

K-350

菅沢2号墳

1991

山形市教育委員会

菅沢2号墳

1991

山形市教育委員会

首次2号墳出土の埴輪



序

菅沢2号墳は、山形市の南西部の菅沢地内に位置し、1号墳及び3号墳とともに菅沢山古墳群を形成しています。これらの古墳は、山形県ならびに山形市の文化財に指定され、保護されてまいりました。山形市の歴史を語る上で欠くことのできない文化財であります。

すでに周知のとおり、2号墳については、円墳としては東北地方でも最大級の規模を誇り、また埴輪を有する古墳として、広く注目を集めてまいりました。

教育委員会では史跡の恒久的保全、保護の立場から、この古墳の復元整備を図るべく、昭和60・61年度に発掘調査を実施しました。結果については、既に報告書を刊行し、その構造と規模について明らかにしております。

本報告書は、発掘調査後に継続してきた出土埴輪の整理分析結果をとりまとめ、埴輪資料の呈示を意図してまとめたものであります。関係機関・研究者の方々に活用していただき、今後の菅沢2号墳の復元整備に対し御教示をいただければ幸いと存じます。

この報告書の発刊にあたり、ご指導とご協力をいただきました関係各位ならびに関係機関に深甚なる謝意を表します。また、埴輪の整理から本報告書刊行までの4ヶ年の間、熱意を傾けていただき御尽力くださいました藤沢敦氏（東北大学大学院生・現東北大学助手）に厚く御礼申し上げます。

1991年3月

山形市教育委員会
教育長 酒匂勝雄

例　　言

1. 本書は復元整備の基礎資料を得るために、1985・1986年に山形市教育委員会が調査を行った、山形県山形市菅沢字山崎に所在する菅沢2号墳の発掘調査報告書である。また、出土遺物に関しては、1968～1970年の山形市史編さんによる発掘調査の際の出土資料も併せて整理を行い、本書に収録した。
2. 菅沢古墳群は、「菅沢山古墳群」として1～3号墳の区域が山形市の史跡として指定されている。さらに2号墳については、「菅沢古墳2号墳」として山形県の史跡に指定されている。本書では從来から最も一般的に使用されてきた、「菅沢古墳群」および「菅沢2号墳」との名称を採用し、これに統一してある。
3. 発掘調査は1985年10月から1986年3月までと、1986年4月から同年7月までの期間で実施した。また1987年3月に補足調査を行っている。
4. 発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形市教育委員会

調査担当 山形市教育委員会社会教育課

調査担当者 江川 隆（山形市教育委員会社会教育課文化係主事）

調査指導者 柏倉亮吉（山形市文化財保護委員）

　　武田好吉（　　同　　）

　　相田俊雄（　　同　　）

　　阿子島功（山形大学教育学部助教授）

　　加藤 稔（山形県立博物館主任学芸員）

　　川崎利夫（天童市立津山小学校教諭）

　　茨木光裕（日本考古学協会会員）

事務局 山形市教育委員会社会教育課

なお、阿子島功、加藤稔、川崎利夫、茨木光裕の各氏からは、1986年度について指導をいただいた。

5. 出土遺物の整理は藤沢敦（東北大学大学院）が担当し、五十嵐ケイ子、漆山順子、金子みつの、伊藤道子の補助を得た。

6. 1985・1986年度の発掘調査の成果については、阿子島・加藤・茨木・江川の執筆・編集によって、すでに『菅沢古墳二号墳発掘調査報告書』として刊行しているが、本書では補足調査と遺物整理の成果をもとに補訂して報告するものである。ただし一部については前記報告

書の内容を再録した。

7. 本書の作成にあたっては、江川（第2章第2節）、藤沢（第1章、第2章第1・3節、第3・4・5章）が担当執筆した。また編集は江川・藤沢が担当した。
8. 発掘調査および報告書作成に当たっては、地元の山形市菅沢地区の方々を初め、以下の方々から御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

山形県教育委員会文化課・山形県立博物館・山形大学付属博物館・山形大学教育学部歴史学研究会・福島県立博物館

今津節生・辻秀人・藤原妃敏・岩見和泰・岸本直文・会田容弘・高橋栄一・坂田浩二・菊地芳朗・菊池佳子・高橋克壽・高木晃の各氏

7. 本調査の資料は山形市教育委員会で一括して保管している。活用されたい。

凡　例

1. 本書に掲載した地形図は、それぞれの中に示した。
2. 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を使用した。
3. 掃図中の方位は、菅沢2号墳の今次調査については真北に統一してあるが、それ以外の図については特に統一していない。
4. 掃図中のレベルは海拔高を表す。
5. 出土遺物の実測図・拓影の内、埴輪は全て4分の1の縮尺に統一してある。埴輪以外の遺物は、石器が3分の2、それ以外の遺物は3分の1に統一してある。写真図版の縮尺は特に統一していない。

本文目次

第1章 菅沢古墳群の位置と環境

第1節 菅沢古墳群の概要	1
第2節 自然的環境	6
第3節 歴史的環境	8

第2章 調査経緯

第1節 第I次調査の概要	11
第2節 第II次調査の経緯	13
(1) 調査の目的	13
(2) 調査の方法	14
(3) 調査の経過	14
第3節 遺物整理の方法	17

第3章 検出遺構

第1節 墳丘と外表施設	22
(1) 墳形と規模	22
(2) 周溝	22
(3) 段築の構成	29
(4) 築成方法	31
(5) 増輪の出土状況	32
第2節 内部主体	36
第3節 小結	38

第4章 出土遺物

第1節 増輪	39
(1) 円筒埴輪	39
(2) 朝顔形埴輪	68
(3) 形象埴輪	84
【家形埴輪】	84
【衣冠形埴輪】	101
【盾形埴輪】	104
【獣形埴輪】	108

【甲冑形埴輪】	122
【馬形埴輪】	155
【種類不明の形象埴輪】	161
第2節 墓輪以外の遺物	167
第5章 考察	
第1節 円筒埴輪・朝顔形埴輪の検討	170
第2節 墓輪から見た菅沢2号墳の築造年代	175
第3節 菅沢2号墳出土埴輪の系譜	179
第4節 菅沢2号墳の埴輪の生産体制	186
第5節 山形盆地の古墳の変遷と菅沢2号墳	193
引用・参考文献	201

挿図目次

第1図 菅沢古墳群の位置	1	第30図 円筒埴輪(9)	51
第2図 菅沢古墳群2号石棺実測図	2	第31図 円筒埴輪(10)	52
第3図 菅沢古墳群全体図	3	第32図 円筒埴輪(11)	53
第4図 菅沢古墳群3号石棺実測図	5	第33図 円筒埴輪(12)	54
第5図 周辺の地形	7	第34図 円筒埴輪(13)	55
第6図 菅沢古墳群周辺の地形図	8	第35図 円筒埴輪(14)	56
第7図 菅沢古墳群と周辺の遺跡	9	第36図 円筒埴輪(15)	57
第8図 1次調査時の菅沢古墳群調査図	12	第37図 円筒埴輪(16)	58
第9図 菅沢古墳群整備基本計画	16	第38図 円筒埴輪(17)	59
第10図 円筒埴輪・朝顔形埴輪 各部の名称	18	第39図 円筒埴輪(18)	60
第11図 形象埴輪各部の名称	19	第40図 円筒埴輪(19)	61
第12図 凸帯の分類	20	第41図 円筒埴輪(20)	62
第13図 ハケメの分類	21	第42図 朝顔形埴輪(1)	71
第14図 菅沢2号墳平面図	23	第43図 朝顔形埴輪(2)	72
第15図 東トレンチ・西トレンチ断面図	25	第44図 朝顔形埴輪(3)	73
第16図 南トレンチ・北トレンチ断面図	27	第45図 朝顔形埴輪(4)	74
第17図 形象埴輪の出土状況	34	第46図 朝顔形埴輪(5)	75
第18図 東北側下段上面のピット	35	第47図 朝顔形埴輪(6)	76
第19図 東南埴輪部の埴輪出土状況	35	第48図 朝顔形埴輪(7)	77
第20図 主体部平面図・断面図	37	第49図 朝顔形埴輪(8)	78
第21図 菅沢2号墳想定復元模式図	38	第50図 朝顔形埴輪(9)	79
第22図 円筒埴輪(1)	43	第51図 朝顔形埴輪(10)	80
第23図 円筒埴輪(2)	44	第52図 家形埴輪1	85
第24図 円筒埴輪(3)	45	第53図 家形埴輪2	87
第25図 円筒埴輪(4)	46	第54図 家形埴輪3	90
第26図 円筒埴輪(5)	47	第55図 家形埴輪4	92
第27図 円筒埴輪(6)	48	第56図 家形埴輪5	93
第28図 円筒埴輪(7)	49	第57図 家形埴輪6	95
第29図 円筒埴輪(8)	50	第58図 家形埴輪7(1)	97
		第59図 家形埴輪7(2)	98

第60図	帰属不明の家形埴輪	100	第92図	帰属不明の甲冑形埴輪(4)	153
第61図	衣蓋形埴輪(1)	102	第93図	馬形埴輪(1)	156
第62図	衣蓋形埴輪(2)	103	第94図	馬形埴輪(2)	157
第63図	盾形埴輪 1	105	第95図	馬形埴輪(3)	158
第64図	その他の盾形埴輪	107	第96図	馬形埴輪(4)	159
第65図	駕形埴輪 1(1)	110	第97図	種類不明の形象埴輪(1)	162
第66図	駕形埴輪 1(2)	111	第98図	種類不明の形象埴輪(2)	163
第67図	駕形埴輪 1(3)	113	第99図	種類不明の形象埴輪(3)	164
第68図	駕形埴輪の製作方法	115	第100図	埴輪以外の遺物(1)	167
第69図	駕形埴輪 2(1)	118	第101図	埴輪以外の遺物(2)	168
第70図	駕形埴輪 2(2)	119	第102図	円筒埴輪	
第71図	その他の駕形埴輪	121		各部の径の分布	171
第72図	甲冑形埴輪 1(1)	124	第103図	円筒埴輪・朝顔形埴輪	
第73図	甲冑形埴輪 1(2)	125		各段の高さの分布	172
第74図	甲冑形埴輪 1(3)	127	第104図	円筒埴輪の分類	173
第75図	甲冑形埴輪 1(4)	129	第105図	朝顔形埴輪の分類	174
第76図	甲冑形埴輪の製作方法	130	第106図	宮城県裏町古墳・福島県	
第77図	甲冑形埴輪 2(1)	133		原山 1号墳出土遺物	176
第78図	甲冑形埴輪 2(2)	135	第107図	福島県天王塙古墳出土遺物	177
第79図	甲冑形埴輪 2(3)	137	第108図	上山市土矢倉古墳群出土埴輪	180
第80図	甲冑形埴輪 2(4)	138	第109図	奈良県ウワナベ古墳出土埴輪	182
第81図	甲冑形埴輪 3(1)	141	第110図	大阪府日置荘遺跡・日置荘西町	
第82図	甲冑形埴輪 3(2)	143		竪跡群出土埴輪	183
第83図	甲冑形埴輪 3(3)	144	第111図	古墳群北側斜面探集の埴輪	186
第84図	甲冑形埴輪 3(4)	145	第112図	ハケメ原体の復元	188
第85図	甲冑形埴輪 4(1)	147	第113図	同一ハケメ工具による埴輪(1)	189
第86図	甲冑形埴輪 4(2)	148	第114図	同一ハケメ工具による埴輪(2)	190
第87図	甲冑形埴輪 4(3)	149	第115図	菅沢 2号墳出土埴輪の構成	192
第88図	甲冑形埴輪 5	149	第116図	山形盆地の古墳分布図	194
第89図	帰属不明の甲冑形埴輪(1)	150	第117図	東根市東根大塚古墳	195
第90図	帰属不明の甲冑形埴輪(2)	151	第118図	山形市大之越古墳出土遺物	196
第91図	帰属不明の甲冑形埴輪(3)	152	第119図	大之越古墳出土馬具想定復元図	197

表目次

第1表	菅沢古墳群周辺の遺跡地名表	9	第29表	甲冑形埴輪3観察表	140
第2表	第I次調査の概要	11	第30表	甲冑形埴輪4観察表	146
第3表	円筒埴輪・朝顔形埴輪の 出土状況	33	第31表	甲冑形埴輪5観察表	149
第4表	I次・II次調査での埴輪の 接合関係	33	第32表	帰属不明の甲冑形埴輪観察表	154
第5表	円筒埴輪観察表(1)	63	第33表	馬形埴輪観察表	160
第6表	円筒埴輪観察表(2)	64	第34表	種類不明の形象埴輪観察表(1)	165
第7表	円筒埴輪観察表(3)	65	第35表	種類不明の形象埴輪観察表(2)	166
第8表	円筒埴輪観察表(4)	66	第36表	埴輪以外の遺物観察表(1)	167
第9表	円筒埴輪観察表(5)	67	第37表	埴輪以外の遺物観察表(2)	169
第10表	朝顔形埴輪観察表(1)	81	第38表	山形盆地の古墳編年表	199
第11表	朝顔形埴輪観察表(2)	82			
第12表	朝顔形埴輪観察表(3)	83			
第13表	家形埴輪1観察表	84			
第14表	家形埴輪2観察表	86			
第15表	家形埴輪3観察表	91			
第16表	家形埴輪4観察表	93			
第17表	家形埴輪5観察表	93			
第18表	家形埴輪6観察表	94			
第19表	家形埴輪7観察表	96			
第20表	帰属不明の家形埴輪観察表	99			
第21表	衣蓋形埴輪観察表	103			
第22表	盾形埴輪1観察表	104			
第23表	その他の盾形埴輪観察表	107			
第24表	鞠形埴輪1観察表	109			
第25表	鞠形埴輪2観察表	117			
第26表	その他の鞠形埴輪観察表	121			
第27表	甲冑形埴輪1観察表	123			
第28表	甲冑形埴輪2観察表	132			

写真図版目次

図版1	菅沢古墳群航空写真	209	a	2号墳主体部(1)	
図版2		210	b	2号墳主体部(2)	
	a 菅沢古墳群遠景			図版11	219
	b 菅沢古墳群遠景			a 主体部横断面	
図版3		211	b	主体部縦断面	
	a 2号墳近景			図版12	220
	b 1号墳近景			a 主体部東側確認状況(1)	
図版4		212	b	主体部東側確認状況(2)	
	a 3号墳遠景			図版13	221
	b 2号墳からの眺望			a 東北側テラス	
図版5		213	b	東北側テラス上面のピット	
	a 東トレンチ		c	ピット掘り方	
	b 東トレンチ上半部土層断面			図版14	222
	c 東トレンチ土層断面			a 東南墳跡部(c-4グリッド)	
図版6		214		埴輪出土状況(1)	
	a 西トレンチ		b	東南墳跡部埴輪出土状況(2)	
	b 西トレンチ上半部土層断面			図版15	223
	c 西トレンチ下半部			a 東南墳跡部形象埴輪出土状況(1)	
図版7		215	b	東南墳跡部形象埴輪出土状況(2)	
	a 南トレンチ			図版16	224
	b 南トレンチ上半部土層断面(2)			円筒埴輪(1)	
	c 南トレンチ上半部土層断面(1)			図版17	225
図版8		216		円筒埴輪(2)	
	a 北トレンチ土層断面			図版18	226
	b 北トレンチ上半部土層断面			円筒埴輪(3)	
図版9		217		図版19	227
	a 西側周溝部(1)			円筒埴輪(4)	
	b 西側周溝部(2)			図版20	228
図版10		218		円筒埴輪(5)	
				図版21	229
				円筒埴輪(6)	
				図版22	230
				円筒埴輪(7)	
				図版23	231
				円筒埴輪(8)	
				図版24	232
				円筒埴輪(9)	
				図版25	233
				円筒埴輪(10)	

図版26	円筒埴輪(1)	234	図版57	駒形埴輪 1 (633—3)	265
図版27	円筒埴輪(2)	235	図版58	駒形埴輪 2 (634)	266
図版28	円筒埴輪(3)	236	図版59	駒形埴輪・盾形埴輪	267
図版29	円筒埴輪(4)	237	図版60	甲冑形埴輪 1(1)	268
図版30	円筒埴輪(5)	238	図版61	甲冑形埴輪 1(2)	269
図版31	円筒埴輪(6)	239	図版62	甲冑形埴輪 2 (647—1)	270
図版32	円筒埴輪(7)	240	図版63	甲冑形埴輪 2 (647—2)	271
図版33	円筒埴輪(8)	241	図版64	甲冑形埴輪 3(1)	272
図版34	円筒埴輪(9)	242	図版65	甲冑形埴輪 3(2)	273
図版35	朝顔形埴輪(1)	243	図版66	甲冑形埴輪 4(1)	274
図版36	朝顔形埴輪(2)	244	図版67	甲冑形埴輪 4(2)・甲冑形埴輪 5・帰 属不明の甲冑形埴輪(1)	275
図版37	朝顔形埴輪(3)	245	図版68	帰属不明の甲冑形埴輪(2)	276
図版38	朝顔形埴輪(4)	246	図版69	帰属不明の甲冑形埴輪(3)・馬形埴輪 (1)	277
図版39	朝顔形埴輪(5)	247	図版70	馬形埴輪(2)	278
図版40	朝顔形埴輪(6)	248	図版71	馬形埴輪(3)	279
図版41	朝顔形埴輪(7)	249	図版72	種類不明の形象埴輪(1)	280
図版42	朝顔形埴輪(8)	250	図版73	種類不明の形象埴輪(2)	281
図版43	朝顔形埴輪(9)	251	図版74	埴輪以外の遺物・古墳群北側斜面採 集の埴輪	282
図版44	朝顔形埴輪(10)	252			
図版45	朝顔形埴輪(11)	253			
図版46	家形埴輪 1・家形埴輪 6	254			
図版47	家形埴輪 2 (609)	255			
図版48	家形埴輪 3・家形埴輪 4(1)	256			
図版49	家形埴輪 4(2)・家形埴輪 7(1)	257			
図版50	家形埴輪 7(2)	258			
図版51	家形埴輪 5・帰属不明の家形埴輪				
		259			
図版52	衣笠形埴輪(1)	260			
図版53	衣笠形埴輪(2)	261			
図版54	盾形埴輪 1 (632)	262			
図版55	駒形埴輪 1 (633—1)	263			
図版56	駒形埴輪 1 (633—2)	264			

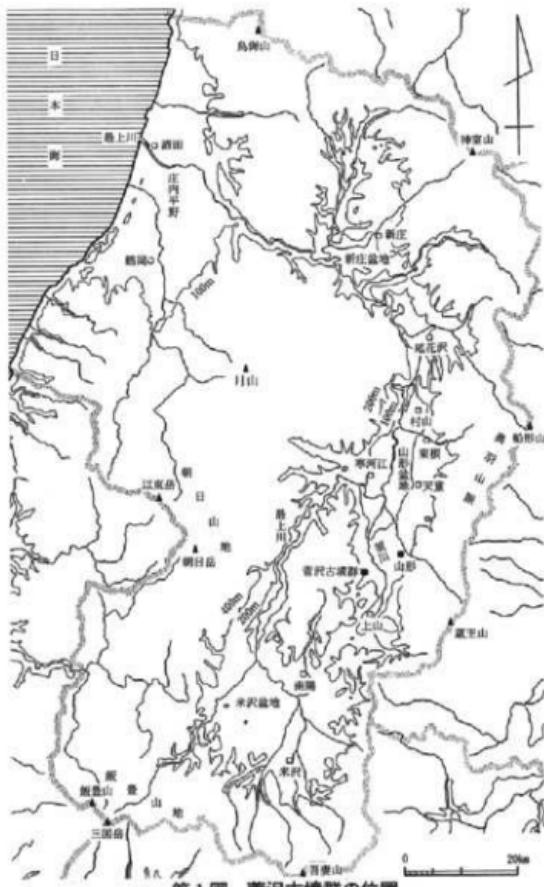
第1章 菅沢古墳群の位置と環境

第1節 菅沢古墳群の概要

吾妻連峰に源を発する“母なる川”最上川は、奥羽脊梁山脈と朝日山地の間に連なる盆地を貫き北流する（第1図）。これらの盆地は大きく、南陽・米沢を中心とする米沢盆地（置賜盆地）、上山から村山に至る最上川とその支流須川の両岸に広がる山形盆地（村山盆地）と、新庄を中心とする新庄盆地

(最上盆地)に分けられる。最上川はこの新庄盆地から西流し、海岸沿いに庄内平野をしたがえ日本海へと至る。山形はその大部分が山地からなり、16パーセントにすぎない平地のほとんどは、この4地域で占められている。

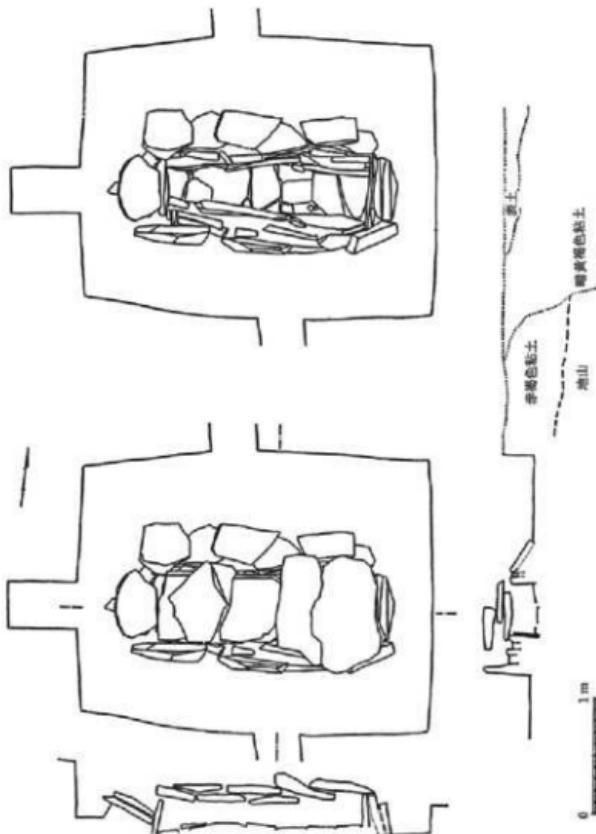
菅沢古墳群は、山形盆地の南部、盆地の南西縁をなす丘陵からの一端が北に突き出た、その先端の標高160mの丘陵上に位置している。このため古墳群からの、特に2号墳墳頂からの眺望はきわめて良い。とりわけ東は全く視界をさえぎるものがない、盆地を北流する須川を越え、藏王連峰とその麓に広がる馬見ヶ崎川扇状地を一望にすることができる。また北西は



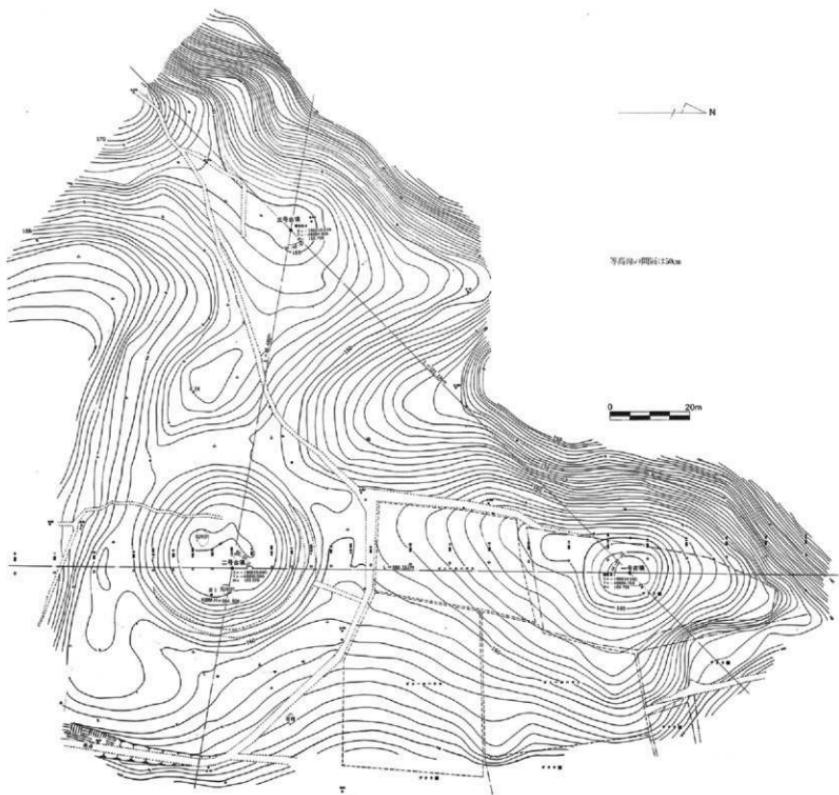
第1図 菅沢古墳群の位置

柏倉方面から、さらに月山を望むことができる。逆に盆地側から見ても、菅沢古墳群は丘陵先端のよくめだつところにあり、当時は木々の緑の中でひときわ際だった存在であったと思われる。

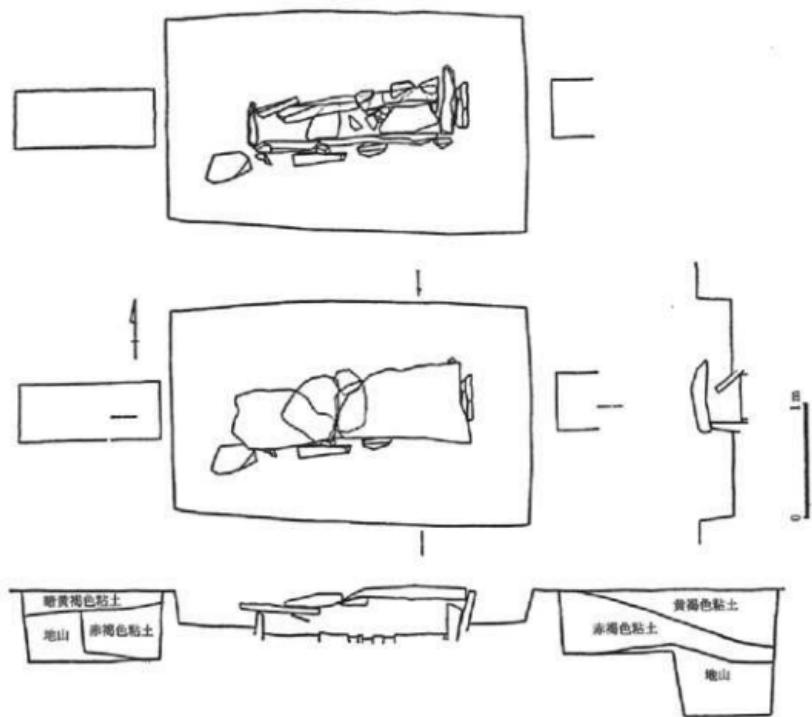
この菅沢古墳群には、3基(?)の円墳が現存し、他に3基の箱式石棺が知られている(第2図)。1号墳は丘陵の北端に立地する。現在ブドウ畠として利用されており、削平を受けているが、現状での観察からは直径20m程と考えられ、高さ2.5mを計る。この1号墳は1946年に開かれ、内部主体は偏平な石英安山岩を利用した箱式石棺であったという。また周囲に円筒埴輪片が散布していたとされるが、現在はほとんど採集しえず、その特徴等は不明である。本書で報



第2図 菅沢古墳群2号石棺実測図(山形市史より)



告する2号墳は、この1号墳の南約60mのところに立地している。直径51~53mと本古墳群中で傑出した規模を有する円墳で、主墳と目される。2号墳の西約50mにも円墳状の高まりが認められ、3号墳とされている。しかしこの高まりはわずかなもので、古墳であると断定はしかねる。これらの円墳の他に、3基の箱式石棺が知られている。1号石棺は2号墳の西北隅付近に存在していたが、早くに破壊され詳細は不明である。2号石棺は2号墳の北東約20mの、盆地に向かって傾斜する緩い傾斜面上に東西方向に立地して現存している(第3図)。偏平な石英安山岩を用いており、側壁は3重に石を立て、床面にも石敷を施している。長さ2mで、東側がわずかに広く、床面も東側が高いため、東頭位と考えられる。3号石棺は2号墳の北15m程の現在ブドウ畠として利用されている中に立地し、これも東西方向をとる(第4図)。長さ1.7mで、東側がわずかに広いことから、東頭位と考えられる。2号石棺同様、偏平な石英安山岩を用い、床面にも石敷を施す。1号石棺はその位置より2号墳の副次的埋葬主体と考えられるが、2号・3号



第4図 菅沢古墳群3号石棺実測図（山形市史より）

石棺は削平された古墳の主体部の可能性が考えられる。地元での聞き取り調査では、これらの石棺が分布する2号墳の北方には、かつていくつかの小古墳が存在していたとされる。特に3号石棺は、現在はブドウ畑のため緩やかな斜面となっているが、1次調査前の測量図では、この3号石棺の箇所で等高線が突出しており、これが3号石棺に伴う墳丘の痕跡を示していると考えられる(第7図)。したがって1号墳と2号墳との間には、さらに多くの削平された小古墳が存在した可能性も考えなければならないであろう。

第2節 自然的環境

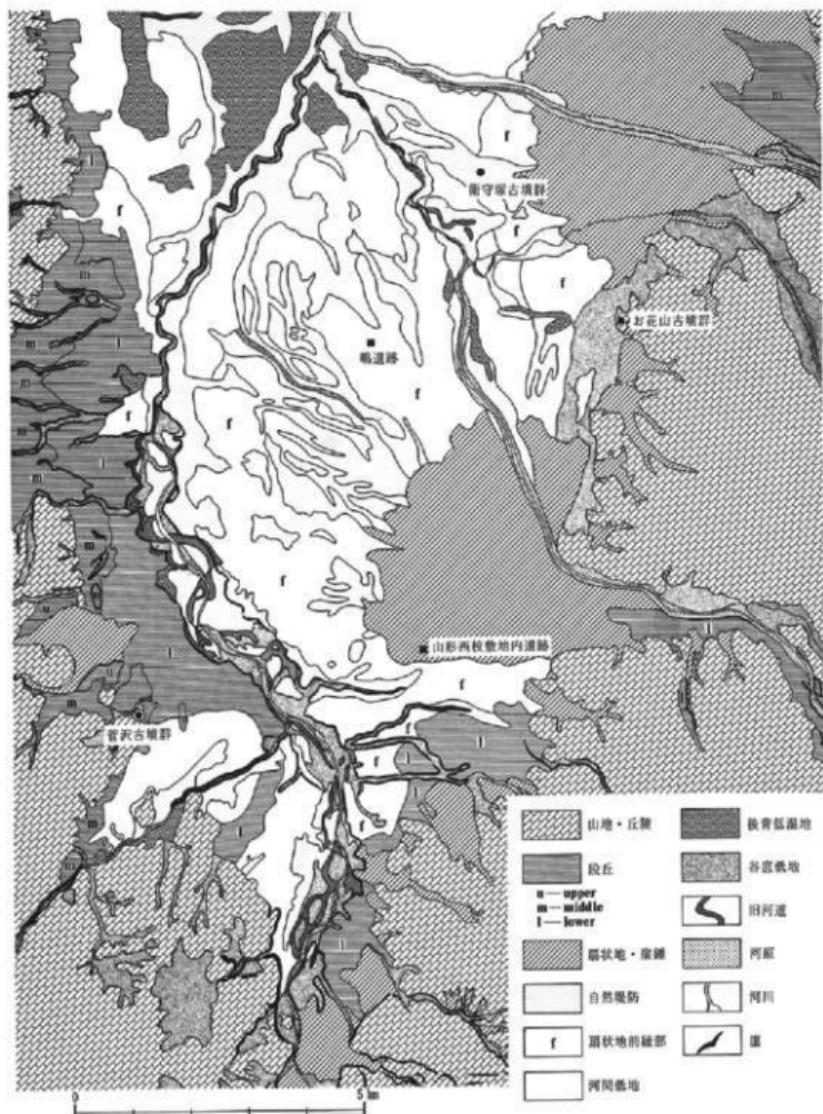
山形盆地は、東に奥羽山系の藏王連峰が連なり、西は白鷹丘陵によって区画され、最上川の支流である須川が北流している。盆地面積は約400km²で、南北40km、東西10kmと南北に細長い。東西は須川に向かって低下する舟底状を呈する。

須川は藏王山系に源を発し、山形盆地の西縁部を流下し寒河江市で最上川に合流している。須川の右岸には、藏王山系から流下する馬見ヶ崎川、立谷川などの河川が西流し、これらの河川が山間部から盆地に流入する地域には、広大な扇状地を形成している(第5図)。現在の山形市街は、この馬見ヶ崎川扇状地の扇央部に位置している。馬見ヶ崎川は、現在は盆地に流入すると大きく流路を北に転じ白川と合流するが、かつては方向を変えることなく西に流れていった時期があったことが、扇状地扇端部から東西に伸びる自然堤防の存在から推測される。また17世紀の山形城下図では、馬見ヶ崎川は西流しており、その痕跡が後背低湿地として残っている。

須川の左岸は、盆地東縁に発達した扇状地によって、須川の流路が盆地の西側に押しやられ、盆地西縁を区画する白鷹丘陵に近接している。白鷹丘陵からは本沢川・戸神川・山王川などの中小河川が流下しており、丘陵より流下するこれらの河川は、小規模な扇状地を形成して須川に接している。この地形面は、須川によって侵食されて段丘を形成している。段丘は主に須川左岸に分布し、右岸では立谷川や馬見ヶ崎川の河谷に分布する程度である。

須川右岸の扇状地の下流には、自然堤防が発達し、その間に河間低地や扇状地前縁部が広がっている。自然堤防は須川べりにも分布する。第5図の範囲には入らないが、寒河江市に入って須川は最上川に合流する。この最上川との合流点に向かって、北に行くにしたがって、盆地の東西の幅は広がっていく。この地域には自然堤防と河間低地が広がるほか、後背低湿地も分布している。

菅沢古墳群は、山形盆地の南西縁をなす丘陵地の先端に位置している。菅沢古墳群周辺の地形・地質については、『菅沢二号墳発掘調査報告書』において、阿子島功氏によって詳しく触れられているので、以下にその部分を再録しておく。



第5図 周辺の地形 (米地・阿子島1982をもとに作成)

古墳群の立地している高度160m代の丘陵の東側稜線は本沢川あるいは遅沢川（おそらくは前者）の河岸段丘面であり、第6図の地点a,b,cには層厚が最大で数mの河成疊層が分布している。丘陵をつくる地層は第三紀中新世のいわゆる緑色凝灰岩類で、地点b,cや菅沢2号墳の地山層は細疊状の凝灰角砾岩である。

河成疊層の分布は丘陵の東側の若干下った肩状の部分に限られるようであり、菅沢2号墳の部分には及んでいなかったであろう。2号墳の部分は波状の尾根型斜面にある。

地点c（古墳群に通じる農道の切り割り）でみられる土壌断面は次の通りである。

- ・地表より0.5mまで、河成疊層（最大径30cm、凝灰岩および安山岩の亜角礫）風化著しく赤褐色を呈す。地表より0.3mまで筍などの細根が密。
 - ・地表下0.5m以下、凝灰角砾岩（細疊状）・約1mまでの間は風化によって割れ目が多く、風化して粘土化した部分は2.5YR4/8の赤褐色を呈する。
 - ・地表下2-3m（道路床）にて、緑色凝灰岩の本来の色調となっている。
- すなわち、2号墳上半部の盛土層である、赤褐色の角砾層は、周辺の基岩の風化帯を材料にしていることがわかる。

第3節 歴史的環境

菅沢古墳群の立地する山形盆地南西端の須川左岸の地域には、縄文時代から奈良・平安時代にわたる各時期の遺跡が多く分布している。それらの状況は第7図と第1表にゆずり、ここでは古墳時代を中心に、各時期の特徴を概観しておくこととする。

山形盆地南部では扇状地が発達することもあり、確実な旧石器時代の遺跡は未発見であるが、縄文時代では山形市谷柏周辺や二位田・柏倉などに集中して遺跡が分布している。その多くは縄文時代前期から後期にかけてのもので、山形市長谷堂の百々山遺跡（第7図・第1表の18、以下同様）は縄文時代中期前葉の代表的な遺跡である。また須川の対岸の山形西高敷地内遺跡（50）では、中期の住居跡が多数発見されている。

弥生時代の遺跡は、集落の内容が明確にされた遺跡はないものの、扇状地扇端部や自然堤防



第6図 菅沢古墳群周辺の地形図



第7図 菅沢古墳群と周辺の遺跡（国土地理院1/25,000 山形南部を使用）

番号	遺跡名	所在地	種類	時期	番号	遺跡名	所在地	種類	時期
1	菅沢古墳群	菅沢山崎	古墳	古墳	29	花川	松原花川	古墳跡	弥生
2	百目鬼	百目鬼	古墳跡	古代	30	東沙門	谷船	古墳跡	古墳
3	金塊	金塊金塊	古墳跡	圓文	31	石垣廻	谷船	古墳跡	古墳
4	坊屋敷	柏倉坊屋敷	古墳跡	圓文	32	石垣廻Y	谷船右田	古墳跡	弥生
5	三月田	柏倉三月田	古墳跡	圓文	33	谷船	谷船	古墳跡	古墳・古代
6	十二月田A	柏倉十二月田	古墳跡	圓文	34	武田	谷船	古墳跡	弥生・古墳
7	十二月田B	柏倉十二月田	古墳跡	圓文	35	前田	谷船前田	古墳跡	圓文
8	水方	柏倉水方	古墳跡	圓文	36	前田下	谷船	古墳跡	圓文
9	柏倉中丁	柏倉中丁	古墳跡	圓文	37	喜平田	谷船	古墳跡	圓文
10	柏倉八幡	柏倉八幡	古墳跡	圓文	38	本沢川	谷船	古墳跡	圓文
11	鮎	柏倉鮎	古墳跡	圓文	39	全力寺	谷船	古墳跡	圓文
12	宿	柏倉宿	古墳跡	圓文	40	萩原	長谷堂萩原	古墳跡	古墳・古代
13	塙平田A・B	柏倉塙平田	古墳跡	古墳	41	川瀬	二位田川瀬	古墳跡	古墳
14	大之越古墳		古墳		42	寺瀬	二位田	古墳跡	古墳・古代
15	門塙日光山	門塙日光山	古墳跡	圓文	43	二位田	二位田	古墳跡	圓・第・古墳・古代
16	村木沢古墳群	村木沢北谷地	古墳	古墳	44	前明石	前明石落合	古墳	古墳
17	津坊	真谷堂津坊	古墳跡	古代			津坊跡		
18	百々山	真谷堂百々山	古墳跡	圓・第・古墳・古代	45	上り塙下り丸吉塙	前明石	古墳	古墳
19	谷增塙	真谷堂谷増塙	古墳跡	圓文	46	藤谷	前明石	古墳跡	古墳・古代
20	兵谷堂城跡	兵谷堂兵谷城跡	城跡	中世	47	繩ヶ岡	前明石	古墳跡	古墳
21	吉崎山城跡	吉崎山城跡	城跡	古代	48	吉原瀬ノ内	吉原瀬ノ内	城跡跡	中世
22	葛野様古墳	柏船	古墳	古墳	49	青田	前明石	古墳跡	古代
23	谷船古墳群	谷船	古墳	古墳	50	山形西高倉塙	前明石	古墳跡	圓・第・古墳・古代
24	高崎山	谷船	古墳跡	古代	51	五日町	五日町兵當代	古墳跡	古代
25	高崎	谷船	古墳跡	古代	52	真當代桑黒	五日町兵當代	桑黒	古代
26	石田	谷船石田	古墳跡	古代	53	五日町古墳	五日町兵當代	古墳	古墳
27	片谷塙	片谷塙	古墳跡	古代	54	山形城跡	前明石	城跡跡	中世・近世
28	横手区	松原横手	古墳跡	圓・古墳・古代・中					

第1表 菅沢古墳群周辺の遺跡地名表（山形県遺跡地図をもとに作成）

上の前面に低湿地をひかえた微高地に立地するものが多い。本古墳群周辺では、谷柏遺跡から石包丁が出土しており、注目される。

古墳時代になると、須川左岸地域には遺跡が密集して分布する。古墳時代前期の遺物を出土した遺跡は、特にこの地域に密集しており、菅沢古墳群の直下の山形市二位田の寺裏遺跡（42）・川落遺跡（43）、長谷堂の萩原遺跡（41）、谷柏の谷柏遺跡（33）などがあげられる。萩原遺跡・谷柏遺跡では中期の遺物も出土しており、集落が継続していくものと考えられる。また須川右岸の扇状地扇端部付近に立地する山形西高敷地内遺跡（50）では、古墳時代前期の住居跡が発見されているとともに、弥生時代中期の土器も出土している。

菅沢古墳群の立地する山形盆地南西端の地域は、山形盆地の中でも特に古墳が集中して分布している地域である。盆地を見おろす周辺の丘陵上には、南から谷柏古墳群（23）・薬師様古墳（22）などから菅沢古墳群をへて、大之越古墳（14）、村木沢古墳群（16）、さらには図幅中には入らないが坊主窪古墳などの古墳が、連なって点在している。また須川沿いの自然堤防上にも前明石古墳（44）などが分布している。これらの多くは、箱式石棺を内部主体とするもので、中期後半から後期にかけてのものと考えられる。

一方、須川の右岸では、第7図の範囲には入らないが、さらに北の馬見ヶ崎川から白川に沿った自然堤防上に衛守塚古墳群などが、それらを望む丘陵上にはお花山古墳群などが存在し（第5図）、もう一つの古墳分布の密集地域を形成している。これらの古墳群に近接して、低湿地に立地し打ち込み式の柱による建物からなる集落で、多様な木製品を出土した鳩遺跡があり、国の史跡に指定されている。鳩遺跡に近い山形市宮町周辺の自然堤防上からは古墳時代の、特に前期の土器が多く出土している。鳩遺跡と同様に低湿地に立地する遺跡としては、さらに北の須川と最上川の合流点に近い天童市西沼田遺跡がある。これらの低湿地に立地する遺跡は、中期後半に始まり、後期にその中心があるものと考えられる。

このように、菅沢古墳群周辺の山形盆地南西端とお花山古墳群などの東部地域は、古墳の密集して分布する地域であるとともに、その周辺に集落遺跡が多く分布する地域でもある。またこれらの古墳時代集落の分布する地域には、弥生時代の遺跡も多く存在している。弥生時代にもたらされた水稻農耕の展開の上に、これらの古墳が成立していることを示すものと考えられよう。

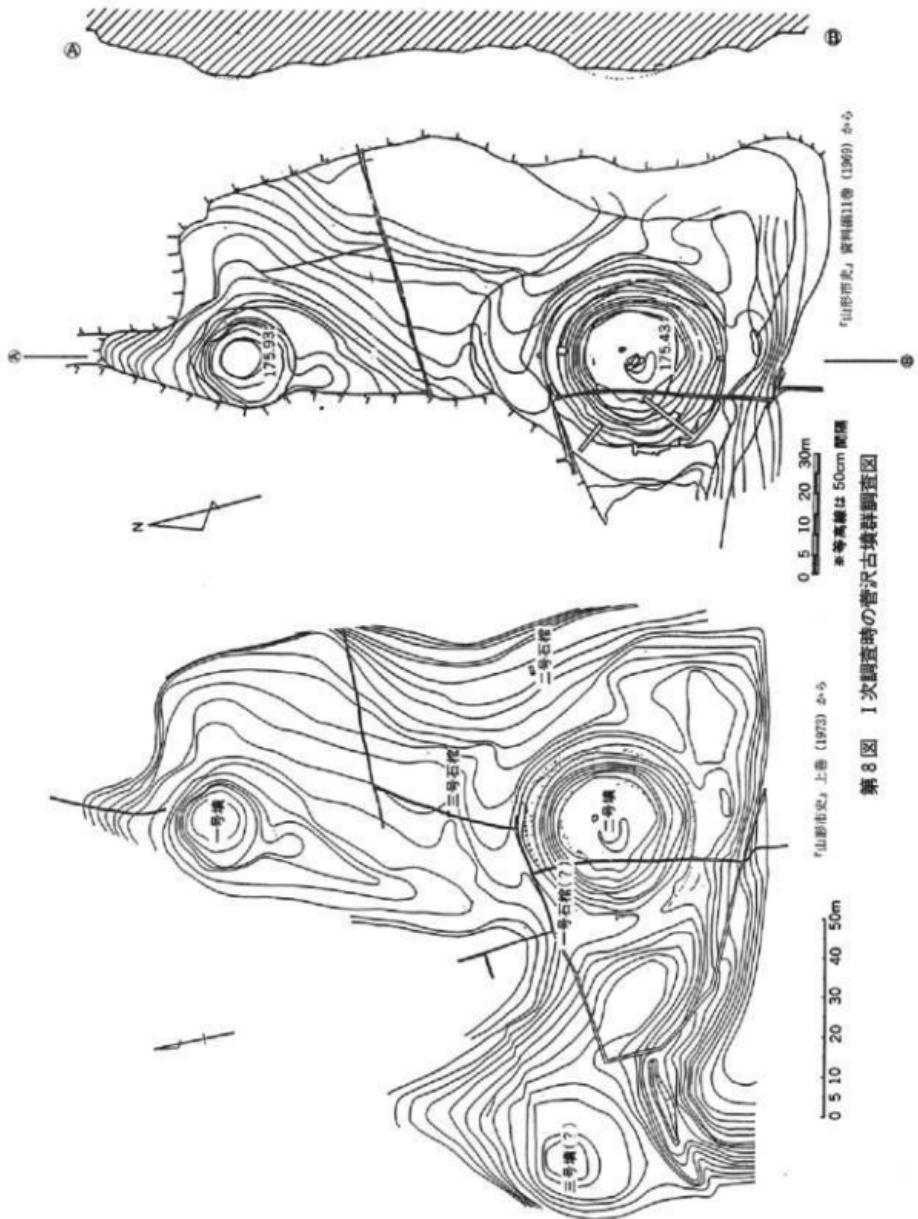
第2章 調査経緯

第1節 第1次調査の概要

菅沢2号墳が広く知られるようになったのは、1967年の上山市土矢倉古墳群の発掘調査が行われていた頃であるという。土矢倉古墳群は山形県内では希有な埴輪を有する古墳であり、その内容が明らかにされるとともに、同じように埴輪を有する菅沢2号墳の存在が注目されるようになつた。その後、古墳周辺の開墾によって箱式石棺が発見されたことや、山形市史編さん事業の一環としての必要性から、1968年10月、1969年8月、1970年7月の3次にわたり測量調査や発掘調査が実施された。この市史編さんに伴う第1次調査の内容は、調査を担当した柏倉亮吉氏によって、『山形市史』においてその概要が報告されている（柏倉：1973）。その内容は第2表に示すが、この調査の結果、菅沢2号墳は2段築成の円墳で県下最大の円墳であり、埴輪を有する古墳であることが明かとなつた。またさらには2号墳の他にも隣接して墳丘の存

所在地	山形市大字菅沢字山崎
立地	山崎集落の背後にある丘陵の頂に営まれている。標高167m前後。比高32m。
現状	丘陵の北端の高み（標高167mの三角点）にあるものを1号墳（円墳）とし、その南100mの稜線上にあるものを2号墳（円墳）とする。2号墳の丘陵線上にもう一基あるらしいが、確認されれば3号墳とする（円墳？）。
調査の目的	山形市史編さん
調査主体	山形市史編さん委員会
調査期間	1968年10月、1969年8月、1970年7月
調査部分	墳丘中央部、南・西・北の墳麓部、西北部下段と西南部上下段部分。
墳丘の規模	下段の底径56m 高さ1m 上面の径40m 上段の底径34m 高さ3.44m
外表施設	墳頂部の周辺部と下段上面の周縁部に、円筒埴輪をめぐらしている。形象埴輪片もある（象形、馬形、盾もしくは瓢形、きぬがさ形など）。葺石なし。下段の周縁をめぐって幅4mほどの周溝がある。
内部主体	上段墳丘の頂上は土饅頭の形を失って平坦になっている。 組み合せ式石棺がここに営まれていたとみえる。
出土遺物	砾石（頂上中央部の深み） 埴輪（墳丘頂の周辺部と下段上面の周縁部）
年代	形式の上では ①丘陵の稜線上に位置する高塚であること ②墳丘外面を覆って埴輪が置かれたこと ③周溝をめぐらしていること などの点から、古い要素を持っているといえる。 形式的には、古墳時代前期第IV期か後期第I期におくべきであろう。 実年代としては、5~6世紀とすることができよう。

第2表 第1次調査の概要



在が確認され、古墳群を形成することも知られるようになった。

菅沢2号墳の第I次調査の結果、器財埴輪を中心とする豊富な内容の形象埴輪が存在することが明かとなった。上記報告においてはその種類が記載され、さらに甲冑形埴輪と円筒埴輪の底部が、これまでに一部復元されて公表されてきた（川崎利夫：1982・1985など）。

第2節 第II次調査の経緯

（1）調査の目的

第I次調査の成果を受けて、昭和44年3月14日には「菅沢山古墳群」として1～3号墳の区域が山形市の史跡として指定を受け、さらに2号墳については、昭和48年6月11日に山形県の史跡指定を受けて現在に至っている。なお、山形市は昭和46年度において、2号墳の区域約4,485m²について、古墳の保存用地として史跡の公有化を実施している。

今回の発掘調査は、この県指定史跡である菅沢2号墳について文化財の保護保全とその活用の見地から、史跡の復元整備を最終目的として山形市三ヶ年実施計画事業に位置づけを行い、その第一段階として実施したものである。

具体的に、復元整備のための条件提示として今回の発掘調査では、

- ① 古墳ならびに古墳が築造されている地形の現況把握
- ② 古墳の規模と構造（墳形、墳丘規模、周溝、埴輪配置状況）の確認
- ③ 古墳構築法の確認
- ④ 内部主体の確認

を主たる目的として、従前の調査成果の追加補足として実施したものである。

調査の実施にあたっては、本古墳が既述のごとく県指定の史跡であることから、県教育委員会文化課との事前の打合せを行い、昭和60年度発掘調査については県の補助事業として実施した。

これまでの経過は以下の通りである。

昭和60・61年度	発掘調査
昭和62年度	補足調査、整備基本計画策定
昭和62年度～平成元年度	遺物整理、報告書作成
平成2年度	報告書刊行

なお、遺物整理・報告書作成にあたっては、山形大学名誉教授柏倉亮吉氏に事業委託を行い、作業は東北大学大学院生藤沢敦が担当した。

(2) 調査の方法

発掘調査に先だち、昭和60年5月、菅沢2号墳を含む菅沢古墳群の範囲について、現況を正確に把握するため、50cm間隔等高線による地形測量（平面、縦横断面）と丈量測量を実施した。

発掘調査にあたっては、測量時に東西・南北10mのグリッドを組むとともに、2号墳の区域については5mのグリッドを組んだことから、これを基準として南北方向をA～O、これに直交する東西方向を1～15とした座標を設定した。

今回の調査目的は、先に述べたように復元整備を前提として、古墳築造時の姿を少しでも多く把握することにあった。すなわち、全面的発掘調査を行えばその全貌が明らかにされるはずであるが、遺構の保護の見地から、部分的調査にとどめることとして、なるべく全貌を把握に近づくべく考慮した。

そのため、墳形の再確認のための墳麓確認及び規模の確認のための墳麓径や周溝幅確認の目的で、かつ、一部墳丘の築成方法について手がかりを得るため、ほぼ墳丘の中心を通る東西南北にトレンチを設定した。

また、本古墳は2段築成と考えられるものの、現況を概観するに、北側及び東側ではその様子がよく観察されるが、南側では不明瞭となり、西側ではほとんど段差が認められないという状況を示す。このような状況が本古墳の本来の姿なのかどうか、また、墳丘西側については、昭和40年代初頭のブドウ畠（棚）造成のための開墾により改変を受けているという地元の方々の話などもあり、段差確認及び墳麓線の確認の意味から、この区域に数本のトレンチを設定することとした。

さらに、本古墳については、埴輪を有する古墳であることがこれまでの調査などにより確認されているが、その設置箇所や設置のし方及びその種類等の確認のため、あわせて、古墳築造時期を明らかにする遺物なども得られればということから、一部に面的調査区域を配した。この面的調査区域は、埴輪が下段上面に配されることが従前より知られることから、2段築成が明瞭に観察される東側部分に設定した。

また、墳頂部については、従前調査の結果として、「削平を受けているが石棺が埋設されていたようである」と報告がなされていることから、その削平の状況や主体部痕の確認のため、墳丘中央部の3グリッドについて調査した。

(3) 調査の経過

本古墳の調査は、当初昭和60年度実施として計画されたものであるが、調査開始時期の遅れから調査半ばで降雪期を迎える一時中断のやむなきに至った。このことから、融雪期以後、昭和61年度に調査を継続することとなった。ここに調査の全般的な経過を記す。

昭和60年度

10月14日～16日 器材運搬を行うとともに、古墳全体が笹で覆われていたことから、笹・雑木等の除伐を行い調査区を設定する。

10月17日～29日 東トレント（G-1～6グリッド）、西トレント（G-9～14グリッド）、南トレント（A～F-7グリッド）、北トレント（I～N-7グリッド）について、笹根の強く張る表土の除去を行う。

10月30日～11月11日 墳丘の東北部（I～K-2～5グリッド）、東南部（A～E-1～4グリッド）の表土除去を行う。この時点において、C-4グリッドに埴輪が密集して確認される。

11月12日～30日 東西南北に墳丘中心を通る形で幅1mのトレントを設定し、墳丘の断割りを行う。

12月2日～3日 墳頂部（H-7、G-7～8グリッド）の掘り下げを行う。本来はこの過程の早い段階で確認されるべきであったが、H-7グリッドに土色変化が見られ、これが主体部になるものかと考えられた。

12月16日～20日 降雪期を迎える、冬越しの手当を行い、調査を一時中断する。

3月10日～30日 調査を再開し、各調査区の清掃を行う。

昭和61年度

4月1日～6日 墳頂部（H-7グリッド）の土層観察と西側周溝部の観察を行う。

4月8日～13日 東南墳麓部（C-4グリッド）埴輪密集地の精査を行う。

4月14日～30日 墳頂部（H-7、G-7～8グリッド）の土層図作成を行う。

5月1日～5日 東南墳麓部（C-4グリッド）の埴輪の取上げを行う。

5月6日～17日 帆立貝型となるかについて墳形確認を行う。

6月27日～7月14日 墳頂部墓壙等の最終確認を行い、埋戻しを始めた。なお、7月5日には、現地に市民約80名の参加を得て現地説明会を開催した。

昭和62年度（補足調査）

3月14日～31日 墳頂の主体部の東側の端を確認するためH-6グリッドの表土を除去して精査を行う。また、1次調査の際の図面と今回の調査成果を合わせるために、1次調査時のトレントの一部を掘り出して確認して記録した。

以上が経過であるが、作業員の手薄から長期にわたる調査となった。この期間、各関係の方々から、甚大なる御指導、御援助をいただいたことをここに記す。

第9回 菅沢古墳群の基本計画



第3節 遺物整理の方法

菅沢2号墳から出土した遺物は、1968～70年のI次調査によるものが平箱約55箱、1985～86年のII次調査によるものが平箱約40箱で、それらのほとんどが埴輪である。このI次調査とII次調査では、調査区が重なる部分も多く、形象埴輪の一部にはI次・II次調査にわたって同一個体破片が存在することが判明していた。そのため、I次調査とII次調査の出土遺物を一括して整理することとした。I次調査の出土遺物は、ごく一部が復元され公表されていた以外は、水洗がなされていただけで、未注記の状態で保管されていた。したがって、I次調査出土遺物の注記とII次調査出土遺物の水洗・注記から遺物整理を開始することとなった。

I次調査の出土遺物は遺物番号を付して取り上げられており、袋ごとに遺物カードが残されていた。しかしI次調査の際の調査記録は、市史編さん室が既に解散していたこともあり、ごく一部を除いて所在不明となっていた。このためI次調査の出土遺物は、出土位置が不明である。ただ1968年度はA～Dトレーナーとそれぞれの中での番号（No.1～）が付けられ、1969年度は100番代、1970年度は200番代が使われていることが判明している。このような状況のために、接合作業は困難を極めることとなった。そこで比較的個体識別が容易な形象埴輪については、I次・II次調査をあわせて個体識別を徹底することによって、I次調査での出土資料の出土位置を限定することに努めた。しかし円筒埴輪・朝顔形埴輪については、I次・II次調査の間での接合は、特徴の明確なもの以外はほとんどなしえない結果に終わっている。以上のような理由もあって、遺物の復元率は極めて低い。

遺物の復元にあたっては、焼粘土粉をエポキシ樹脂で固着させる方法（今津節生：1984）を用いた。復元によって内面の観察が困難になるものについては、可能な限り取り外して内面の観察が可能になるように工夫した。また脆弱な資料については、資料化するもののみについてアクリル樹脂（パラロイドB72）を有機溶剤（アセトン）の5%溶液として塗布し強化した。資料化したもの以外は、同一個体破片も含めて強化していない。これは自然科学的分析 将来行う場合に備えて、必要最低限のものを強化したことによる。

遺物の資料化にあたっては、以下のような基準で資料化する遺物を抽出した。円筒埴輪・朝顔形埴輪については、全周の約6分の1以上残存し直径の復元できるもの、口縁部の小破片を除いていざれかの段の高さが判明するもの、口縁部・底部については直径の復元が不可能でも製作技法が良く観察できるもの、1破片で凸帯とスカシ孔が残存するもの、これらのいざれかを満たすもの全てを抽出した。また、この基準を満たしていないとも、他の一般的な資料とは異なる特徴を有するものについては、全て抽出している。形象埴輪は、個体識別によって同一個体であることが判明している、ごく小さな破片を除いて、全ての資料を抽出して資料化した。

資料化するために抽出した遺物は、次のように遺物登録番号を個々に付け登録し、以後の作

業はこの登録番号に基づいて行った。本報告書においても、全てこの遺物登録番号を使用している。登録の際、形象埴輪で個体識別の結果、同一個体と判断されたものについても、破片1点ごとに番号を与えている。

No001～ 円筒埴輪（II次調査出土資料）

No201～ 円筒埴輪（I次調査出土資料）

No401～ 朝顔形埴輪（II次調査出土資料）

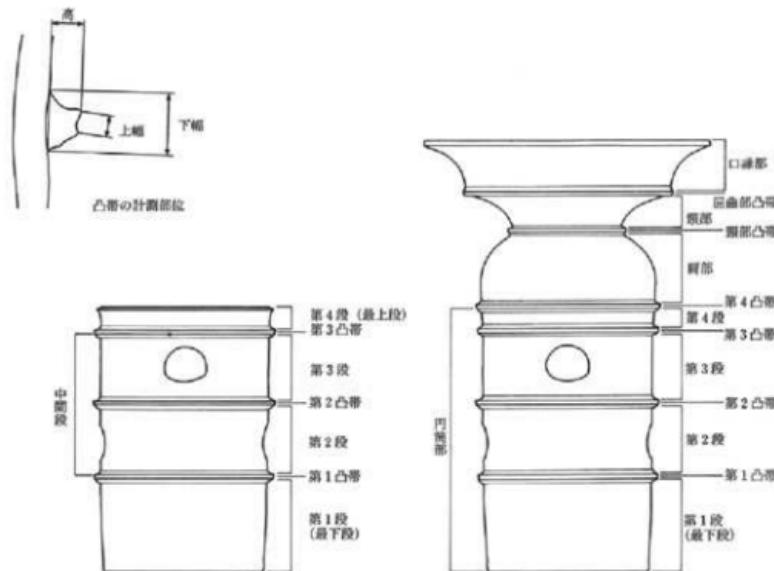
No501～ 朝顔形埴輪（I次調査出土資料）

No601～ 形象埴輪（I・II次調査出土資料）

No801～ 埴輪以外の遺物（I・II次調査出土資料）

これらの抽出し登録した遺物は、全て実測図・拓本作成、写真撮影、特徴の観察を行い、それらを本報告書に掲載した。

本報告書では、円筒埴輪との記載は、普通円筒埴輪を指すこととする。円筒埴輪、朝顔形埴輪の各部の名称は第10図に示したとおりとする。形象埴輪の各部分の名称は、その埴輪が模した実物の名称に基本的に従っているほか、第11図のとおりとした。盾形埴輪と鶴形埴輪につい

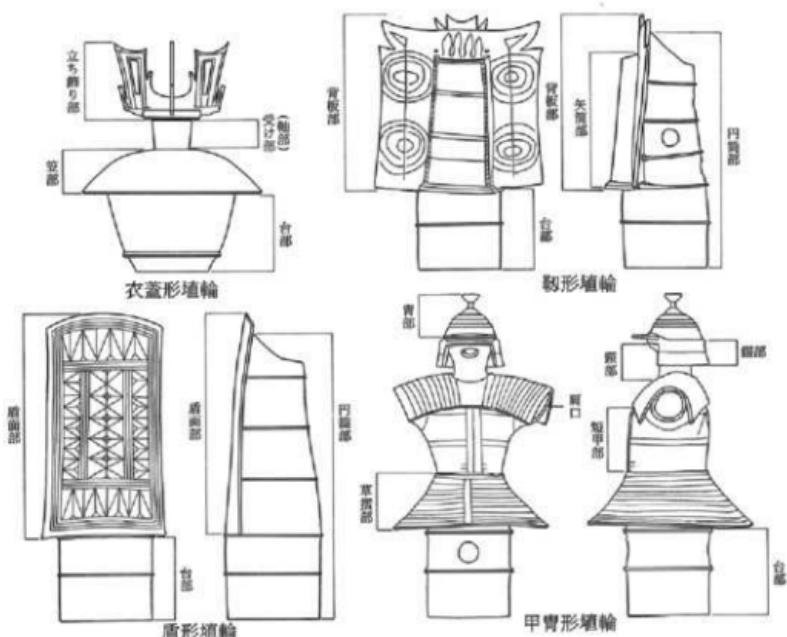


第10図 円筒埴輪・朝顔形埴輪各部の名称

では、円筒部とした場合は円筒形に巻き上げられた部分全体を指し、台部とは盾や韁の下に付いてそれらを乗せる台の部分のみを指すこととする。製作技法などの呼称は、基本的に川西宏幸の「円筒埴輪統論」（川西宏幸：1973）によっている。

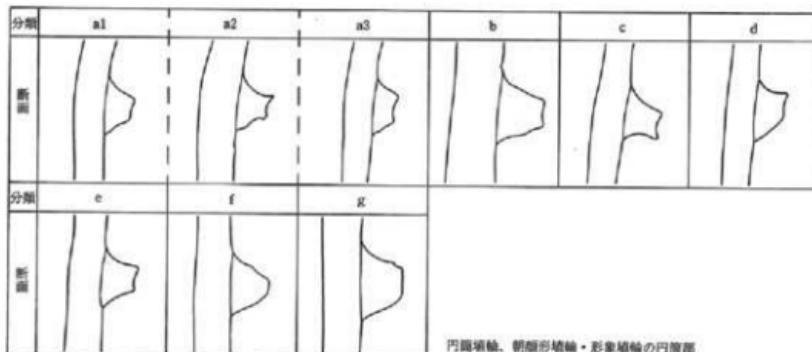
観察表中の法量の内、数字の前に・が付けられているものは復元値であることを示す。法量は0.1cmまで計測しているが、各段の高さは凸帯が必ずしも水平でない、平均的な部分で0.5cm単位で計っている。各段の高さは凸帯の中心からの高さを計測した。朝顔形埴輪の器壁の厚さは、肩部以上の部分は最小値と最大値を器厚①として示し、円筒部の器厚は平均的な部分の厚さを器厚②として示している。基部の高さは、内面での平均的な高さを計測した。また埴輪底面の拓影に矢印が付けられているものは、その箇所で基部の粘土帯がつながれていることを示す。

本古墳出土の埴輪の凸帯は、いずれも断面形がM字形あるいは台形のしっかりしたものであるため、本文中では個々にふれずに、観察表に分類を記載した。凸帯の分類については、以下の通りに分類した（第12図）。

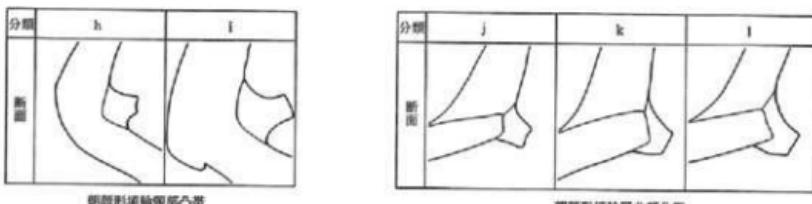


第11図 形象埴輪各部の名称

- a. 上面と側面は強くヨコナデが施されるが、下面のナデ付けが弱く、下面の本体との接合部があまり強くナデ付けられていないもの。下面のナデは複数回おこなわれており、下面の中程にゆるい稜を持つ。このaは、側面の稜が丸みを帯びるもの(a1)、側面の稲が鋭く突出するもの(a2)、高さが他のものより低いもの(a3)に細分した。
- b. 形態はaと同様であるが、下幅・高さがaより大きく、したがってより太い粘土紐を使って作られているもの。
- c. M字形を呈し、上面・側面・下面ともに強くヨコナデが施されるもので、下面の屈曲が強く、やや垂れ下がったような断面形状のもの。
- d. 側面の上側の稜は鋭く突出するが、下側の稜がゆるいもの。
- e. M字形を呈し、上面と下面の屈曲が同様なもの。下面に稜は持たない。
- f. ヨコナデが上面と下面のみに施され、側面はほとんどナデられず、粘土紐を器壁に押さえつけた時の指圧痕を残すもの。鶴形埴輪の円筒部に見られる。
- g. 上面と下面にはヨコナデが施され、側面にもヨコナデが施されるが、それが弱いため部分的に粘土紐の形状を残すもの。甲冑形埴輪の台部に見られる。
- h. 朝顔形埴輪の頸部の凸帯で、端正なM字形を呈し、側面はややくぼむもの。



円筒埴輪、朝顔形埴輪・形象埴輪の円筒部



第12図 凸帯の分類

分類	a ハケメ密度粗			b ハケメ密度細	
	a1	a2	a3	b1	b2
木取	本証目板	追証目板		本証目板	
模式図					
拓影					

第13図 ハケメの分類

- i. 朝顔形埴輪の頸部の凸帶で、hより下幅・高さが大きく、また側面は平坦なもの。
- j. 朝顔形埴輪の頸部から口縁部に移る、屈曲する部分の凸帶で、やや下に垂れたような形状を呈する。
- k. jと同様の部分の凸帶で形態も類似するが、下幅と高さが大きいものである。
- l. kとほとんど同じであるが、下面の一部に頸部に施された横方向のハケメ調整が及んでいるもので、この部分が明瞭な平坦面をなしている。

ハケメの本数は、2cmあたりの本数を記載した。ハケメは2cmあたり8本以下の粗いもの(a)と、2cmあたり10~14本の細かいもの(b)とに大別でき、さらにその特徴から第13図のように細別した。ただし、表面の保存が悪いなどの理由で細別が不可能なものは、大別のみを記載している。a1は粗いものの内、条線が器壁に直交しているもので、本証目板を使用していると考えられるものである。a2は条線が器壁に斜めにくい込んでいるもので、追証目板を使用していると考えられるものである(横山浩一:1978)。a3はa2と同様に追証目板を使ったと考えられるものであるが、特に密度が粗いものである。b1・b2はともに細かく、条線が器壁に直交しているものであるが、b1の方が条線が鋭い。詳細は第5章の考察で述べるが、このb1は原体が復元できており、工具の幅は11.5cm程であることが判っている。それに対してb2の工具の幅は、5cm程度と狭いものである。

焼成については、叩くと金属質の音のする堅ちに焼かれているものをa、焼きが甘いものをc、これら以外の通常のいわゆる埴質の焼きのものをbとする3区分で表示した。色調については、その個体の中で一般的な部分の色を土色帖の色調で記載した。

第3章 検出遺構

第1節 墳丘と外表施設

(1) 墳形と規模

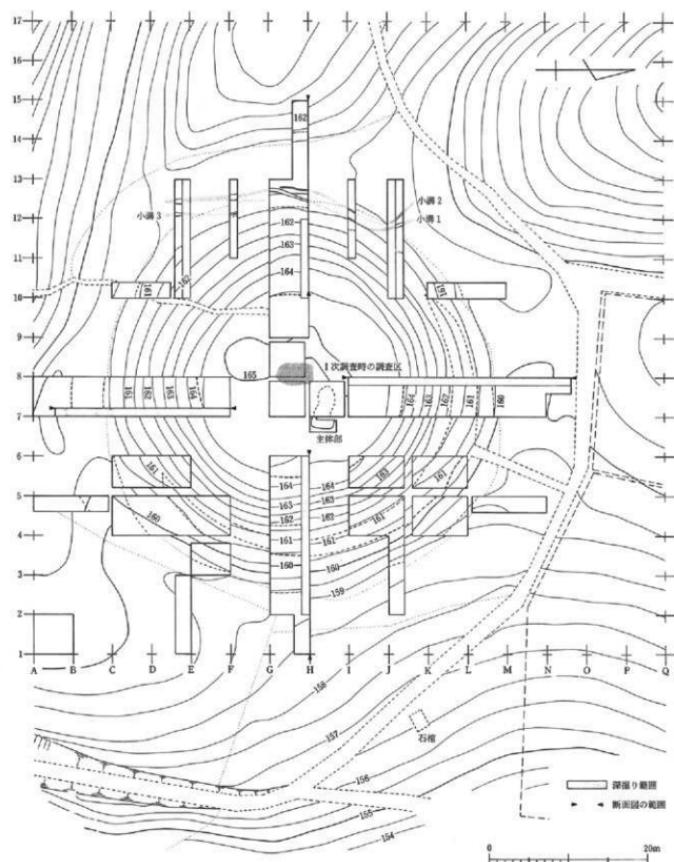
墳丘全体が笹で覆われており笹根による擾乱がはなはだしかったことや、必ずしも十分な調査が行えなかったこともある、深掘りを行った東西南北のトレンチ以外では、表土・崩壊土と旧墳丘面との識別は不十分にしか行えていない。よって以下の記述はこの東西南北トレンチでの所見を中心に述べることとする。また、D-10~12グリッドとJ-10~12グリッドでは、1m幅の範囲のみ精査している。なお、薙石はいずれの調査区でも存在しない。

今回調査を行った全ての調査区において、墳丘裾は弧状にめぐり、張り出しをもつ部分はない。現地形の観察では、南側の墳丘の外側に伸びる高まりが前方部あるいは造り出しになる可能性も考えられたが、南トレンチの調査において、この部分の高まりは浅い周溝の外縁部にあたることが明確になった。現地形の観察を加味すれば、前方部が付き帆立貝式の古墳になる可能性は考えられず、円墳と見なされる。また全体を調査してはいないが、現地形を考慮すれば、造り出しが付く可能性もほとんど無いものと考えられる。墳麓部の径は、南北50m、東西49mを計る。墳麓部の高度は東158.5m、北159.7m、西160.6m、南160.2mであり、西側ほど高度が高く、東側は低くなっている。墳頂平坦面の径は、東西23m、南北25mである。詳細は後述するが、東側のほぼ半分の範囲で段築が認められ、2段築成と見なされ、上段下端の径は約38mである。墳丘の高さは、東側で計って6.6m（下段2.8m・上段3.8m）である。

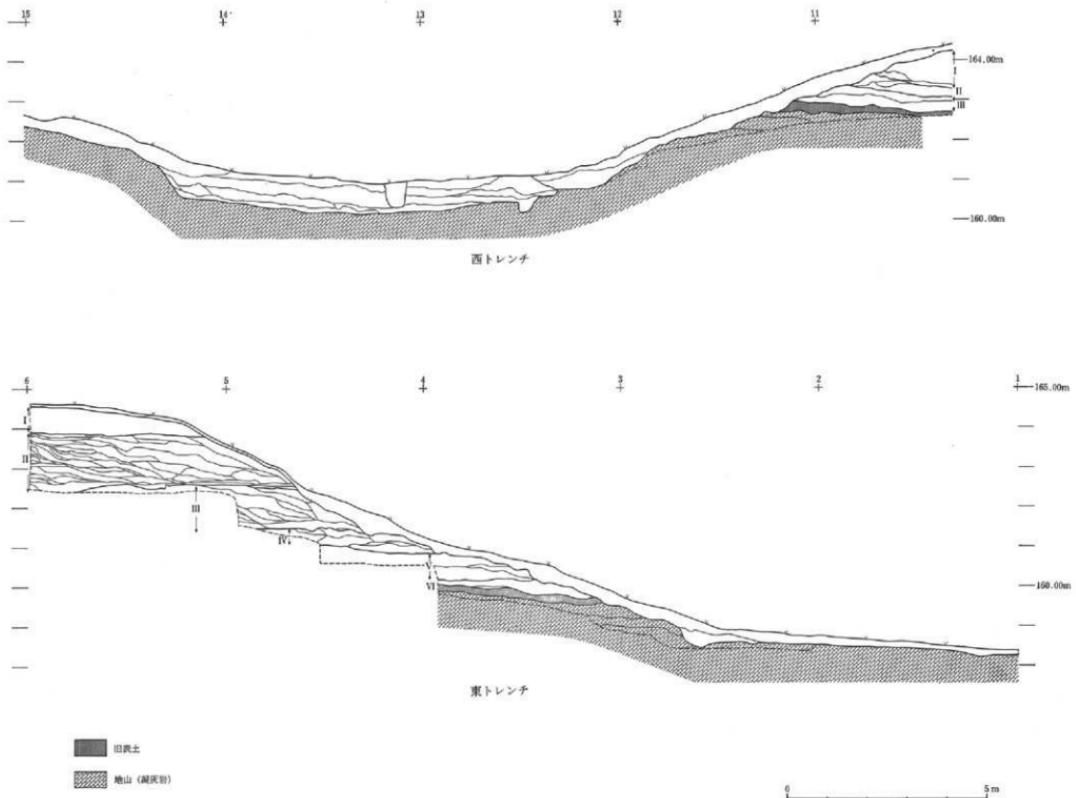
(2) 周溝

周溝は西側でもっとも明瞭に確認できた。西トレンチの墳丘下半部は、昭和40年代の開墾時のものと思われる擾乱により大きく破壊されているが、かろうじて墳麓は残存しているものと考えられる。ここから底面の幅で9.4mにわたって、地山の凝灰岩を削り出した周溝が確認された。後述する旧表土の高度から、古墳築造以前には、西から下ってくる尾根状の地形を呈していたと考えられ、西側の部分は尾根を切断する形で造り出されていることが判明した。

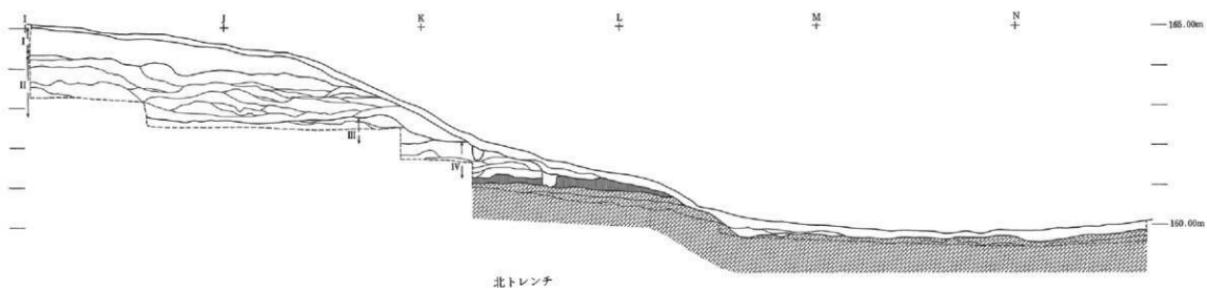
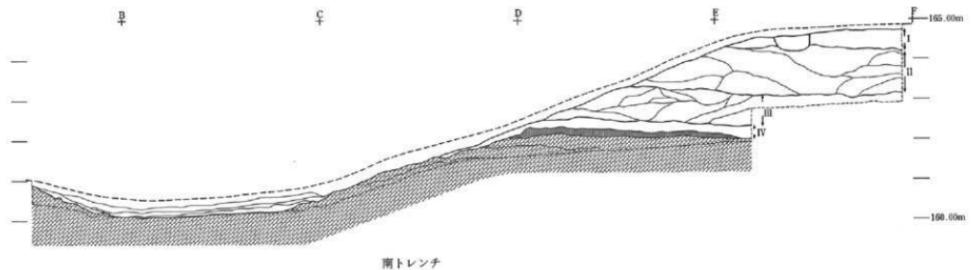
西側周溝底面には墳丘により3条の小溝が検出された（第14図）。いずれも部分的な検出に留まるが、その位置から図示したようにつながるものと考えられる。小溝1はD-12グリッドからJ-12グリッドまで伸び、西トレンチより北側では、墳丘裾にほぼ沿っている。幅10~55cm、深さ3~35cmを計る。北端は未検出であるが、J-12グリッドでは外側に方向を変え、2号墳の北東方向に入り込む谷に向かっている。南端も未検出であるが、2号墳の南側の斜面に



第14図 菅沢2号墳平面図



第15図 東トレンチ・西トレンチ断面図



■ 表土
■ 地山 (凝灰岩)

0 5m

第16図 南トレンチ・北トレンチ断面図

直交する方向に伸びている。小溝2はG-12グリッドから北に伸び、小溝1の外側に並行している。幅10~28cm、深さ3~19cmで、北端は未検出であるが、小溝1と同様に谷に向かっている。小溝3はD-12グリッドとF-12グリッドで検出され、小溝1の内側に並行している。幅12~45cm、深さ10~15cmで、北端は未検出であるがG-12グリッドでは検出されないことが、それより南で終わるものと考えられる。F-12グリッドでは墳丘裾に沿っているが、D-12グリッドでは墳丘裾から離れている。南端も未検出であるが、小溝1と同様に南側斜面に直交する方向に伸びて行くものと考えられる。西トレンチの断面観察では、小溝1は周溝底面から掘り込まれており、古墳築造に伴うものと考えられる。小溝2は西トレンチの断面では浅いため確認できなかった。しかし、この小溝2と小溝3は、小溝1とほぼ並行していることから、小溝1と同様に古墳築造時のものと考えられる。

南トレンチでは、墳丘裾から4.2mのところで、周溝外縁の立ち上がりが検出されている。外縁で80cmほど掘り込まれており、その傾斜はゆるやかである。

東トレンチでは墳丘裾から8mの範囲まで調査を行っているが、周溝外縁にあたる立ち上がりは検出されていない。この東側は、昭和40年代のブドウ畑造成時に重機により土が動かされているといわれ、その際に削平された可能性がある。

北トレンチでは墳丘裾から10.2mの範囲まで調査を行ったが、周溝外縁にあたる明確な立ち上がりは検出されていない。ただし墳丘裾から7.2mのところから、わずかに高くなってしまい、これが外縁の立ち上がりに相当する可能性がある。ただこの北側も、道をはさんだ北側がブドウ畑造成のためかなり平にならされており、周溝外縁が削平されていることも考えられる。

これらのトレンチ以外では東南部において周溝外縁の立ち上がりが確認されている。以上の点から、本古墳の周溝は、底面の幅4.2~9.4mでほぼ全体を浅くめぐるものと考えられる。しかし、周溝がこの幅であると、墳丘西北部と西南部の谷が入り込む部分では外縁が立ち上がることは、現地形の様相からは考え難く、この部分では墳丘裾の平坦面から外縁の立ち上がりを持たずに、直接谷の斜面に移行していく可能性があるだろう。

(3) 段築の構成

菅沢2号墳はI次調査結果と現況の観察から、2段築成と考えられるものの、現況の観察では北側と東側では段築の様子がよく観察されるが、南側で不明瞭となり、西側ではほとんど段差が認められない。今回の調査においても、結果的には北トレンチから東南部までのほぼ東側ではテラスが確認されたが、それ以外の西側ではテラスは明確には確認できなかった。

北トレンチではK-7からL-7グリッドにかけての部分に、幅3mのテラスが確認できた。テラス内縁での標高は161.4mであり、墳丘裾の標高は159.7mで、下段の高さは1.7mとなる。

下段上面のテラスは旧表土層からなっており、下段部分は全て削り出しによって造られている。東トレンチではG-3からG-4グリッドにかけての部分でテラスが確認された。幅は4mで、内縁での標高は161.3mである。墳丘裾の高度は、この東トレンチがもっとも低いため、下段の高さは2.8mとなる。下段上面のテラスは、旧表土起源の整地層と考えられるVI層と、盛土であるV層に相当する。

この北トレンチから東トレンチをへて、墳丘東南部のD-4・E-4グリッドまでは、比較的明瞭にテラスが確認でき、その幅は2.5~3mである。しかし、これより西よりのC-4グリッド付近からテラスは明瞭に確認できなくなっていく。さらに西の南トレンチでは、段築は明瞭には観察できない。標高161mから162mにかけての部分で、わずかに傾斜があるくなっている範囲があり、この高さが東半部のテラスの高さにはほぼ相当することから、ここが下段上面のテラスになる可能性も残るが、明確ではない。

西トレンチでは標高162m前後から墳丘裾付近まで、擾乱により破壊されており、段築は確認できない。この擾乱は昭和40年代の開墾時の擾乱の可能性があり、この西トレンチの両側のF-11・12グリッド、I-11・12グリッドでも確認されたかなり大規模なものである。このような状況のため、墳丘の西半部ではテラスはいずれの調査区でも明確にはできなかった。

このように、墳丘西半分の調査範囲が狭かったこともあるが、今回の調査では、西側でのテラスの存在は明確にはできなかった。この点については、次の3通りの理解が可能であろう。

まず、西側にテラスが認められなかつたことを、後世の削平によってテラスが失われたと考え、本来は全体に下段上面のテラスがめぐらされていたとする理解である。この場合、さらに2通りの考え方があろう。

①南トレンチの標高161mから162mにかけての範囲に認められたわずかに傾斜があるくなる部分をテラスに相当すると見なし、全体と同じ高さでテラスがめぐるとの理解。ただしこの場合、西側の墳丘裾の標高は160.6mであり、西側では下段の高さが1m以下になってしまう。

②東トレンチのテラスの標高より、北トレンチのそれの方がわずかに高く、また東南部でも西側に近いほど標高がわずかではあるが高い点を重視し、全体にテラスがめぐるが、その高さは東側が低く西側が高くテラスが全体に斜めに傾斜して造られていると考える理解。この場合、西側の下段の高さは、それなりの高さが確保されることになる。

これらに対して、③そもそも西側ではテラスは設けられず、盆地に面した東側にのみテラスが造られたという考えも可能である。

今回の調査では、いずれとも断定できる根拠は見いだせなかった。この段築のあり方は、埴輪の配列の復元の点でも大きな問題である。すなわち、先にあげた③の場合、後述するように墳丘裾には埴輪列がめぐらされていた可能性は極めて低いため、下段上面のテラスが全周しな

いとすると、墳丘西側では墳頂平坦面を除くと埴輪は立てられていないことになる。その場合、I次調査では西側の墳麓付近でも埴輪が出土しており、これらの本来の樹立位置が問題となろう（第8図下側の図、点が埴輪出土位置、大きな点は基底部が掘えられていた位置）。

（4）築成方法

古墳の築成方法を調査するために、東西南北トレンチに深掘区を設けて断面を観察した（第15・16図）。いずれのトレンチでも、盛土層の基本的な様相から大別が可能であり、それらの大別層の境はほぼ水平である。このことから、墳丘の築成にあたっては、何段階かの大きな作業単位があったものと推定される。

これらのトレンチのうち、もっとも盛土の状況が良く観察できた東トレンチでの大まかな層序区分は以下のとおりである。

I層 赤褐色、砂礫層

II層 暗褐色砂礫層を主体とし、礫層と明褐色砂質粘土層との不規則な互層

III層 褐色～にぶい赤褐色の砂質粘土層

IV層 暗赤褐色砂質粘土層

V層 褐色砂質土層

VI層 暗褐色砂質粘土層、旧表土起源の整地層

旧表土層 暗褐色砂質粘土層、上面に炭化物の薄い層が部分的に存在する

地山層 基岩の凝灰岩およびその風化帯

西トレンチ、南・北トレンチでも基本的な層序関係は東トレンチと同様であるが、西・南・北トレンチでは東トレンチの下部の層の相当層を欠くところがある。旧表土層の高度は、東トレンチ159.8m、北トレンチ161.2m、西トレンチ163.0m、南トレンチ162.3mで、全体に西側が高い。まず東側を中心に盛土を行い、平坦な面を造り出してから、より上部の盛土を行っていったことがうかがえる。盛土は、全体的に外に向かってゆるやかに傾斜する層が多く、墳丘中心から外に向かって盛土を広げていったものと考えられる。

盛土の材料となった自然土の土壤断面を仮想的に示すと次のようになる。

黒土層（腐植に富む；A層とする）

褐色系土層（土壤化作用をうけている、土壤化層；B層）

赤褐色砂質粘土または細角礫層（基岩の風化帯上部で土壤の母材、B C層～C層）

盛土層は、この土壤断面の任意の深さから掘取ってきている。したがって盛土層の下半部であるIII～V層はA層およびB層起源のものが多く、暗色泥質もしくは褐色粘土質のものが多い。両者はブロックで混合されたためか、偽縞状のまだら模様となっている。盛土層上半部である

II層はB C～C層から取られており、しかもくだかれいブロック（細礫岩状の凝灰角礫岩）のままの大きな角礫が含まれている。II層はB C層・C層起源の角礫とA層およびB層起源の泥質のものとが不規則な互層をなしている。I層はとくに赤みが強く2.5YRの赤褐色を呈する。その起源はB C層である。

（5）埴輪の出土状況

菅沢2号墳の埴輪の配列に関しては、詳細は不明ながらも1次調査によって、墳頂平坦面の周縁と下段上面の周縁に埴輪列があり、それらは隣のものと密着せず約1mの間隔をあけて立てられていることが知られてきた。今回の調査においては、円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪のいずれも、据え付けられた状態で出土したものはない。II次調査における円筒埴輪・朝顔形埴輪の部位別の出土状況は、第3表のとおりである。西トレンチとその周辺の、墳丘西側の部分の出土が特に少ないが、この部分が大きな擾乱によって破壊されていることと関連があるものと考えられる。また、東南墳麓部と東北側の下段上面のテラス付近に多く集中しているが、これらはいずれも小破片がほとんどのため、流れ込みと考えられる。

今回の調査で埴輪の配列を示す遺構としては、墳丘東北部の下段上面で発見されたビットがある（第18図）。墳丘東北部の下段上面にあたるH-4・I-4グリッドでは、テラス内縁の部分に直径40～50cm前後、深さ約20～30cmのビットが、約120～180cm前後の間隔で5基ならんで検出された。埋土中から埴輪が出土したビットが2箇所あるが、いずれも小破片で据え付けられたような状況では出土していない。ビットの埋土の状況の調査も十分行えていないが、ビットの間隔が1次調査の際に確認された埴輪据え方の間隔に類似することから、これらのビットが埴輪の据え方で、埴輪が抜き取られたものである可能性が高いものと考えられる。またここではテラスの外側の縁に近いところにも、1箇所同様のビットが発見されている。

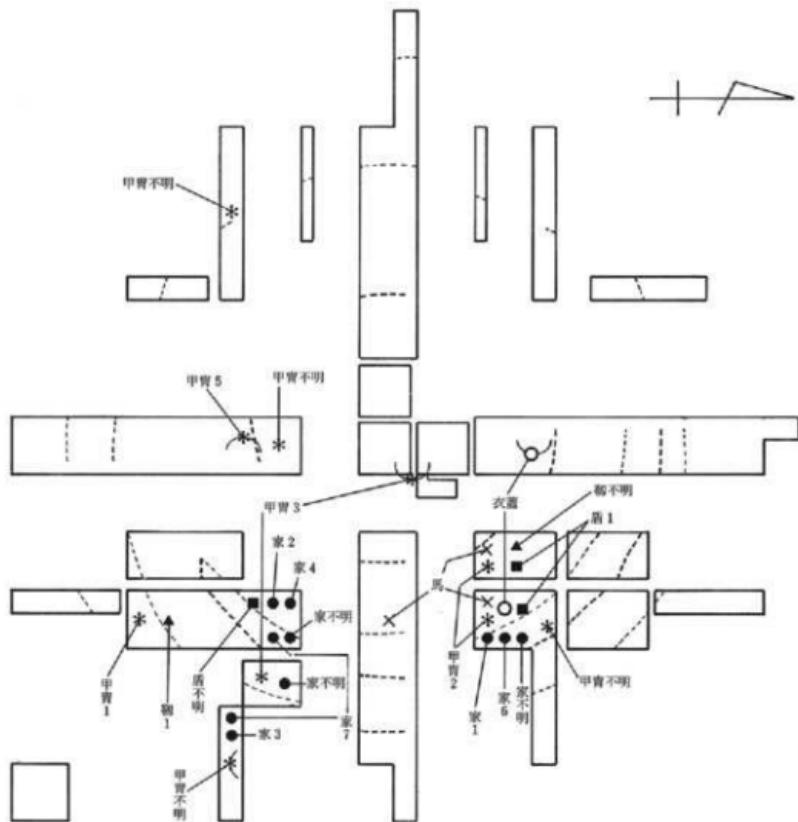
墳丘裾に埴輪列がめぐるか否かについて注目されたのは、東南部のC-4グリッドとその周辺でまとまって出土した埴輪である。ここは、II次調査においてもっとも密集して埴輪が出土した区域である。C-4区での埴輪の出土状況と、この中でもっとも多く復元できた3個体の埴輪の出土状況を第19図に示す。3個体ともグリッドのほぼ全体にわたって分布し、特に集中する部分も見あたらない。また3個体とも、上部ほど残存状況が良い傾向があり、401の朝顔形埴輪と640の甲冑形埴輪1では底部は残っていない。633の駒形埴輪1は底部から上端までは全体が出土しているが、この個体でも底部は最も遺存状況が悪く、ごくわずかがかろうじて残っているにすぎない。この3個体以外では接合するものは少なく、底部が残っていても完闡するものは無い。さらに、墳麓に埴輪列がめぐらされていたならば、墳頂平坦面やテラスの周縁に配列された埴輪列と比べると崩壊の影響は最も少ないと考えられるにもかかわらず、埴輪の

調査区	円筒埴輪						朝顔形埴輪						調査区	円筒埴輪					
	口 縫 部	スカ カモ シ・ 部	底 部	口 縫 部	尾 部	曲 部	第4 部	縫 部	スカ カモ シ・ 部	底 部	口 縫 部	尾 部	曲 部	第4 部	縫 部				
南トレ下半	0	1	2	0	1	0	0	K-5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
南トレ上半	0	0	0	0	0	0	0	L+M-4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
A-1	0	0	0	0	0	0	0	北トレ下半	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
A+B-4	11	2	20	1	2	1	2	北トレ上半	6	1	5	2	1	0	3	0	0	0	
C-4	25	25	36	8	6	9	2	G-7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
C-5	8	2	11	0	0	0	3	G-8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
D-1+2	0	0	0	0	0	0	0	H-6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
D-4	0	0	0	0	0	0	0	H-7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
D-5	0	1	0	0	0	1	0	C+D-10	3	0	2	0	1	0	0	1	0	0	
E-3	1	1	24	4	5	2	1	D-10-12	4	4	10	2	2	4	4	4	0	0	
E-4	0	3	7	0	2	3	1	F-11-12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東トレ下半	6	0	8	0	0	1	1	西トレ下半	2	0	5	0	0	0	0	1	0	0	
東トレ上半	0	0	0	0	0	0	0	西トレ上半	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
I-4	5	1	25	6	5	3	5	I-11-12	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	
I-5	4	0	7	1	1	0	3	J-10-12	1	0	6	1	1	1	0	0	0	0	
J-2	0	0	3	0	0	1	0	K+L-10	9	0	1	1	0	2	1	0	0	0	
J-3	1	0	3	1	0	1	1	不明	2	2	0	1	1	0	1	0	0	0	
J-4	1	0	0	0	1	1	0	II次調査合計	82	44	169	28	29	33	31	0	0	0	
J-5	0	0	0	0	0	0	0	I次調査合計	91	79	189	28	23	23	36	0	0	0	
K-4	0	0	0	0	0	0	0	起計	173	123	358	56	52	56	67	0	0	0	

第3表 円筒埴輪・朝顔形埴輪の出土状況

種類・個体	登録番号	Ⅰ次調査	Ⅱ次調査
円筒埴輪	001	C-4	No151 No243
家形埴輪2	609	E-4	No145
		E-5	
家形埴輪4	605	E-4	No240
	606		No147付近
家形埴輪7	747	E-5	
	748		No147
	749		No229
	750		No229
	751	E-2	
衣笠形埴輪	621		No208
	622		No232
	623	北トレシチ上半	
	624	北トレシチ下半	
	625	北トレシチ上半	
	626		No204
	628	I-4	
	629	北トレシチ上半	
	630	北トレシチ上半	
盾形埴輪1	632	北トレシチ上半	No126, No127, No131-2 I-4, I-1-5
甲背形埴輪2	647	I-4, H-5	No125, No126, No127, No129, No131, No131-2, No135, No135-136
甲背形埴輪3	648	E-3, G-H- 4	No141, No143, No144 No220, No221, No222
甲背形埴輪4	665		No149 No245
	666		No148 No241
	669		No150 No241, No245, No246

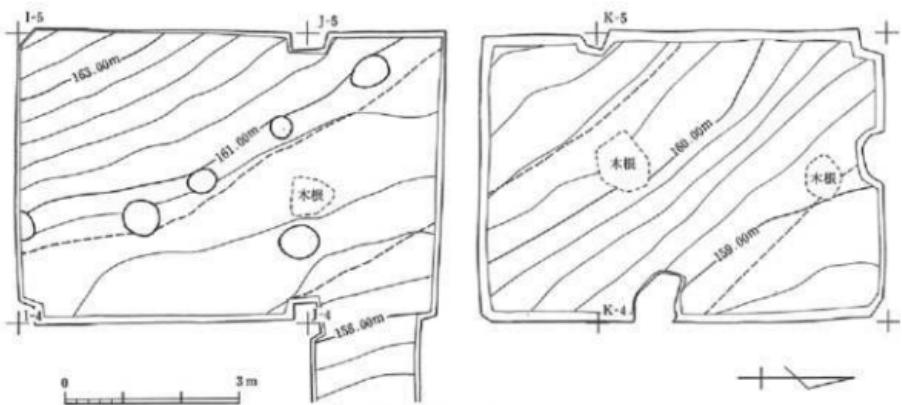
第4表 Ⅰ次・Ⅱ次調査での埴輪の接合関係



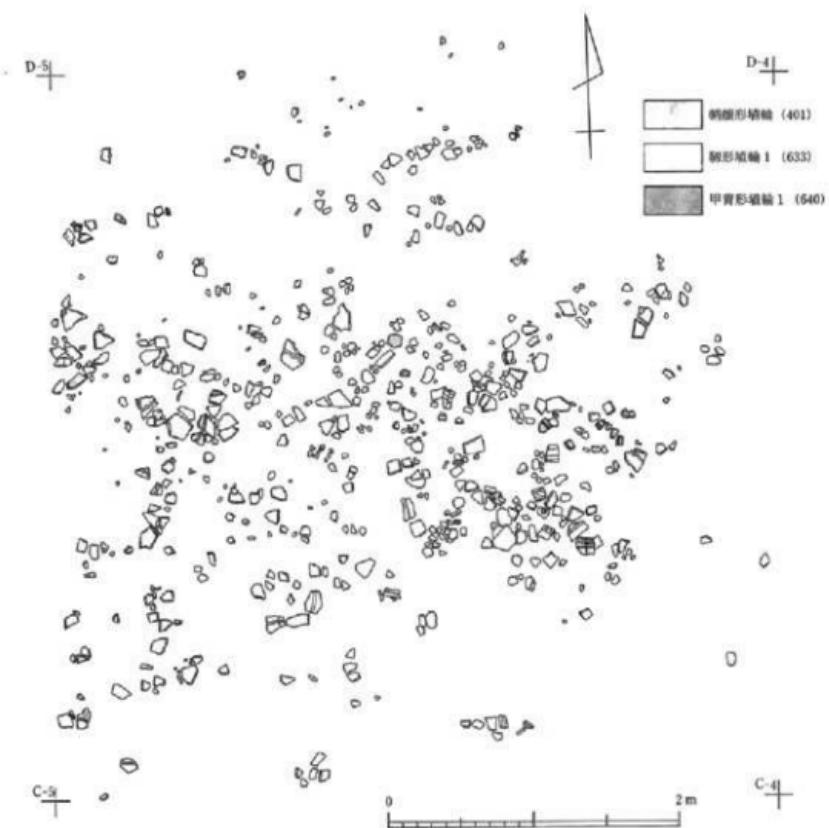
第17図 形象埴輪の出土状況

据え方は検出されていないし、大きく削平された様子も認められない。したがって、この墳體東南部で集中して出土した埴輪はこの箇所に配列されたものではなく、下段上面か墳頂平坦面に樹立されていたものが転落したものと考えられ、墳體に埴輪列がめぐらされていた可能性は低い。またJ-3グリッドの墳麓付近で、ピットの可能性のあるプランが確認されたが、調査範囲が狭いこともあって、確認できていない。これ以外では、いずれの調査区でも、墳體部では埴輪の据え方と考えられるような遺構は検出されていない。以上の所見からは、墳體に沿って埴輪列がめぐらされていた可能性は極めて低いものと考えられる。

次に形象埴輪の出土状況を見ると(第17図)、基本的に円筒埴輪・朝顔形埴輪の出土状況と共通しており、そのほとんどが埴丘東半部から出土している。種類別に見ても特に偏る傾向は見いだせない。【次調査と】次調査での接合関係をみると(第4表)、次調査で埴丘東北部のモ



第18図 東北側下段上面のピット



第19図 東南墳墓部の埴輪出土状況

ラス付近のH-5区、I-4区、I・J-5区から出土している盾形埴輪1と甲冑形埴輪2は、I次調査のNo125~136とNo222・228が接合している。II次調査では墳丘東側のE列で出土している家形埴輪2・4・7、甲冑形埴輪3は、I次調査のNo141~145とNo220~240が接合している。さらに墳丘東南裾にあたるC-4区出土の円筒埴輪は、I次調査のNo151とNo243が接合している。若干重なる部分はあるが接合関係からは、墳丘東北部から東南部に移るにつれて、I次調査での取り上げNoが100番台200番台ともに大きくなってしまい、両者の関係は特に矛盾しない。よって、I次調査のみの出土ではあるが、No148・149とNo241~246で出土した甲冑形埴輪4も、墳丘東南部付近の出土と見なして差し支えないものと思われる。したがって、個体が識別できたものでも、家形埴輪6個体、衣蓋形埴輪1個体、盾形埴輪1個体、剣形埴輪1個体、甲冑形埴輪4個体が東半部から出土しており、これは確認できた形象埴輪のほとんどを占める。形象埴輪の出土状況が円筒埴輪・朝顔形埴輪のそれと類似することから、西側で出土が少ないと想定されるが、少なくとも上記した形象埴輪が東側に樹立されていたことはその出土状況から確実であろう。これらの形象埴輪は器財を中心とするものであるが、甲冑形埴輪が東側だけで4個体と多いに対し、衣蓋形埴輪が1個体しか確認できないなど、その構成比率からは墳頂部の中心に密接して立てられたものとは考え難い。出土状況を合わせて考えると、盆地を望む東側を中心に墳頂平坦面か下段上面のテラスに並べるように、これら形象埴輪も樹立されていた可能性が高い。

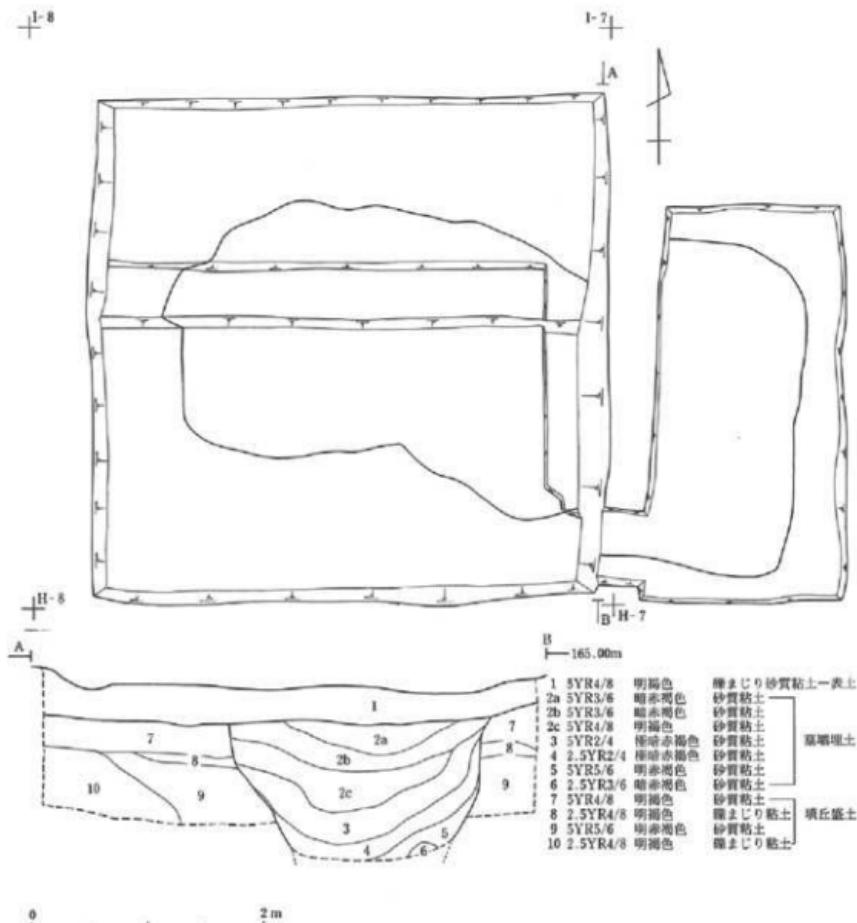
以上のII次調査の結果は、I次調査の埴輪配列に関する認識と矛盾するものではなく、それを変える新たな知見は得られていない。したがって、菅沢2号墳では墳頂平坦面と下段上面のテラスに埴輪が配列され、それらは1m強の間をあけて並べられていたものと考えられる。ただし、形象埴輪が墳頂平坦面と下段上面のどちらに樹立されていたかは明らかではない。

第2節 内部主体

墳頂部はH-7、G-7、G-8の3グリッドにおいて調査を行ったが、このうちH-7グリッドにおいて、主体部が確認された。H-7グリッド内の主体部は、表土である層厚30cmの笹の根が密に入る褐色砂質土を除去した段階で気付かれるべきであった。しかし、H-7グリッド南半は墳頂面から110~130cm、北半は70~100cmまで掘り下げた段階で作業が中止され、実測図が作成された。さきの『菅沢古墳二号墳発掘調査報告書』では、この段階までの所見をもとに報告がなされたが、主体部はH-7グリッドからさらに東のH-6グリッドに伸びており、東端は未確認であった。この主体部東端は、1987年度の補足調査において確認を行つており、ここではその成果を合わせて述べる。

主体部の墓壙は、東西方向に伸びる隅丸長方形を呈するもので、その方位はN-100°-Eで

ある。確認された長さは5.5mであるが、壁はやや傾斜を持って立ち上がるため、上面での長さは5.6m程になるものと考えられる。幅は東側の上端で2.8mを計る。墳丘盛土を掘り込んで造られており、横断面形は逆台形に近い形を呈する。埋土はいずれも落ち込んだ様な状況を呈している。断面形の様相から、墓壙の底面は調査した深さからさほど深くはないと考えられ、H-7区東壁際でのボーリング・ステッキによる調査では、調査した底面から60cm程で墳丘盛土にあたる。したがって、確認面からの深さは1.8m程になる。掘り込んだ範囲と、このボーリング調査においても、石棺や石室の痕跡は全く確認できないため、木棺直葬の可能性が高いと考え



第20図 主体部平面図・断面図

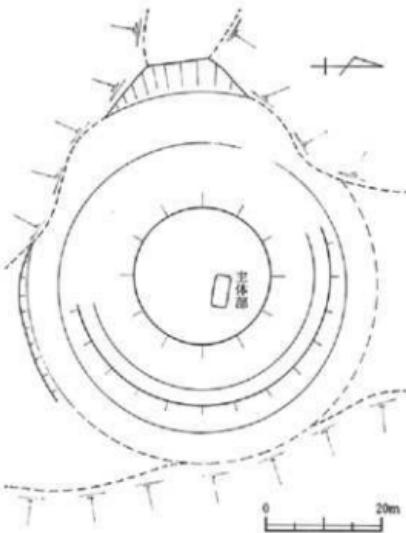
られる。ただ、H-7区の南半部の最も深く掘り込んだ部分の底面では、基壙の輪郭に沿って部分的ではあるが、粘土の薄い層が確認でき、場合によってはこれが粘土床に相当する可能性も残る。いずれにせよ、木棺であったことは間違いないと思われる。

この内部主体は、墳頂平坦面の中心からは北東にずれるため、他に主体部が存在するのではないかと考えたが、H-6・H-7グリッド以外の調査区では、他に内部主体が存在した痕跡は見いだせなかつた。I次調査時に墳頂平坦面に設けられた調査区は、II次調査のG-7からG-8グリッドにかけて検出されており、これらのグリッドではI次調査時より深くまで調査しているが、内部主体は確認されない。

第3節 小結

最後に、今回の調査で確認できたことと、残された課題について簡単にまとめておく。

- ①墳形…截頭形の2段築成の円墳。帆立貝式あるいは造出しが付く可能性はほとんど無い。
- ②規模…墳麓部径は南北50m、東西49m。墳頂平坦面の径、南北25m、東西23m。上段下端の径、約38m。高さは東側で6.6m（下段2.8m、上段3.8m）。
- ③周溝…尾根を切断した西側では底面の幅9.4m。南側で4.2m。ほぼ全体を浅くめぐるものと推定。東側と北側は確実ではない。
- ④段築…北トレチから東南部にかけてテラスが確認され、2段築成である。西側の状況は確認できていない。
- ⑤築成方法…西から下ってくる尾根状の地形を切断し、整地を行い平坦面を造り出してから、何段階かに分けて盛土を積む。
- ⑥墳輪の配列…墳頂平坦面の周縁と下段上面のテラスに墳輪列がめぐる。形象埴輪の配列状況は明確ではないが、東側中心に並んで立てられていた可能性。西側の状況を確認する必要がある。
- ⑦内部主体…墳頂平坦面の東北よりに長さ5.6m、幅2.8mの基壙。木棺直葬あるいは粘土床。方位はN-100°-Eの東西方向。他に内部主体があるかどうかは未確認。



第21図 菅沢2号墳想定復元模式図

第4章 出土遺物

第1節 増輪

増輪は出土遺物のほとんどを占め大量に出土しているが、いずれも遺存状況が悪く、復元率も低い。これらの増輪は、I次調査、II次調査を合わせた全ての資料で、黒斑の存在するものは無く、全て審窯焼成によるものと判断される。そのため以下の記述では、この点は省略する。

(1) 円筒増輪（第22~41図、第5~9表、図版16~34）

ここには口縁部が遺存し円筒増輪であることが確認できる個体の他、中間段や底部の資料で、朝顔形増輪や形象増輪の円筒部であると確定できなかった全ての資料を含めている。したがって後に検討するように、朝顔形増輪の円筒部の可能性の高い資料もこの中に含まれている。

円筒増輪は全体が遺存する個体が存在しない。第22図の201が最も遺存状況の良いもので、口縁部から凸帯3条をはさんで4段目までが残存している。この個体の上から2段目と3段目には、それぞれ一対の円形のスカシ孔が直交する位置に開けられている。複数の段のスカシ孔の位置関係が判明する資料では、第30図の277を唯一の例外として、円筒増輪・朝顔形増輪とともに、全て直交する位置関係を取る。しかしこの201の上から4番目の段には、3番目の段と直交する部分にわずかではあるが残存部分があるにもかかわらず、ここにはスカシ孔は観察できない。底部の遺存する資料では第35図の213、第39図の022のように、2段目にスカシ孔が穿たれている。したがって、この201の遺存する一番下の段は、本来の最下段の可能性が高く、凸帯3条の4段構成をなすものと考えられ、他の破片でも特に矛盾するものはない。よって便宜上、以下の説明では、凸帯3条、4段構成をとるものとして記述する。

この201は各段ともほとんど直径が変わらない円柱状の形態を呈し、最上段の上半で外反し端部に至る。中間段は12.5~13.0cmとほぼ同じ高さであるのに対して、最上段は5.2cmと狭い。スカシ孔は円形で、やや横長である。外面調整は1次調整タテハケのみで、内面調整は斜方向のハケメ調整である。この内外両面のハケメが、ほぼ同じところで途切れ何回かに分けて調整がなされていることから、小工程を繰り返して製作されているものと判断される。他の資料では、第24図の239・249などハケメの途切れるところにほぼ対応する位置に、はっきりとした粘土紐の縦目の痕跡が確認されることから、基本的な特徴が一致するこれらの円筒増輪では、小工程を繰り返して製作していると考える。口縁部は外面がタテハケの後にヨコナデを行う。この口縁部のヨコナデと第3凸帯の貼付けの前後関係は、口縁部のヨコナデの下端の範囲が、ナデが弱く不明瞭であることから、他の資料も含めて明確にできなかった。口縁部の内面調整は、

斜方向ハケの後、横方向のハケメを施してからヨコナデを行っている。中間段には、1次調整のタテハケの後に部分的に弱いヨコナデが観察される。同様のヨコナデは他の円筒埴輪の中間段や朝顔形埴輪の円筒部にも観察されるものがあるが、いずれの場合でも部分的に弱く、ナデの範囲も明確でない。したがって、これは2次調整とは考え難く、凸帯貼付に伴うヨコナデの際に、凸帯の間にも部分的にヨコナデが及んだものと考えられる。

この201以外の個体も、いくつかの例外を除いては、ほとんどがこの201と同様の特徴を持っている。したがって以下では、口縁部の遺存するもの、中間段だけが遺存するもの、底部が遺存するものの順に、特に異なる点を中心に記述することとする。

第22図から第27図が口縁部の遺存する資料である。口縁部の遺存する資料は、後に述べる221・244の2点の例外を除いて、資料化しなかった小破片を含めて全てのものが、最上段が4.4～6.7cmと狭いものである。口径は最小26.7cmから最大39.2cmと幅が広いが、30～35cmのものが多くを占める。第3段まではいずれも円柱状の形態を示すが、口縁部の形態は外反するもの、大きく外反し内面に稜を形成するもの、小さく外方に屈折するもの、大きく外方に屈折するものと、変化に富んでいる。口縁部より下の体部の外面調整は、いずれもタテハケのみであるが、内面調整は斜方向ハケ、斜方向ナデのものがあり、第22図240は第3段の中位付近までが斜方向ナデ後斜方向ハケで、さらにそれより上位には斜方向ナデが施されている。口縁部の調整は、外面はタテハケの後、ヨコナデを施すものがほとんどであるが、第24図の257はタテハケの後口縁部に横方向のハケメを施してからヨコナデを行っている。また205は、第3凸帯を貼付けた後に、斜方向ナデ（板状工具か？）を施してからヨコナデを行っている。一方、内面調整は変化に富んでおり、①体部の調整の後に口縁部の開く部分のみに調整を加えるもの、②第3凸帯に対応する位置付近より上にヨコナデあるいは横方向のナデを行い、さらに口縁部の開く部分に調整を加えるもの、③同じく第3凸帯に対応する位置付近より上に横または斜方向のハケメを施し、さらに口縁部の開く部分に調整を加えるものに分けられる。①にはヨコナデのみを行うもの（第23図014、第25図026など）と、口縁部の開く部分に横方向のハケメを施した後にヨコナデを行うもの（第22図201・223・211など）がある。②も同様にヨコナデのみを行うもの（第22図001）と、横方向のハケメを施した後にヨコナデを行うもの（第22図240、第23図247・271など）がある。③はいずれも横方向のハケメを施してからヨコナデを行うものである（第26図028、第27図021）。

これまで述べてきた口縁部資料と異なるものが、第27図の221・244の2点で、口縁端部の外面に凸帯の剥落痕を有するものである。いずれもほとんど開かない円柱状の体部から、口縁近くでわずかに外反するもので、口縁端部外面に幅1.9～2.0cmの凸帯の剥落痕がめぐる。残存する本体部の口縁端面はわずかに外傾する面をなす。221では最上段の幅は13.5cmを計り、他の円

筒埴輪の中間段の高さとほぼ等しい。いずれも外面調整は1次調整タテハケのみで、内面調整は明確ではないがナデと思われる。内面の口縁部付近には横方向のハケメの痕跡が観察される。凸帯は側面がわずかにくぼむ台形を呈する。このような特徴の口縁部を持つものはこの2点のみで、これ以上の特徴は不明であるが、221は口縁部で直径が33cm程になると思われる。

第28図から第34図が中間段だけが残存するものである。中間段は、いずれもほとんど開かれない円柱状で、段の高さは12.5~14.0cmである。スカシ孔は1例を除いて全て円形と考えられるもので、2次調整を施し器壁の厚い013・232以外では、径は6~8cmである。複数の段が遺存する資料では、スカシ孔は直交すると判断されるものが大部分を占めるが、第30図の277だけは上下の段のスカシ孔が60°前後ずれる位置関係になるものと考えられる。外面調整は後に示す少數の例外を除いて、いずれも1次調整のタテハケのみである。内面調整は斜方向ナデ、斜方向ハケ、あるいは斜方向ナデの後斜方向ハケを施すものがある。

これまで述べてきた中間段とは異なる特徴を持つ中間段の資料を第34図にまとめた。013・232・236は、2次調整にヨコハケを施す中間段の破片である。このうち236にはヨコハケを止めた痕跡が明瞭に残っており、B種ヨコハケである。232は2次調整のヨコハケがしっかりと施されておらず、1次調整のタテハケを多く残している。013・232には円形のスカシ孔があり、比較的多く残っている013のスカシ孔の径は、これまで述べた一般的なものより大きくなるものと判断される。このヨコハケを施す3点は、器壁の厚さが1.3~1.6cmと他のタテハケのみの破片より厚く、また013の凸帯は高さ・下幅ともに大きくなっている。259は凸帯の特徴と器壁の厚さが、これらのヨコハケを施すものと類似する中間段の破片である。これらの4点は、第5章での検討で詳しく述べるが、底部の020・213・229とともに大形の朝顔形埴輪の円筒部と考えられるものである。233はスカシ孔があることから中間段の部分であるが、外面調整に縦方向のナデを施し、それから凸帯を貼付けている。218もスカシ孔があるため中間段と見なされる破片であるが、外面調整が横方向のナデを施すものである。228はスカシ孔の2辺が直交する。粘土紐の巻き上げ痕と凸帯の形状から、図に示した上下関係になると考えられる。したがって、スカシ孔は側辺と下辺が直交することになるため、スカシ孔の形は方形になるものと判断される。

第35図から第41図が底部の遺存する資料である。底部の資料も、口縁部同様、底径の変異が大きく、最小25.7cmから最大40.3cmに及ぶ。この底径が大ききもので、器厚が厚い013・213・229は大形の朝顔形埴輪の底部の可能性が高いものである。最下段の高さが判明するものは第35図213と第39図022の2点のみであるが、いずれも16.5cmで、中間段よりも高い。これ以外にも第37図250、第38図027・242、第39図022では15cm付近の高さまで残存しているが、凸帯は存在しないことから、最下段は中間段より高いことが判る。形態はほとんど開かず直立するものと

開くものとがある。いずれも基部を製作した後に巻き上げているものと考えられる。基部の高さは、内面の合わせ目で計って、3.2~5.0cmで、4cm前後のものが多い。基部の本数は底部が完周する第35図の212・215では3本となっている。同じく214では2本まで確認できるが、欠損があり3本になるのかどうかは確実ではない。基部の合わせ方は、212では全て左側が外にくるが、215では左側を外にして2本を合わせ、それに両端とも外側からかぶせるようにもう1本を合わせている。底面には棒状の圧痕が観察されるものがあるが、いずれも圧痕はまばらで、繊んだ形跡はない。植物の茎をまばらに敷いたものと考えられる。外面調整はタテハケのものが多くを占めるが、その他に継方向のナデのものがある（第35図214・215、第36図217・219、第37図216）。これらには、ハケメ調整の際と同様に、調整の始まるところに粘土のはみ出しが見られるものがあることから、板状工具によるナデの可能性がある。また第35図の212は、条痕が極めて弱いタテハケである。内面調整は、全て斜方向のナデで、下端近くは横方向の部分もある。さらにナデの後、斜方向のハケメが施されるものがある。最下段の下端の底面に接する部分には、内外面にヨコナデが見られるものが多い。これは内外両面に見られるもの、外面だけのもの、逆に内面だけのものもある。これらは体部の調整との前後関係が確定できなかったものもあり、下端のナデが先行すると判断されるものもあるが、多くは体部の調整の後に下端にヨコナデが加えられている。しかしこれらのヨコナデは、①器壁の厚さを大きく変えるものではないこと、②底面側に抜けているものがないこと、③口縁部までを含む全ての資料で倒立させたことを示す痕跡が見られないこと、④成形が小工程を繰り返していると判断されること、⑤特に外面ではヨコナデが一周せず部分的に施されるものが多いことから、一挙巻き上げに伴う底部調整とは見なし難い。埴輪を正立させたまま、底部の粘土のはみ出しなどを整える程度のものと考えられる。また第37図の250では、外面の下端付近に横方向のハケメが部分的に観察される。

第41図の029はこれまで述べてきたものと異なり、外面調整がB種ヨコハケの後にタテハケを施し、さらにB種ヨコハケを施すという、3段階の調整を行っている。

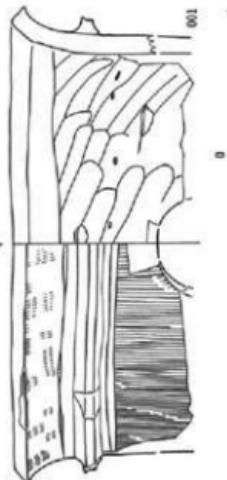
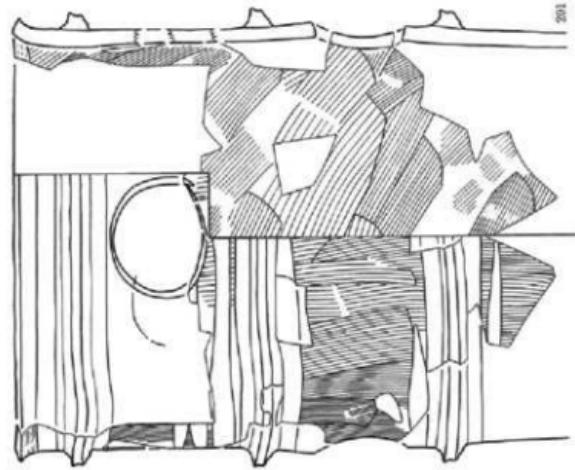
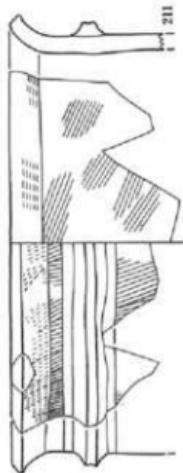
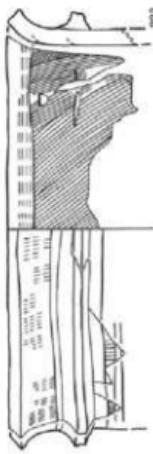
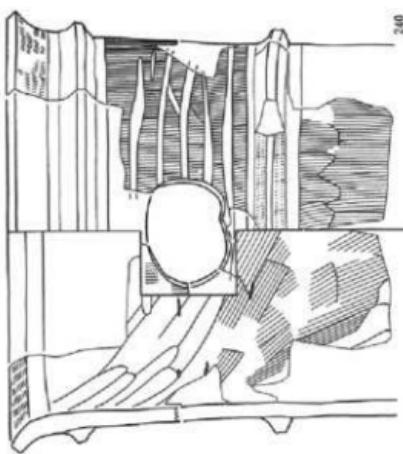
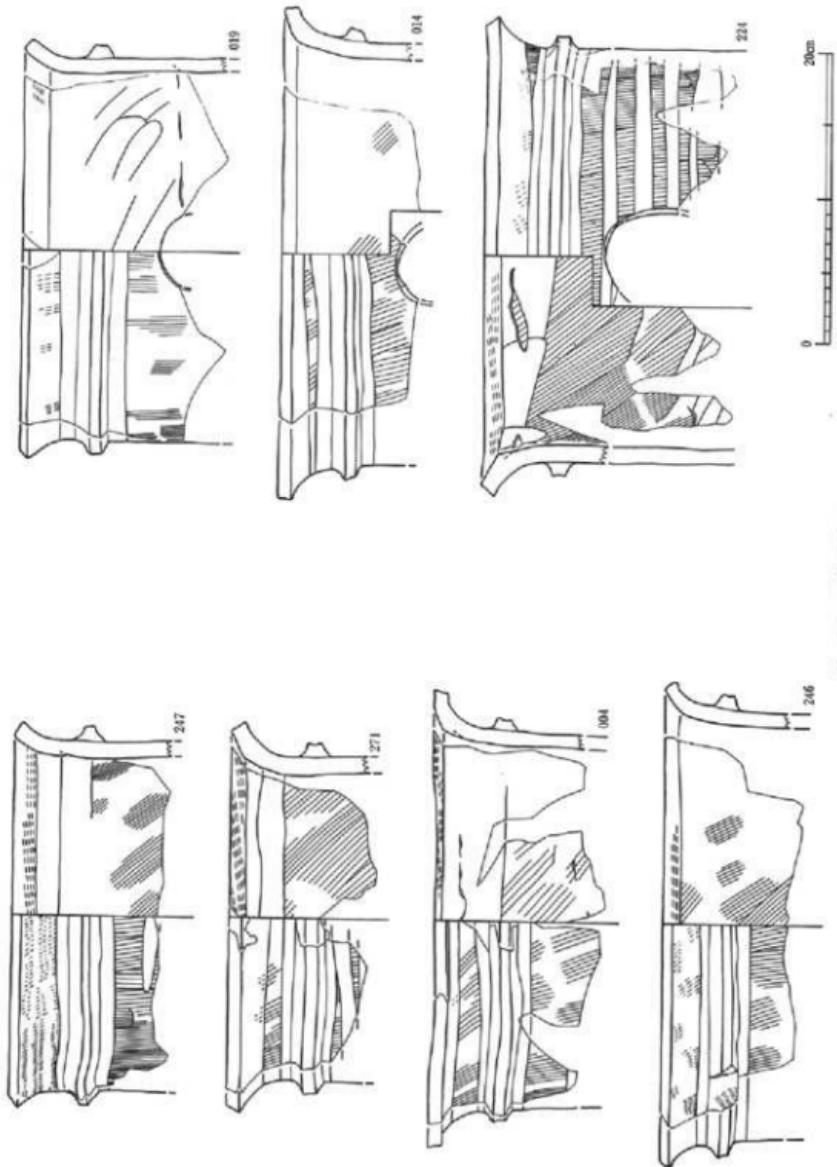
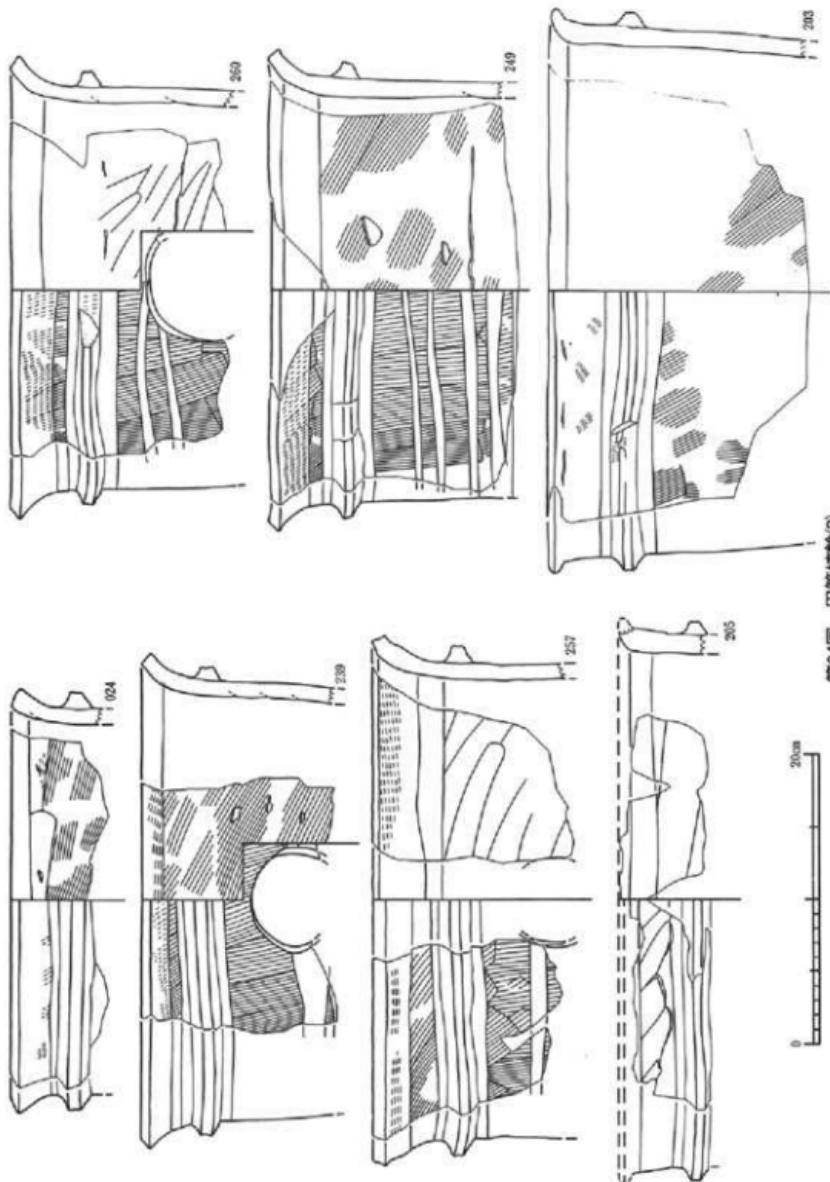


圖222 圓筒埴輪(1)

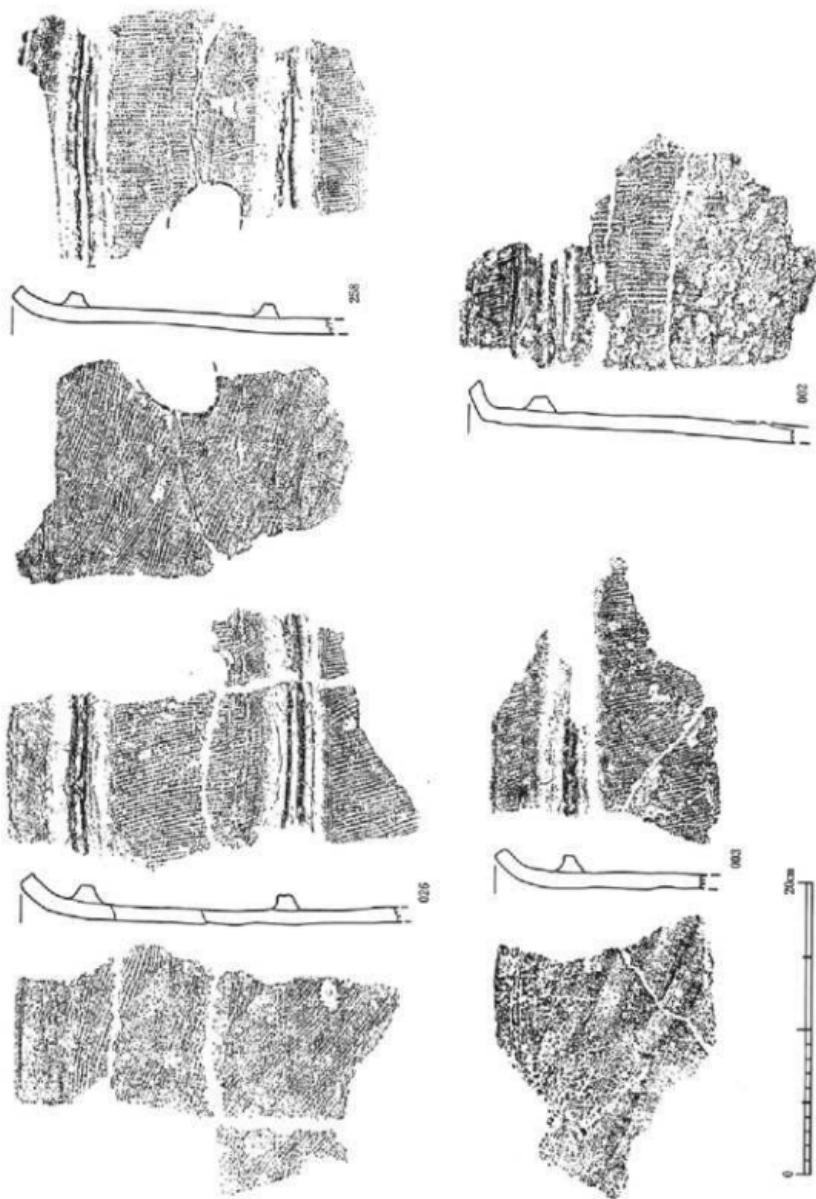
第23図 円筒埴輪(2)



第24圖 圓筒埴輪(3)

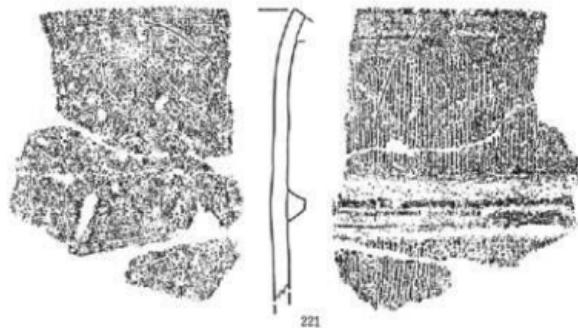
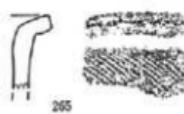
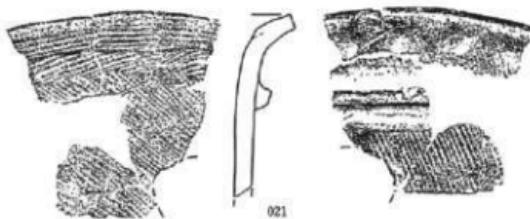
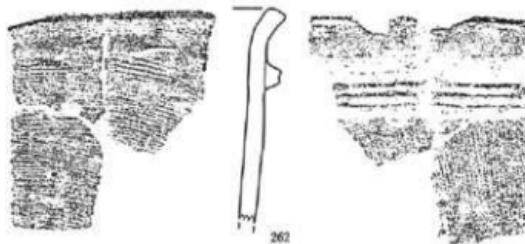


第25図 円筒埴輪(4)





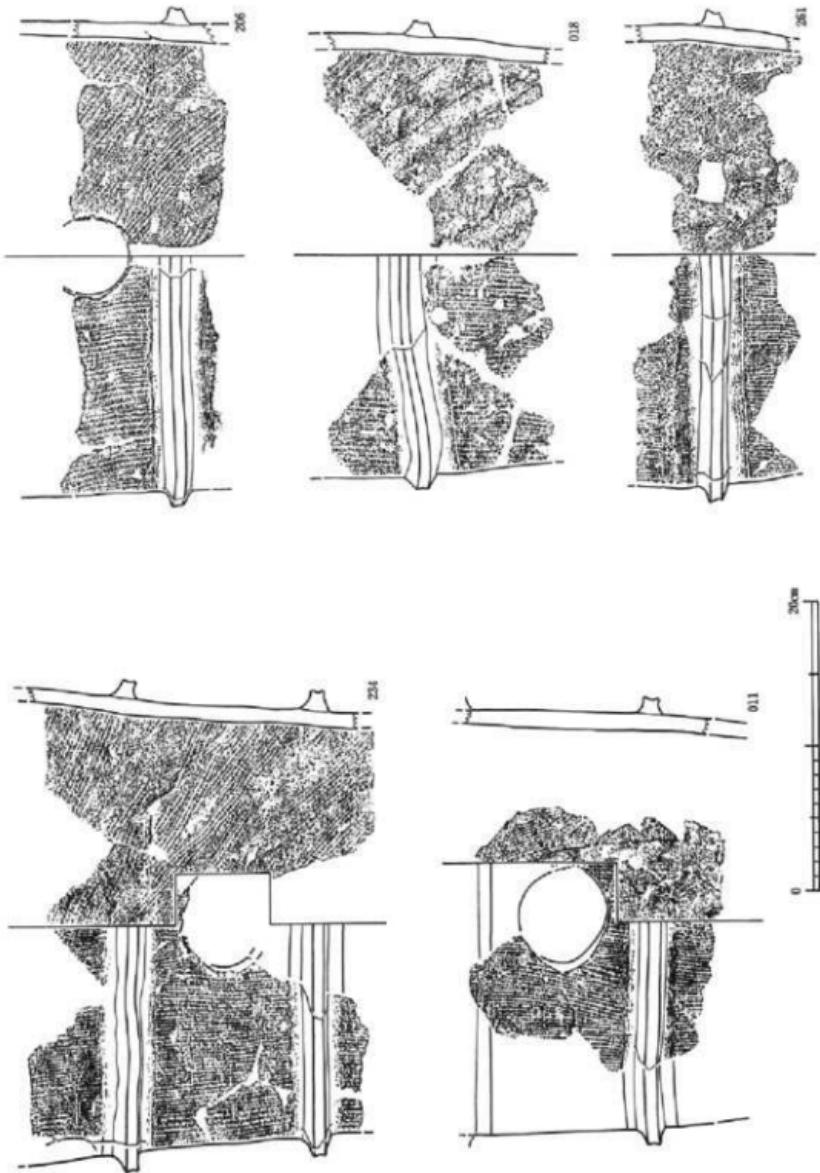
第26図 円筒埴輪(5)

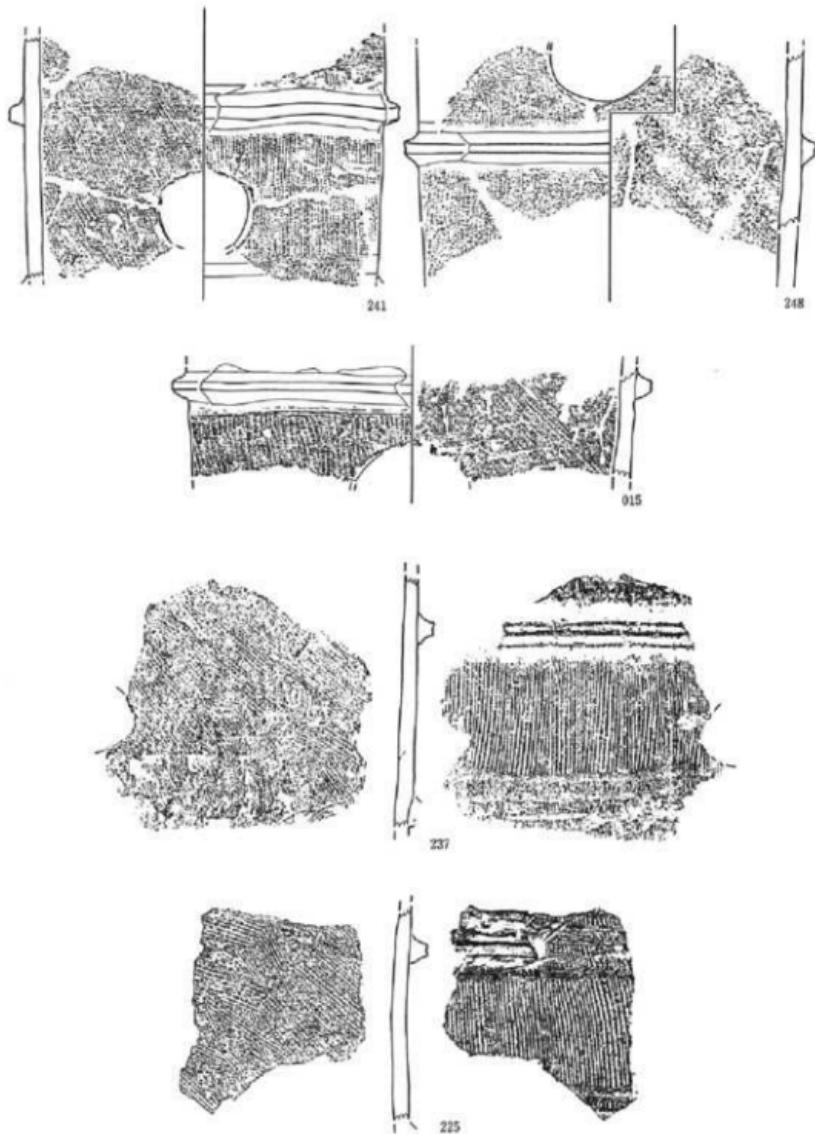


0 20cm

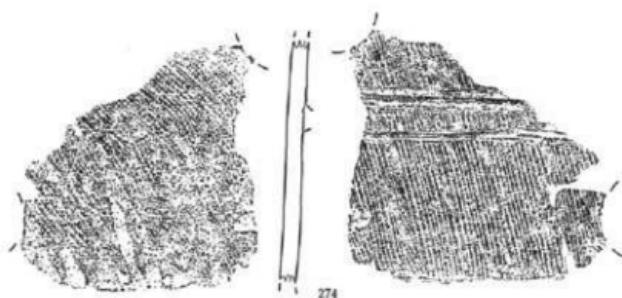
第27図 円筒埴輪(6)

第28図 円筒埴輪(7)

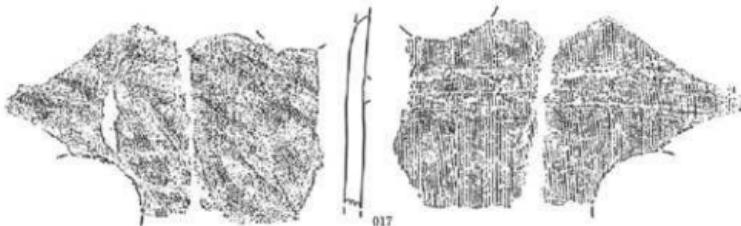




第29図 円筒埴輪(8)



274



017



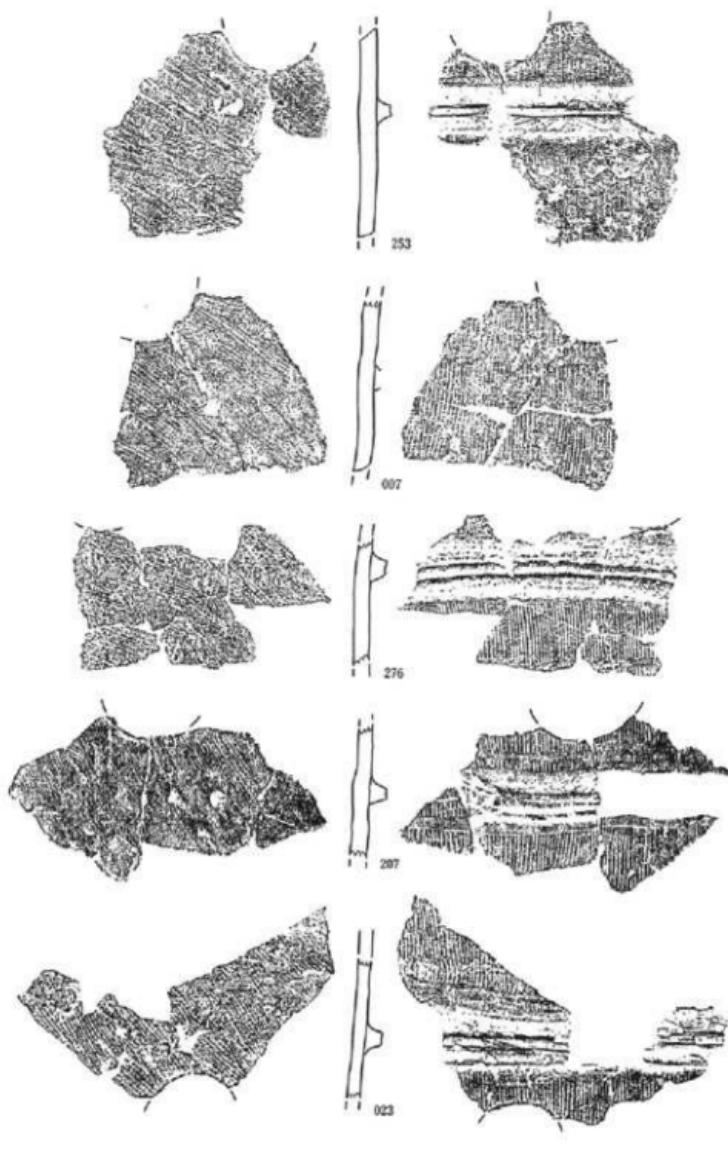
277



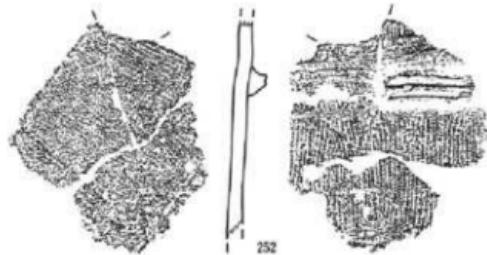
272

0 20cm

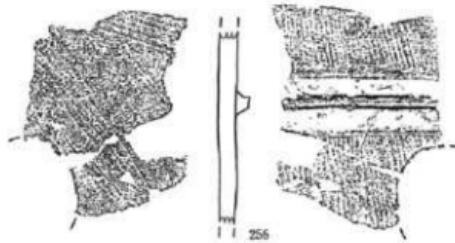
第30図 円筒埴輪(9)



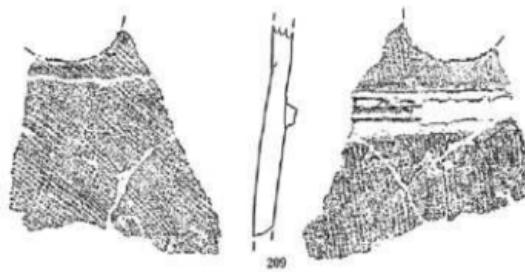
第31図 円筒埴輪(10)



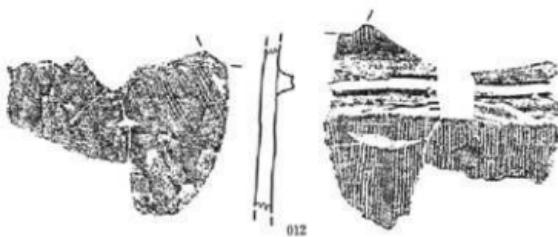
252



256



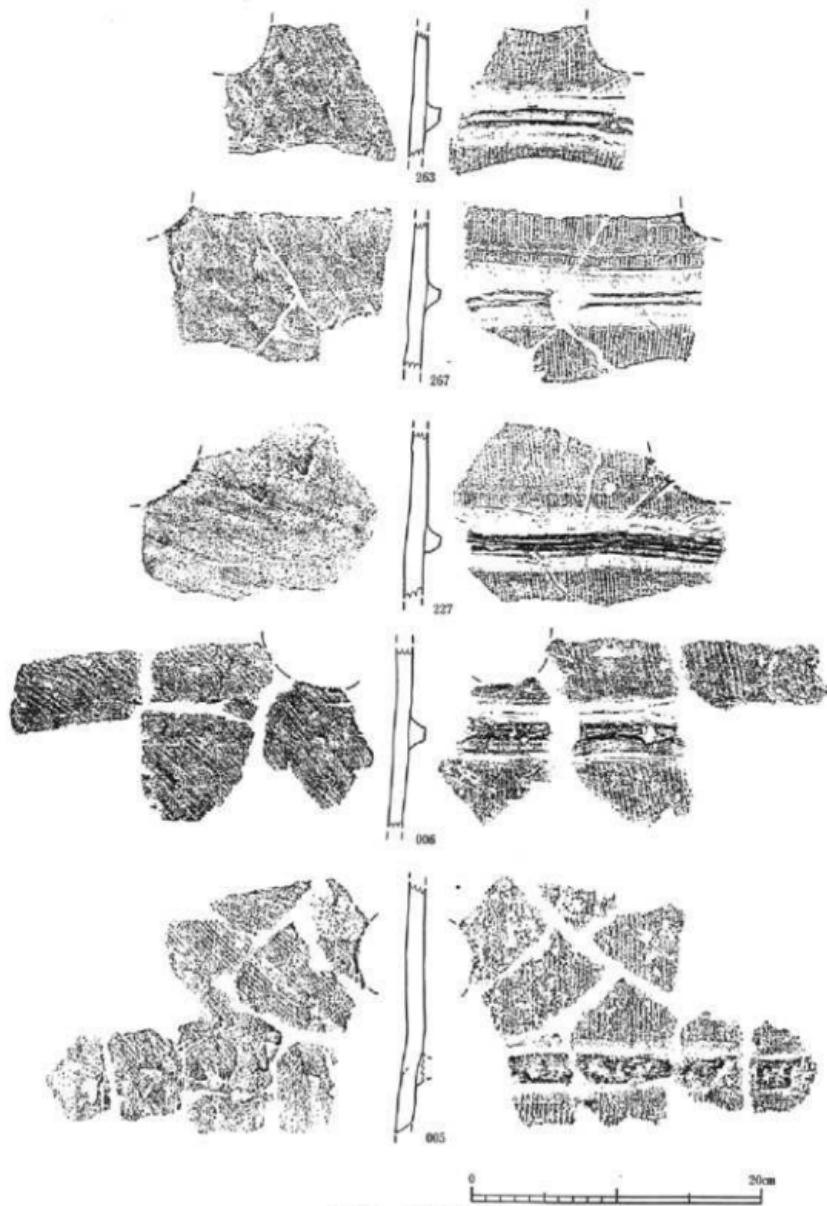
209



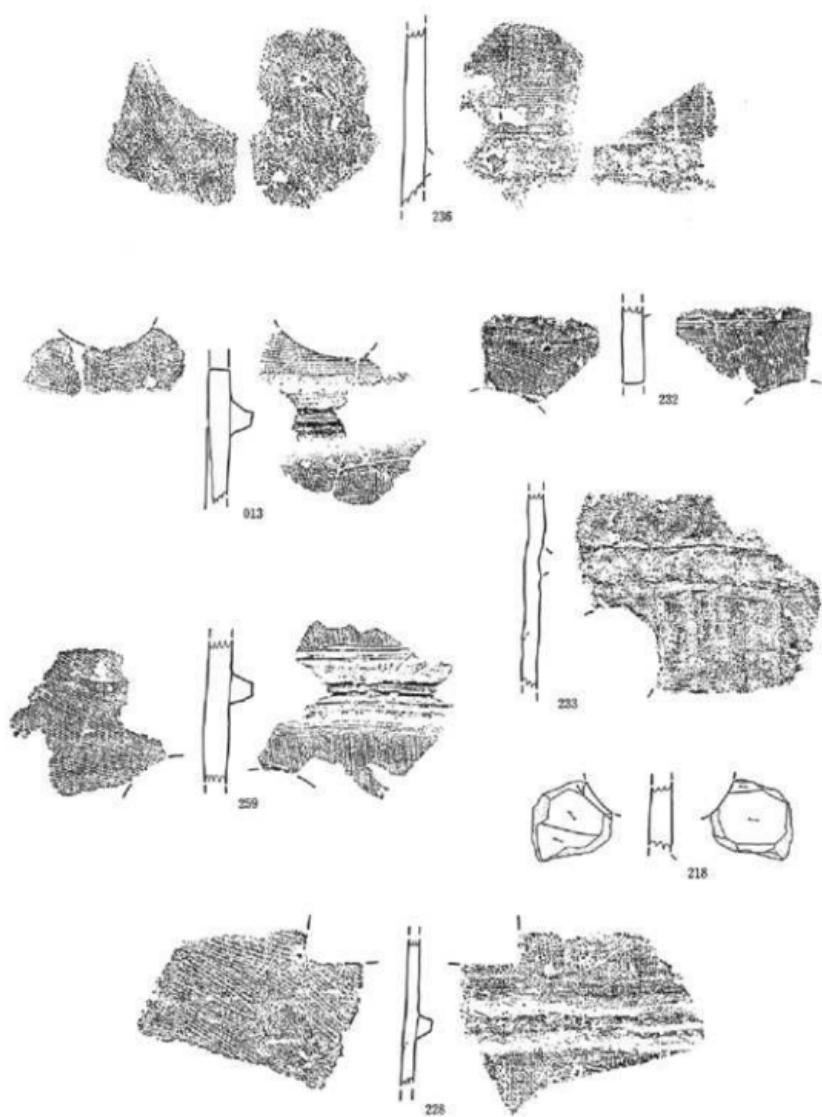
012



第32図 円筒埴輪(1)



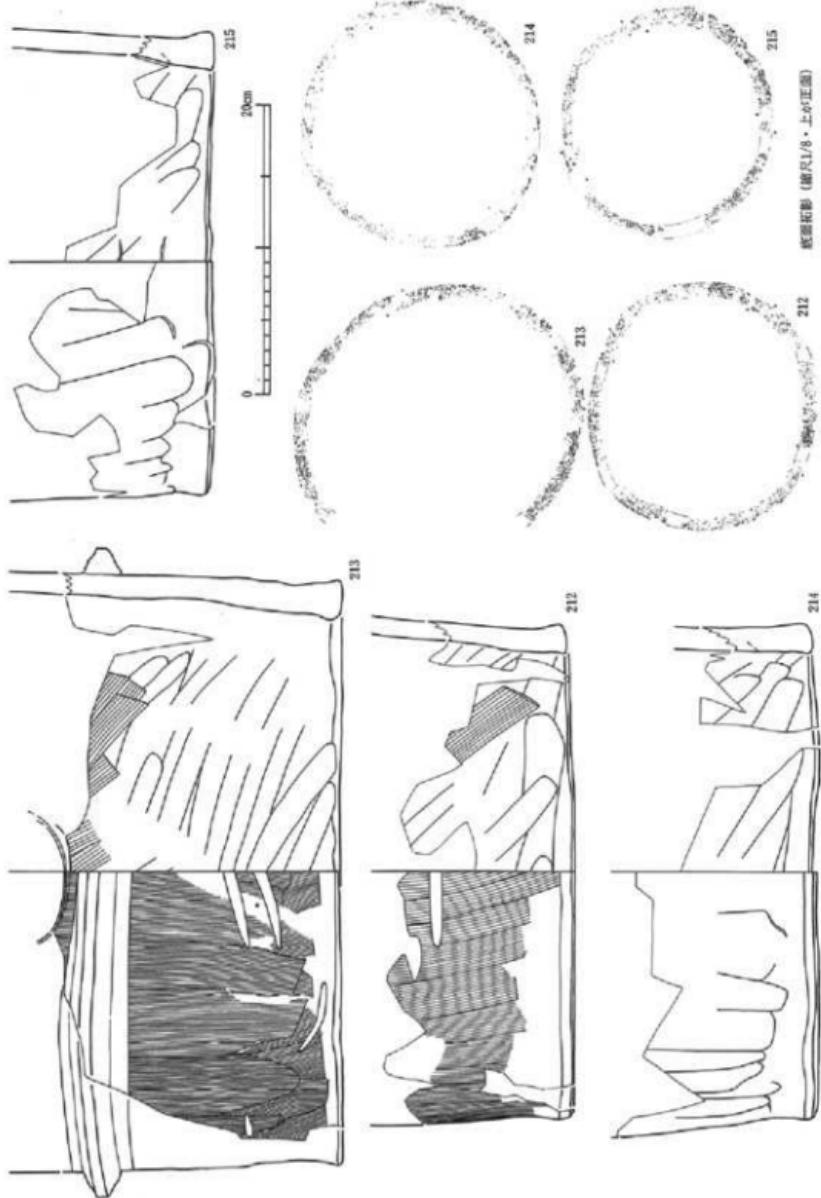
第33図 円筒埴輪(12)



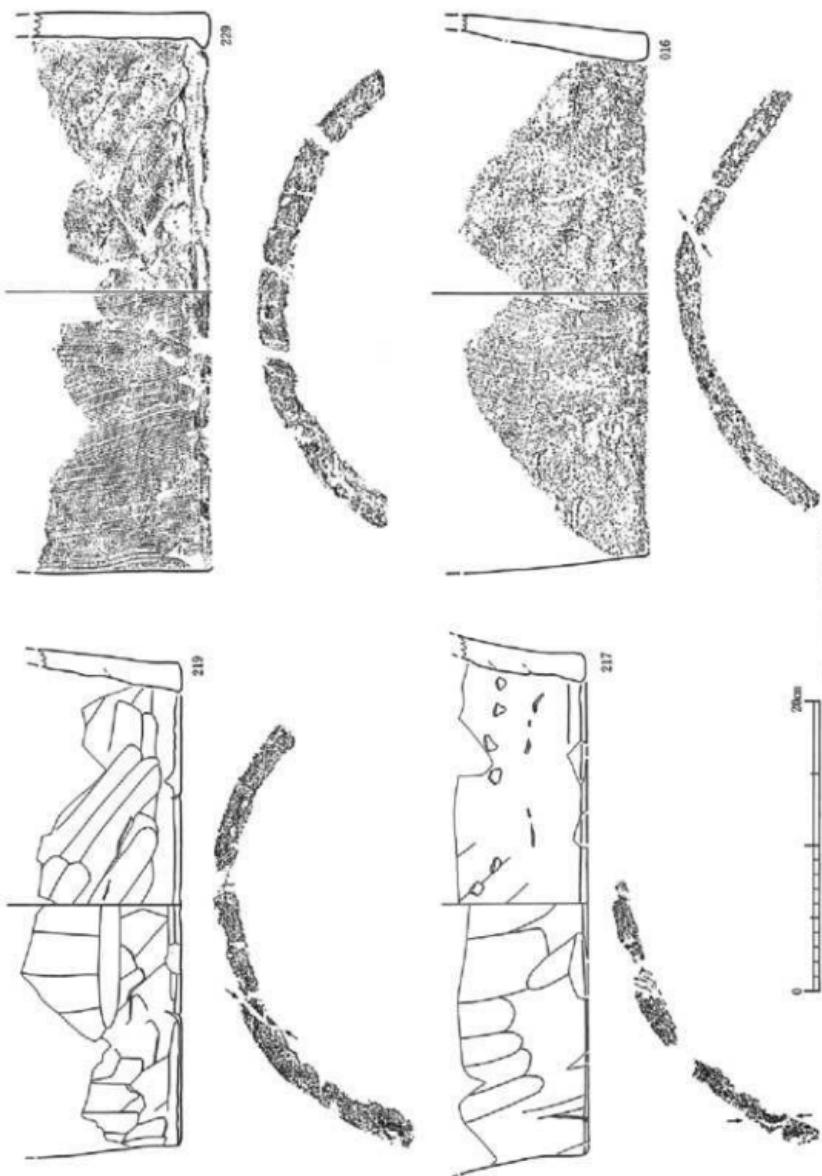
第34図 円筒埴輪03

0 20cm

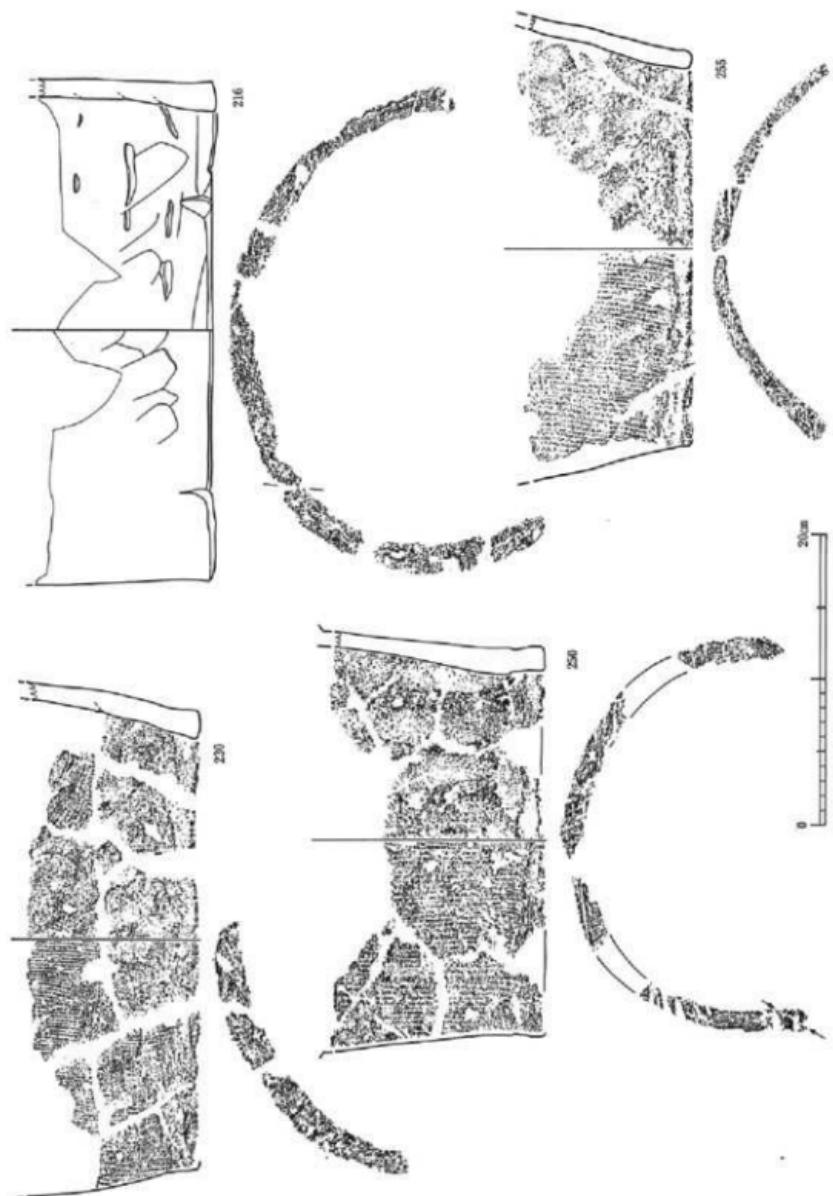
第35圖 円筒埴輪4



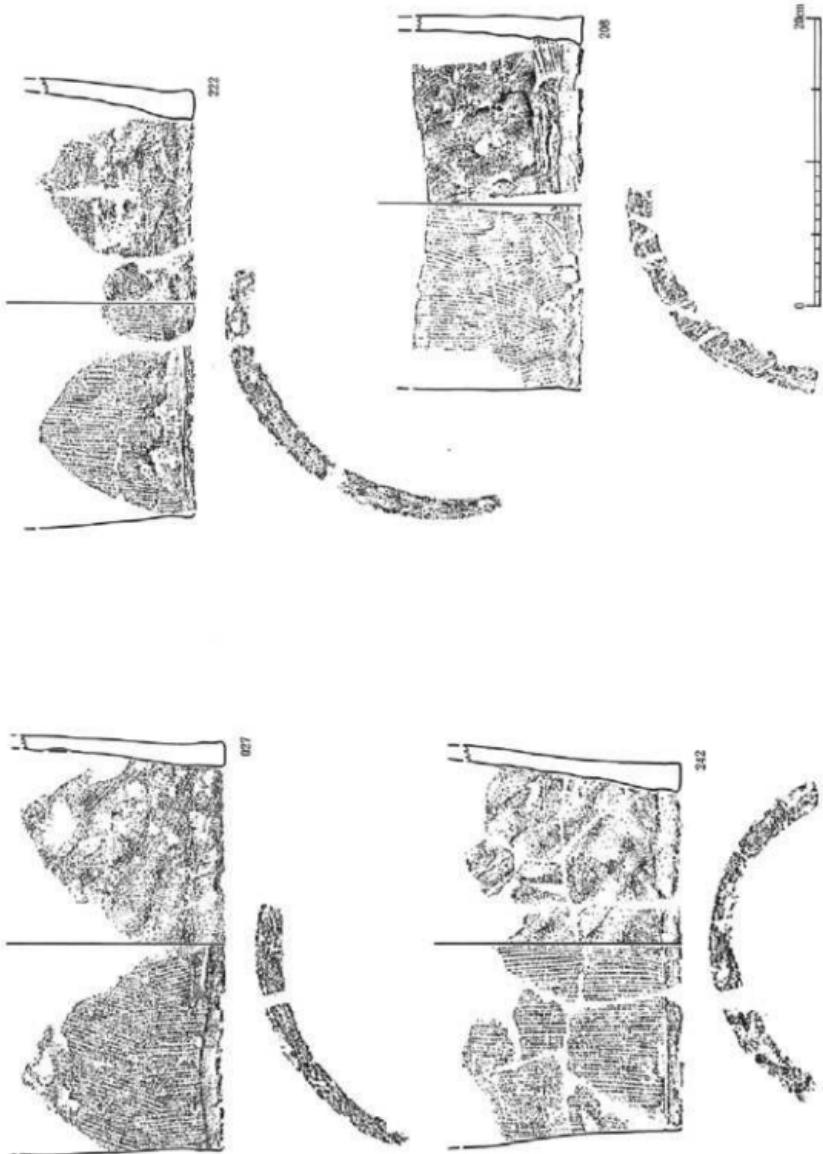
第36図 円筒埴輪

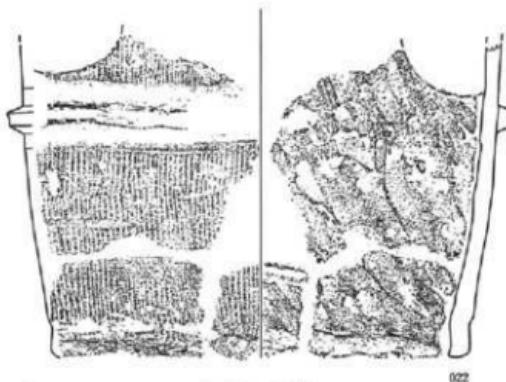


第37図 円筒埴輪16

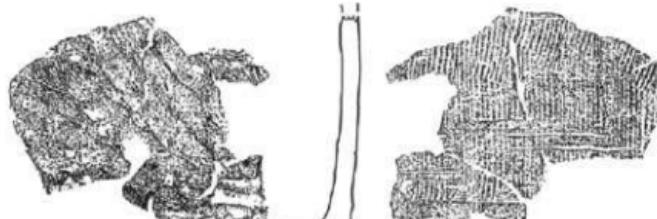


第38図 円筒埴輪

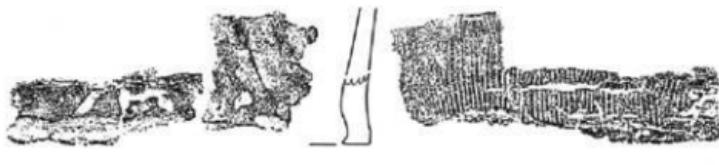




022



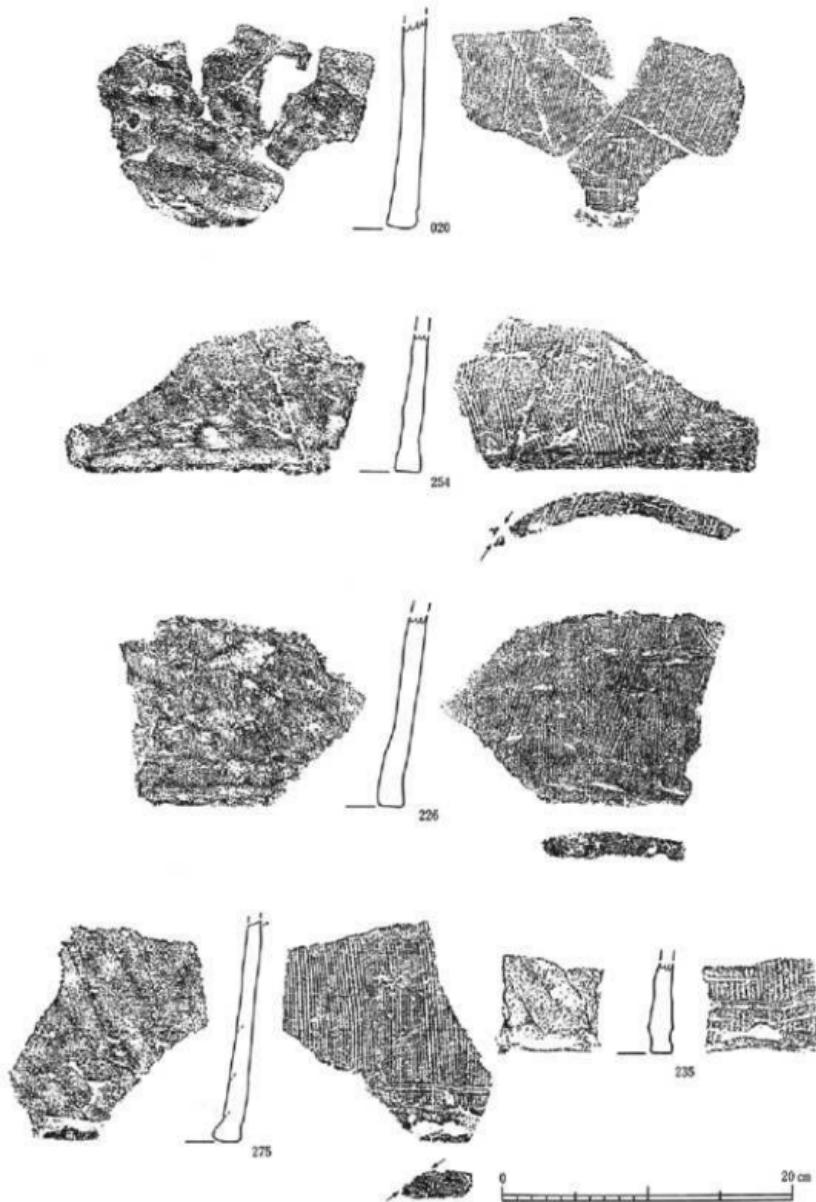
231



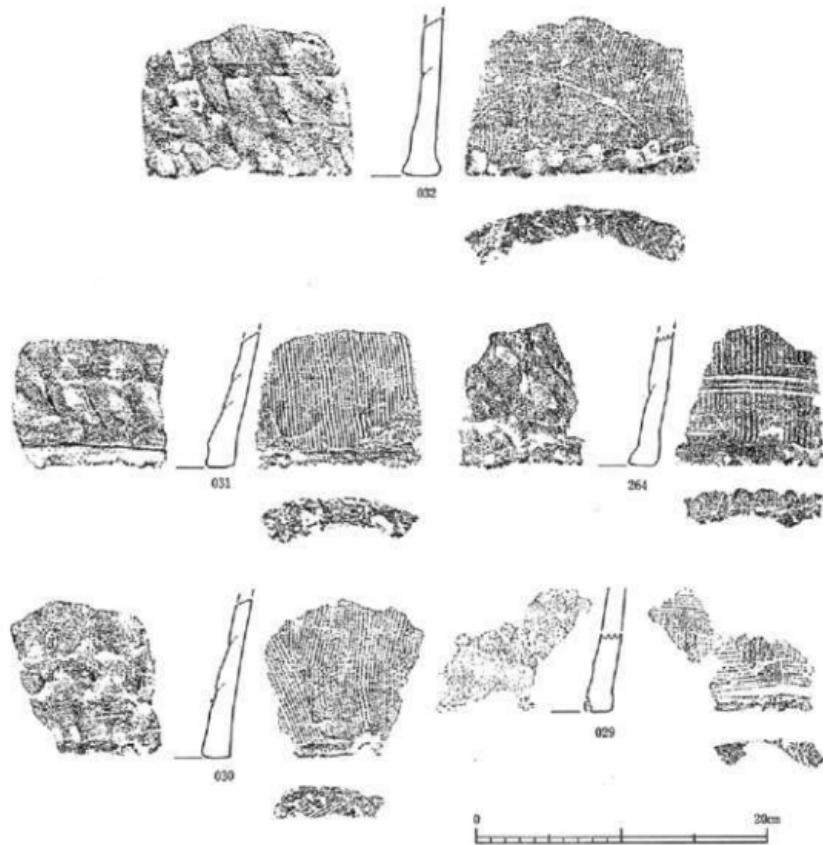
210



第39図 円筒埴輪18



第40図 円筒埴輪19



第41図 円筒埴輪(20)

登録番号	開拓番号	剖面番号	出土場所	法数	測量	凸部				ハケメ		地盤	
						上幅	下幅	高	形態	外因	内因		
001	22	16	C-4	口径：Φ33.0 既存高：12.6 段段高：5.3 壁厚：1.3	外側：チハヤー→凸部貼付・口縁部ヨコナデ・スカシ孔 穿孔（内因） 内側：斜方向ナード→口縁部ヨコナデ・スカシ孔穿孔	0.7	1.9	1.2	x2	7	—	a	7.5YR6/4 に、5A・黄鐵
002	25	17	C-4	既存高：12.5 既段高：5.6 壁厚：1.0	外側：チハヤー→凸部貼付・口縁部ヨコナデ 内側：不明	0.9	2.4	1.1	al	5	—	c	10YR7/8 黄鐵
003	25	28	C-4	既存高：14.7 既段高：5.1 壁厚：1.1	外側：チハヤー→凸部貼付・口縁部ヨコナデ 内側：斜方向ナード→口縁部方向ハケ→口縁部ヨコナデ	0.6	2.1	1.2	al	6	6~7	c	10YR7/6 明礬層
004	23	19	C-4	口径：Φ31.4 既存高：12.1 段段高：5.9 壁厚：0.9	外側：チハヤー→凸部貼付・口縁部ヨコナデ 内側：斜方向ナード→第3C柱以上ヨコナデ→口縁部斜方 向ハケ→口縁部ヨコナデ	0.9	2.0	0.8	x2	5	5~6	b	7.5YR7/6 無
005	33	23	C-4	既存高：12.5 壁厚：1.2	外側：チハヤー→凸部貼付 内側：斜方向ナード→斜方向ハケ	—	2.5	—	—	5~6	5~6	c	10YR7/6 明礬層
006	33	22	C-4	既存高：12.5 壁厚：1.1	外側：チハヤー→凸部貼付・スカシ孔穿孔（内因） 内側：斜方向ナード→口縁部ヨコナデ	0.8	2.3	1.1	al	4	5	c	10YR7/6 明礬層
007	31	26	C-4	既存高：12.0 壁厚：1.1	外側：チハヤー→凸部貼付 内側：斜方向ナード→斜方向ハケ	—	2.0	—	—	7	7	b	7.5YR7/6 無
008	大番												
009	大番												
010	36	21	C-4	既存高：13.0 既段高：4.7 壁厚：1.3	外側：チハヤー→凸部貼付・口縁部ヨコナデ・スカシ孔 穿孔（内因） 内側：不明	0.5	2.2	1.1	al	6	—	c	7.5YR6/6 後礬層
011	38	23	A+B-4 C-5	既存高：29.6 既段高：19.7 壁厚：1.1	外側：チハヤー→凸部貼付・スカシ孔穿孔（内因）、幅L.L. 高さ：45 内側：斜→斜方向ナード→斜方向ハケ	0.9	2.0	1.2	c	7	6~7	a	7.5YR6/4 に、5A・黄鐵
012	32	27	A+B-4 C-5	既存高：12.5 壁厚：1.1	外側：チハヤー→凸部貼付・スカシ孔穿孔（内因） 内側：斜方向ナード→斜方向ハケ→スカシ孔穿孔	0.8	1.9	1.2	c	7	8	b	10YR6/4 に、5A・黄鐵
013	34	28	C-4	既存高：13.0 壁厚：1.5	外側：チハヤー→凸部貼付・ヨコハケスカシ孔穿孔（内因） 内側：斜方向ハケ→スカシ孔穿孔	0.9	3.0	1.6	b	10~11	13	b	10YR7/6 明礬層
014	33	38	C-5	口径：Φ34.0 既存高：9.6 既段高：5.0 壁厚：1.2	外側：チハヤー→凸部貼付・口縁部ヨコナデ・スカシ孔 穿孔（内因） 内側：斜方向ハケ→口縁部ヨコナデ	0.8	2.2	0.9	d	6	6~7	c	10YR7/6 明礬層
015	29	28	C-5	外側H：31.0 既存高：8.2 壁厚：1.2	外側：チハヤー→凸部貼付 内側：斜方向ハケ	0.5	1.9	1.1	al	5	5~6	c	10YR7/6 明礬層
016	36	38	E-3 E-4	既存高：36.0 既段高：11.2 壁厚：1.2~2.0	外側：チハヤー 内側：既存ナード	—	—	—	—	11	—	c	10YR7/6 明礬層
017	30	26	E-4	既存高：13.2 壁厚：1.2	外側：チハヤー→凸部貼付・スカシ孔穿孔（内因） 内側：斜方向ナード→ハケ	—	2.0	—	—	8	10	b	7.5YR6/6 無
018	28	26	C-5	既存H：30.0 既段高：16.0 壁厚：1.1	外側：チハヤー→凸部貼付 内側：斜方向ナード→斜方向ハケ	0.8	2.2	1.1	al	5	5~6	b	7.5YR6/8 黄鐵
019	23	23	I-4	口径：Φ29.0 既存高：14.1 既段高：5.3 壁厚：1.1~1.3	外側：チハヤー→凸部貼付・口縁部ヨコナデ・スカシ孔 穿孔（内因） 内側：斜方向ナード→口縁部斜方向ハケ→口縁部ヨコナ デ・スカシ孔穿孔	0.8	2.2	1.1	al	7	7	c	7.5YR6/8 無
020	40	33	J-3	既存高：14.5 壁厚：1.6~2.1	外側：チハヤー 内側：既存ナード	—	—	—	—	11	—	b	10YR6/6 明礬層
021	27	16	D-10~12	既存高：12.6 既段高：5.6 壁厚：1.2	外側：チハヤー→凸部貼付・口縁部ヨコナデ 内側：斜方向ハケ→斜方向ナード→ハケ→口縁部斜方向ハケ→ 口縁部ヨコナデ	0.8	2.0	1.0	d	6	5~7	b	7.5YR7/6 無
022	39	30	D-10~12	既存H：29.0 既段高：12.6 既存高：16.5 壁厚：1.1~1.3	外側：斜方向板状板ナード→チハヤー→凸部貼付 内側：斜方向ナード→下端斜方向ナード	1.0	2.0	1.1	al	6	—	b	10YR7/6 明礬層
023	31	24	北トレンチ 上半	既存高：12.0 壁厚：0.9	外側：チハヤー→凸部貼付・スカシ孔穿孔（内因） 内側：斜方向ハケ→スカシ孔穿孔	0.8	2.1	1.2	c	7	7	a	7.5YR6/4 に、5A・無
024	24	24	北トレンチ 上半	既存高：6.7	外側：チハヤー→凸部貼付・口縁部ヨコナデ 内側：斜方向ハケ→口縁部ヨコナデ	0.9	2.3	1.1	al	5~6	6~7	b	7.5YR6/5 無

第5表 圓筒埴輪観察表(1)

登録番号	測定番号	国際前号	出土場所	法量	測定	凸部		凹部		成	色調		
						上幅	T幅	高	形態	外幅	内幅		
024					破損高:4.5 厚さ:1.1								
025	16	20	北トレンチ 上半	残存高:8.6 破損高:5.8 厚さ:1.2	外側:タテハケ→凸部粘付・口縫部ヨコナデ 内側:斜方向ハケ→第3凸部以上ヨコナデ→口縫部斜方 向→口縫部ヨコナデ	1.0	2.3	1.1	e	6 a	5~6 a2	b	7.5YR6/6 浅黄緑
026	25	19	北トレンチ 上半	残存高:26.3 破損高:18.0 厚さ:4.5 厚さ:1.0	外側:タテハケ→凸部粘付・口縫部ヨコナデ 内側:斜方向ハケ→口縫部ヨコナデ	0.7	2.3	1.2	a1	7 a1	6~7 a1	b	7.5YR7/8 黄緑
027	38	32	北トレンチ 上半	基盤:29.4 残存高:34.1 厚さ:1.0~1.7	外側:タテハケ→下端ヨコナデ 内側:斜方向ナデ	—	—	—	—	7 a1	—	b	10YR7/6 明黄緑
028	26	16	東トレンチ	残存高:11.7 破損高:4.8 厚さ:1.0	外側:タテハケ→凸部粘付・口縫部ヨコナデ 内側:斜方向ハケ→第3凸部以上横方向ハケ→口縫部ヨ コナデ	0.7	2.3	1.1	c	7 a1	7~8 a1	b	7.5YR6/6 黄
029	41	34	J-10	残存高:8.5 破損高:1.3~1.9 厚さ:1.0	外側:斜方向ヨコハケ→タテハケ→B縫ヨコハケ 内側:下端横方向ナデ→斜方向ナデ	—	—	—	—	7~11 a1	—	b	7.5YR6/6 黄
030	41	34	C-4	残存高:30.8 厚さ:15.0 厚さ:1.1~1.9	外側:タテハケ→下端横方向ナデ 内側:下端ヨコハサエ→斜→斜方向ナデ	—	—	—	—	7 a1	—	b	7.5YR7/4 に5R-4
031	41	34	C-4	残存高:9.1 厚さ:4.5 厚さ:1.1~1.9	外側:タテハケ→下端ヨコナデ 内側:斜→斜方向ナデ→下端ヨコナデ	—	—	—	—	7 a1	—	b	7.5YR7/6 黄
032	41	32	C-5	残存高:10.8 厚さ:14.5 厚さ:1.1~1.3	外側:下端ヨコハサエ→タテハケ 内側:斜方向ナデ	—	—	—	—	7 a1	—	b	5YR7/1 に5R-4
391	22	16	下例No1	口径:30.6 残存高:26.5 破損高:13.0 厚さ:12.5 厚さ:5.3 厚さ:1.0	外側:タテハケ→凸部粘付・凸部横ヨコナデ→口縫 部ヨコナデ→スカシ乳孔(乳孔:幅8.3, 高6.0) 内側:斜方向ハケ→口縫部横方向ハケ→口縫部ヨコナ デ・スカシ乳孔	0.7	2.2	1.1	a2	7 a1	5~6 a	b	7.5YR6/6 黄
392	26	19	下例No2	残存高:13.5 破損高:6.7 厚さ:1.0	外側:タテハケ→凸部粘付・口縫部ヨコナデ 内側:斜方向ハケ→第3凸部以上ヨコナデ→口縫部ヨ コナデ	0.7	2.0	1.3	a1	6 a1	6~7 a1	c	7.5YR6/6 浅黄緑
393	26	23	下例No3	口径:30.1 残存高:18.1 破損高:5.5 厚さ:1.2	外側:タテハケ→凸部粘付・口縫部ヨコナデ 内側:斜方向ハケ→口縫部ヨコナデ	0.6	2.3	1.0	e	6~8 a	6 a	c	10YR6/4 浅黄緑
394	欠番												
395	24	23	下例No3	口径:30.2 残存高:18.0 破損高:5.3 厚さ:1.3	外側:タテハケ→凸部粘付→斜方向ナデ (斜) →口 縫部ヨコナデ 内側:斜→横方向ナデ→斜方向ヨコナデ	0.6	1.8	1.0	e	—	—	c	10YR6/4 浅黄緑
396	38	24	下例No3	残存高:22.8 残存高:11.0 厚さ:1.1	外側:タテハケ→凸部粘付・スカシ乳孔 (内側) 内側:斜方向ナデ→斜方向ナデ→斜方向ハケ	0.6	2.1	1.2	e	6 a2	4~5 a2	b	10YR6/6 黄
397	31	23	下例No3	残存高:11.8 厚さ:1.0	外側:タテハケ→凸部粘付・スカシ乳孔 (内側) 内側:斜方向ナデ→斜方向ナデ→スカシ乳孔	0.6	2.0	1.2	a1	6 a1	7 a1	b	10YR6/6 黄
398	38	32	下例No2+ No2+No6	基盤:25.7 残存高:11.5 厚さ:13.2 厚さ:1.1~1.9	外側:タテハケ→下端ヨコナデ 内側:斜→横方向ナデ→斜→横方向ナデ→下端ヨコナデ 縫隙開け込み(変色)有	—	—	—	—	7 a1	—	s	10YR7/4 に5R-4
399	32	23	下例No11	残存高:15.4 厚さ:1.2	外側:タテハケ→凸部粘付・スカシ乳孔 (内側) 内側:斜方向ハケ→スカシ乳孔	1.0	2.0	0.8	d	6 a2	6 a2	b	10YR6/6 黄
400	29	32	A-9區	残存高:9.2 基盤高:4.5 厚さ:1.0~1.9	外側:タテハケ 内側:斜方向ナデ→下端ヨコナデ	—	—	—	—	6 a1	—	b	7.5YR7/6 黄
401	22	20	Bトレ-東	口径:20.7 残存高:15.4 厚さ:1.1	外側:タテハケ→凸部粘付・口縫部ヨコナデ 内側:斜方向ハケ→口縫部横方向ハケ→口縫部ヨコナデ	0.7	2.4	1.0	a1	6 a1	5~6 a	c	10YR7/6 明黄緑
402	35	29	No114	口径:34.3 残存高:13.2 厚さ:5.0 厚さ:1.2~2.0	外側:タテハケ→下端ヨコナデ 内側:横→斜方向ナデ→斜方向ハケ	—	—	—	—	7~8 c	10 c	b	7.5YR7/8 黄

第6表 円筒埴輪観察表(2)

登録 番号	標題 番号	測量 番号	出土場所	法基 測量	測量	凸形		ハサメ		組 成	色調	
						上幅	下幅	高	幅	外幅	内幅	
213	35	29	No116	底径: 48.8 残存高: 29.1 基部高: 4.0 側面高: 16.5 壁厚: 1.4-2.1	外側: ダラハケ→凸形斜付・部分的にヨコナデ・スカシ 孔: 乳孔 (円形) 内側: 前方向ナデ→斜方向ナケ 側面: 前方向ナデ (変遷) 有	0.8	2.6	1.8	b bl	11 bl	9 bl	b 7.5YR6/5 浅黄緑
214	36	29	No118	底径: 34.2 残存高: 29.2 基部高: 3.8 壁厚: 1.5-2.1	外側: 側方向ナデ・下端部ヨコナデ 内側: 側→前方向ナデ	-	-	-	-	-	-	b 10YR7/5 明黄緑
215	35	30	No124	底径: 32.4 残存高: 18.1 基部高: 3.0 壁厚: 1.3-2.6	外側: 側方向ナデ 内側: 前→側方向ナデ	-	-	-	-	-	-	c 10YR8/5 黄緑
216	37	30	No109	底径: 34.6 残存高: 13.1 基部高: 3.9 壁厚: 1.2-2.2	外側: 側→前方向ナデ 内側: 側→側方向ナデ・下端部ヨコナデ	-	-	-	-	-	-	c 7.5YR6/6 橙
217	36	29	No109	底径: 34.8 残存高: 9.3 基部高: 3.8 壁厚: 1.4-2.0	外側: 側方向ナデ 内側: 前方向ナデ・下端部ヨコナデ	-	-	-	-	-	-	c 7.5YR6/6 浅黄緑
218	34	28	No113	残存高: 5.6 壁厚: 1.5	外側: 側方向ナデ→スカシ孔穿孔 (円形)・凸形斜付 内側: 側→前方向ナデ	-	-	-	-	-	-	b 5YR6/6 橙
219	36	30	No115	底径: 33.6 残存高: 11.0 基部高: 5.0 壁厚: 1.2-2.0	外側: 側方向ナデ+下端ヨコナデ・部分的にヨコナデ 内側: 下端ヨコナデ→側方向ナデ	-	-	-	-	-	-	c 10YR6/5 黄緑
220	次番											
221	27	22	No119-3	底径高: 22.4 壁厚: 13.5 壁厚: 1.1	外側: ダラハケ→凸形斜付 内側: ナデ?→口縁部横方向ナデ→口縁部ヨコナデ	-	1.9 0.5	- 2.2	1.2 al	7 al	7 al	b 7.5YR7/5 黄緑
222	36	30	No119-3	底径: 29.3 残存高: 19.7 基部高: 4.0 壁厚: 1.0-2.0	外側: ダラハケ 内側: 側方向ナデ・下端ヨコナデ	-	-	-	-	7 al	-	c 7.5YR6/6 浅黄緑
223	22	19	No119-3	口径: 30.0 残存高: 19.7 基部高: 4.0 壁厚: 1.1	外側: ダラハケ→凸形斜付・口縁部ヨコナデ 内側: 前方向ハケ→口縁部横方向ハケ→口縁部ヨコナデ	0.7	2.3	1.2	al	6~7 al	6~7 al	a 7.5YR7/4 に、2.5-3.5
224	23	17	No119-3	口径: 33.5 残存高: 17.6 側面高: 5.4 基部高: 4.0 壁厚: 1.1	外側: ダラハケ→凸形斜付・口縁部ヨコナデ・凸形開口 内側: ヨコナデ→スカシ孔穿孔 (円形)	0.9	2.2	0.9	e a2	6 a2	5~6 a2	a 7.5YR7/4 に、2.5-3.5
225	29	25	No119	残存高: 14.9 側面高: 12.5 基部高: 1.0	外側: ダラハケ→凸形斜付 内側: 前方向ハケ	0.6	2.2	1.2	al	7 al	8 al	b 7.5YR6/6 浅黄緑
226	40	33	No119	残存高: 13.6 基部高: 1.6 壁厚: 1.2-1.9	外側: 前方向ナデ 内側: 前方向ナデ・下端ヨコナデ	-	-	-	-	7 al	-	c 10YR6/6 黄緑
227	33	26	No119-4	残存高: 12.2 壁厚: 1.2	外側: ダラハケ→凸形斜付・スカシ孔穿孔 (円形) 内側: 前方向ナデスカシ孔穿孔	0.6	2.0	1.1	al al	7 al	-	b 7.5YR6/6 黄緑
228	34	36	No119-4	残存高: 11.3 壁厚: 0.9	外側: ダラハケ→凸形斜付・スカシ孔穿孔 (万形) 内側: 前方向ハケ→スカシ孔穿孔	0.7	1.9	1.0	d al	6~7 al	6~7 al	b 10YR6/6 黄緑
229	36	29	No121	底径: 38.3 残存高: 12.5 基部高: 4.3 壁厚: 1.5-2.1	外側: ダラハケ 内側: 前方向ナデ→下端ヨコナデ	-	-	-	-	11 bl	13 bl	b 10YR7/6 明黄緑
230	37	30	No127 No128	底径: 34.8 残存高: 11.9 基部高: 4.5 壁厚: 1.2-1.9	外側: 下端付ナデ→ダラハケ・下端ヨコナデ 内側: 前横側方向ナデ→前方向ナデ→前方向ハケ	-	-	-	-	7 al	7~8 a	c 7.5YR6/6 橙
231	29	33	No129-2	残存高: 14.5 基部高: 3.0 壁厚: 1.2-2.0	外側: ダラハケ→下端ヨコナデ 内側: 前横側方向ナデヨコナデ	-	-	-	-	6 al	-	a 7.5YR7/4 に、2.5-3.5
232	34	28	No123	残存高: 16.4 壁厚: 1.5	外側: ダラハケ→凸形斜付→ダラハケ→スカシ孔穿孔 (円形) 内側: 前方向ハケ→横方向ナデ→スカシ孔穿孔	-	-	-	-	13 bl	11 bl	b 7.5YR7/6 黄緑

第7表 円筒埴輪観察表(3)

登録番号	機種	回数	回数	出土地場	法量	調整	凸面			凹面			成形度	色調
							上幅	下幅	高	前傾	外傾	内傾		
233	34	26	No127	西野高:13.3 基部高:1.1 壁厚:1.1	外側:前方ナード→凸面貼付・スカシ孔穿孔(円形) 内側:不明	-	2.2	-	-	-	-	c	7.5YR7/3 黄褐	
234	28	22	No138-2	西野高:10.3 基部高:2.6 壁厚:13.0 壁厚:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付 内側:斜方向ハケ→スカシ孔穿孔	0.5 0.5	1.9 2.1	1.2 1.4	c c	7 al	6~7 al	a	7.5YR6/1 にぶい	
235	40	34	No139-2	西野高:6.8 基部高:4.1 壁厚:1.6	外側:タテハケ→部分的にヨコナダ 内側:斜方向ナード→下端ヨコナダ	-	-	-	-	6 al	-	a	7.5YR6/4 にぶい	
236	34	28	No122	西野高:13.3 No134	外側:凸面貼付・スカシ孔ハケ 内側:斜方向ハケ	-	2.4	-	-	10 b	10~11 b	c	10YR7/6 明黄褐	
237	29	26	No132	西野高:17.7 2段目高:13.0 壁厚:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付・スカシ孔穿孔(円形) 内側:斜方向ナード→斜方向ハケ→スカシ孔穿孔	0.5	2.2	1.2	s1 al	7 al	7 al	b	10YR6/4 淡黄褐	
238	36	18	No144	西野高:11.6 4段目高:5.3 壁厚:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付・凸面貼付ヨコナダ・凸面貼付 部分的にヨコナダ→スカシ孔穿孔(円形) 内側:斜方向ナード→斜方向ハケ→第3凸面以上斜方向ナ デ→凸面ヨコナダ→スカシ孔穿孔	0.5	2.4	1.2	d al	6 al	5 al	b	7.5YR7/8 黄褐	
239	24	16	No146 No147	口径:32.4 西野高:15.5 4段目高:5.4 壁厚:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付・凸面貼付ヨコナダ・凸面貼付 部分的にヨコナダ→スカシ孔穿孔(円形) 内側:斜方向ナード→口縫部ヨコナダ・スカシ孔穿孔	0.5 0.5	1.8	1.1	al al	8 al	-	c	7.5YR7/6 棕	
240	22	16	No148 No149	口径:30.4 西野高:15.0 4段目高:5.0 壁厚:13.5 壁厚:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付・凸面貼付ヨコナダ・凸面貼付 部分的にヨコナダ→スカシ孔穿孔(円形)、幅1.4、高 5.5 内側:斜方向ナード→斜方向ナード→第3凸面以上ヨコナダ →凸面横斜方向ハケ→口縫部ヨコナダ・スカシ孔 穿孔	0.5 0.5	2.2	1.0 1.1	al al	8 al	7~8 al	b	10YR7/6 明黄褐	
241	29	26	No148	体厚:25.2 残存高:17.5 壁厚:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付・凸面貼付ヨコナダ スカシ孔穿孔(円形) 内側:斜方向ナード→スカシ孔穿孔	-	0.8	2.1	1.1	al	7 al	7 al	b	10YR7/6 明黄褐
242	38	31	No148 No149	口径:25.4 残存高:15.1 基部高:7.0 壁厚:1.1~2.0	外側:タテハケ→凸面貼付 内側:斜方向ナード→下端ヨコナダ	-	-	-	-	7 al	-	b	10YR7/6 明黄褐	
243	欠番					-	-	-	-	-	-	-	-	
244	27	22	No132	残存高:7.9 壁厚:1.0	外側:タテハケ→凸面貼付 内側:不明、口縫部に前方ハケ有無	-	2.0	-	-	7 al	-	c	7.5YR6/8 棕	
245	26	21	No132	残存高:11.5 4段目高:4.7 壁厚:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付・凸面貼付ヨコナダ・凸面貼付 部分的にヨコナダ 内側:不明、口縫部に前方ハケ有無	0.5	2.2	1.1	al al	7 al	-	b	10YR7/6 明黄褐	
246	23	19	No132	口径:-33.6 残存高:9.9 4段目高:4.4 壁厚:1.0	外側:タテハケ→凸面貼付・凸面貼付ヨコナダ 内側:斜方向ナード→凸面横斜方向ハケ→口縫部ヨコナダ	0.5	1.9	1.0	al al	7 al	8 al	b	10YR6/4 淡黄褐	
247	23	19	No133	口径:-26.7 残存高:11.0 4段目高:5.5 壁厚:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付・凸面貼付ヨコナダ・凸面貼付 部分的にヨコナダ 内側:斜方向ナード→第3凸面以上ヨコナダ→口縫部横斜 方向ハケ→口縫部ヨコナダ	0.5	2.3	1.0	al al	7 al	8 al	b	10YR6/4 淡黄褐	
248	29	24	No200	体厚:27.0 残存高:16.5 壁厚:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付・スカシ孔穿孔(円形) 内側:斜方向ナード→スカシ孔穿孔	0.5	2.5	1.0	al al	8 al	-	c	7.5YR7/6 棕	
249	24	17	No211	口径:-33.3 残存高:17.4 4段目高:5.5 壁厚:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付・口縫部ヨコナダ・凸面貼付 部分的にヨコナダ 内側:斜方向ナード→斜方向ハケ→第3凸面以上ヨコナダ →口縫部ヨコナダ	0.5	2.1	1.1	al al	7 al	8 al	b	7.5YR7/6 棕	
250	35	31	No212	残存高:16.4 基部高:3.9 壁厚:1.1~1.8	外側:タテハケ→下端部分的に前方ハケ 内側:斜方向ナード→下端ヨコナダ	-	-	-	-	5~6 al	-	b	10YR7/6 明黄褐	
251	30	27	No212	残存高:20.1 壁厚:1.0	外側:タテハケ→凸面貼付・凸面貼付部分にヨコナダ スカシ孔穿孔(円形) 内側:斜方向ナード→スカシ孔穿孔	0.5	2.6	1.1	al al	7 al	7 al	b	7.5YR7/6 棕	
252	32	27	No212	残存高:16.0 壁厚:0.9	外側:タテハケ→凸面貼付・スカシ孔穿孔(円形) 内側:斜方向ナード→スカシ孔穿孔	0.5	2.1	1.1	al al	7 al	7~8 al	b	10YR7/6 明黄褐	
253	31	25	No212 No214	残存高:14.2 基部高:1.1	外側:タテハケ→凸面貼付・スカシ孔穿孔(円形) 内側:斜方向ナード→スカシ孔穿孔	0.5	2.0	1.0	al al	6 al	3~4 al	b	10YR6/6 黄褐	

第8表 円筒埴輪観察表(4)

登録 番号	神岡 通号	出土場所	法量	測量	凸部				凹部				種 類	色調
					上幅	下幅	高	形態	外側	内側	外側	内側		
254	40	23	N-213	残存高：10.8 基部高：3.5 留厚：1.1-1.8	外側：テテハケー下端ヨコナデ 内側：下端付近後方ナカデ→斜方向ナデ	-	-	-	-	7	-	b	10YR7/6 明黄褐	
255	37	30	N-216	残存高：12.1 基部高：2.8 留厚：1.0-1.4	外側：テテハケ 内側：斜方向ナデ	-	-	-	-	7	a1	-	b	10YR2/6 明黄褐
256	32	25	N-221	残存高：14.2 基部高：1.3	外側：テテハケー凸端附近・スカシ孔穿孔（円形） 内側：斜方向ハケ	0.7	1.8	1.0	e	6	4	a	7.5YR6/6 黄	
257	34	39	N-222	口徑：36.8 残存高：14.0 4段目高：5.9 留厚：1.8	外側：テテハケー凸端附近・口縫部横方向ナカデ・3段目 内側：斜端部部分的にヨコナデ→口縫部ヨコナデ・スカシ孔穿孔（円形） 内側：斜方向ナカデ→口縫部横方向ナカデ→口縫部ヨコナデ・スカシ孔穿孔	0.7	2.3	1.1	a1	6	4-7	a1	7.5YR6/6 黄	
258	25	17	N-218	残存高：22.5 4段目高：4.4 2段目高：13.5 留厚：1.6	外側：テテハケー凸端附近・口縫部ヨコナデ・凸端横部 内側：ヨコナデ→スカシ孔穿孔 内側：斜方向ナカデ→口縫部ヨコナデ・スカシ孔穿孔	0.6	2.0	1.0	a1	7	8	a1	7.5YR2/6 黄	
259	31	25	N-223	残存高：19.5 留厚：1.6	外側：テテハケー凸端附近・スカシ孔穿孔（円形） 内側：斜方向ハケースカシ孔穿孔	0.9	2.4	1.5	b	12	11	b	7.5YR6/6 黄	
260	24	18	N-222	口徑：34.3 残存高：13.5 4段目高：4.5 留厚：1.1	外側：テテハケー凸端附近・口縫部ヨコナデ・凸端間隔 内側：斜方向ナカデ→口縫部ヨコナデ 内側：斜方向ナカデ→口縫部横方向ナカデ→口縫部ヨコナデ 内側：スカシ孔穿孔	0.8	1.9	0.9	a2	7	6	a2	5YR6/6 黄	
261	28	23	N-222	半周径：32.2 残存高：18.7 留厚：1.1	外側：テテハケー凸端附近・凸端間隔部分にヨコナデ 内側：斜方向ナカデ→時方向ハケ	0.8	2.0	1.2	a2	7	8	a2	10YR6/4 に赤い褐	
262	27	28	N-224	残存高：14.6 4段目高：4.6 留厚：1.2	外側：テテハケー凸端附近・口縫部ヨコナデ 内側：斜方向ナカデ→口縫部ヨコナデ	0.8	2.2	1.1	a1	7	8	a1	10YR2/6 明黄褐	
263	33	27	N-220	残存高：8.6 留厚：1.0	外側：テテハケー凸端附近・スカシ孔穿孔（円形） 内側：斜方向ナカデ→斜方向ハケ→スカシ孔穿孔	0.8	2.1	1.0	d	6	4	a	7.5YR2/6 に赤い褐	
264	41	34	N-220	残存高：9.5 基部高：4.2 留厚：1.1-1.9	外側：ヨコナデ→部分的にヨコナデ 内側：斜方向ナカデ	-	-	-	-	2	-	a2	7.5YR6/6 黄	
265	27	21	S-241	残存高：5.1 留厚：1.1	外側：斜方向ハケ→口縫部ヨコナデ 内側：不明	-	-	-	-	6	-	b	7.5YR6/6 黄	
266	36	29	N-211	残存高：13.4 4段目高：4.7 留厚：1.2	外側：テテハケー凸端附近・口縫部ヨコナデ 内側：斜方向ナカデ→口縫部横方向ナカデ→口縫部ヨコナデ	0.6	2.3	1.0	a1	8	7	b	10YR2/6 明黄褐	
267	33	26	N-203	残存高：10.2 留厚：1.0	外側：テテハケー凸端附近・スカシ孔穿孔（円形） 内側：斜方向ナカデ→スカシ孔穿孔	0.6	2.1	1.0	a1	7	-	b	10YR2/6 明黄褐	
268	26	29	N-243	残存高：12.5 4段目高：4.5 留厚：13.5 留厚：1.1	外側：テテハケー凸端附近・口縫部ヨコナデ 内側：小切、口縫部横方向ナカデ	0.6	2.5	1.2	a1	7	-	c	10YR6/6 黄	
269	欠番													
270	26	21	不明	残存高：12.6 4段目高：5.8 留厚：1.4	外側：テテハケー凸端附近・口縫部ヨコナデ 内側：不明	0.7	2.1	1.0	e	10-11	-	c	10YR6/6 黄	
271	23	21	不明	口徑：27.0 残存高：10.1 4段目高：5.7 留厚：1.1	外側：テテハケー凸端附近・口縫部ヨコナデ・凸端間隔 内側：斜方向ナカデ→第3凸部以上ヨコナデ→口縫部横方 向ナカデ→口縫部ヨコナデ	0.9	2.3	0.9	e	6	5	a	10YR2/4 に赤い黄	
272	30	25	不明	残存高：16.2 留厚：0.9	外側：テテハケー凸端附近・スカシ孔穿孔（円形） 内側：斜方向ナカデ→斜方向ナカデ・スカシ孔穿孔	-	2.3	-	-	7	8	b	7.5YR2/6 黄	
273	欠番													
274	39	25	不明	残存高：16.5 留厚：1.2	外側：テテハケー凸端附近・スカシ孔穿孔（円形） 内側：斜方向ナカデ→斜方向ハケ→スカシ孔穿孔	-	2.0	-	-	6	5-7	b	10YR6/6 黄	
275	49	33	不明	残存高：15.3 基部高：4.5 留厚：1.0-1.9	外側：テテハケー下端附近ヨコナデ・凸端附近 内側：斜方向ナカデ	-	-	-	-	6	-	b	5YR2/4 に赤い黄	
276	31	26	N-222	残存高：10.1 留厚：1.1	外側：テテハケー凸端附近・凸端間隔部分にヨコナデ スカシ孔穿孔（円形） 内側：斜方向ナカデ→部分的に斜方向ナカデ	0.9	2.2	1.1	d	8	8	a	7.5YR6/3 に赤い黄	
277	30	26	N-242	残存高：15.1 留厚：1.0	外側：テテハケー凸端附近・スカシ孔穿孔（円形） 内側：斜方向ナカデ→スカシ孔穿孔	-	2.2	-	-	7	8	b	7.5YR6/6 浅黄	

第9表 円筒埴輪観察表(5)

(2) 朝顔形埴輪 (第42~51図、第10~12表、図版35~45)

朝顔形埴輪も残存状況が悪く、全体が判明する資料は無い。

第42図の401はII次調査のC-4区を中心に比較的まとまって出土したもので、朝顔形埴輪の中で最も遺存の良好なものである。わずかに開くだけの円柱状の円筒部から、丸みを帯びる肩部から頸部で強くくびれて外反し、凸帯をはさんでさらに大きく外反する口縁部を有する。円筒部は3段まで残存しており、下側の2段には直交する位置に円形のスカシ孔が穿孔されている。このため残存する一番下の段は、最下段にはならない。円筒部の最も上の段は、段の高さが6.0cmと狭い。それに対して中間段の高さは13.0cmで、先に見た円筒埴輪の中間段の高さと等しい。このような段の構成から、この朝顔形埴輪の円筒部の狭い最上段が、円筒埴輪の口縁部の狭い最上段に対応すると考えることができよう。そう判断すると、この401の残存する最も下側の段の下に、もう一段、底部の段がくるものと考えられる。したがって、この狭い段が、円筒埴輪の口縁部の狭い段に対応すると考えるならば、最下段・中間段2段・狭い円筒部の最上段・肩部・頸部・口縁部という6条凸帯の7段構成をなすものと考えられる。以下の説明では、円筒埴輪同様、便宜的に6条凸帯・7段構成として記述する。

朝顔形埴輪はいずれも、この401と同様の形態をなすものである。すなわち、ほとんど開かず、あるいはわずかに開くだけの円柱状の円筒部に、丸みを帯び強く内湾する肩部から、頸部で強くくびれて外反し、さらに口縁部が外反し大きく開くものである。スカシ孔も、いずれも円形である。しかし法量の点では、かなりの変異が見られ、大型のものと小型のものに大別が可能である。口径では大小の差は明確でないが、頸部径では大型22.9~24.9cmに対し小型16.3~19.4cm、肩部の最大径では大型40.0~42.7cmに対し小型28.1~32.3cmとその差は明瞭である。またこれらの資料では、器壁の厚さを見ると、円筒部で大型が1.5cm前後に対して小型は1.1cmであり、他の部位でも同様に大型のものの方が厚くなっている。またこれらの大型の朝顔形埴輪は、いずれもハケメが密で条線が明瞭なb1である。ただし第43図の503は、ハケメが密であるが器厚が薄く、大型か小型か判断がつかない。これは器面の保存が悪く、他の大型のもののハケメと類似するものかどうか不明である。これを除けば、小破片でも器厚とハケメの点から大別が可能で次のものが大型と判断される。すなわち第42図401、第44図416、第45図507、第47図413・518、第48図417・505、第50図414、第51図418・419の10点である。次に大小の各段の高さを見ると、口縁部は大型9.0~10.5cmで小型が7.5~9.5cm、頸部は高さの判明するものが大型の401のみで9cm程であり、小型の第45図523は推定で7cm程と思われる。肩部は大型が18cm程で小型が12.5~13.0cm、円筒部の狭い第4段は大型6.0~8.0cmで、小型は第51図526が8.0cmである以外は3.5~4.5cmである。円筒部の中間段の高さが判明するものは大型の401の13.0cmのみであるが、先に述べたようにこれは円筒埴輪の中間段の高さに等しいことから、小型の朝顔

形埴輪の中間段の高さもこれと同様のものと考えておきたい。したがって、大型の朝顔形埴輪は、第4段より上部が、各段とも小型より若干大きく作られていることになる。

朝顔形埴輪の製作方法は、大型・小型とも、細部を除けば基本的に一致する。したがって以下では、大小の区別を示さないものは両者に共通するもので、特に異なる点のみ区別を示すものとする。

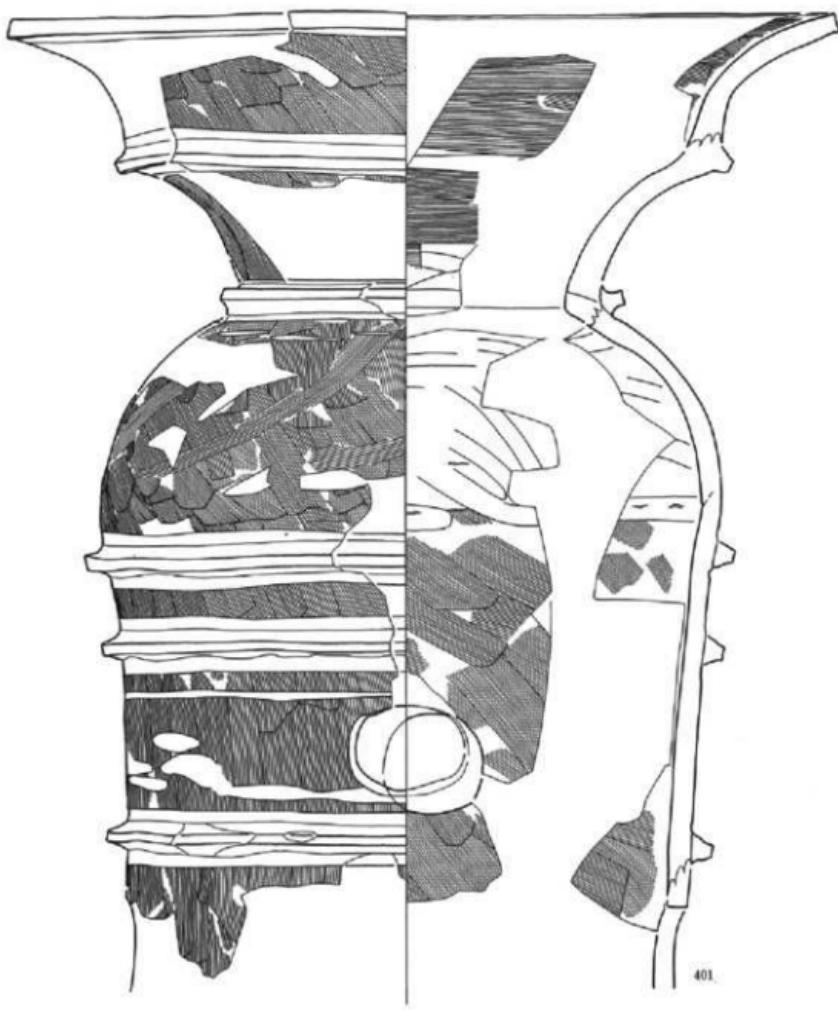
円筒部は外面調整が1次調整タテハケのみのものと、2次調整B種ヨコハケを施すもの(第47図413、第51図418)があるが、後者はいずれも大型の朝顔形埴輪である。418は一括出土した資料の中に、円筒部の第4段にあたる狭い段の部分の破片が含まれており、朝顔形埴輪の円筒部の中間段であると判断されるものである。円筒部の凸帯には、凸帯が剥落した箇所に浅い沈線や、ヨコナデによって浅くくぼませているのが観察されるものがあり、凸帯貼付のための目印と考えられる。凸帯間には部分的に弱いヨコナデが観察されるものがあり、特に第4段には多く見られる。これは円筒埴輪のところでも述べたように、凸帯貼付に伴うヨコナデの際に、凸帯間にヨコナデが及んだものと判断される。内面調整は横～斜方向ハケメが施されているが、第51図526はナデである。

肩部の外面調整は左上がりの斜方向にハケメを施した後に、それに交差するように左下がりに再度ハケメ調整を施す。内面調整は横～斜方向のナデである。この内面のナデの始まる高さ付近に、はっきりした粘土紐の接合痕が観察されるものが多く存在し、第42図401などではこの接合痕に円筒部のハケメがもぐりこんでいる。そのため、この箇所で小工程が分かれるものと判断される。第49図の415では、肩部の外面の斜方向ハケメが、円筒部の第4凸帯の貼付けに伴うヨコナデにかぶさっており、円筒部の凸帯が付けられた後に肩部が製作されている。それに対して、第51図526は円筒部の第3段から第4段の部分の破片であるが、肩部の調整の左下がりのハケメが、円筒部の中間段まで施されている。この左下がりのハケメは、凸帯貼付けに伴うヨコナデに切られており、円筒部の凸帯の貼付けが肩部の製作の後になされていることが判る。

頸部は肩部の先端部外面に積み上げるようにして製作されており、外面は縦方向のハケメ調整、内面は横方向のナデの後に横方向のハケメ調整を行う。頸部から口縁部に移る屈曲する部分では、頸部先端部分にヨコナデが施されていることが剥落した資料から判明している。したがって、頸部の先端を一旦口縁部のように仕上げてから、最上段の製作を始めていると考えられる。この頸部先端の内面の剥落部分には、刻み目を入れたものが見られるが(第46図510・517・519)、これらはいずれも小型の朝顔形埴輪である。この刻み目はハケメ工具でなされたものと考えられる。一方、大型の朝顔形埴輪では、第44図416に剥落部分が残存しているものの、刻み目が入れられた痕跡はない。

口縁部は頸部の先端の内面に積み上げるようにして製作されており、外面は縦・斜方向のハ

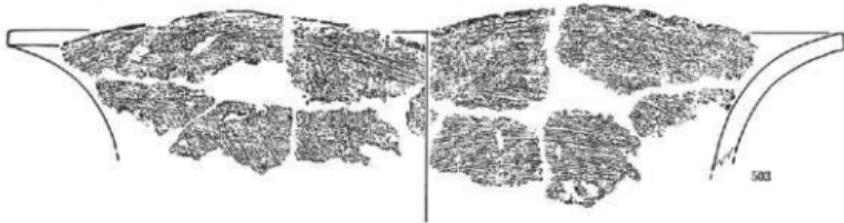
ケメ調整、内面は横方向のハケメ調整である。頸部から口縁部へ移る屈曲する部分の凸帯は、この接合部分の稜に付け足すようにしている。第46図513は、この屈曲部の小破片であるが、凸帯の下側と頸部の一部に横方向のハケメが施されており特異である。頸部から口縁部へ移る屈曲する部分の内面には、横方向のナデが見られる。このナデは、口縁部の横方向のハケメよりも前に施されたものと後に施されたものの両者が見られる。口縁部の調整は、内外面とも、その中間付近を境にハケメが大きく2回に分けて施されているものが多く、口縁部の製作が2回の小工程に分かれることを示しているものと思われる。屈曲部の内面のナデは、頸部と口縁部の接合を強くするためのものと考えられることから、おそらく口縁部の下側の製作に伴うものであろう。口縁端部はヨコナデが施されるが、大型の第42図401・第44図416では、端面に横方向のハケメの痕跡が残されており、ヨコナデの前に端面をハケメ調整で整えていることが判る。また第43図503は、口縁端部外面に横方向のハケメ調整を行ってからヨコナデを施している。第44図410は、一旦先端部をヨコナデで調整した後に、さらに粘土を付け足してから口縁端部を製作している。この粘土の付け足しの際に、外面には斜方向のハケメを施してから、ヨコナデを行っている。



401.

0 20cm

第42図 朝顔形埴輪(1)



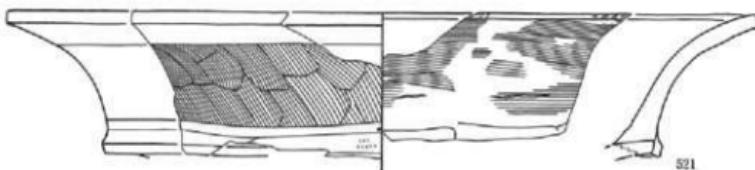
503



408



404



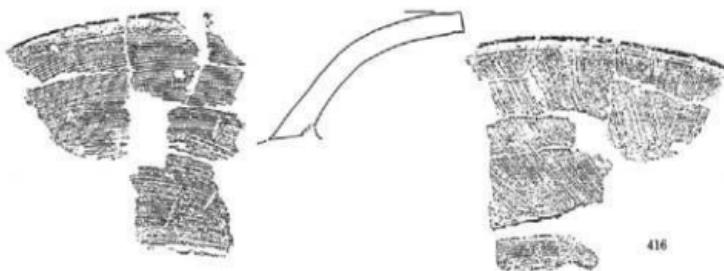
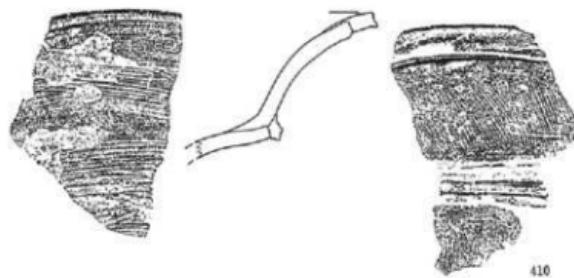
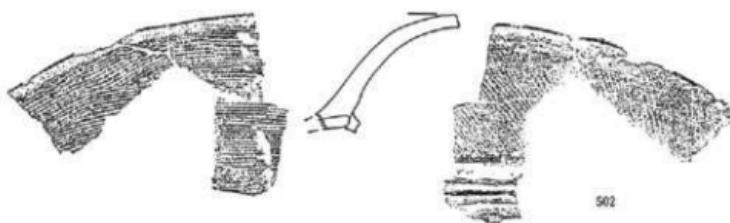
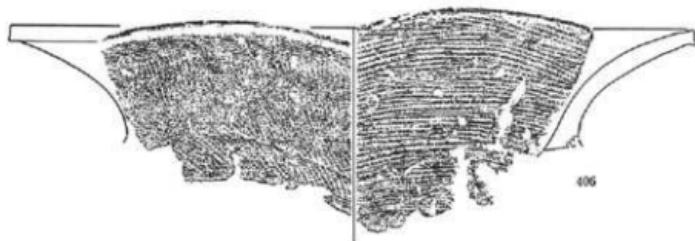
521



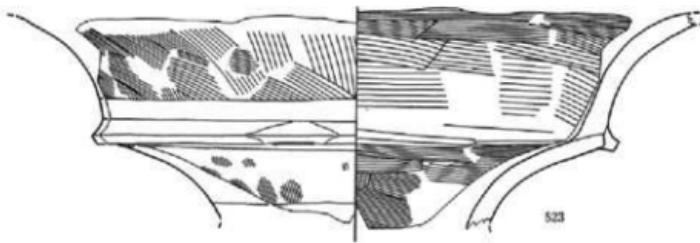
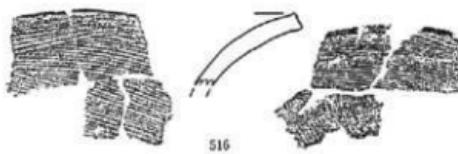
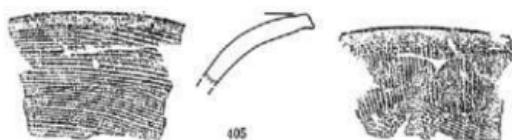
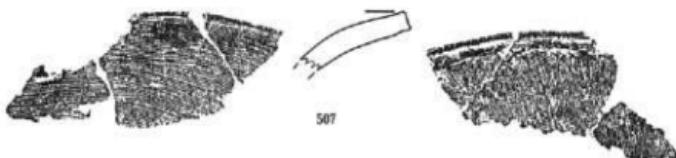
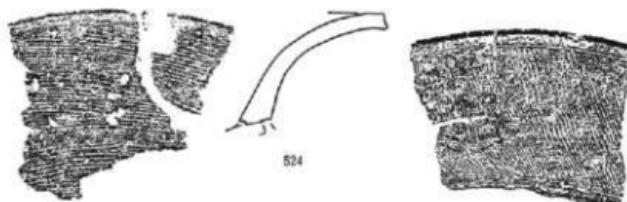
407



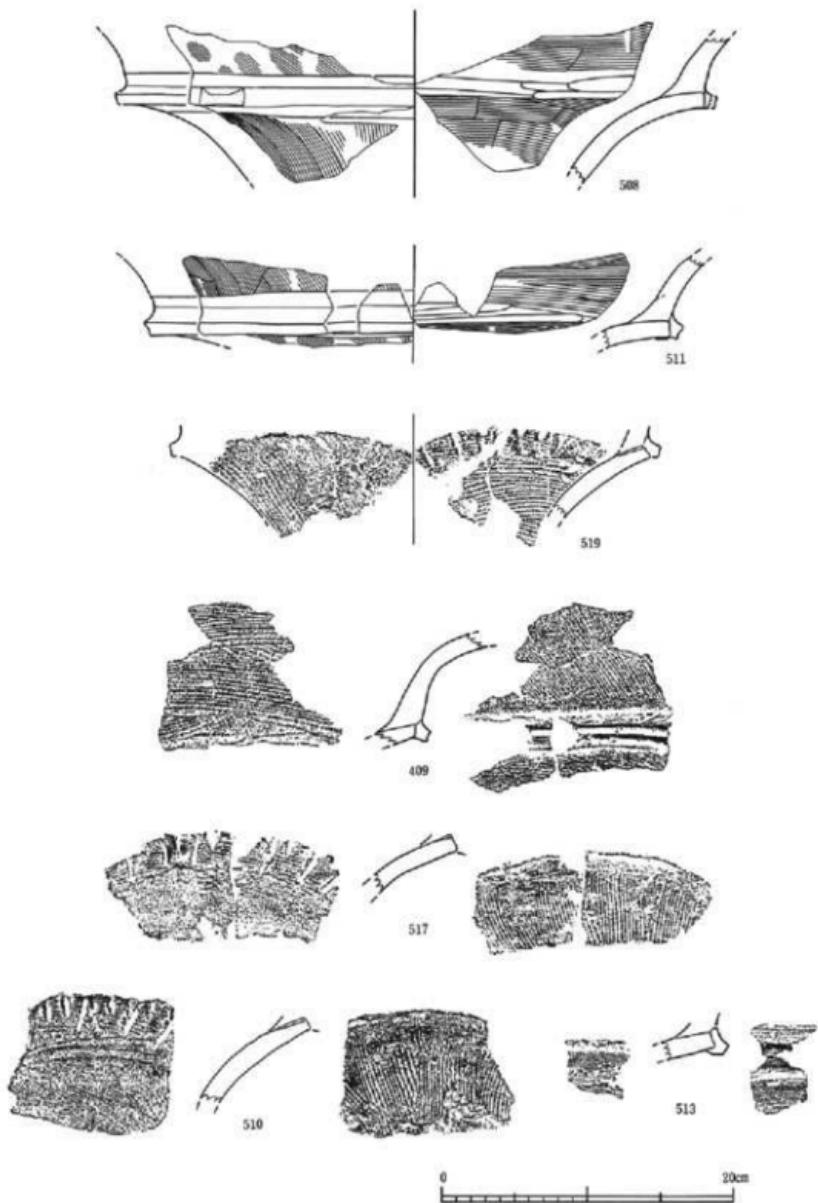
第43図 朝顔形埴輪(2)



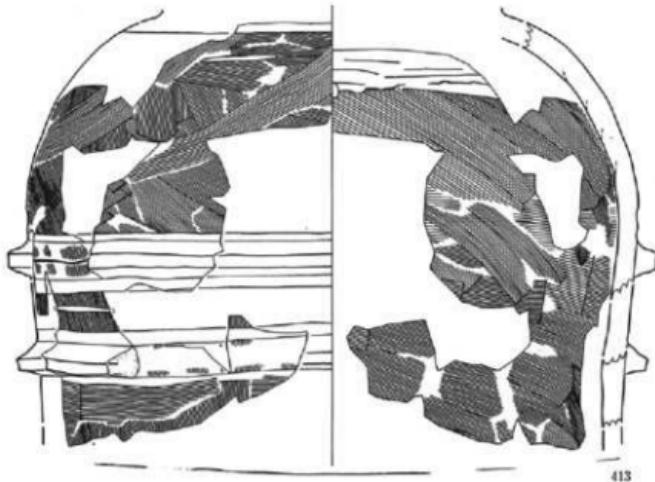
第44図 朝顔形埴輪(3)



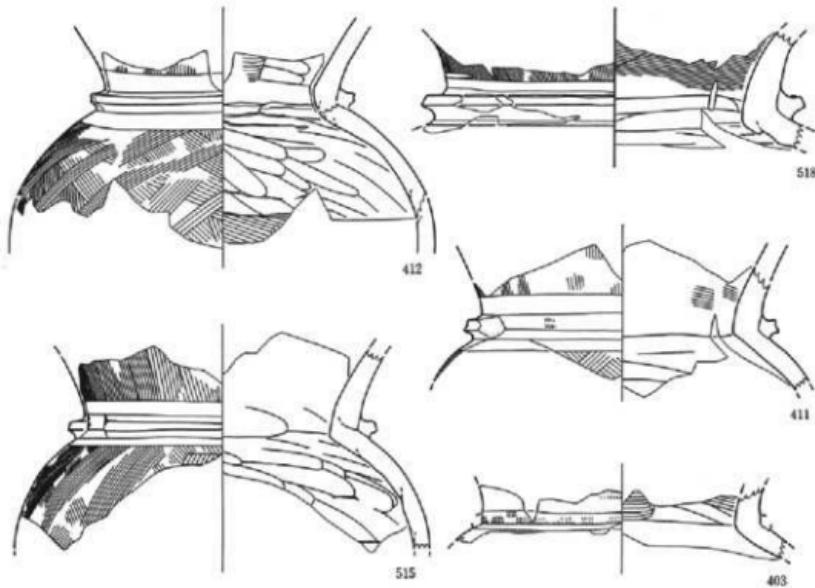
第45図 朝顔形埴輪(4)



第46図 朝顎形埴輪(5)

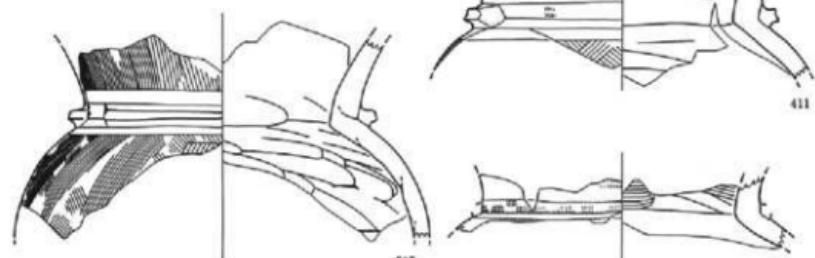


413



411

412



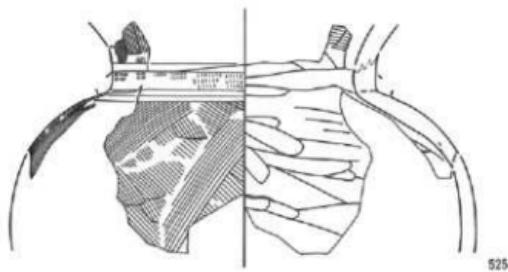
412

415

403



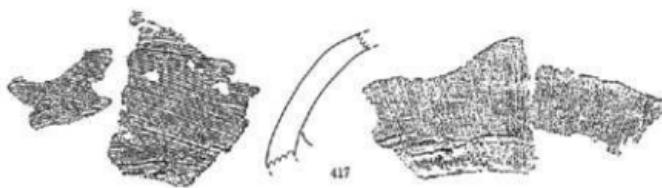
第47図 朝顔形埴輪(6)



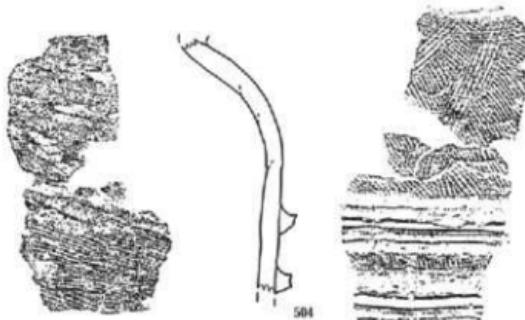
525



525



417

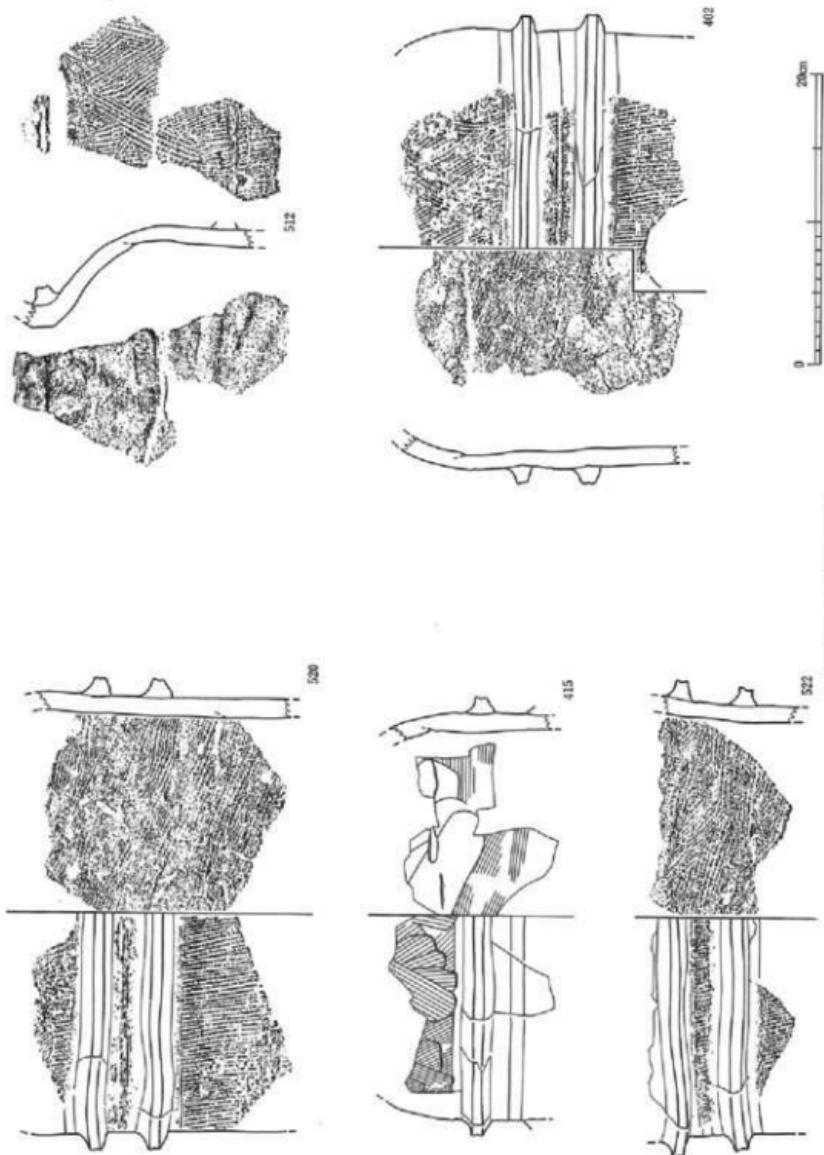


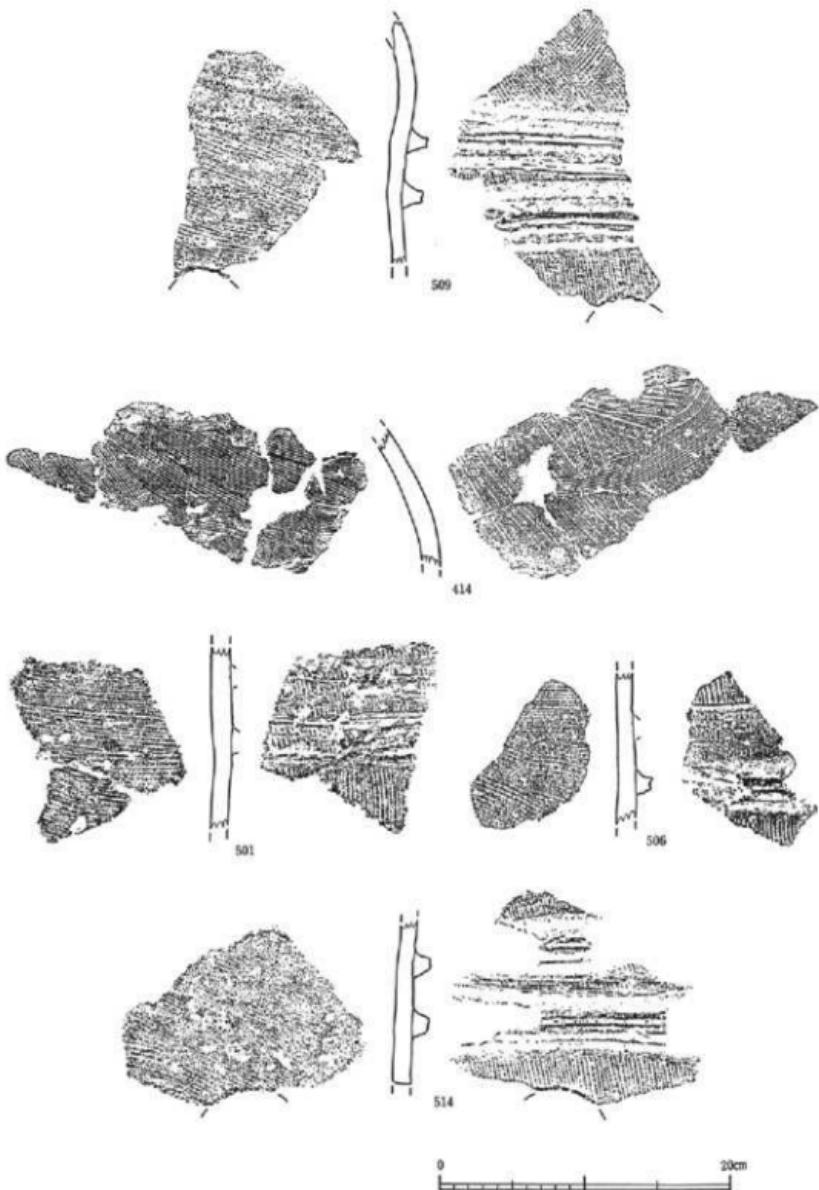
504



第48図 朝顔形埴輪(7)

第49圖 雜鰐形植物(3)

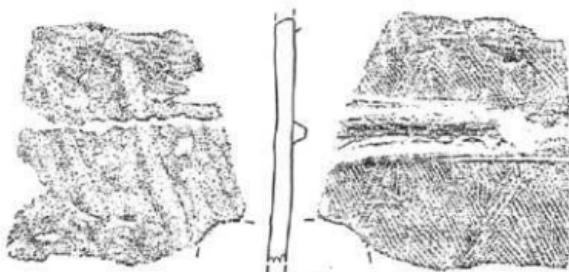




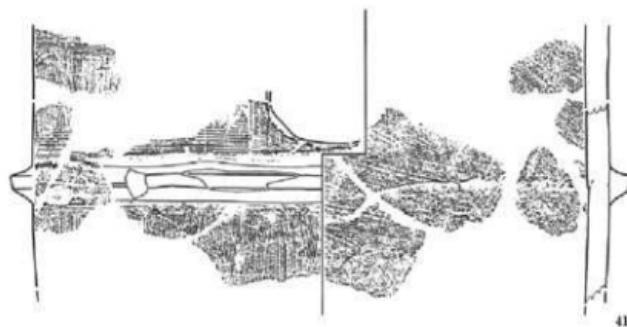
第50圖 朝鏡形埴輪(9)



419



526



418

0 20cm

第51図 朝顔形埴輪(3)

第10表 朝顏形埴輪觀察表(1)

登録番号	回数	回数	出土場所	法線	調整	凸面			ハケ		能成度	色調	
						上顎	下顎	高	形態	外顎	内顎		
417	48	48	J-2	椎骨高:8.8 頭幅:13.2-15.8	外面:傾力方向ハケ→凸面貼付・部分的にヨコナデ 内面:凸面内側ナダ→傾力方向ハケ	—	—	—	b2 bl	b2 bl	b	7.5YR2/4 に.5V1/3	
418	34	44	北トレンチ 上半	椎骨高:7.8-8.0 椎幅:11.8 頭幅:11.8	外面:ナダハケ→凸面貼付・凹面ヨコハケ→スカシ孔穿孔 内面:傾力方向ハケ→スカシ孔穿孔	0.9	2.5	1.5	b bl	b3 bl	b	7.5YR2/4 に.5V1/3	
419	34	45	I-29	椎骨高:23.5 頭幅:8.0 頭幅:8.0	外面:内凹部タマハケ→第4歯中柱以上斜方向ハケ→凸 研削付 内面:不規	0.8 —	2.9 2.8	1.4 —	b bl	b3 bl	c	10YR6/6 明黄色	
501	30	44	下西N6	椎骨高:13.2 頭幅:4.5 頭幅:4.5	外面:ナダハケ→凸面貼付 内面:傾力方向ハケ	—	1.8 1.9	—	—	2 al	2 al	7.5YR7/6 暗	
502	44	38	下西N6	椎骨高:9.8 頭幅:2.5 頭幅:2.5	外面:頭面傾斜方向ハケ→凸面貼付方向ハケ→凸面貼付 内面:ヨコ面ヨコナデ	0.7	1.2	0.8	j al	2 al	a	7.5YR7/6 暗	
503	43	36	CトレN3	口幅:46.0 椎骨高:9.8 椎骨高:9.8	外面:波状ハケ→輪郭部近似方向ハケ→口縁端部ヨコ 内面:横方向ハケ	—	—	—	b2 b	b2 b	c	10YR6/6 黄緑	
504	48	43	No113	椎骨高:17.6 頭幅:13.0 頭幅:14.5	外面:内凹部タマハケ→第3・4凸面貼付・頭面斜方向 ハケ(左上がり)→逆斜方向ハケ→内凹部凸 内面:内凹部斜方向ハケ→内凹部斜方向ナダ	0.6 0.8	2.0 2.1	1.2 1.1	a2 a2	2 al	a	7.5YR6/6 浅	
505	48	48	No118-19	椎骨高:22.9 頭幅:21.3 頭幅:21.3	外面:傾力方向ハケ→凸面貼付・部分的にヨコナデ 内面:凸面内側横方向ナダ→傾力方向ハケ	—	—	—	b2 bl	b2 bl	b	7.5YR2/6 暗	
506	50	44	No118-19	椎骨高:21.8 頭幅:4.0 頭幅:4.0	外面:ナダハケ→凸面貼付 内面:横方向ハケ(左上がり)ハケ	—	2.1 0.7	— 2.0	— 1.1	2 al	2 al	b	7.5YR7/6 黄緑
507	45	38	No119	椎骨高:3.9 頭幅:1.1	外面:傾力方向ハケ→口縁端部ヨコナデ 内面:横方向ハケ→口縁端部ヨコナデ	—	—	—	b2 bl	b3 bl	b	10YR6/6 黄緑	
508	46	29	No119	椎骨高:11.0 頭幅:13.14	外面:頭面傾斜方向ハケ→口縁端部・傾力方向ハケ→凸面貼付 内面:頭面傾斜方向ハケ→凸面内側横方向ナダ→口縁端部 方向ハケ	—	1.5	—	—	2 al	2 al	c	7.5YR7/6 黄緑
509	50	43	No121	椎骨高:17.6 4歯目高:3.5 頭幅:2.1	外面: 内面:門歯部:ナダハケ→凸面貼付・スカシ孔穿孔(内凹) 頭部:傾力方向ハケ(左上がり)→逆斜方向ハケ(左下がり) 内面:門歯部斜方向ハケ→スカシ孔穿孔・直面斜方向ナ デ	0.5 0.5	1.8 2.0	1.3 1.4	a2 a2	2 al	2 al	b	7.5YR6/6 黄緑
510	46	46	No122	椎骨高:5.9 頭幅:1.0-1.1	外面:傾力方向ハケ→輪郭ヨコナデ 内面:新筋ハケ→輪郭ヨコナデ→輪郭内ル→口縁端部 に付う椎骨方向ナダ	—	—	—	2 al	2 al	2 al	b	7.5YR6/6 黄緑
511	46	39	No123-2	椎骨高:6.6 頭幅:11.1-1.5	外面:頭面傾斜方向ハケ→口縁端部傾斜方向ハケ→凸面貼付 内面:頭面傾斜方向ハケ→口縁端部傾斜方向ナダ→凸面内側横 方向ナダ	0.9	1.8	1.0	j al	2 al	a	7.5YR7/6 に.5V1/3	
512	49	43	No142	椎骨高:16.1 頭幅:12.5 頭幅:11.1-1.5	外面: 内面:ナダハケ→凸面貼付・スカシ孔穿孔(内凹) 頭部:傾力方向ハケ	0.7 —	2.1 2.1	1.0 —	b —	4 al	—	b	7.5YR6/6 黄緑
513	46	49	No142	椎骨高:2.3 頭幅:12.5 頭幅:12.5	外面:凸面貼付→右下側・横筋横方向ハケ 内面:横筋方向ハケ(剥離跡)	0.8	2.0	1.3	l b	13 12	b	7.5YR7/6 暗	
514	50	44	No152	椎骨高:13.2 4歯目高:4.0 頭幅:1.2	外面:ナダハケ→凸面貼付・スカシ孔穿孔(内凹) 内面:横筋方向ハケ(左上がり)ナダ→輪郭側・傾力方向ナ デ	0.6 0.6	2.0 2.1	1.2 1.1	a2 al	7 al	b	7.5YR7/6 暗	
515	47	42	No112	頭幅:25.9 椎骨高:15.5 頭幅:12.1-1.5	外面:前筋側方向ハケ(左上より)→逆斜方向ハケ(左 下より)→頭面傾斜方向ハケ→輪郭凸面貼付 内面:頭面傾斜方向ナダ→輪郭側・傾力方向ナ デ	0.6	1.7	0.8	b al	2 al	c	7.5YR7/6 黄緑	
516	45	38	No219	椎骨高:5.9 頭幅:1.8-1.2	外面:頭面傾斜方向ハケ→輪郭ヨコナデ 内面:傾力方向ハケ→輪郭ヨコナデ→輪郭貼付→口縁端部 に付うナダ	—	—	—	g al	7 al	b	7.5YR7/6 黄緑	
517	46	38	No219	椎骨高:4.2 頭幅:11.1-1.2	外面:傾力方向ナダ→輪郭ヨコナデ 内面:傾力方向ハケ→輪郭ヨコナデ→輪郭貼付→口縁端部 に付うナダ	—	—	—	7 al	7 al	c	10YR6/6 黄緑	

第11表 朝顔形埴輪観察表(2)

登録番号	測定番号	試験番号	出土場所	法位	特徴	凸部			凹部		形状	色調	
						上顎	下顎	高	影響	外因	内因		
518	47	42	No220	頭部高：-23.2 残存高：-0.4 頭厚：1.4-2.3	外側：頭部最高方向～後方斜面 内側：頭部側～斜方向ナデ～頭部側～新方向ナデ～横 ～斜方向ナケ	8.7	2.4	1.3	i	12 sl	12 sl	b	7.5YR8/8 黄
519	46	39	No209	頭部高：-5.2 残存高：-1.0-1.2 頭厚：1.0-1.2	外側：頭部最高方向～後部リコナデ 内側：頭部最高方向～頭部リコナデ～頭部斜み～口縫 組合せに伴うナデ	-	-	-	-	6 sl	6 sl	c	10YR8/6 黄
520	49	45	No243	頭部高：-31.4 残存高：-10.1 口縫高：-9.5 4段目高：-4.0 頭厚：1.1-1.2	外側：円頭部タテナケ～凸形貼付・頭部最高方向～左 上がり 内側：頭部最高方向～斜方向ナケ	8.7 8.7	2.2 2.2	1.3 1.3	al al	7 al	7 al	b	7.5YR2/6 黄
521	43	37	No243	口径：-31.8 残存高：-10.1 口縫高：-9.5 4段目高：-1.1-1.2	外側：口縫部端～斜方向ナケ～凸形貼付・口縫部端ココ ナデ 内側：凸頭内側最高方向ナデ～口縫部端方向～口縫端 リコナデ	8.7	1.5	0.8	j	2 al	2 al	b	7.5YR2/6 黄
522	49	44	不明	頭部高：-31.0 残存高：-10.2 4段目高：-4.5 頭厚：1.1	外側：テナケ～凸形貼付 内側：凸頭部側～斜方向ナケ～頭部側方向ナデ	8.7 8.7	1.9 2.0	1.3 1.3	c c	8 al	7 a	a	7.5YR8/4 に近い黄
523	45	36	不明	口径：-50.0 頭部高：-18.6 残存高：-15.1 口縫高：-9.2 4段目高：-6.5 頭厚：1.1	外側：頭部最高方向～頭部凸頭部貼付 内側：頭部最高方向～凸形貼付 頭部高：-6.5 方向ナケ	8.7	1.6	1.1	j	5 al	6~5 al	b	10YR8/6 黄
524	45	37	不明	残存高：-7.6 口縫高：-8.0 4段目高：-1.1-2.0	外側：頭方向ナケ～凸形貼付・口縫部端ココナデ 内側：斜方向ナケ～口縫部端ココナデ	-	-	-	-	2 al	2 al	a	7.5YR8/6 黄
525	48	42	不明	頭部高：-18.4 残存高：-32.3 4段目高：-16.3 頭厚：8.9-1.5	外側：斜方向ナケ（左上がり）→逆斜方向ナケ（左下が り）～頭部最高方向～頭部凸頭部貼付 内側：頭部最高～斜方向ナデ～頭部最高～斜方向ナデ～横方 向ナケ	-	1.9	-	-	2 al	2 al	a	7.5YR8/4 に近い黄
526	31	45	下部No3	残存高：-17.6 4段目高：-8.0 頭厚：-	外側：テナケ～斜方向ナケ（左下がり）～凸形貼付 内側：斜方向ナデ～スカシ乳頭孔（凹側） 内側：斜方向ナデ～スカシ乳頭孔	8.7	1.8	1.0	e	5 al	-	b	10YR7/4 に近い黄

第12表 朝顔形埴輪観察表(3)

(3) 形象埴輪

形象埴輪も円筒埴輪・朝顔形埴輪と同様に遺存状態が悪く、全体の特徴などが判明しているものはわずかである。個体識別の結果では、以下の数量の形象埴輪が確認された。

家形埴輪	7 個体
衣蓋形埴輪	1 個体
盾形埴輪	2 個体
韁形埴輪	2 個体
甲冑形埴輪	5 個体
馬形埴輪	1 個体

さらに、種類が限定できなかった破片の中に、女性の人物埴輪の島田館の可能性のある破片が1点含まれている。

また、これらは最小個体数であり、さらに個体数が増加する可能性もある。

以下、それぞれについて記述する。

【家形埴輪】

家形埴輪は屋根の形状から見ると切妻の家1個体、寄棟の可能性のあるもの2個体、入母屋の可能性のあるもの2個体が確認され、屋根が不明のもの1個体、円形柱の家1個体が存在する。さらに帰属を明確にできなかった破片があり、個体数はさらに増加する可能性も残る。

家形埴輪 1 (第52図、第13表、図版46)

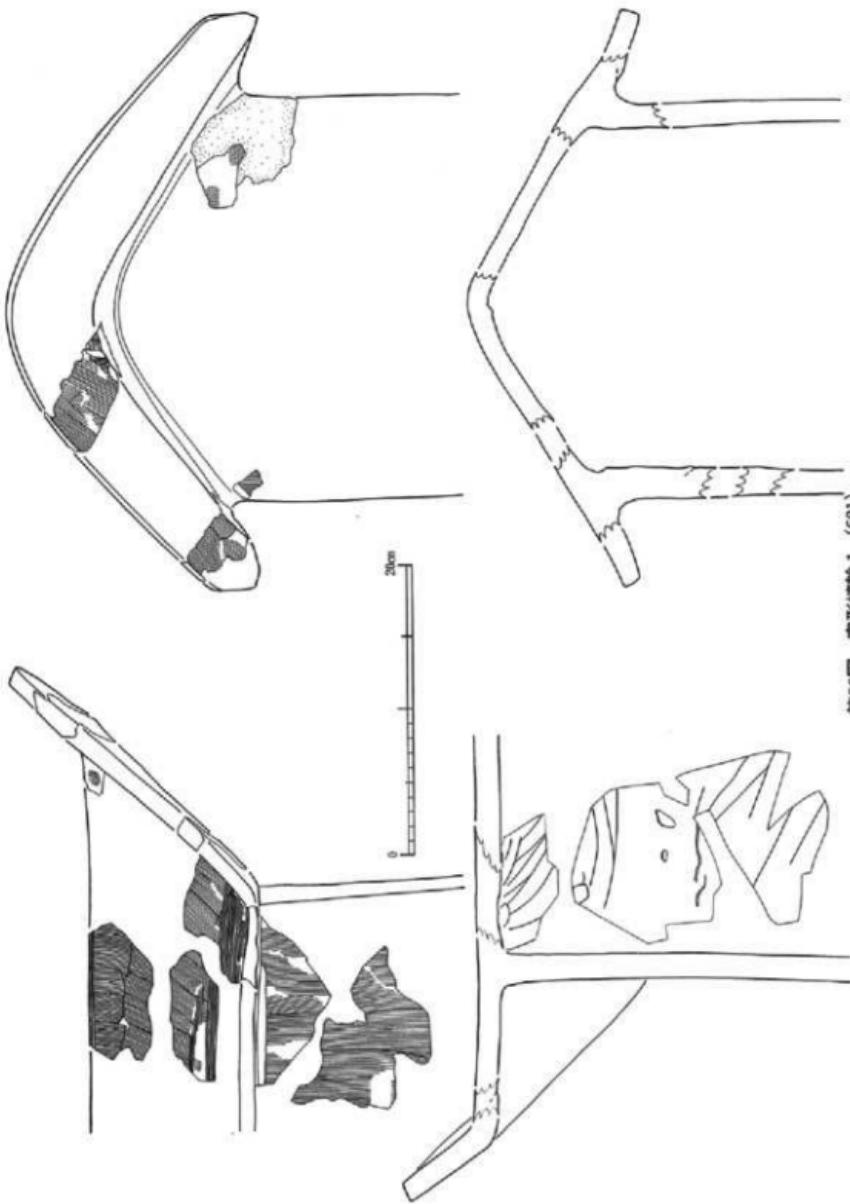
II次調査のI-4区で出土しているもので、切妻の家である。屋根と壁のつながりが判明する唯一のものである。色調・焼成・ハケメの状況から同一個体と判断した4点の破片を、位置関係を推定して組み合わせて復元したもので、法量は確実でない。復元後の最大高は31.3cmであるが、壁の下端が存在しないことから、さらに高くなるものと判断される。

壁の製作方法が粘土紐の巻き上げによるのか、粘土板を張り合わせているのかは、隅の部分がわずかしか遺存していないことから明確ではない。ただ、内面に粘土紐の接合痕を残す部分

登録番号	樹種	樹高	出土場所	部位	形象の特徴・底面等	発掘方法の特徴・文様等	ハケメ		焼成度	色調
							外側	内側		
601	22	46	II次 I-4	壁 屋根 軒先 軒先 軒先	切妻の家、既存高：31.3 下端部を大きく、切り込みは見られない 切妻構造：27.7、屋根：1.5-2.2 軒先がわざかに反らる以外平直、襷は伸びない、高さ（軒先～脚）：11.8 脚厚：1.4-1.6 破風部：5.9、脚厚：1.4-1.9	貼付け、縫隙などを全くなし 外側：裏方角ハケ・屋根との接合部強め ナデ、内面：縫一斜方向ナデ 外側：裏方角ハケ→軒先付近横方向ハ ケ・腰折部分強めにナデ、内面：斜方向 ナデ、脚付け近は粘土紐の接合痕を多く残す 内外面：ハケメ	13 1	— —	b b MVR&F 淡青緑	

第13表 家形埴輪1観察表

第52圖 家形繩輪 1 (601)



があり、後者の場合でも粘土紐を重ね合わせて板状にしていることが判る。壁は残存する部分には、貼付けや切込みなどは認められず、外面には縦方向のハケメ調整が施されているだけである。内面調整は横から斜方向のナデである。

屋根は軒先付近でわずかに反る以外は、ほぼ平坦で、傾きはかなりゆるい。外面は縦方向のハケメの後に、軒先付近に横方向のハケメ、棟付近に部分的にナデを施すだけで、貼付けや線刻などは認められない。内面には斜方向のナデ調整が施されているが、棟近くでは粘土紐の接合痕を多く残しており、ほとんど調整されていない。軒先の下面はナデである。壁と屋根との接合方法も、この箇所が内外面とも強く丁寧にナデつけられていることから明確にし難い。屋根の形状から判断すると、壁体に粘土板をかぶせて屋根を製作したものと考えられる。その際、棟付近の内面に接合痕を残すことから、両側から2枚の粘土板を壁にかぶせ、屋根部分の内面を調整した後に棟を塞いだ可能性がある。

破風板は妻側、屋根側ともに素文で、両面ともハケメ調整が施されている。

家形埴輪2（第53図、第14表、図版47）

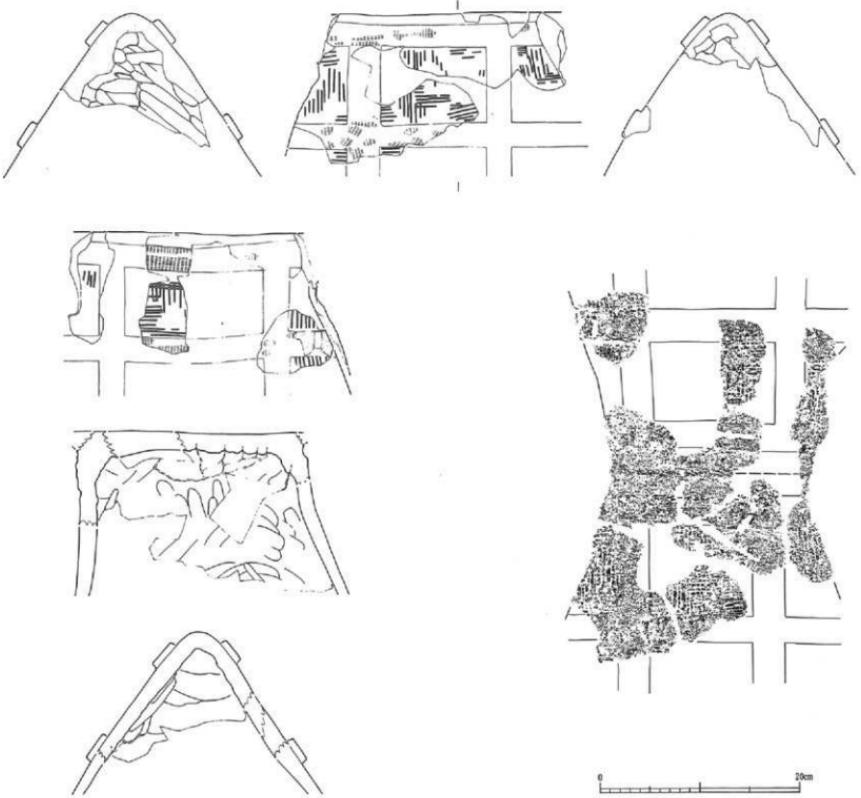
II次調査のE-4・5区で出土しているもので、II次調査の資料も接合している。屋根のはば上半が遺存しており、家形埴輪で棟の長さが判るものは、この個体のみである。棟の長さは両端に剥落部があるため明確ではないが約23cmを計る。

この個体は、妻の隅の部分の構成に理解し難い部分があり、屋根の形状の判断に苦しんだものである。その点は後に詳しく記すこととして、まず平側の屋根の部分から説明する。

平側の屋根は平坦で、途中で傾斜が変わる所は無い。棟の両脇には、幅3cm前後の剥落痕が棟方向に伸びており、棟押えが貼付けによって表現されていたことが判る。棟上端から11cm程下の所には、押縁を表現したと思われる、幅2.6~2.9cmの凸帯の剥落痕が横方向に両端まで伸びる。両側の妻近くにこれと直交して同様の凸帯が貼付けられている。これらの凸帯でX切られた内部はナデられた後、線刻で網代が表現されている。網代の表現は、横方向の押縁の棟側・軒側両方に施されている。棟押えや押縁状凸帯の剥落部には、ハケメが残っている。したがつ

登録番号	測量番号	測量番号	出土場所	部位	形態の特徴・法則等	製作技法の特徴・文様等	ハケメ 内面 外面	焼成	色調
999	53	41	I-32a145 日次E-4 E-5	屋根	勾欄か？ 平側の構成は平側、側面はやや内側 残存高：16.4、棟の長さ：23.0 棟押えと剥落痕の幅：2.7-3.3 押縁状の剥落痕の幅：2.6-2.9 剥厚：1.2~2.0	平側 外側：横方向ハケメ押縁と、押縁状凸帯 棟付ナデ→現段階で網代を表す 内側：横方向ナデ・棟辺近は棟上縫接合 痕を多く残す 側面 外側：横・斜方向ナデ 内側：ナデ	14 b	-	c 7.5V26.9 黄地

第14表 家形埴輪2観察表



第53図 家形埴輪2 (609)

てハケメ調整を行った後に棟押えなどの凸帯を貼付け、さらにナデを施してから線刻を行っていることが判る。

平側と妻側の接する部分の棟上端から7cm程の範囲には、角の部分に剥落痕が確認され、さらに先に屋根が伸びる可能性が残る。但し、平側に横にめぐる押縁の付近の高さでは、片側では剥落は見られず、この点から切妻にはならないと考えられる。したがって、上部の剥落からさらに屋根が伸び入母屋になる場合と、上部の剥落は押縁を表した凸帯が剥落したもので寄棟になる場合が考えられた。しかし剥落の無い側の反対側の同じ高さの所では、妻が内湾し平側から続く部分が突出している。入母屋・寄棟いずれの場合でも、この部分が何を表現したのか不明で判断に苦しんだ。また寄棟の場合、妻側に何の装飾もなく、平側の横方向の押縁も続かない点で問題が残る。他方、入母屋造りであったとした場合、妻側の突出する部分が付け足されて製作されていることとなる。同様に妻側の壁より屋根の妻先が突き出る家形埴輪1(切妻)では、平側から続く屋根が妻先端に至るまで一連の粘土板から作成されていると考えられる。強度のことを考えると、突出する妻先を付け足すより、平側から一連に続く粘土板で製作した方が有効であろうと思われ、この点で疑問がぬぐえない。よって、一応ここでは寄棟の家の可能性が強いものと考え、剥落部分は押縁状のものが貼付けられた痕跡と考えておきたい。

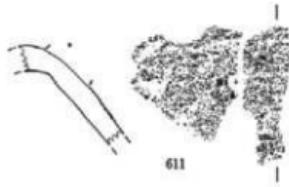
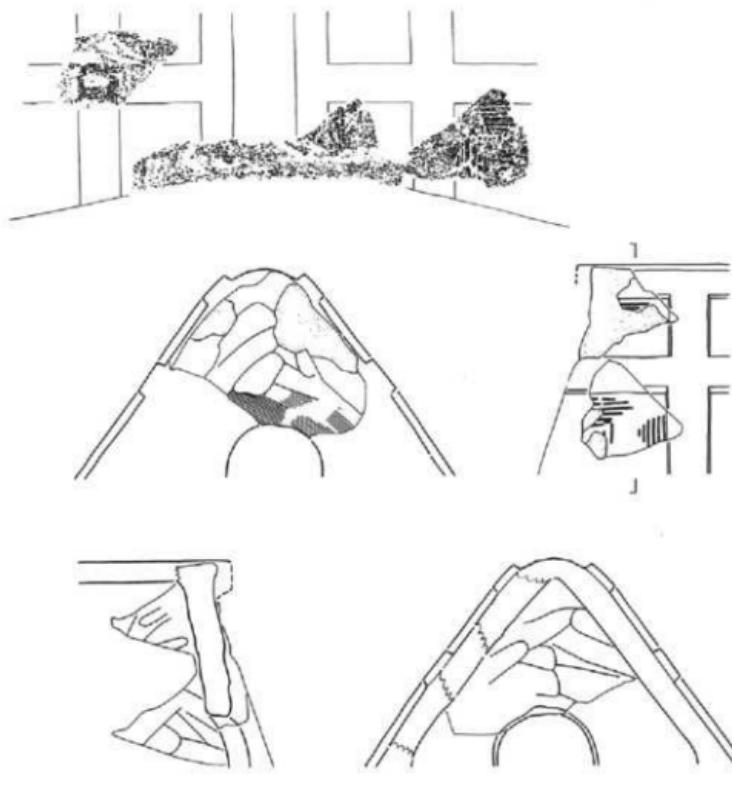
内面は平側・妻側ともにナデ調整が施されているが、棟の部分は粘土紐の形状をとどめ、接合痕も明瞭に残されている。したがって、平側・妻側それぞれ2枚づつ4枚の粘土板を合わせ、内外面を一旦調整した後に、棟に粘土を充填するようにして塞いだものと考えられる。

家形埴輪3(第54図、第15表、図版48)

基本的な構成は家形埴輪2と同様の、屋根の部分の破片である。610と611は接合しないが、色調・焼成・外面の貼付けと線刻の構成が類似する上、同じグリッドから出土していることから同一個体と判断した。

610は屋根の上半の妻付近の破片である。これも平側と妻側の合わさる隅の部分に剥落痕が残り、さらに平側の屋根が先に伸びる可能性も残るが、家形埴輪2の所で述べた理由から、一応寄棟の家の可能性を考えておきたい。

平側は依存状況が悪く、ほとんど残っていない。棟の脇には両側にかろうじて剥落痕が確認できることから、棟押えが凸帯で表現されていたものと思われる。棟上端から6cm程の所から横方向に剥落痕が伸び、押縁を凸帯で表現したものと考えられる。この凸帯の棟からの位置が、家形埴輪2よりも狭いことから、この個体は家形埴輪2より小振りになる可能性が考えられよう。妻近くには、横方向の凸帯に直交する凸帯の剥落痕がある。これらの凸帯で区切られた内部には、線刻で網代が表現されている。妻側はやや内湾する。円孔が開けられているが、貼付



0 20 cm

第54図 家形埴輪3

けや線刻は認められない。内面は平側・妻側とも、ナデが観察される。平側の下端付近は、やや器厚が厚くなっている、壁との接合部が近いことを示す。この器厚の変化の具合から想定すると、壁の析行きの幅は23cm程度になると推定される。

611は屋根の棟付近の破片で、棟の脇に棟押えの剥落した痕跡が残る。棟押えの下側には、わずかではあるが網代を表現した線刻が観察される。

登録番号	説明番号	回収番号	出土場所	断面	形態的特徴・底足等	製作技術的特徴・文様等	ハケメ		焼成	色調
							外側	内面		
610	54	48	日本E-2	断面	背後か? 平側の底足は平坦。背面は内 向し内孔を穿つ(底足高:6.5) 平側と妻側の合わざる間に斜面 傾斜と斜面底の幅:2.3-2.5 傾斜底付斜面底の幅:2.2 底厚:0.6-2.0	平側 外側: 棟方向ハケ→棟押え・押縁状凸帯 棟付ナデ→斜面で網代を表す 内側: 棟→棟方向ナデ 妻側 外側: 棟方向ハケ→棟方向ナデ→スカシ 孔厚(内側) 内側: 棟→棟方向ナデ	b	—	c	7.5YR8/8 黄赤
611	51	48	日本E-2	断面	棟付近の破片。 底足高:7.2 傾斜と斜面底の幅:4.0 底厚:1.3-1.6	外側: 棟方向ハケ→棟押え斜面付ナデ→ 斜面で網代を表す 内側: 不明	b	—	c	10YR8/4 淡黄橙

第15表 家形埴輪 3 観察表

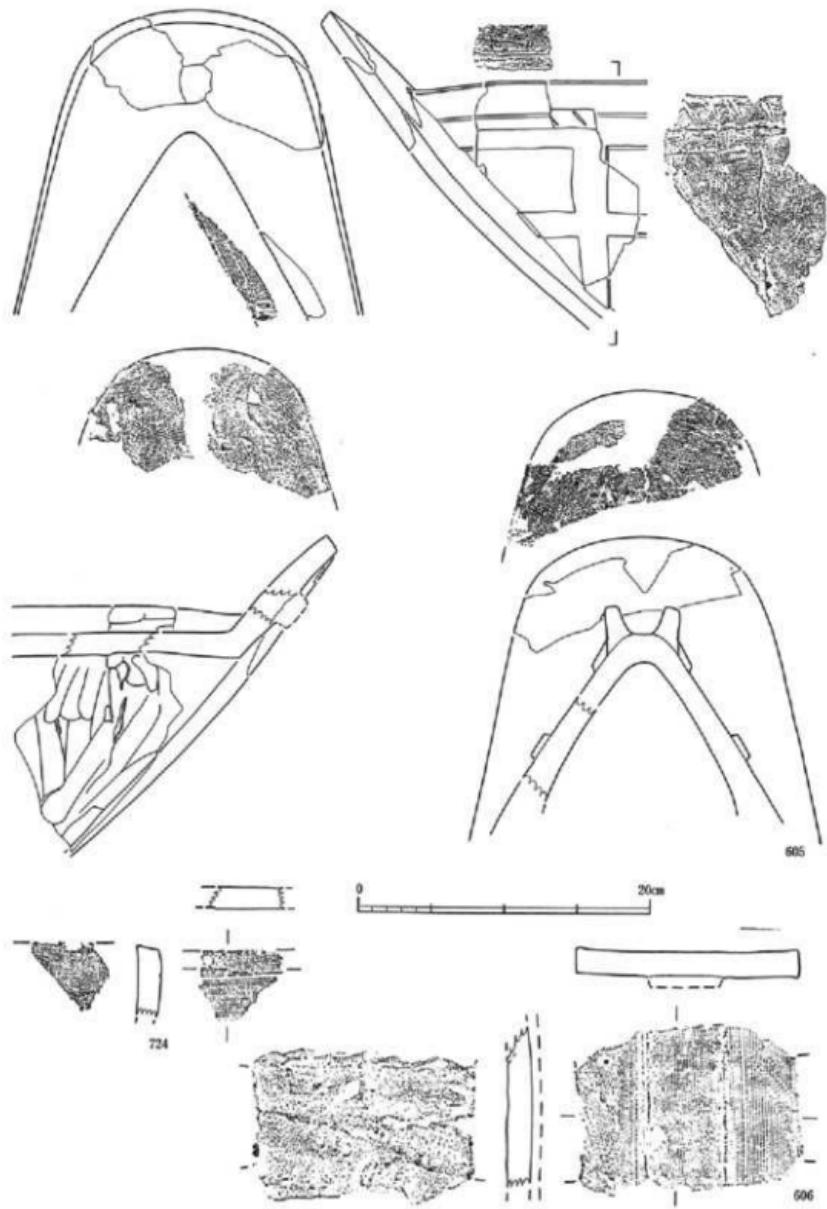
家形埴輪 4 (第55図、第16表、図版48・49)

家形埴輪の中では、この個体のみが堅く焼きしまっており、色調も赤みが強い特徴的なものである。同様の焼成の状況は甲冑形埴輪にのみ見られるもので、接合しないものの、屋根の部分の605・724と壁の部分の606が同一個体である蓋然性は極めて高いものと判断される。

605は屋根の妻付近の破片で、破風板の上半部と屋根の片側が残存している。残存部分からは切妻か入母屋の家が考えられる。ただ、この残存する屋根の下端には、接合部近くの器厚が厚くなっていると考えられる部分があり、これが破風板に直交する方向に伸びることから、入母屋の家になる可能性が考えられる。屋根は平坦で、傾きは大きい。棟の脇には棟押えを表した凸帯が貼付けられており、両側で2条になるものであろう。この棟押えに接する部分と、さらに下がった部分に横方向に2条、それらに直交する方向に1条の、幅2cm前後の剥落痕が存在し、凸帯で屋根を方形に区切っていることが判る。屋根の押えを表現したものと考えられる。外面調整はハケメで、棟押えは斜方向に線刻を加えてから貼付けている。さらに押縁状の凸帯を貼付け、ナデ調整で仕上げている。裏面はナデ調整である。破風板は妻側・屋根側とともに素文で、ハケメの後ナデで調整を行う。妻側下端近くには棟柱の端を表現したと思われる剥落痕がある。この屋根の2条の棟押えの上に継木が乗る可能性を考え検討したが、確証は得られなかった。

724はわずかに反る、ほぼ平坦な破片で、屋根の軒先の部分と考えられる。両面ともハケメ調整で、片面には端から1.7cmの所に沈線が1条めぐる。

606は偏平な板状の破片で、壁と考えられる。両側面には切込みが見られ、その幅は15.6cm



第55図 家形埴輪 4

である。また右側の側面には、それに直交する辺が上下ともわずかに残存しており、その高さは7.0cmである。破片の中央には幅5.3cmの剥落痕があり、貼付けで柱を表したものと考えられる。外面は縦方向のハケメの後、柱を貼付け、さらにその両側にハケメ調整を加えている。内面はナデである。

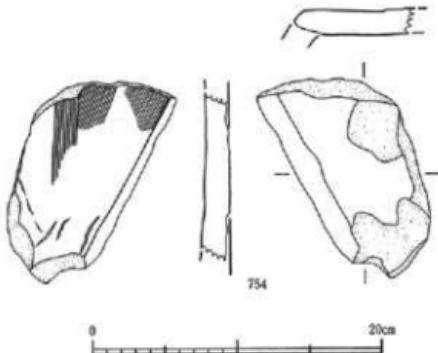
登録 番号	牌固 番号	回数 番号	出土場所	部位	形態の特徴・法量等	製作技法の特徴・文様等	ハケメ		種 類	色調
							外側	内側		
605	55	45	I 36a240 II 3E-4	屋根	入母屋。裾に2重の押附え。背面は凸部で方形に区切る 窓痕有り；21.9 複雑な上縁；0.9、下縁；1.9、高1.9 押附部底面剥落痕；1.9-2.4 窓跡（平側）；1.5-1.8 窓跡（底側）；1.3-1.9	平面 外側：横～斜方向ハケ～複雑な點付け（點付け間に凹み）→押え縫試内側點付→ナデ 内面：縦～斜方向ハケ 破風板 内面；もハケメ後ナデ	13 bl.	—	a	7.5VR7/6 青
606	50	49	I 36a142付近	壁	内側に切込みを有す。中央に凸側部有り。 左の柱；15.6、右側に凹みの高；7.0 右側剥落痕；1.3、窓厚；1.7-1.8 軒丸；0.9-1.3、窓厚；1.3-1.6 窓跡から底面までの高；2.2	外側；竪方向ハケ～凸側點付→縦方向ハケ～カーブ形の切込み 内面；縦方向ナデ	11-13 bl.	—	a	7.5VR6/4 に青～緑
724	55	49	I 未明確	屋根	軒丸、むずかしく反らす。窓厚；1.3-1.6 窓跡から底面までの高；2.2	内面；も複方向ハケ 内面；縦面と平行に沈線	13 bl.	13 bl.	a	7.5VR6/4 に青～緑

第16表 家形埴輪4観察表

家形埴輪5

(第56図、第17表、図版51)

屋根の一部の破片1点のみの出土であるが、他の家形埴輪の屋根とは異なり、また家形埴輪6とも焼成の状況が異なることから別個体と判断した。妻の端近くの破片で、外面の妻端部には幅1.4cmの剥落痕があり、破風板が剥落したものと判断される。したがって切妻、もしくは入母屋の家になることが考えられるが、この破片の内面の下端付近には家形埴輪4と同様に接合部近くの器厚が厚くなっている部分があり、それが破風板に直交する方向に伸びることから、入母屋の家の可能性が考えられよう。全体に保存が悪く調整は判別し難いが、内面にはハケメが施されている。



第56図 家形埴輪5

登録 番号	牌固 番号	回数 番号	出土場所	部位	形態の特徴・法量等	製作技法の特徴・文様等	ハケメ		種 類	色調
							外側	内側		
724	56	51	I 未明確	屋根	入母屋。側面延長の痕跡、側面の両端に沿って破風板の剥落痕；1.4 器厚；1.6-1.8	外側；平滑 内面；縦方向ハケ	—	14 b	c	10VR7/6 明黄

第17表 家形埴輪5観察表

家形埴輪 6 (第57図、第18表、図版46)

屋根の形状は不明であるが、壁の部分を比較的多く残す家形埴輪である。対応する屋根を検討したが、屋根の部分のみが残る家形埴輪 2・3・4・5 とは色調・焼成の点で大きく異なることから、別個体と判断した。

この個体は色調・焼成・調整の状況が類似する 5 点の破片を組み合わせて復元しているが、長方形の窓状の切込みが妻側 1 箇所、平側 3 箇所とすると全体の比率が良いものと考えて復元したもので、この大きさに特に根拠は無い。このうち最も多く残存している破片では、妻側の切込みの部分から、平側の切込み 2 箇所までの部分が残っている。同様に妻側の壁に切込みを有する破片が、これを合わせて 4 箇所存在したことから、両方の妻側の壁に窓を有するものと判断した。また平側の切込みは、2 箇所とも幅がほぼ等しいことから、同様の切込みが平側全面に並ぶものと考え、3 箇所とすると妻側の幅との比率が不自然でないと考えた。平側の窓の幅は 2 箇所で判明しており、5.5cm と 6.1cm である。窓の高さは確認できる箇所がなく推定であるが、最も高いところで 11cm までが残っている。

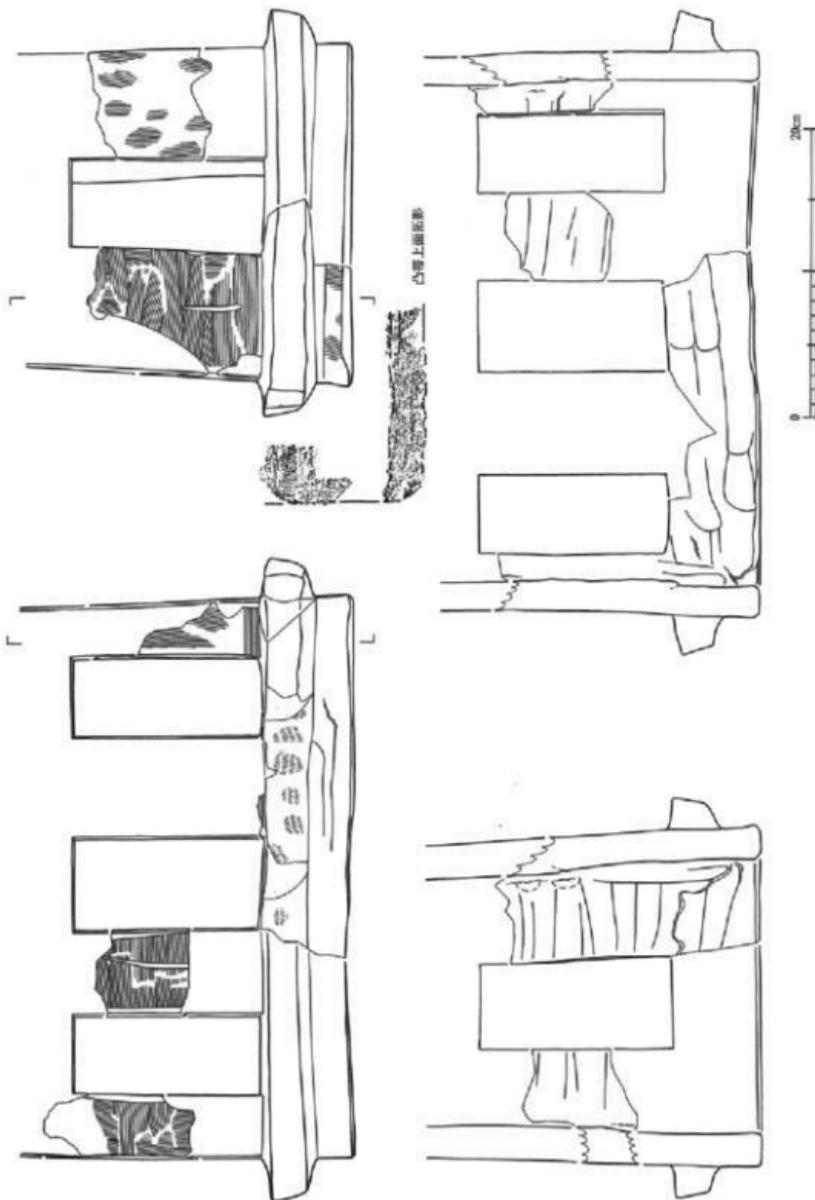
壁はわずかに内傾して立ち上がる。壁の内面の妻側の一部には、底面から 6cm ほどの箇所に明瞭な接合痕が存在する部分がある。これが大きな製作工程の単位を示すものとすると、高さ 6cm 強の粘土帯を組み合わせて基部とし、その上に粘土板を接合して壁を作成した可能性が考えられる。調整は横方向のナデで、隅の部分は縦方向に強くナデ付けられている。

外面には、底面から 2.8cm の間を開けて、幅 3.6cm の凸帯がめぐらされている。窓状の切込みの下辺は、この凸帯の上端に合わせて開けられており、窓の切込みが凸帯の接合の後であることを示す。凸帯の剥落部には縦方向のハケメが残っており、凸帯より上の壁面はさらに横方向のハケメが施され、凸帯の上面にもハケメが施されている。凸帯の側面と下面是ナデである。窓はこの壁面の横方向のハケメを切って開けられている。窓状の切込みの間の壁面には、貼付けや線刻などは全く見られない。

登録番号	埋蔵番号	回収番号	出土場所	部位	彩墨の特徴・状況等	製作技術の特徴・文様等	ハケメ		焼成	色調
							外面	内面		
602	57	46	日次 I-4	壁	妻側高 : 25.0, 平側高 : 44.6 妻側に 1 箇所 平側に 3 箇所長方形の窓を 開ける。窓の幅 : 5.5~6.1 下端から 2.8cm 開いて凸帯をめぐらす。 凸帯 上端 : 2.2, 下端 : 3.6, 高 : 2.7	外縁：縦方向ハケメ→凸帯貼付→凸帯より 上端縦方向ハケメ→凸帯上端ハケメ→窓切込 み→部分的にナデ 内面：横方向ナデ→側縦方向ナデ	13 b2	—	b	TOYBR8/4 浅黄

第18表 家形埴輪 6 観察表

圖57 家形埴輪 6 (602)



家形埴輪7 (第58・59図、第19表、図版49・50)

円形の柱を持つ高床建物である。いずれの破片も色調・焼成の点で良く類似することから同一個体と判断した。

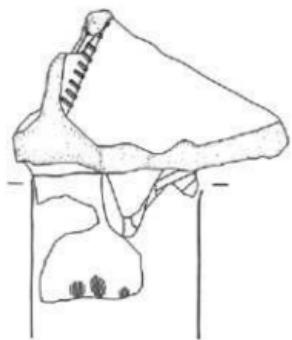
746は円形の柱が屋根と接合する部分の破片である。柱の径は11.4cm程になると推定され、後に述べる床の部分の柱の径より細く、柱が上に行くに従って細くなっていることを示す。屋根は柱の上端にかぶせるようにして接合されている。柱と屋根の接合部には、鎧状の補強が施されている。屋根は2面がほぼ直角に接する部分が残っているだけで、全体の形状は不明であるが、寄棟状の形態を取るものと考えられる。この屋根の2つの面が接する角には、鎧状の突起が付けられており、そこに長方形の刺突が並んで施されている。この突起は根本付近が残存しているだけであるが、次に述べるような鎧状の屋根飾りになるものと推定される。屋根の表面は保存状況が悪く、調整も不明であるが、鎧状の飾り以外の貼付けや線刻は確認できない。

747は平坦な角状の突起の両面を沈線で区切り、さらに方形の刺突を沈線に沿って施している。刺突の状況が746の屋根の角の突起に施されたものと類似し、厚さも同様であることから、これは屋根の角に付けられた鎧状の屋根飾りであると考えられる。

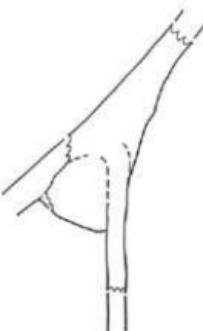
748~751は床の部分の破片である。いずれも上面は床の縁と平行の方向にハケメ調整を行い、下面にはナデを施している。748・749には、床の縁の部分が残存している。両者とも、縁から5.5cm程の箇所で下方に屈折させている。748・750・751には、柱の接合部が残存している。刺落面からの復元度であり確実ではないが、柱の外径は13~20cm程度である。これらにはいずれも、その下面に床の縁と直交する方向に柱と床をつなぐ鎧状の補強が付けられているか、あるいはそれが剥落した部分が残っている。751では、柱との刺落部の横に、さらに粘土を接合した部

登録番号	測定番号	測定番号	出土場所	断面	形状と特徴・法量等	製作技法の特徴・文様等	ハケメ		焼成	色調
							前面	内面		
746	58	49	I次不明	柱~屋根	円形の柱の上に屋根の隅が取り付く 残存高：20.3、柱径：11.4 屋根の合せ方に鎧状の突起を作り出す 屋根と柱の接合部に鎧状の補強 留厚：1.2~1.6、柱径：1	柱：外側面方向ハケメ→内側面 屋根：外側面方向に鎧状突起の方形の刺突、 内側面ナデ	12~14 b	—	c	MYB6/6 黄緑
747	59	49	ESE-5	屋根脚	平頂した鎧状の屋根脚 残存高：1.1、左の刺突幅：14.2 留厚：1.6~2.2	両面ともナデ→鎧型一方形刺突 径：2.0~3.0×0.4~0.8	—	—	c	MYB6/4 淡黄緑
748	59	50	I-23a/42	床	円形柱の端から4.5cm以下に断面、柱との 接合部に鎧状の補強、柱径：12.0 柱の端から端までの高さ：10.0 留厚：2.1~2.9	上面：模方向ハケメナデ 下面：ナデ→鎧脚取り付け	14 b	—	c	MYB6/4 淡黄緑
749	59	50	I-23a/20	床	床の縫合部の破片、跡か5.3cmで屈折 留厚：1.6~3.3	上面：模方向ハケ 下面：ナデ	14 b	—	c	MYB6/4 淡黄緑
750	59	50	I-23a/20	床	床の柱との接合部、縫合部に鎧状の補強 柱径：1.13、留厚：2.0~2.5	上面：ハケメナデ 下面：ナデ	13 b	—	c	MYB7/4 にぶい黄緑
751	59	50	I-23a/2	床	床の柱との接合部、縫合部に鎧状の補強 柱径：16.6、留厚：1.9~2.7	上面：ナデ 下面：ナデ→鎧脚取り付け	13 b	—	c	MYB7/4 にぶい黄緑

第19表 家形埴輪7 観察表



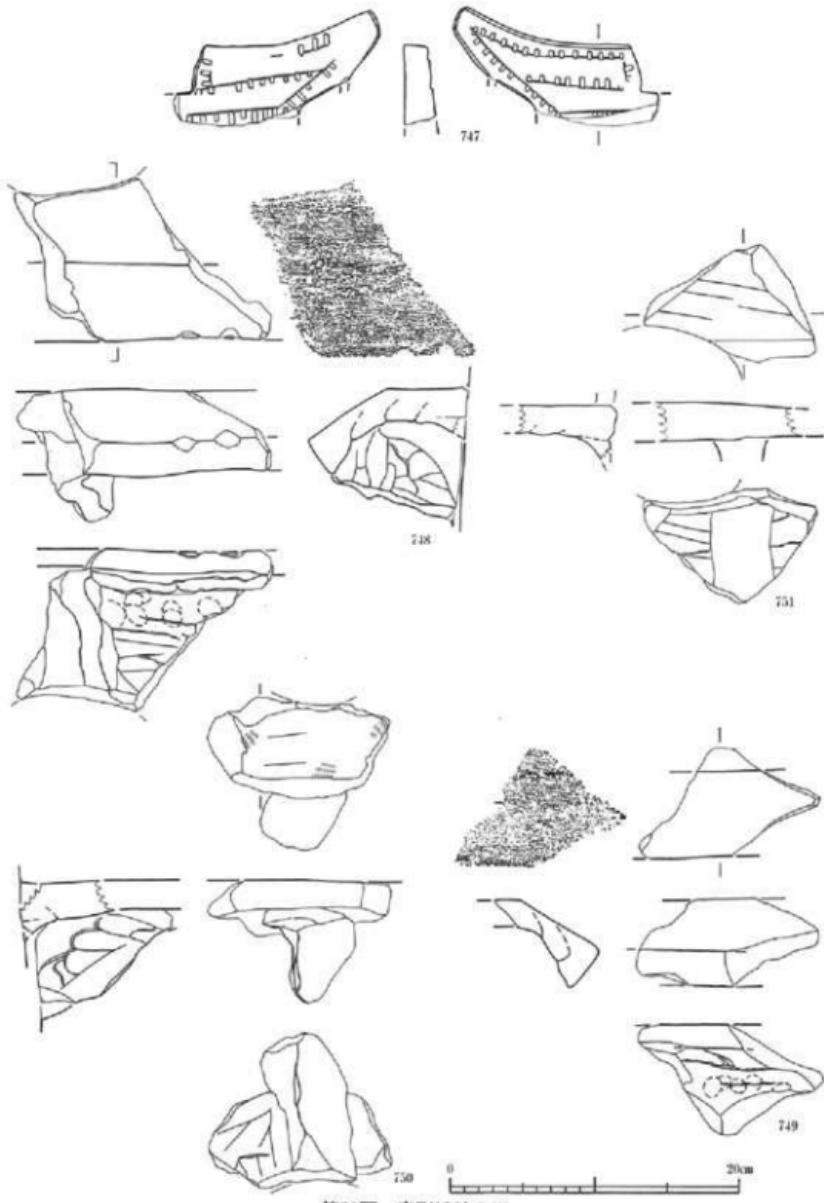
712



|||



第58図 家形埴輪7 (1)



第59図 家形埴輪 7(2)

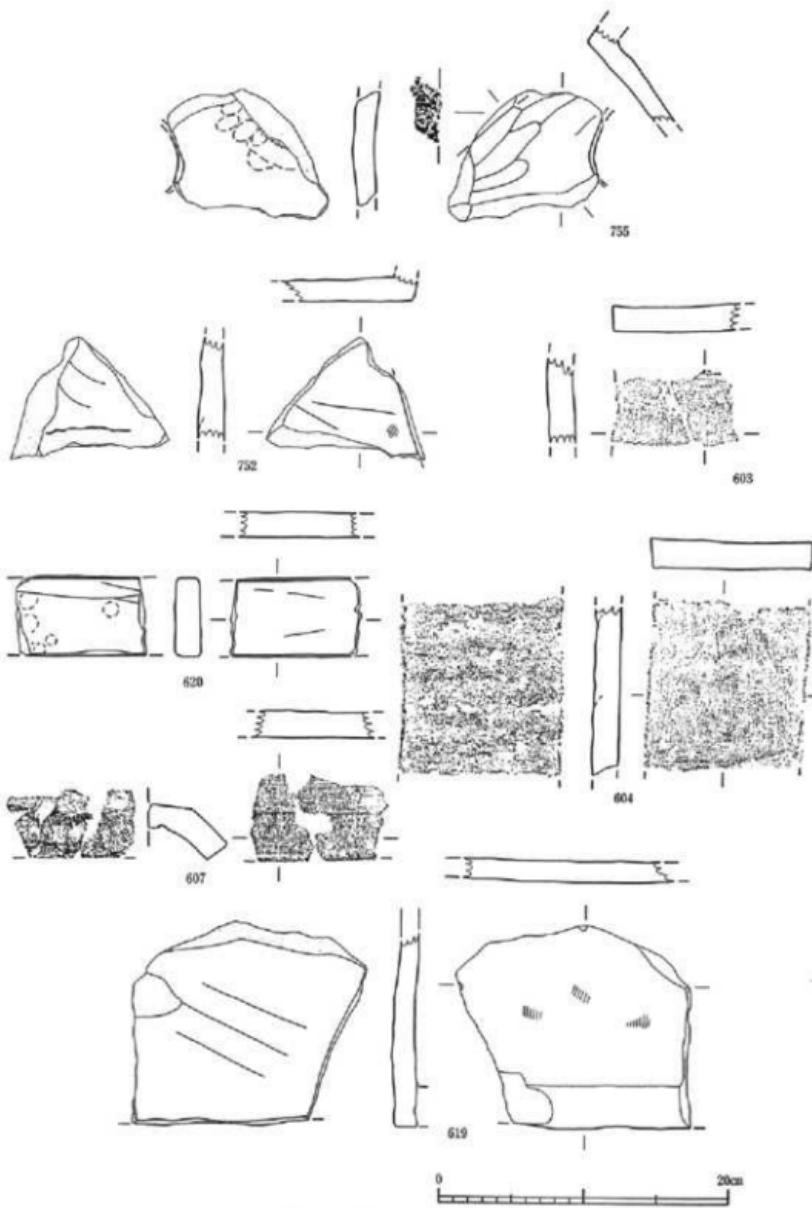
分が剥離した痕跡が、床の縁と平行の方向に伸びている。このことから、柱を両側から挟み込むようにして板状の粘土を接合して、床を作り出していることが判明した。またこの剥落部の床上面には、床の縁に平行する方向に剥落痕が残っており、柱に接する所まで伸びている。この部分の床の上に、柱に取り付く何らかの施設を表現していたものと考えられる。

帰属不明の家形埴輪（第60図、第20表、図版51）

これまで示した家形埴輪の、どの個体に帰属するか不明のもの、またそれらと別の個体になる可能性のあるものを第60図にまとめた。755は線刻で網代葺を表現する寄棟の家形埴輪の妻付近の破片で、妻側にスカシ孔を穿つ。したがって、家形埴輪3の反対の妻側に対応する可能性も高いが、家形埴輪3では、平側と妻側の合わさる隅の部分に剥落痕が観察され、ここになんらかの装飾を施している。しかしこの破片では、平側と妻側が直接合わさるだけとなっている点が異なるため、一応別に示した。752は板状のものがほぼ直角に曲がる部分の破片で、壁か屋根の隅の部分と思われる。620は壁の下端近くにめぐらされた鱗状の凸蒂であろう。残る破片は、いずれも壁体の部分と考えられる。

登録 番号	測定 番号	回数 番号	出土場所	部位	形態の特徴・記述等	製作方法の特徴・文様等	ハサメ		焼成	色調
							外面	内面		
663	60	51	日次1-4	壁	平坦な破片、左側に切込み 基厚：1.7-1.8	外面：縱方向ハサメ→横方向ハサメ→切込み 内面：ナデ？	14 b	— b	10VRC/6 明黄褐	
664	60	51	日次不明	壁	平坦な破片、左右に切込み 左の幅：11.2、右幅：1.8	外面：縱方向ハサメ→横方向ハサメ→切込み 内面：横方向ハサメ→切込み	14 b	— b	10VRC/6 薄棕	
665	60	51	日次1-4	突帯	壁の下端附近に付く突帯の突筋、壁から 3.0cmのところで下方に屈折、壁から端ま での幅：13.4、基厚：1.7-1.9	上端：横方向ハサメ 下端：ナデ	14 b	— b	10VRC/4 にぶい黄褐	
619	60	51	日次削トレンド	壁	平坦な破片、残存高13.5、下端から3.0cm の縦方向屈折、基厚1.4-1.6	外面：ハサメ 内面：側方向ナデ	14 b	— b	7.5VRC/8 黄褐	
620	60	51	日次1-3-4	壁	平坦な破片、上下の高さ：5.5 基厚：1.6-1.8	外面：ナデ 内面：ナデ	— —	— —	10VRC/6 明黄褐	
752	60	51	日次E-4	壁?	平坦な破片がほぼ直角に曲がる部分 基厚：1.4-1.6	外面：縦方向ハサメ→斜方向ナデ 内面：側方向ナデ	14 b	— —	10VRC/4 にぶい黄褐	
755	60	51	日次E-3	網模	寄棟の寄筋、寄側に円孔を穿つ(孔径：約 7mm)、基厚：1.3-1.6	蜜蝋外側：側方向ナデ→スカシ孔穿孔 平側外側：ナデ→側方向ナデを貫す 内面：ナデ・掛丸	— —	— —	10VRC/6 明黄褐	

第20表 帰属不明の家形埴輪観察表



第60図 帰属不明の家形埴輪

【衣蓋形埴輪】(第61・62図、第21表、図版52・53)

衣蓋形埴輪は1個体のみが確認されている。他の器財埴輪がいずれも複数個体存在し、特に甲冑形埴輪は5個体が存在することに比べて、衣蓋形埴輪が1個体のみというのは少なすぎるようと思われたため、特に入念に検討したが、確認し得た破片では1個体より多くなる可能性は非常に少ない。

第61図に示したのは、笠の上部に付き十字形に広がる、立ち飾りの部分の破片と考えられるものである。

623は立ち飾りの破片の中では、もっとも遺存状況が良いものである。通常、衣蓋形埴輪の立ち飾りは、U字形を呈して立ち上がるが、この資料では直線的に上方に伸び、その中央に長方形のスカシ孔を開けている。図に示したような傾きをなすものと推定したが、この場合高さは23.5cm程となる。下端には受け皿状の部分が付くものと考えられるが、残存する範囲では、接合痕などは確認できない。下端の外側は、本体よりさらに外に伸びており、刺状の突起が付くものと考えられる。表裏面には、輪郭に沿って2条の線刻が施されている。但し中央のスカシ孔の下側は、1条のみとなっている。628は片側の端部が、この2条の線刻から離れているものである。接合しないが、線刻と端部との間隔やハケメのつながり具合いから、図に示したような位置に対応すると考えられる。線刻から離れている方の端部が、本体の内側よりさらに内側になるため、ここにも刺状の突起が付くものと思われる。

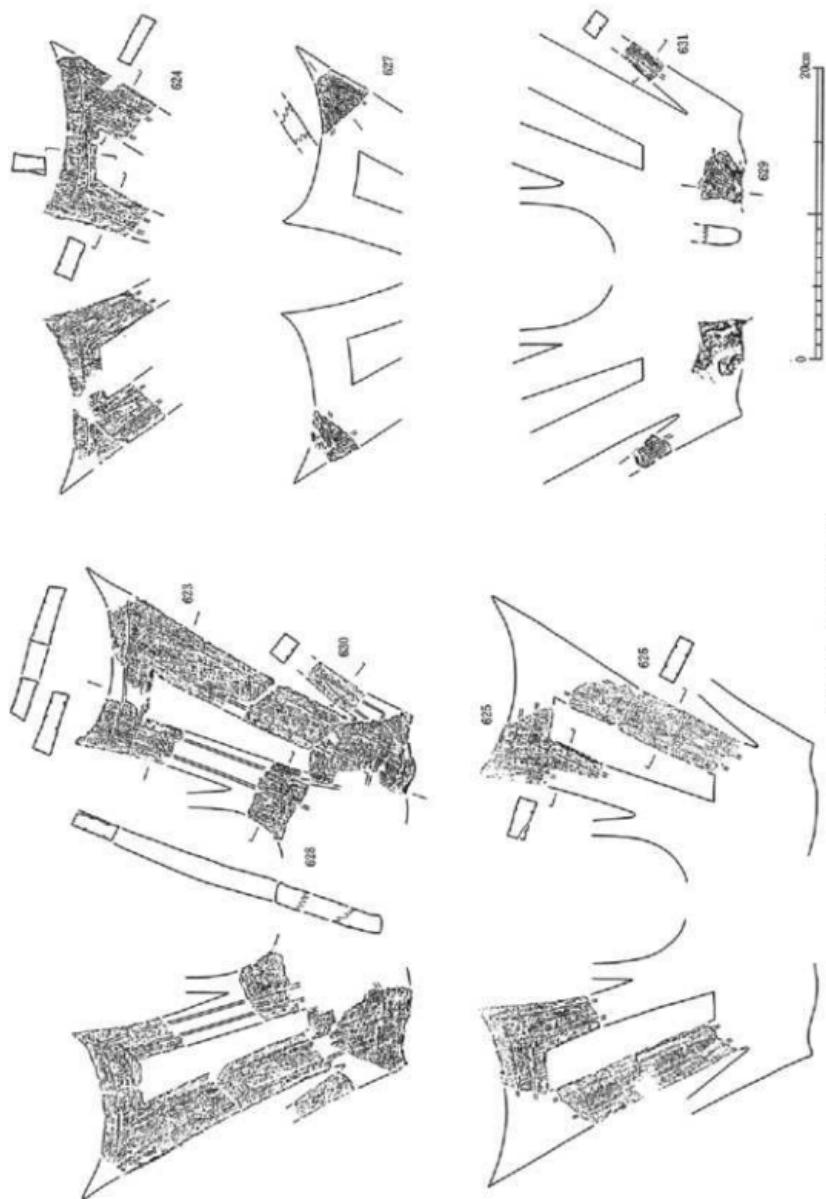
衣蓋形埴輪の立ち飾りの破片は、これらを含めて合計9点が確認された。いずれも先に示したものと同様の特徴を有し、さらに色調・焼成や調整の細部の特徴が一致する。これら9点の位置関係を検討したが、1個体分におさまり、複数に分かれる可能性はほとんどない。

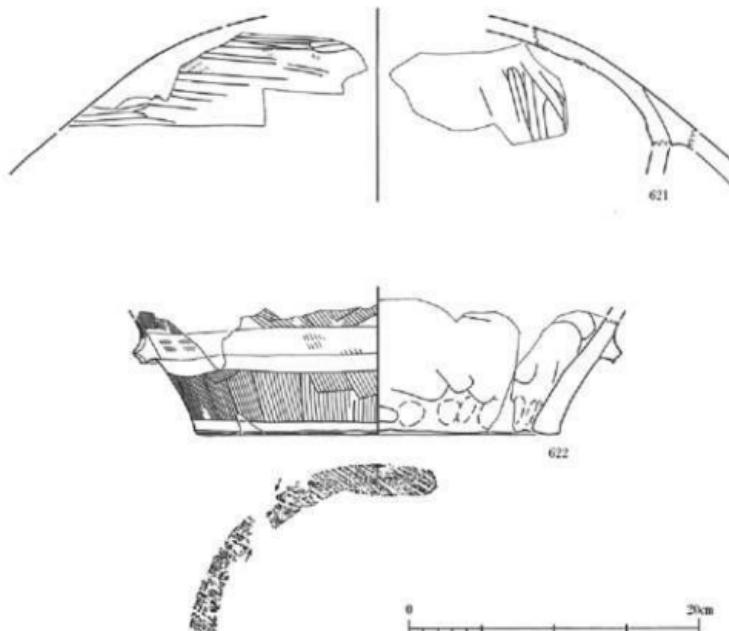
第62図に示したのは、笠部の破片と、その底部に相当すると考えられるものである。

621は円筒形の台部から笠部にかけての破片である。残存する部分が少ないため、復元した直径はあまり確実ではない。台部から笠部に屈曲して移る部分には、笠部の外側が剥落した部分があり、円筒形台部から笠部内側まで連続して巻き上げ、その後に笠部外側を貼付けていることが判る。この笠部外側が剥落した面にはハケメの痕跡が観察され、そのハケメは2cmあたり7本程の粗いものであり、次に示す底部付近の外面調整と共に通する。笠部の表面は、ハケメをナデ消しているだけで、貼付けや線刻などは加えられていない。これ以外にも接合できなかつた同様の箇所の破片がいくつか存在するが、いずれも図示したものと同様の特徴を持ち、貼付けや線刻は見られない。したがって、この衣蓋形埴輪の笠部には、装飾は全くなされていない可能性が高い。

622は底部付近の破片であり笠部とは接合しないが、色調・焼成が類似する。さらに、笠部の621には内面の表面が薄く広く剥離するという、本古墳出土埴輪の中では他に見られない特

第61図 衣蓋形埴輪(1)





第52図 衣蓋形埴輪(2)

登録番号	博物館番号	回収番号	出土場所	部位	形態の特徴・法華等	製作製出の特徴・文様等	ハケノ 外面 内面		施 成	色調
							b	b		
621	62	53	I-326208	室町～白 堺	台脚から笠頭に斜めにして作る部分 残存高：8.2、幅厚：1.0-1.2	外面：窓内向ハケ→笠頭取り付け→ナ 内面：ナデ	14 b	— a	b	7.5VR7/6 黒
622	62	55	I-326222	台脚	合併底部付足、底径：15.2、側厚： 1.0-1.3、残存高：2.3、底下段高：5.7、 内径：上幅：0.8、下幅：2.0、高：1.1	外面：チテハケ→凸面輪付(凸面下に沈 潤)→チテハケ→下端ヨコナギ 内面：下端近縁部えり→側→斜方向ナデ	5-7 a	— a	b	7.5VR7/6 黒
623	61	52	日次北トレンチ 上半	立ち脚⑨	平底、中央にスカシ孔 残存高：23.5、幅厚：1.0-1.3	裏裏面：ハケ→輪郭に沿って擦削	14 b2	— a	b	7.5VR7/6 黒
624	61	53	日次北トレンチ 上半	立ち脚⑩	平底、中央付近の腰片、中央にスカシ孔 残存高：8.5、幅厚：1.0-1.3	裏裏面：ハケ→輪郭に沿って擦削	14 b2	— a	b	7.5VR7/6 黒
625	61	52	日次北トレンチ 上半	立ち脚⑪	平底、上端付近の腰片、中央にスカシ孔 残存高：8.1、幅厚：1.2-1.3	裏裏面：ハケ→輪郭に沿って擦削	14 b2	— a	b	7.5VR7/6 黒
626	61	52	I-326209	立ち脚⑫	平底、中央のスカシ孔の外側の側刃 幅：2.8-3.4、幅厚：1.0-1.1	裏裏面：ハケ→輪郭に沿って擦削	14 b2	— a	b	7.5VR7/6 黒
627	61	53	I-次不確	立ち脚⑬	平底、先端の部分 幅厚：1.2	裏裏面：ハケ→輪郭に沿って擦削	14 b2	— a	b	7.5VR7/6 黒
628	61	53	日次Ⅰ-4	立ち脚⑭	平底、スカシ孔の内側の側刃 幅厚：1.1-1.2	裏裏面：ハケ→輪郭に沿って擦削	14 b2	— a	b	7.5VR7/6 黒
629	61	53	日次北トレンチ 上半	立ち脚⑮	平底、下端付近の腰片 幅厚：1.3	裏裏面：ハケ→輪郭	14 b2	— a	b	7.5VR7/6 黒
630	61	52	日次北トレンチ 上半	立ち脚⑯	平底、側刃の突起 幅：1.2-1.6、幅厚：1.2-1.3	裏裏面：ハケ→骨面のみ擦削	14 b2	— a	b	7.5VR8/6 浅黄
631	64	53	I-次不確	立ち脚⑰	平底、側刃の突起 幅：1.3-1.7、幅厚：1.1-1.2	裏裏面：ハケ→中心に1条擦削	14 b2	— a	b	7.5VR8/6 浅黄

第21表 衣蓋形埴輪観察表

微があり、この622にも同様の状況が見られることから、両者が同一個体であると判断した。底径25.2cmで大きく開き、底面から5.7cmの箇所に凸帯をめぐらしており、円筒埴輪の最下段とはかなり形態が異なる。外面調整はタテハケであるが、部分的に凸帯の上にハケメがかかる箇所があり、凸帯貼付後にもタテハケがさらに施されている。底面には、細い繊維状の圧痕が密接して同一方向に並んでおり、残存している部分全体にこれは確認できる。この点も円筒埴輪とは異なっている。

【盾形埴輪】

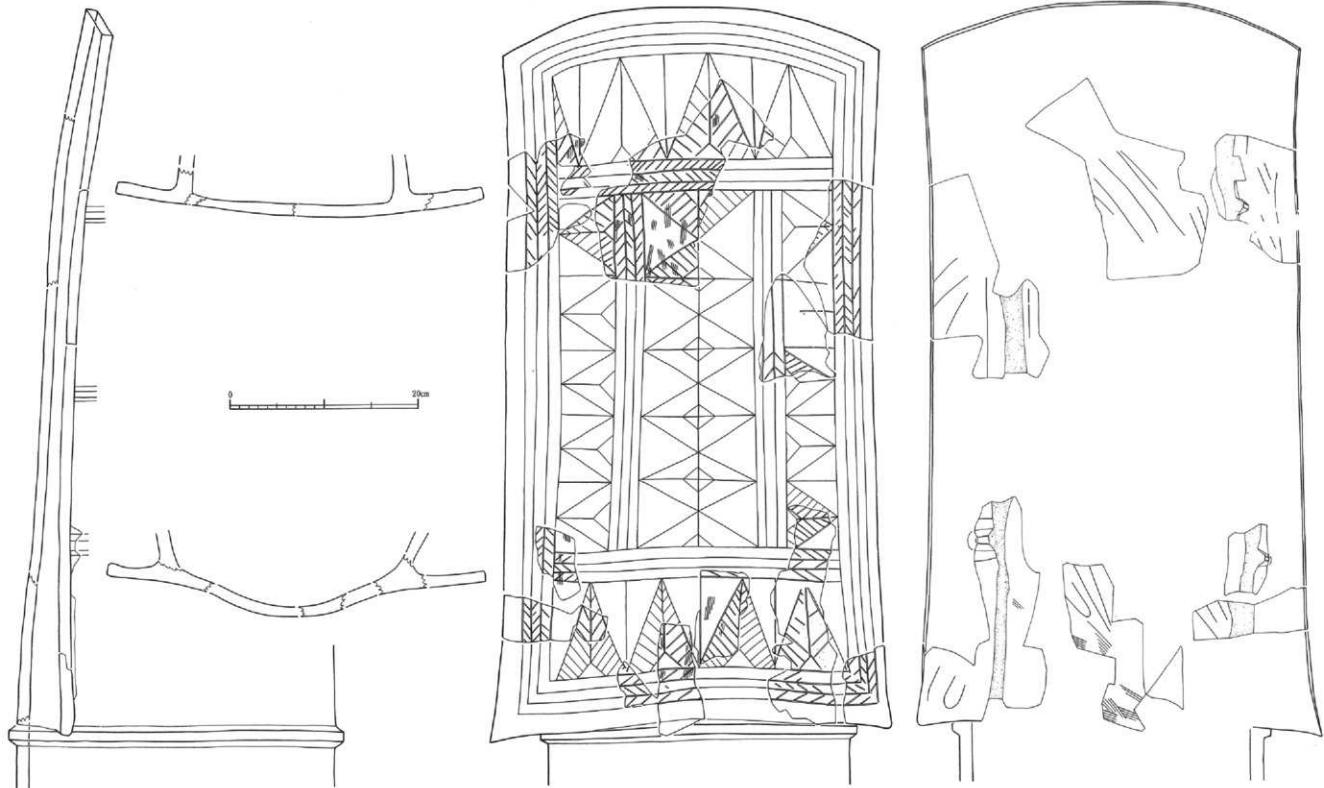
盾形埴輪は1個体が確認され、推定を加えて盾面全体を復元した。これとは別に、表面の線刻による文様が異なる、盾形埴輪の可能性が強い破片があることから、さらにもう1個体別の盾形埴輪が存在した可能性がある。

盾形埴輪1（第63図、第22表、図版54）

盾面の一部が遺存しているだけであるが、盾面の文様構成などから、第63図のように復元した。盾面は周囲を3重の綾杉文で縁どる中を、II字形にこれも3重の綾杉文で区画している。II字形の区画の上下には上向きの鋸歯文が充填されている。下側の鋸歯文は、盾面の湾曲の具合から、4単位と推定した。上側はこれに対し3単位半であるが、下側の幅との対応からこのように推定した。この上側の鋸歯文は、その左端のものより中央付近のものの方が高くなると考えられることから、盾面の上端は図のように弧状を描くものと推定している。II字形の区画の両側は、外向きの鋸歯文が施され、中央の区画の内部は鋸歯文の組合わせた菱形の文様が充填されている。この鋸歯文と菱形文は5単位が重ねられていると推定した。これは盾面の文様の構成と、背面の円筒部の凸帯の間隔がうまく対応するようにして、この高さを割り出した。このような復元の結果、盾面の高さ77.0cm、幅は下端で42.9cm、上端で40.2cmを計る。盾面下端付近での円筒部の径は、盾面の残存する部分の湾曲から37cm程になると推定される。盾面より下の円筒形の台部の高さを、後に示す鞠形埴輪などと同様と考えると、全体の高さは106cm程になると推定される。盾面の下には凸帯の剥落痕がめぐり、背後の円筒部の凸帯は、

登録番号	回収年	回収地	出土場所	部位	形態の特徴・法量等	製作技術の特徴・文様等	ハケメ		色調
							外側	内面	
622	63	54	日光北トレンド 上手	盾面	円筒に斜状の粘土層を付け面額を表す 高：27.0、下端幅：42.9 上端幅：36.2	表面：前方斜面ハケーテー織目 鋸歯文で縁どりII字形に綾杉文で区画 内側に鋸歯文・菱形文を充填 横状面裏面：ナダ 外側：フリルバー・凸筋模様 内面：前方斜面ハケーテー織目ナダ	13 b	— —	c 7.5% 透青白

第22表 盾形埴輪1観察表



第63図 盾形牆輪 1 (632)

間隔が判明する段では、16cmの高さがあり、この点から3条の凸帯が入るものと考えられる。

凸帯は、盾面背後の接合部しか残存しておらず、形態や法量は不明である。

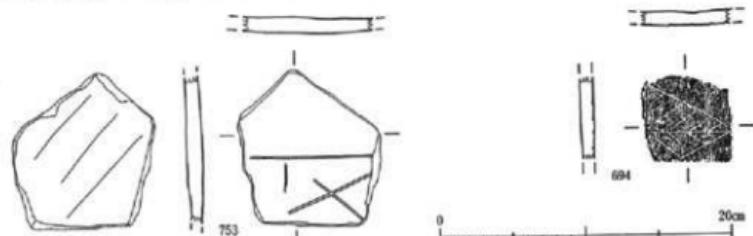
背面の円筒部はほとんど残存していないが、下半部では、円筒形に粘土紐を巻き上げた後に、その両側に鱗状に粘土板を付け盾面を作出している。ところが、残存する最上位の凸帯より上側では、盾面と円筒部の接合面に剝離面が観察され、この部位では盾面を製作した後に、背後の円筒部を付けている。したがって、最上位の凸帯より下の部分は粘土紐巻き上げでまず円筒形を作り、その両側と上部に粘土板をつけ盾面を作りし、さらに背後の円筒の上端に円筒部最上段を付加したものと推定される。

円筒部の外面調整は、残存する部分がほとんどなく明確ではない。盾面の表面は縦方向のハケメをナデ消してから線刻が施されているが、ハケメはわずかに残存する部分で観察すると、細かなハケメbが使用されている。内面は下半が斜方向ハケの後、斜方向のナデ調整で、上半は斜方向ナデのみが施されている。下半のハケメは粗いハケメaである。盾面の両側に貼付けられた部分の裏側はナデが施されている。

その他の盾形埴輪破片（第64図、第23表、図版59）

形態と表面の文様から盾形埴輪の破片と考えたものである。

753は線刻の状況から、盾形埴輪1と同様の文様を表した盾面の破片と考えられるが、表面の保存状況が悪いこともあり、盾形埴輪1であるとするとどの部分に対応するか判断しかねたため、一応別に示した。694は盾面中央の菱形の文様を線刻で表している部分であると考えられるが、盾形埴輪1では菱形の中心を通る十字の線刻の交点に、さらに小さな菱形文が加えられるのに対し、この破片ではそれが見られない点から、別個体と判断した。



第64図 その他の盾形埴輪

登録 番号	調査 番号	回収 番号	出土場所	部位	形態の特徴・法量等	製作技法の特徴・文様等	ハケメ		色調
							外面	内面	
694	64	59	1次 N-230	盾面	扁平な破片、断面：0.9	外面：不明、線刻で菱形文を表す 内面：斜方向ナデ	—	—	c 7.5YRC/6 相
753	64	59	1次 E-4	盾面	扁平な破片、断面：0.8-1.1	外面：ナデー線刻で菱形文を表す 内面：不明	—	—	c 7.5YRC/6 相

第23表 その他の盾形埴輪観察表

【輪形埴輪】

輪形埴輪は2個体が確認された。さらに、これらとは別個体の輪形埴輪の可能性が強い破片が存在する。

輪形埴輪1（第65～68図、第24表、図版55～57）

II次調査の際、東南部の墳墓付近のC-4グリッドを中心に、比較的まとまって出土したもので、ほぼ全体の形状が判明した唯一の埴輪である。遺存状況は上部ほど良い傾向があり、逆に円筒形の台部の遺存状況は悪く、特に最下段はごくわずかがかろうじて遺存しているだけである。

円筒形の台の上に輪を乗せるもので、上端は復元であるが、器高88.1cmを計る。輪部は方形の錐状の背板部と筒状の矢筒部からなる。

・円筒部は、横断面形が下部は正円形であるが、上部に行くにつれて正面を平坦に作ることから、半円形になっていく。凸帯は5条からなり、下部の2段が輪の下に付く台であり、3段目から上は輪の背後に取り付く。輪部の下に付く台部では、第1段の高さが16cm程、第2段が13cm程で、円筒埴輪・朝顔形埴輪の第1段と中間段の高さに等しい。第3段目より上は、凸帯が水平でないこともあり、ばらつきが大きい。第5凸帯のすぐ上側には明瞭な接合痕があり、ここより上側では、背板と円筒部の間に接合痕が観察される。第5凸帯より下側では、背板は円筒部の製作の後に、その脇に貼付けられており、最上段のみが背板の製作の後に付け加えられていることが判る。外面調整はタテハケのみで、ハケメは粗いaが使われており、背板と矢筒部には細かいハケメbが使われていることと対照的である。第1段の下端付近には、タテハケ後部分的にヨコナデが施されている。凸帯は第1凸帯のみが全周し、第2凸帯より上では輪の背後にのみ付けられている。第2凸帯は、ちょうど背板の下端に位置する。凸帯は第1から第3凸帯のみが残っているが、いずれもヨコナデが十分施されず、そのため粘土紐の形状を残している。凸帯の剥落部にはナデ状の浅い沈線が観察される。また第1段の上部にもナデによる浅い沈線がめぐらしている。スカシ孔は正面を除き、第2段から第5段まで、直交する位置に互い違いに開けているが、第2段では3箇所に穿孔し、その内2箇所は後にふさいでいる。

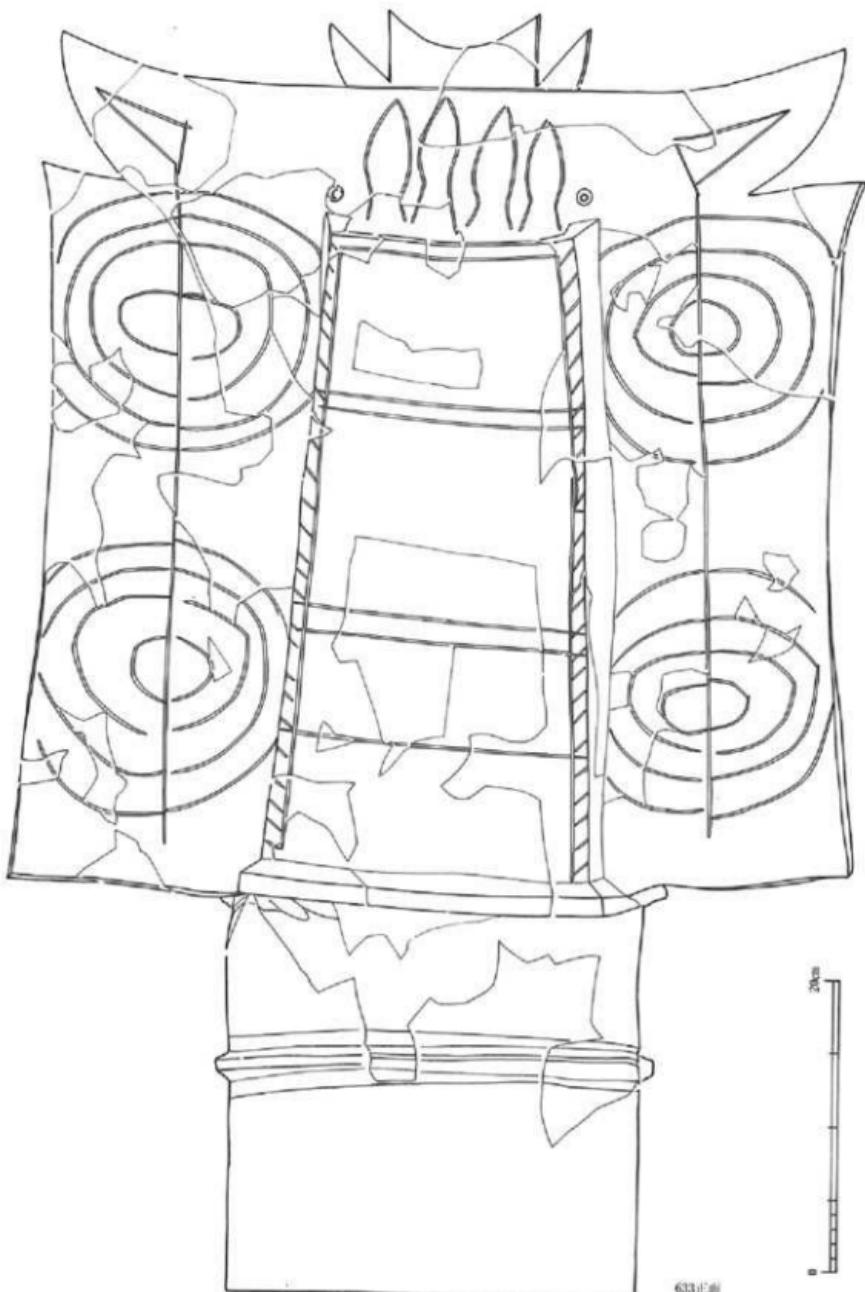
背板はほぼ方形で、左右の上端には角状の突起を作り出している。中央の上端にも突起が付く。この内、中央の幅の広いU字状の突起は、先端が残存していないが、残っている辺の伸びる方向から、図に示したような形になると推定した。その両側には幅の狭い突起が付くが、これは根本付近がわずかに残っているのみで、復元した形に特に根拠は無い。矢筒部の左右の背板には、上下2段に4重の同心円文が配されている。さらに、これらの同心円文の中央を、沈線が上下に貫いている。この上下に貫く沈線の上側には、三角形の文様が、角状の突起の輪郭

に沿うように描かれている。矢筒部の上にあたる部分には、沈線で4本の矢が表現されている。背板と次に後に述べる矢筒部には、文様は沈線で表されるだけで、凸帯などの貼付けは見られず、その痕跡もない。また矢筒部の右側の刃の上側の背板には、小孔があけられており、遺存していないが対応する左側にも穿孔されていたものと考えられる。

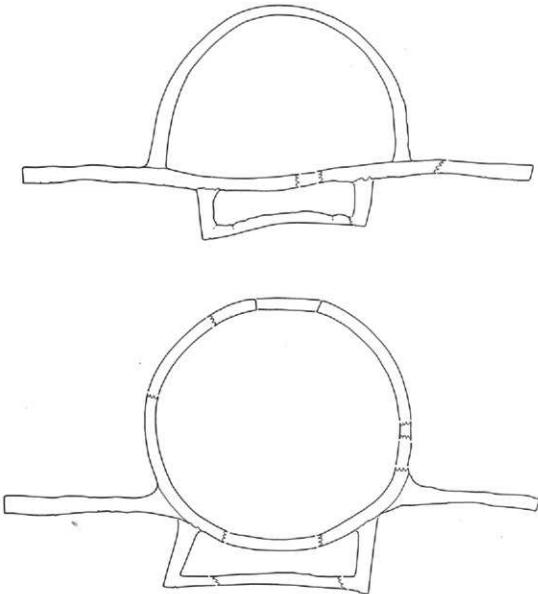
矢筒部は背板の中央に付き、上端より下端の幅が広い、縦長の台形を呈し、下端は1段張り出す。円筒部に背板を取り付け、ちょうど盾形埴輪のようにした後に、その前面に四字状に粘土板を付けて、箱形の矢筒部を表す。矢筒部の上側と下側はふさがれない。矢筒部が付けられている部分の背板には、縦方向に沈線が密接して刻まれているのが剥落面で確認され、接合を良くするためのものと考えられる。背板との接合部は、外面はその後のハケメ調整のためはつきりとしないが、内面は強くナデ付けられている。したがって、矢筒部の側辺を背板に接合した段階では、矢筒部の前面はふさがれていないことになる。内面のナデは側辺では全体に施されているが、前面の部分の内面では、調整は行われず粘土紐の接合痕を多く残している。以上のことから、矢筒部の製作にあたっては、まず左右の側辺を接合した後、粘土紐を重ね合わせて板状にした前面部分を側辺に取り付けたものと考えられる。前面の外側は、その左右と上側の輪郭に沿って沈線で縁取られ、その間に斜線を連ねている。但し、上側では沈線のみとなっ

登録 番号	標目 番号	回数 番号	出土場所	部位	形態の特徴・文様等	製作技術の特徴・文様等	ハケメ		成 形 度	色調	
							外側	内側			
633	63~ 67	3~6 7	日KU-4	内筒部	内筒形の台形の上に方形の背板と矢筒部を乗せる。底面：48.1	外側：テテハケメ背板剥け・凸帯貼付け・第6回脱脂ロースカル孔埋孔 内側：斜方向ナデメ斜方向ハケ	7~9 al	7 a	b	7.5YR1/4 において	
				下端は内筒形で上面に行くに従い半円形 底径：28.0、面厚：1.0~1.6 2段目まで側面の下の台 3~6段目は側面の背板に付く 段の高さ	凸形（上から） 6 7.0~18.0 上端 下端 高 底径 5 12.0~14.0 — 1.9 — — 4 12.0~12.0 — 1.9 — — 3 10.5~11.5 0.5 1.9 1.0 2 13.0~13.5 0.4 1.6 1.2 1 15.5~16.0 0.5 1.8 0.9 内筒のスカリをあける スカリ径：幅：6.4~7.5、高：6.7~6.8						
				背板部	内筒部の左右と上面に横状の粘土紐を付ける形の背板を表す 最大高：40.2、下端での左右幅：50.0 上端の左右に角状の突起 上端中央に横状の突起 矢筒部の左右の刃の上に小孔埋孔 小孔径：0.6 開口：1.2~2.0	表面と側面：ナデハケ 表面に織縫で文様を表す =織縫=	14 b2				
				矢筒部	背板の表面に横形に粘土紐を貼付けてやや白帯の矢頭部を表す 最大高：48.1、下端での左右幅：25.1 上端での左右幅：16.7 厚さ：1.0~1.7	矢筒の側面に沿って沈線で縫取り間に斜 縫を連ねる 内側は1~2条の状態で4時に区分される	14 b2	—			

第24表 矢筒形埴輪1観察表



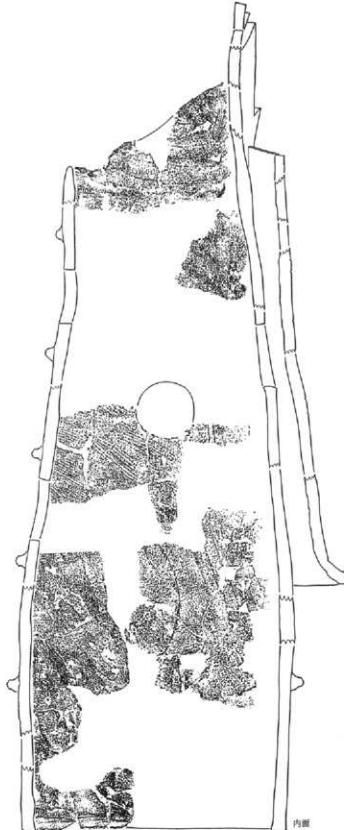
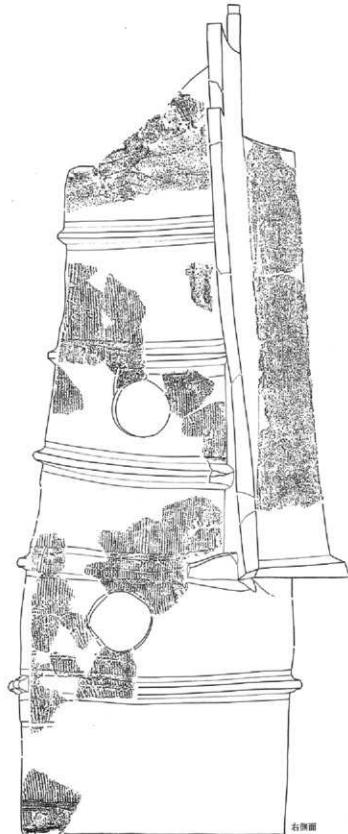
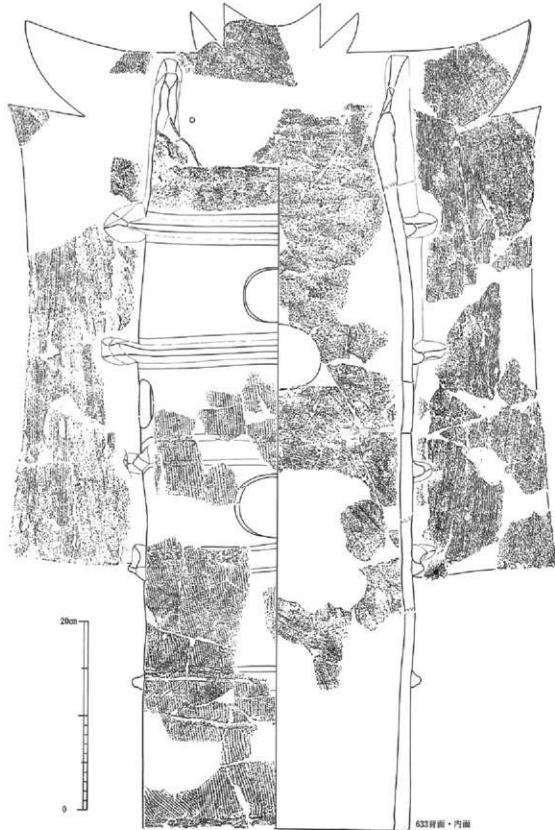
第65図 鞭形埴輪 1(1)



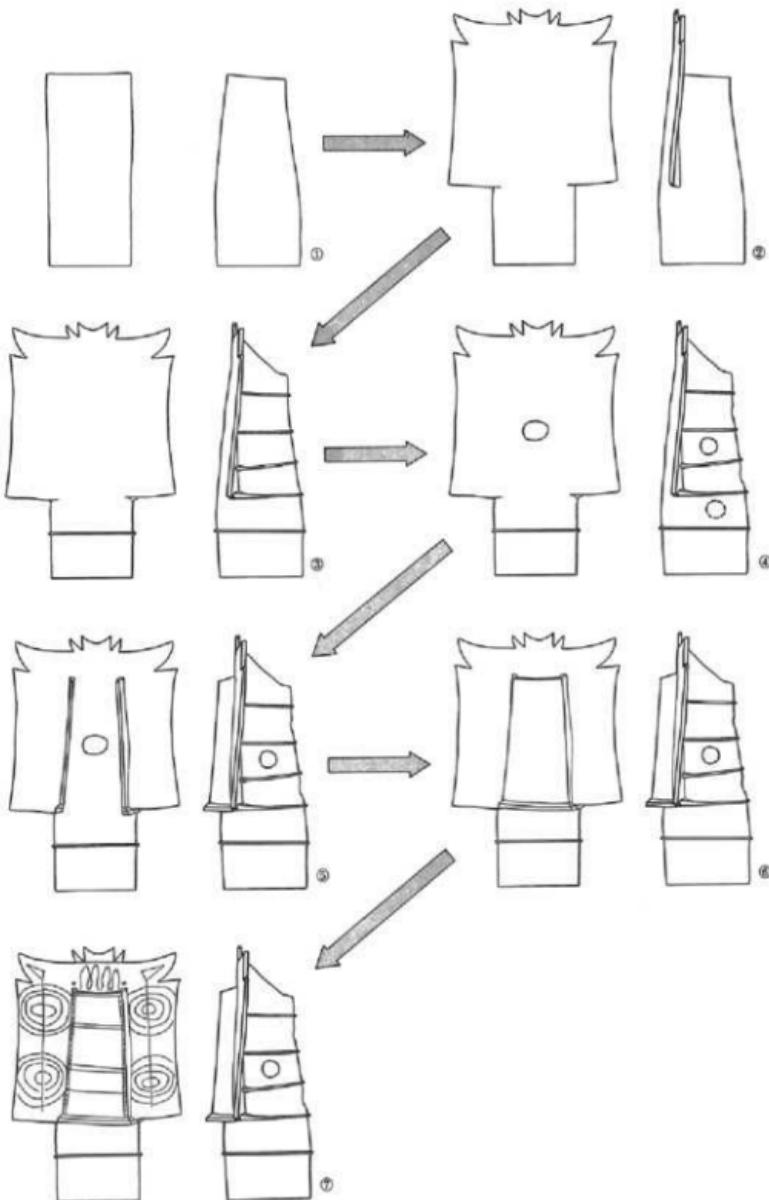
0
20cm



第66図 鶴形埴輪1(2)



第67図 菱形埴輪 1(3)



第68図 車形埴輪の製作方法

ている。この縁取られた内部は、上から 2 条・2 条・1 条という 3 組の沈線で 4 段に区切られているのみで、それ以外の直弧文などの文様は施されない。区切られた各段の高さも一定しない。矢筒部の上面と左右の側面には、文様は施されていない。

以上の観察から、鞠形埴輪 1 の製作方法を復元すると、以下の通りとなる（第68図）。なお次に示す鞠形埴輪 2 も、この鞠形埴輪 1 と基本的に共通する特徴を有しており、同様の製作方法が考えられる。

①小工程を繰り返して、円筒部を第 5 段目の高さまで製作する。この際、将来鞠の正面になる部分は、上に行くにしたがって平坦に作り、そのため上部の横断面形は半円形になる。内外面の調整には、粗いハケメ a が使われる。

②円筒部の両脇と上側に、鋸状の粘土板を貼付け、背板を作り出す。

③円筒部に凸帯を貼付けるとともに、円筒部の第 6 段目を付ける。凸帯の貼付けと、第 6 段目の製作の前後関係は、この部分が残っていないため不明である。凸帯は、第 1 凸帯のみが全周し、第 2 から第 5 凸帯は背板の裏にのみ付けられる。

④円筒部に円形のスカシ孔を開ける。第 2 段は左右の側面と正面に穿孔するが、左側面と正面のスカシ孔は後であさがれる。第 3 段と第 5 段は背面に、第 4 段は左右の側面に穿孔する。矢筒部であさがれる正面にも 1 箇所穿孔する。これらの内、第 4 段の右側面のスカシ孔の穿孔の際に付いたと思われる沈線が、凸帯貼付けに伴うヨコナデを切っていることから、穿孔がこの段階であると推定した。

⑤背板の前面に沈線で刻みをいれ、そこに矢筒部の左右の側辺を取り付ける。

⑥取り付けられた矢筒部の左右の辺に、粘土板を貼付けて、矢筒部前面とする。

⑦背板の表裏面と矢筒部の表面を細かいハケメ b で調整し、線刻で文様を表す。矢筒部の左右の側辺の上側の小孔も、この段階に穿孔されたものと考えられる。

鞠形埴輪 2 (第69・70図、第25表、図版58・59)

II 次調査で出土している。矢筒部、左側の背板の下半、円筒部の一部分が残存しているだけであるが、基本的な法量・形態や製作方法は鞠形埴輪 1 と変わらない。異なる点は、矢筒部の細かな表現と、背板の各所に切込みを施す点である。

円筒部は鞠形埴輪 1 と特に変わることはない。スカシ孔の位置関係も基本的に同じであるが、第 2 段目の左側のスカシ孔はあさがれてはいない。内外面の調整に使われているハケメも粗い a で、背板と矢筒部では細かい b であることも同様である。凸帯も同じくナデがきちんと施されず、粘土紐の形状を残すものである。

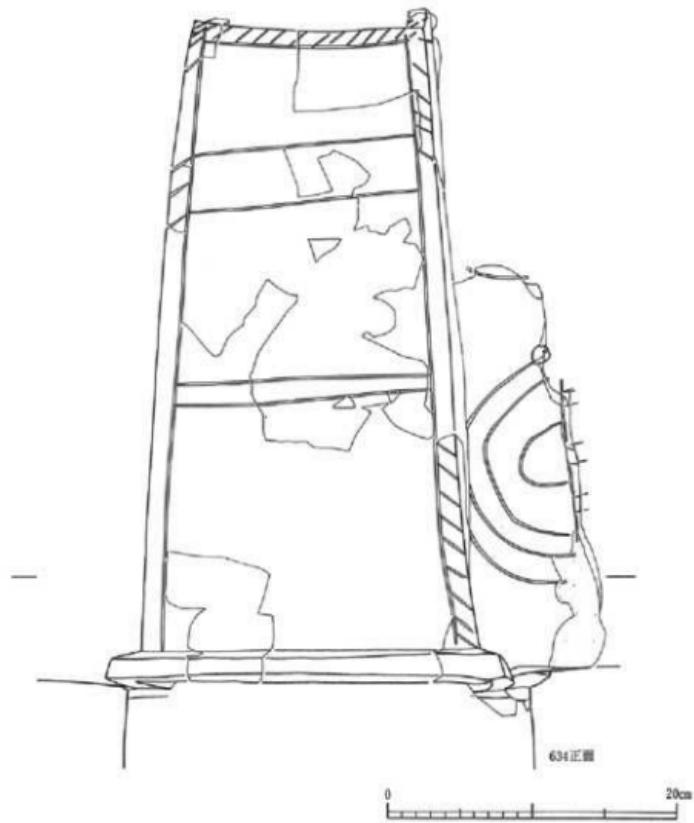
背板は鞠形埴輪 1 同様に、円筒部の両脇に鋸状の粘土板を貼付けて作り出す。背板には線

刻で同心円文が描かれており、その中央を沈線が上下に貫いている。残存しているのは下端近くの内側半分であるが、その上に弧状の沈線が1本残っており、同心円文は上下2段に配されていたものと判断される。下側の同心円文は4重の沈線からなる。この下側の同心円文を上下に貫く沈線に沿って、3箇所の切込みが見られる。ひとつは同心円文の中心である。さらに内側から1本目と2本目の沈線の間に、上下2箇所に切込みを施す。また同心円文の内側から3本目の上側の沈線が、上下に伸びる沈線に接する付近に小孔を穿孔している。

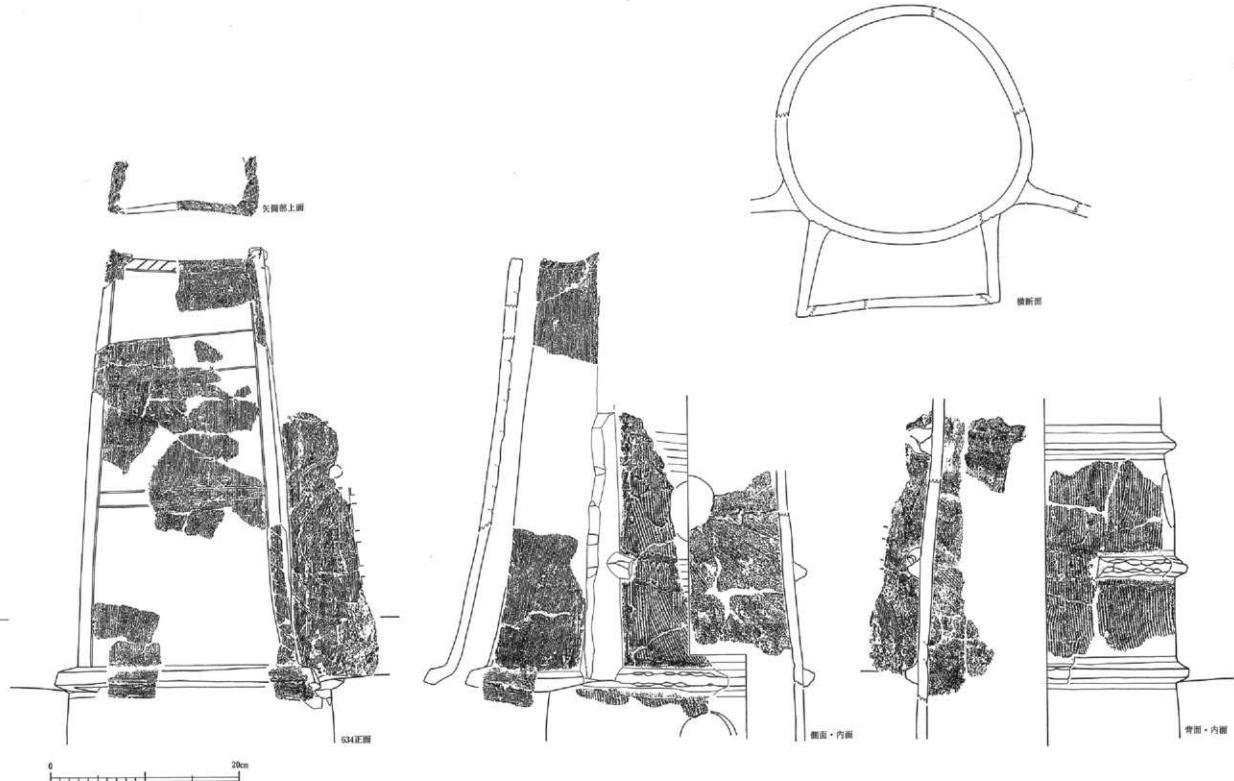
矢筒部も鞠形埴輪1と同様の形態、製作方法によって作られている。ただ、表面の線刻による文様が若干異なっている。矢筒部の前面は、左右と上側の輪郭に沿って沈線で縁取り、その間に斜線を連ねるが、鞠形埴輪1では斜線が充填されるのは左右の辺のみであったが、鞠形埴輪2では左右と上側の辺にも施されている。また矢筒の上面にも斜線が刻まれている。前面の内部は、鞠形埴輪1と同様に横方向の沈線で区切っており、残存する部分では2条一組の沈線が2組認められる。このうち上側の沈線は、2本の間隔が広い。この2組の沈線のさらに下に、鞠形埴輪1と同様にもう1本沈線が施され、4段に区切られるのかどうかは、欠損があり不明である。

登録番号	博物館番号	出土地点	部位	断面の特徴・法則等	製作技術の特徴・文様等	ハケメ		色調
						外側	内側	
804 199~ 20	58~ 59	1次	内筒部	内筒部に背板と矢筒を付ける 矢筒高さ: 28.8	外面: ダラハケ→有輪鉛付け→△部削除 付けすきし孔埋孔	7	7	b SYR17/4 に、53→無
			上に行くに貫く半円形 下端での径: 28.4、面厚: 1.0~1.5 面の高さ 第3段: 11.5、第4段: 12.5 第2凸唇 上幅: 0.4、下幅: 2.1 高: 1.0、形態: 第2凸唇 上幅: 0.1、下幅: 2.0 高: 1.2、形態: 内筒のスカラ孔をあける	内面: 斜方向ハケ	a1	a2		
			背板部	内筒部に埋込部の粘土板を付ける。方形か 接着面: 27.5、面厚: 1.3~1.5 上下の沈線にあわせて幅1cm程の小さな 切込みを入れる 同心円文の上に小孔埋孔、面厚: 1.2 背板の表面に、裏面に粘土板を付けやすむ 形の突起部を設す 復元高: 47.3、下端での左右幅: 29.1 上端での左右幅: 15.9 面厚: 1.0~2.2	表面面ととも「ナデ」ハケ 表面に塗刷で文様を表す =施刻= 3~4重の同心円文を上下2段に配し れるを中心を沈線が上下に貫く 内面: 粘土板の「アーチ型」	14	b2	
			矢筒部		外側: 粘土板の「アーチ型」 内面: ナデ、粘土板表面多く残る =施刻= 前脚の輪郭に沿って底端で縫取り間に溝 をやさねる 内部は2条の沈線で区画 上端にも施刻を複数も	14 b2	—	

第25表 鞠形埴輪2観察表



第69図 鞆形埴輪 2(1)

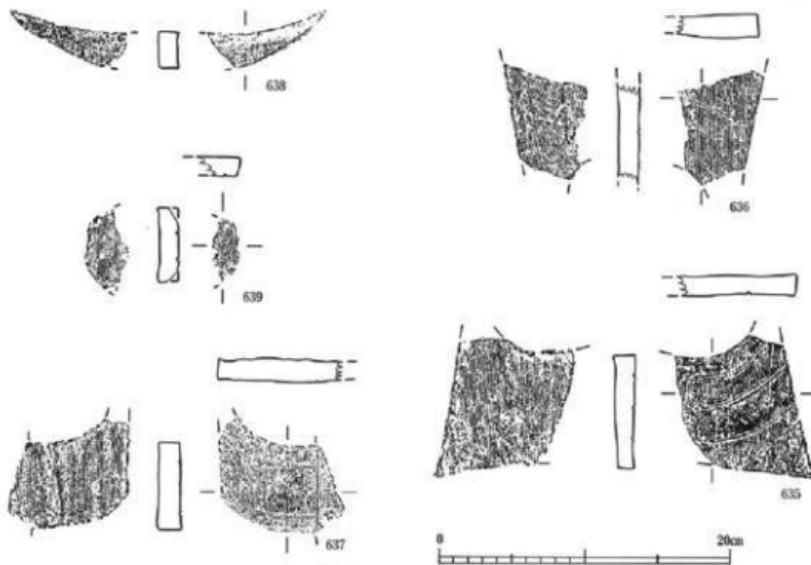


第70図 翼形埴輪2(2)

その他の輪形埴輪片（第71図、第26表、図版59）

形態と表面の文様から輪形埴輪の背板の破片の可能性が考えられるものである。いずれも平坦な板状の破片で、色調・焼成の点で類似し、同一個体の可能性がある。

635・636は表面に3重の同心円文を線刻で描き、さらにその内側を同心円状に切り抜くものである。これらは、輪形埴輪1・2の背板に施された同心円文と類似し、その最も内側を切り抜いたものの可能性が考えられる。その場合、635は背板左側の下端とみなされ、輪形埴輪1ではこの部分が残存しており、輪形埴輪2でも残っている部分の状況からこれは該当しない。したがって、3個体目の輪形埴輪が存在する可能性がある。残る破片は、この2点との類似性



第71図 その他の輪形埴輪

登録番号	団体番号	出土場所	部位	影響の特徴・法量等	製作技法の特徴・文様等	ハケメ		焼成	色調
						外観	内面		
635	71 59	1次不明	背板	平底、背板の下端附近、同心円文の中央に円孔(孔径:約1.0) 縫隙:1.1-1.4	表面:東方内ハケーナデー・縫隙で同心円文を表す・円孔穿孔 裏面:東方内ハケー円孔穿孔	14 b2	14 b2	a	7.5VR3/6 便
636	71 59	1次不明	背板	平底、同心円文の中央に内丸(孔径:約1.0)、厚さ:1.3-1.6	表面:東方内ハケー縫隙で同心円文を表す・円孔穿孔 裏面:東方内ハケー円孔穿孔	14 b2	14 b2	a	7.5VR3/4 にSVA便
637	71 59	1次不明	背板	平底、背板上端の角状の突起 縫隙:1.3-1.6	表面:東方内ハケーナデー・縫隙 裏面:オーバー窓内ハケ	14 b2	14 b2	a	7.5VR3/6 便
638	71 59	1次不明	背板	平底、背板上端の側面の突出部 上下最大幅:2.5、縫隙:1.2-1.4	表面:ハケーナデ 裏面:ハケ	14 b2	14 b2	a	7.5VR6/4 にSVA便
639	71 59	1次1-4	背板	平底、円形の縫隙 縫隙:1.3	表面:ハケー縫隙に沿って縫隙 裏面:ハケ	13 b2	13 b2	a	7.5VR7/6 便

第26表 その他の輪形埴輪観察表

からここに含めたもので、形態や文様の点から見て、甲冑形埴輪1・2には該当する部分は無い。637は角状の突起のような形態をしている。その輪郭に沿って、同心円が3条線刻で表され、それを上下に貫く沈線が描かれている。638は鋭く伸びる刺状の突起である。背板上側の突起になるものかも知れない。639は円形の輪郭をもつ小破片で、輪郭に沿って沈線が施されている。

【甲冑形埴輪】

甲冑形埴輪は5個体が確認できた。その他にも帰属を明確にし得なかった破片が多数あり、さらに個体数が増加する可能性も残る。いずれも円筒形の台部から短甲・頸甲・肩甲・冑までを一連に作ったものと考えられる。これらの甲冑形埴輪の内、短甲を表した部分は、全て三角板を合わせた短甲を表現している。ただしいずれの個体でも、革縫か紙留かの表現は省略されて無い。冑の部分では、眉庇付冑を表すものがある他、三角板を合わせた冑を表現した破片があり、衝角付冑を表したものもあると考えられる。

甲冑形埴輪1（第72～75図、第27表、図版60・61）

II次調査の際、東南部の墳丘付近のC-4グリッドを中心に、比較的まとまって出土したものである。台部から短甲の一部、さらに肩甲・頸甲から眉庇付冑の部分が残存している。

台部は最上段がわずかに残っているだけである。台部から短甲部にかけては連続して製作されており、草摺はその後に貼付けられている。外面調整はタテハケで、草摺の剥落部分には斜方向の沈線が連続して刻まれている。

短甲部は背面の台部から続く破片、同じく背面の頸甲・肩甲に続く破片、前洞から脇の部分と推定した2点の破片を、弯曲の具合い、外面の線刻や内面調整の状況から位置を推定して合わせて復元したもので、それらが接合するわけではない。ただ、この甲冑形埴輪1は、色調が同様の焼成の状況の甲冑形埴輪の中ではやや明るいことに加えて、短甲部の内面調整にハケメを施している。他の甲冑形埴輪がナデのみであることから、これらの破片は甲冑形埴輪1に帰属するものと判断した。外面はハケメ調整をした後、ナデを施し、線刻を加えている。草摺と頸甲・肩甲の剥落部ではハケメのみが観察されることから、ナデはこれらを貼付けた後に施されていることが判る。頸甲・肩甲もハケメの後ナデを施しており、短甲部と頸甲・肩甲部の外面調整は、甲冑形埴輪5を除く全ての甲冑形埴輪に共通する。線刻によって、長側第2段に相当する帶金をはさんで三角板が向かい合うように表現されている。豊上第3段に相当すると考えられる帶金まで表現されており、それより上は頸甲・肩甲に隠される形となっている。他の

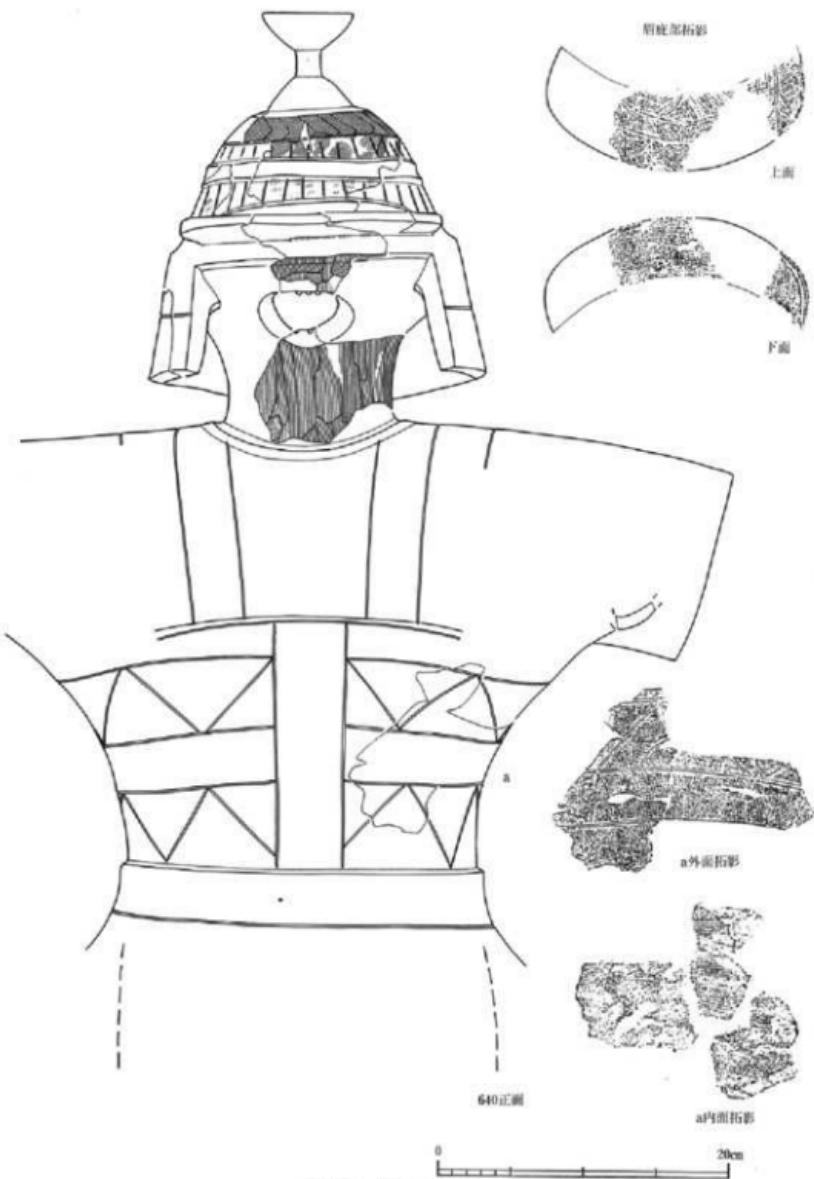
甲冑形埴輪においても、短甲部はこの位置までを表現している。長側第3段の下は直接草摺に続き、第4段の裙板は表現されていない。残存部が少ないが、脇に開閉装置の表現は加えられていないものと考えられる。よって、胴一連の短甲を表したものと思われる。その他の甲冑形埴輪でも、脇に開閉装置の表現が施されているものはない。

草摺はごくわずかしか残っていない。台部から短甲部を製作した後に貼付けられており、上端から3.9cmのところに横方向の沈線が施されている。短甲部に接する部分は1段、段が付き、上端に格子状の線刻を施している。

頭甲・肩甲は短甲の上部の本体を作成した後に、板状の粘土を貼重ねて作出している。外面にはほぼ平行する沈線を施して、頭甲・肩甲を表す。頭甲の頭部と接する部分には、頭甲・肩甲の貼付けの分の高さの段が付く。頭甲の上端は、わずかに陸帶状に突出しており、襟を示したものかと考えられる。頭甲・肩甲部の内面は、ほぼ同じ高さから横方向のナデとなっており、短甲部がハケメであることから大きく変わる。この付近で小工程が分かれるものと考えられる。肩口付近は上下方向にナデが施され、粘土紐の接合痕も上下に走ることから、肩口付近は左右に伸ばす形で巻き付けられたものと判断される。よって、頭甲・肩甲が貼重ねられる短甲の上

登録番号	撰定番号	出土地所	部位	影響の特徴・法算等	製作方法の特徴・文様等	ハーメ		
						外観	内面	地質
640	72- 74	60- 61	日次C-4	骨・頭甲・肩甲・草摺を一起に作る。 現存高：72.8		H1-H3 H3	H1-H3 H3	a 5YR6/6
			台部	最上部の一部のみ残存	外觀：テテハテー草摺組合時のヨコナデ			
			頭甲	頭甲：1.5 三角形切欠	内面：斜→斜の方向ナデ			
			肩甲	肩甲部高：17.3 肩甲部下端の左右の幅：23.9 肩甲部下端の側面の幅：25.2 頭甲：1.2-1.5	外觀：ハーメターハーメ 内面：斜→横方向のナデ部分的に壁方向ナデ・肩口附近壁方向ナデ			
			草摺	肩甲下端に貼付けられた草摺	外觀：ナデ→上端に筋状痕跡・横方向の凹窓で区別			
			頭甲	横断面で区切る。最高点の高：13.9 頭甲本体から粘土紐を施す際の縫隙で頭甲 頭甲を表す	外觀：ハーメ横力向ナデ→縫隙で頭部・ 内面：頭甲を表す			
			肩甲	合掌中央での高：12.1、頭甲：2.0-2.3 肩甲幅：9.9-11.1、肩甲厚：3.2-3.3 頭甲：13.1、頭甲厚：1.2-1.5	外觀：横方向ナデ→横方向ナデ			
			頭部	頭甲・肩甲の上に丸アリカッセ(?)を間に置く 表面にオカリ乳(編)：6.6、高：3.9 頭甲幅：13.1、頭甲厚：1.2-1.5	外觀：頭力向ハマースカル・孔穿孔 内面：頭力向ナデ→横方向ナデ→穿孔			
			背	2面に小孔を配する頭部付背 背部高：16.6、下端幅：18.6 背部幅厚：1.1-1.1 相思部左右幅：17.9、同厚：0.7-1.3 背下端に粘土紐を施す際の縫隙	外觀：頭力向ハマースカル・頭部付背 一級窓式の孔を表す 内面：頭力向ナデ・指揮と 相思部：ハーメナデ→上端に縫隙			
			頭	頭甲高：9.1-10.6、頭厚：1.2-1.6	内面：ナデ			
644	75	61	日次C-4	頭甲	頭甲本体に重ね合わせた頭甲 頭厚：2.4	外觀：ナデ→微弱で頭甲を表す 内面ナデ	-	- a 3YR6/6 砂
645	75	61	日次C-4	頭甲	頭甲本体から剥離した頭甲 粘土紐を合わせて板状に作る 頭厚：8.6-1.3	外觀：横方向ハマースカル・頭部付背 頭甲を表す 内面：ナデ・頭部面にはハケ跡	H1 b	H1 b a 3YR6/6 砂
646	75	61	日次C-4	頭甲	頭甲本体から剥離した頭甲 粘土紐を合わせて板状に作る 頭厚：0.9-1.5	外觀：横方向ハマースカル・頭部付背 頭甲を表す 内面：ナデ・頭部面にはハケ跡	H2 b	H2 b a 3YR6/6 砂

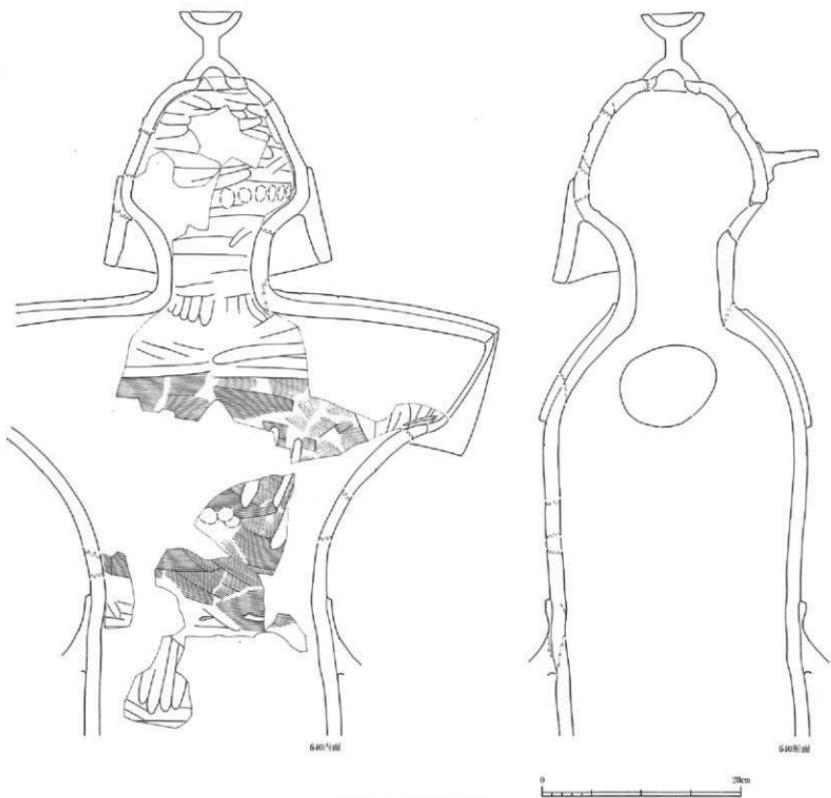
第27表 甲冑形埴輪 1観察表



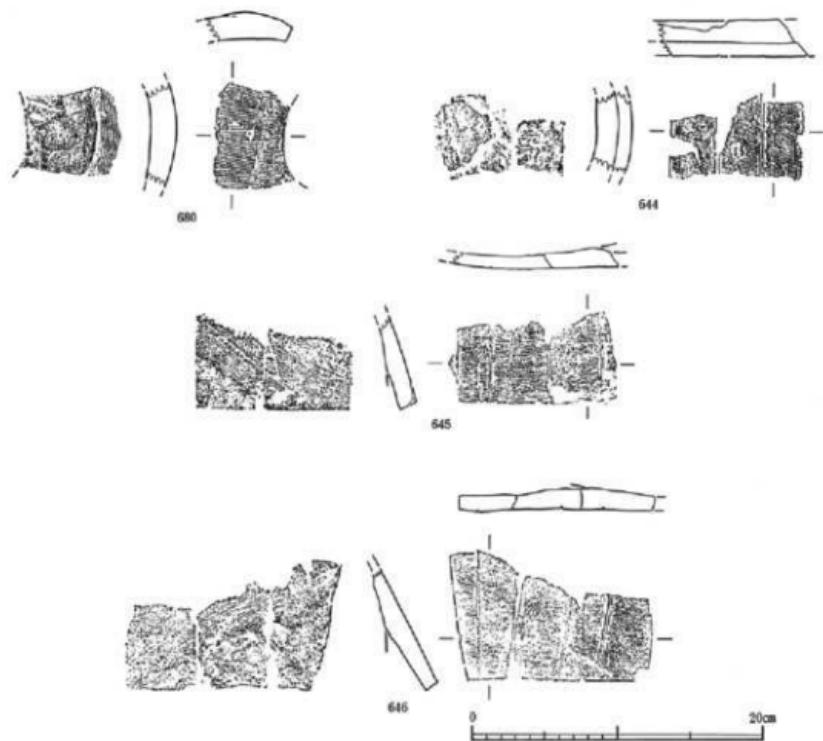
第72図 甲冑形埴輪 1(1)
—124—



第73圖 甲青形埴輪 1(2)



第74図 甲冑形埴輪 1(3)

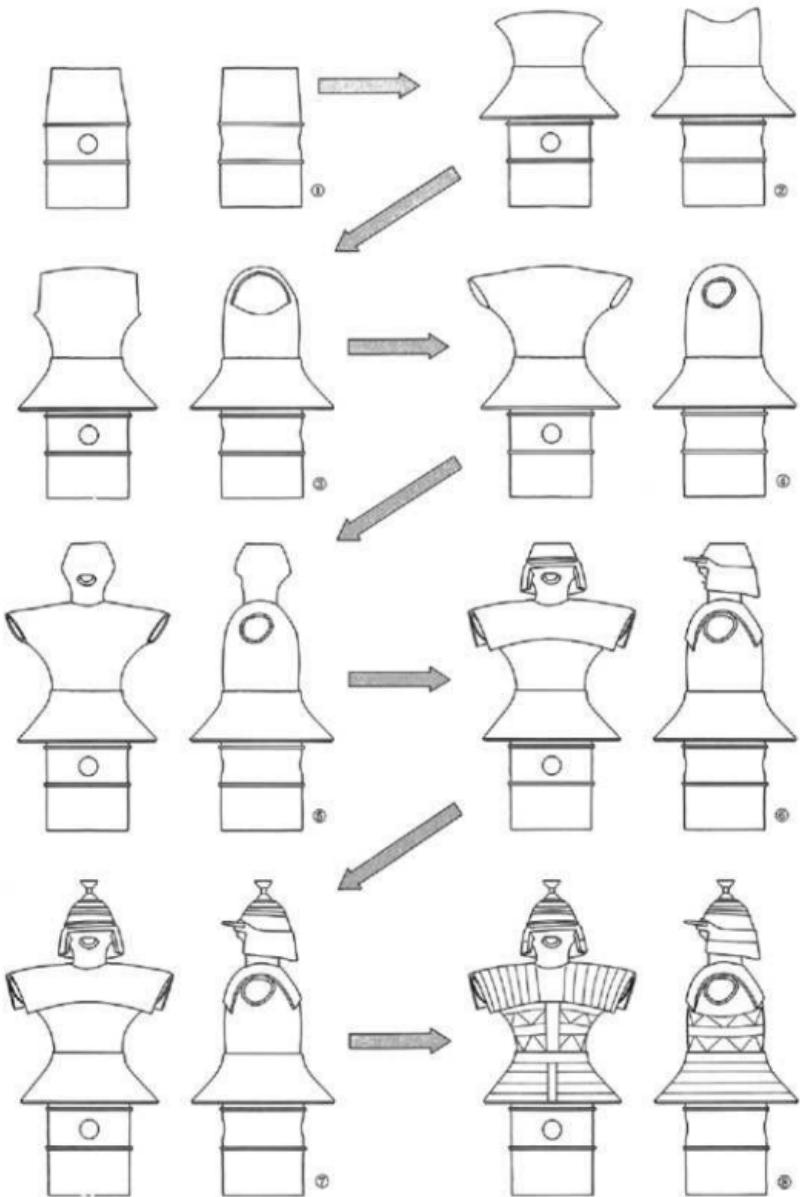


第75図 甲冑形埴輪 1(4)

部を製作した後に肩口が作られており、短甲の上部は巻き上げではない。板状の粘土を前後にわたして、製作したものと推定される。

背は眉庇底背を表しており、頸甲・肩甲の上にラッパ状に広がる頭部の上に乗る。頸甲と頭部の接合部の内面が強くナデ付けられているため、頭部の接合方法は明確ではないが、その形状から本体の上端に孔を開け、そこから頭部を巻き上げて作ったものと推定される。頭部の前面には、円孔が開けられている。円孔の上下の内側には刻み目が入れられており、あたかも歯を表したかのように見えなくもない。ただし、刻み目が入れられるのは、この甲冑形埴輪 1だけである。

背は頭部に統いて粘土紐を巻き上げて製作されている。地板第1段の上端と、伏鉢が付く部分の内面に、明瞭な接合痕があり、この位置で小工程が分かれるものと考えられる。内面は最後に付けられる伏鉢が付く部分を除いてナデが施されており、小工程ごとに内外面を調整しな



第76図 甲冑形埴輪の製作方法

がら製作していったものと考えられる。胴巻板は低い凸帯を貼付けて表現している。地板は、第1段・第2段とも線刻で小札を表している。眉庇は背の前面に、板状の粘土を貼付けて作り出す。先端に切込みなどは入れられていない。眉庇の上面は輪郭に沿う形で弧状に2条の沈線で区切られ、その間に斜線を連ねて綾杉文状にした線刻が施されている。背の上端の外面には円形の剥落痕が残っており、伏鉢・管・受鉢が作出されていたことが判る。この部分は、本古墳出土資料には該当部分が残存しないため、剥落部の大きさなどから推定し復元した。

鎧は沈線によって2段に区切られている。下端は背面に向かって下がっている。鎧の上端は1段、段が付き、背の地板第2段に直接つながる。腰巻板の表現は見あたらない。眉庇も鎧と同様に一段高くした部分に付けられており、沈線で区切られた上の段が腰巻板に相当するのではないかとも考えたが、その場合腰巻板が眉庇よりかなり下まで突き出ることになり不自然である。鎧の貼付けられた部分の内面には、指圧痕があり、鎧の接合の際に押されたものと考えられる。したがって、鎧部の貼付けの時点では、背の上端はふさがれていないことになる。

第75図に示したものは、出土状況や色調の類似から640と同一個体になると判断した破片で、これらの破片の入る位置を確定できなかつたため復元に加えなかつたものである。680は肩口の破片と思われ、端部の弯曲の具合い、肩甲の剥落痕がないことから、下側の部分に相当するものであろう。640では左側の肩口の下側は残存していることから、右側になると判断される。644・645・646は肩甲の部分の破片である。いずれも本体を製作した後に、粘土板を貼り重ねて肩甲を作りしており、645・646には剥落面に本体を作成した際に施されたハケメの陰刻が残っている。これらの肩甲の貼り重ねられた部分の内面には、縱方向に粘土の接合痕が5cm程の間隔で観察されることから、この幅の帶状の粘土を本体に貼り重ねたものと判断される。

以上の観察から甲冑形埴輪の製作方法を復元すると、以下のとおりとなる（第76図）。なお、他の甲冑形埴輪も基本的に同様の製作方法で作られていると考えられ、甲冑形埴輪1では残存しない部分の特徴は、他の甲冑形埴輪の様相から復元した。

- ①小工程を繰り返して円筒形の台部を製作する。この際、最上段の第3段目は、この上に乗る短甲部の形状に合わせて、前後を長く、左右を狭くしていく。
- ②粘土紐を巻き上げて、短甲部の下半を製作する。さらに草摺を貼付ける。草摺を貼付ける段階は確実ではないが、相当の重さがあり大きく開く草摺を貼付けるには、その際に内面から押さえることが必要と考えられ、少なくとも短甲部の上部がふさがれる前であると推定した。
- ③粘土板を前後に渡し、短甲部の上部をつなげてふさぐ。
- ④左右に伸ばす形で粘土紐を巻き付け、肩口まで作成する。
- ⑤上端中央に孔を開け、そこから上に粘土紐を巻き上げ、頭部から背部を作成する。
- ⑥粘土帯を短甲上部に貼り重ねて肩甲・頭甲を作る。背に粘土板を付けて鎧・眉庇を作る。

- ⑦背部の上端をふさぎ、伏鉢・管・受鉢を付ける。
 ⑧背・肩甲・頸甲・短甲・草摺の各部の表面に線刻を施し、仕上げる。

甲冑形埴輪 2 (第77~80図、第28表、図版62・63)

甲冑形埴輪の中では、この個体のみが明るい黄褐色を呈し、他の個体が堅練に焼き上げられているのに対し、焼きがやや甘いことから、容易に識別できた。また残存状況は余り良くないが、鎧・肩甲から短甲の背面・草摺のほぼ半分と各部分が残存していたこともあり、全体を復元した。これは、従来草摺形埴輪として紹介されていたものである。

現物では復元の結果、全体の高さは113cmとなっている。これは台部の第1段と第2段の高さを、ともに16cmとして復元したためである。しかし、後に甲冑形埴輪3のところでも触れるが、鎧形埴輪の台部の状況などから、第2段の高さが円筒埴輪の中間段と同じ13cm程となる可能性が強いため、挿図ではその差3cmを減じて、器高110cmとして示している。

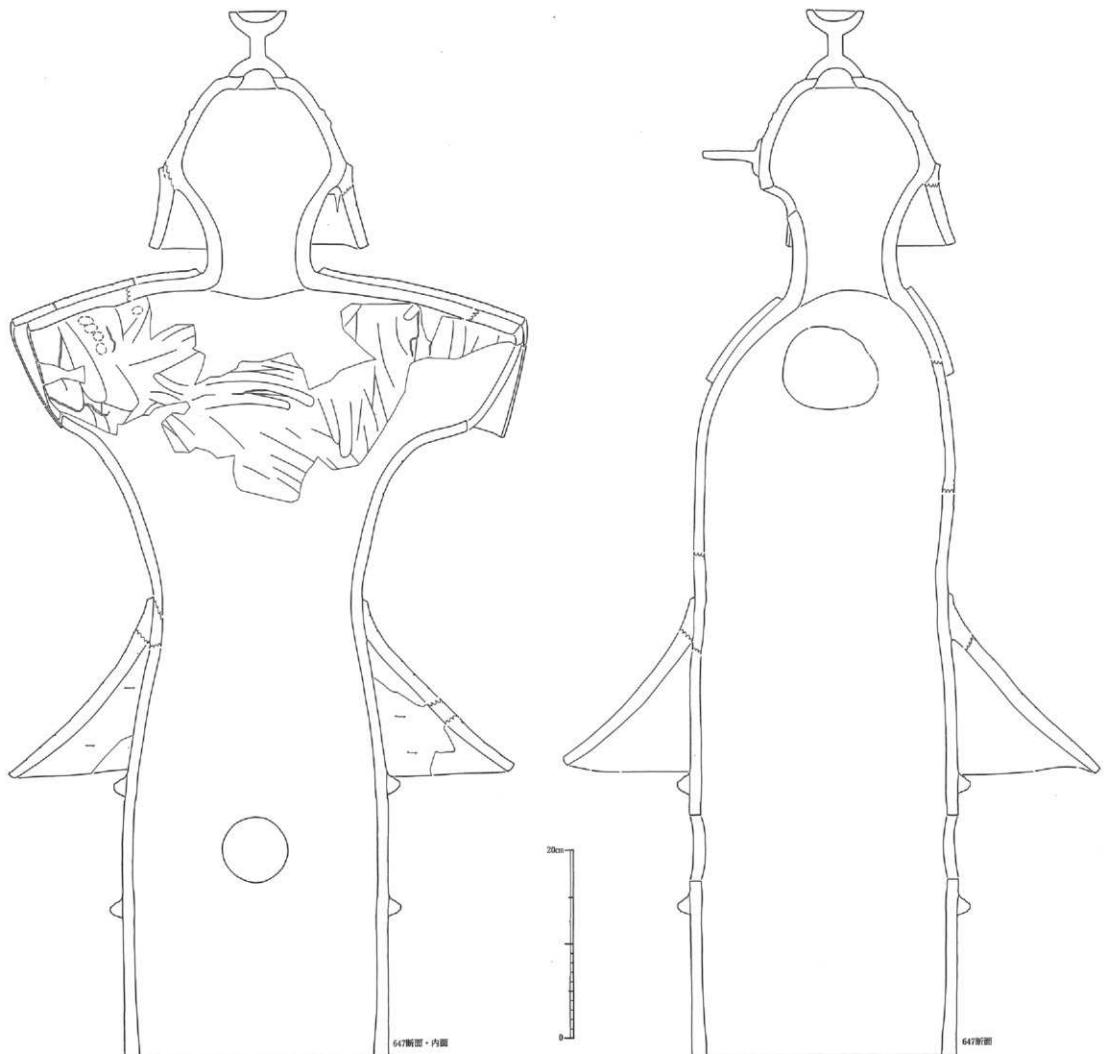
台部はほとんど残存していない。草摺の接合部付近にわずかに残存しているだけであり、詳細は不明である。

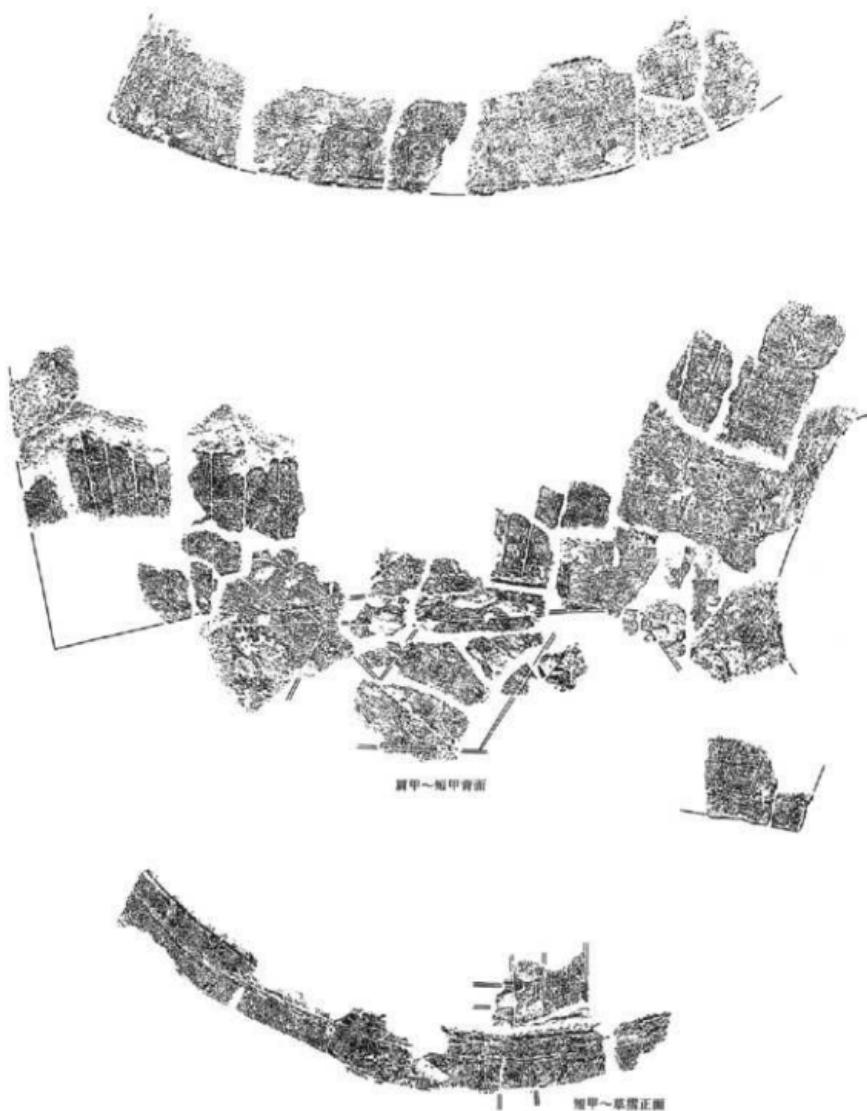
短甲部は、前胸引合板の下端付近と、後胸の上半部が遺存しているのみである。前胸引合板から草摺の上端部の横断面形を見ると、短甲下端部では左右の幅より前後の幅が長い楕円形を呈している。外面には縦方向に3本の沈線が残り、2枚の前胸引合板を示している。引合板の右側には横方向に2本の沈線がわずかに残っており、握板を示したものかもしれない。後胸は長側の帯金より上の部分が残存している。背面中央はほぼ正方形の板で、その左右に小さな三角板を配している。

短甲上部から肩口にかけての部分の内面調整を見ると、肩口付近では粘土紐の接合痕が上下

北緯 緯度 番号	南緯 緯度 番号	出土場所	断面	断面の特徴・法量等	製作技法の特徴・文様等	ハタメ		地 域	色調
						外輪	内輪		
646 77~ 80	62~ 63	I-326125.126 No.27.129 No.31 No.31-2 No.33 No.33-136 No.22.228	短甲	背・胸甲・肩甲・短甲・草摺を一連に作る。完形に既成。復元高：110.0 三角形肩甲 短甲底高：22.6 肩甲下端での左右幅：22.2 短甲下端での底幅：26.8 基厚：0.9~1.3	外輪：ハケ→ナード→擦痕 内輪：前方向ナード	14 162	—	b	2.5VTR/4 淡青緑
	II次1~4 H-3	草摺	短甲下端に剥離された軽一連の草摺	外輪：前方向ハケ→擦痕 内輪：前方向ナード					
		各側の高さ：1.2~2.3、幅厚：0.9~1.7	各側の高さ：1.2~2.3、幅厚：0.9~1.7	側厚：側面には削痕文を観察 側厚：他の面には削痕文を観察					
		短甲・肩 甲	短甲底部に粘土板を貼りねじ留めて肩甲・ 肩甲を表す 肩甲の左右の最大幅：54.9 基厚：2.0~2.1	外輪：前方向ハケ→横方向ナード→擦痕 内輪：前方向ナード・肩甲付近擦痕ナード					
		短 甲	背下端に粘土板を貼りた短甲、幅：21.2 基厚：8.7、幅厚：1.1~1.6	外輪：前方向ハケ→ナード→擦痕 内輪：前方向ナード					

第28表 甲冑形埴輪2観察表





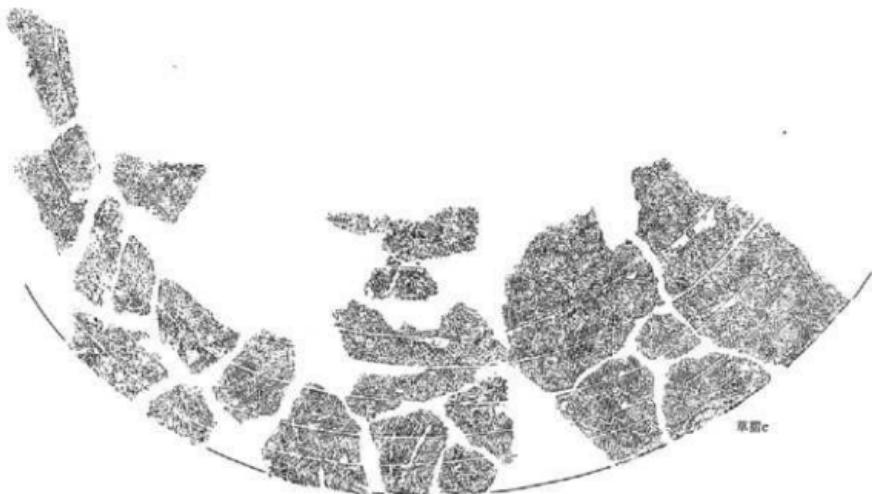
第79図 甲背形埴輪 2(3)



草图a



草图b



草图c

0 20cm



草图・波状文の描き方

第 80 図 甲冑形埴輪 2 (4)

に走り、ナデ調整も上下方向に施されている。よって、肩口近くでは、左右に伸ばす形で粘土紐を巻き付け、肩口まで作成したと判断される。

頸甲・肩甲は短甲上部の本体に粘土板を貼重ねて作っており、肩口付近では肩甲の下端は短甲から離れている。外面は線刻で頸甲・肩甲を表現するが、頸甲はほとんど残っていないため詳細は不明である。肩甲は右側が10枚、左側が12枚の板を表しており、左右で枚数が異なっている。ただし、右側の復元は、短甲背面の部分と肩甲の部分が、微妙な位置で接合しているだけなので、必ずしも確実ではない。左側の肩甲の方が確実である。

草摺部は短甲下端に付き、スカート状に広がるもので、短甲部の横断面形に沿って左右の幅より前後の幅がやや大きく作られている。横方向の沈線で、11段に区切られる。短甲部に接する最上段は、一段、段がつく。この最上段には、方向の異なる斜線を合わせて矢羽根状にした沈線が、上からみて左回りにめぐらされている。それより下の段には、線刻による波状文が充填されている。短甲部の前胸引き合わせ板の下にあたる部分には、2条の縦方向の沈線が上から2段目から引かれており、波状文もここで途切れる。草摺は半周以上残存しているが、縦に区切る沈線は、この前面に施されるもののみであり、胸一連の草摺を表したものと判断される。ほぼ半周近く残っている背面の草摺部の波状文の施し方を観察すると、各段ともほぼ同じ箇所で波状文を描き始めていることが判る（第80図）。このことから、各段ごとに一周させて波状文を施すのではなく、一定範囲で上から下までの段を一連の動作で波状文を描いているものと考えられる。

頸部から上は、鱗が残っているだけで、その他は甲冑形埴輪1にあわせて復元したものである。鱗は右側の前端を欠く他はほぼ全周が残存している。下端は水平にめぐる。胃との接合部分はごく一部が残っているだけであるが、段が付いてつながる。ほぼ中位の高さに1条の沈線が施され、2段に区切っている。

甲冑形埴輪3（第81～84図、第29表、図版64・65）

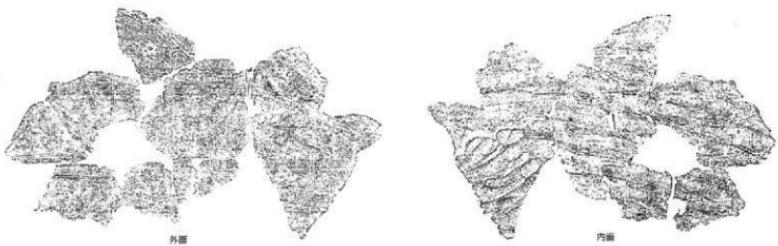
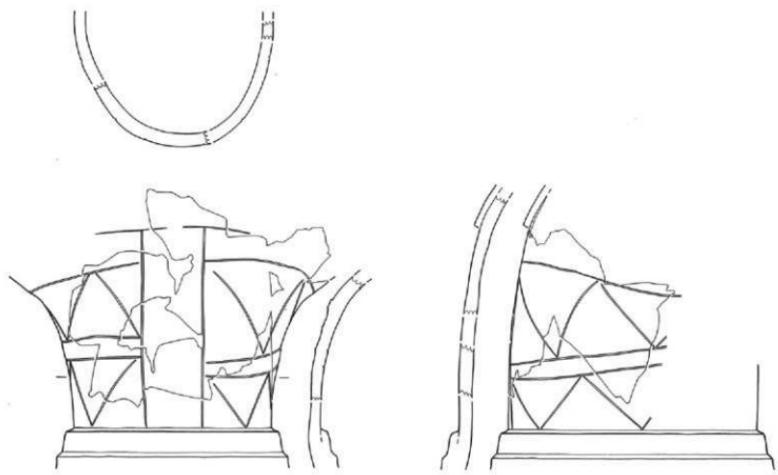
従来、短甲形埴輪として復元され紹介されてきたものであるが、II次調査での出土破片を合わせて検討したところ、短甲部の前胸引き合板の部分が2個体分であることから、この甲冑形埴輪3と次の甲冑形埴輪4に分離された。この両者は、法量が若干異なる以外は、細部に至るまで極めて良く類似しており、両者を分離することは容易ではなかった。ただこの甲冑形埴輪3と甲冑形埴輪4はI次調査で取り上げ番号の異なる破片が相互に接合しており、その接合関係を基準に、I次調査の内1969年度調査分のNo141～144と1970年度調査分のNo220～222というグループと、同じくNo148～150とNo241～246というグループに分けると、同一箇所が重複することもなく分離できる。この両グループは、上に示した取り上げ番号の中に、かなり残存している

台部が含まれており、本来樹立された位置の周辺でまとめて出土したものと考えられることから、この分類が妥当なものと考えておきたい。また草摺も上記のように分けると、横方向の沈線で区切られた最下段に施された斜方向の沈線が、この甲冑形埴輪3では全て右下がりになるのに対し、甲冑形埴輪4では逆に全て左下がりになって矛盾しない。

第81図の648は短甲部の前脇から脇にかけての破片で、下半部の横断面形は、正面の部分の弯曲が強く、左右の幅より前後の幅が大きい橢円形を呈する。他の甲冑形埴輪と同様に、長側の帶金をはさんで向かい合うように三角板を表現しているが、長側第1段の三角板が、引合板に接する部分で左右で向かい合わずにずれている。内面調整はナデのみであるが、左脇の内面

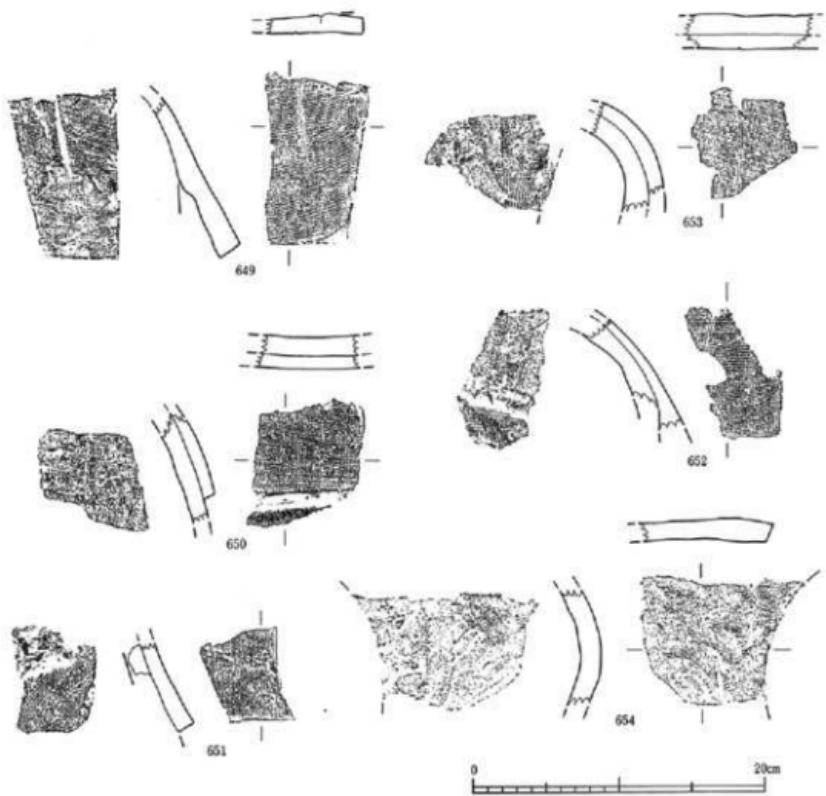
登録番号	銘柄	四捨番号	出土場所	部位	形態の特徴・状況等	製作法の特徴・文様等	ハケメ 外側	黒 内側	色調
646	81	64	1次8641, 143	肩甲	前脇から脇にかけての部分 残存高さ2.8、厚さ最高：29.2 厚甲部下端での左右の幅：20.0 厚甲部下端での背後幅：25.0 厚厚：1.0-1.5	外面：横方向ハケ→ナデ→縦筋で三角板 を表す 内面：横→一部方向ナデ	12~13 b1	—	a 7.5YR3/4 に, 5.5V4褐色
649	82	64	1次86219	肩甲	厚甲本体から剥離した肩甲。ほぼ平賀 厚厚：1.0-1.7	外面：横方向ハケ→横方向ナデ→縦筋で 肩甲を表す 内面：ナデ、剥落部にはハケ跡部	11 b	—	a 7.5YR3/6 明褐色
650	82	64	1次86221	肩甲	厚甲本体に重ね合わせた肩甲 厚甲本体厚：1.1、肩甲 厚甲底面厚：2.1	外面：短甲部横方向ハケ→肩甲貼付け 肩甲底面厚：カーブ→横方向ナデ 内面：横方向ナデ	13 b1	—	a 5YR5/6 明赤褐色
651	82	64	1次86221	肩甲	厚甲本体から剥離した肩甲 厚厚：1.0-1.3	外面：横方向ハケ→横方向ナデ→縦筋で 肩甲を表す 内面：横筋部にハケ跡部	12 b	11~13 b	a 7.5YR6/6 暗
652	82	64	1次86220	肩甲	厚甲本体に重ね合わせた肩甲 厚厚：1.6-2.2	外面：横方向ハケ→横方向ナデ→縦筋で 肩甲を表す 内面：ナデ、剥落部にはハケ跡部	11 b	11 b	a 5YR6/6 暗
653	82	64	1次86142	肩甲	厚甲本体に重ね合わせた肩甲、肩口 厚厚：2.3	外面：横方向ハケ→横方向ナデ→縦筋で 肩甲を表す 内面：ハケ→ナデ	11 b	11 b	a 5YR6/6 暗
654	82	64	1次86221	肩甲	肩口の部分 厚厚：1.3-1.5	外面：横方向ハケ→ナデ 内面：ナデ	11 b	—	a 5YR5/7 に, 5.5V4褐色
655	83	64	1次E-3	肩甲	厚厚：1.3	外面：横方向ハケ→ナデ→縦筋で三角板 を表す、内面：横方向ナデ	14 b	—	a 10YR5/6 に, 5.5V4褐色
656	83	64	1次86222	肩甲	短甲部下端付近 厚厚：1.2-1.4	外面：横方向ハケ→ナデ→縦筋で三角板 を表す、内面：横→一部方向ナデ	13 b	—	a 7.5YR5/4 に, 5.5V4褐色
657	83	65	1次86222	肩甲～ 革韁	短甲部下端から革韁の接合部 厚甲部底面厚：1.3	短甲部外側：横方向ハケ→横方向ナデ→ 縦筋で三角板を表す 革韁部外側：ナデ→接合部に斜めに交叉 する横筋部 内面：横方向ナデ	12 b	—	a 7.5YR5/3 に, 5.5V4褐色
658	83	65	1次86223	肩甲～ 革韁	短甲部下端と革韁の接合部 短甲部外側：1.2	外面：ナデ→接合部に斜めに交叉する横 筋、内面：横→一部方向ナデ	—	—	a 7.5YR5/4 に, 5.5V4褐色
659	83	65	1次86222	革韁	短甲部下端、厚厚：1.1-2.5	外面：横方向ハケ→横方向ナデ→縦筋 縦筋で区切り間に斜筋を造る 内面：横方向ナデ	13 b	—	a 7.5YR5/4 に, 5.5V4褐色
660	83	65	1次86222	革韁	短甲部下端、厚厚：1.1-2.5	外面：横方向ハケ→横方向ナデ→縦筋 縦筋で区切り間に斜筋を造る 内面：横方向ナデ	13 b	—	a 7.5YR5/4 に, 5.5V4褐色
661	83	65	1次H-2+3 付近剥離	革韁	短甲部下端：9.1、厚厚：1.5-2.4	外面：横方向ハケ→横方向ナデ→縦筋 縦筋で区切り間に斜筋を造る 内面：横方向ナデ	13 b	—	a 7.5YR5/4 に, 5.5V4褐色
662	83	65	1次不明	革韁	残存高：13.4、厚厚：1.5-2.5	外面：横方向ハケ→横方向ナデ→縦筋 縦筋で区切り間に斜筋を造る 内面：横方向ナデ	13 b	—	a 7.5YR5/4 に, 5.5V4褐色
663	84	65	1次86220	台部	円筒形の台部、底面～剥離 底面高：30.5、底面厚：13.5 厚厚：1.2-1.8、スカシ径：約5 底面上端：1.6、下端：1.9、高：1.5 底面下端：1.4、下端：1.9、高：1.5	外面：テラヘルツ～凸面削付、凸面側部分 的にコナガヘ・スカシ丸孔(円形)→革 接合部横方向ナデ 内面：新方内→一部新方横ハケ→剥離 部以降→横方向ナデ	10~13 b1	10~13 b1	a 5YR5/4 に, 5.5V4褐色

第29表 甲冑形埴輪3観察表



第81図 甲冑形埴輪 3(1)



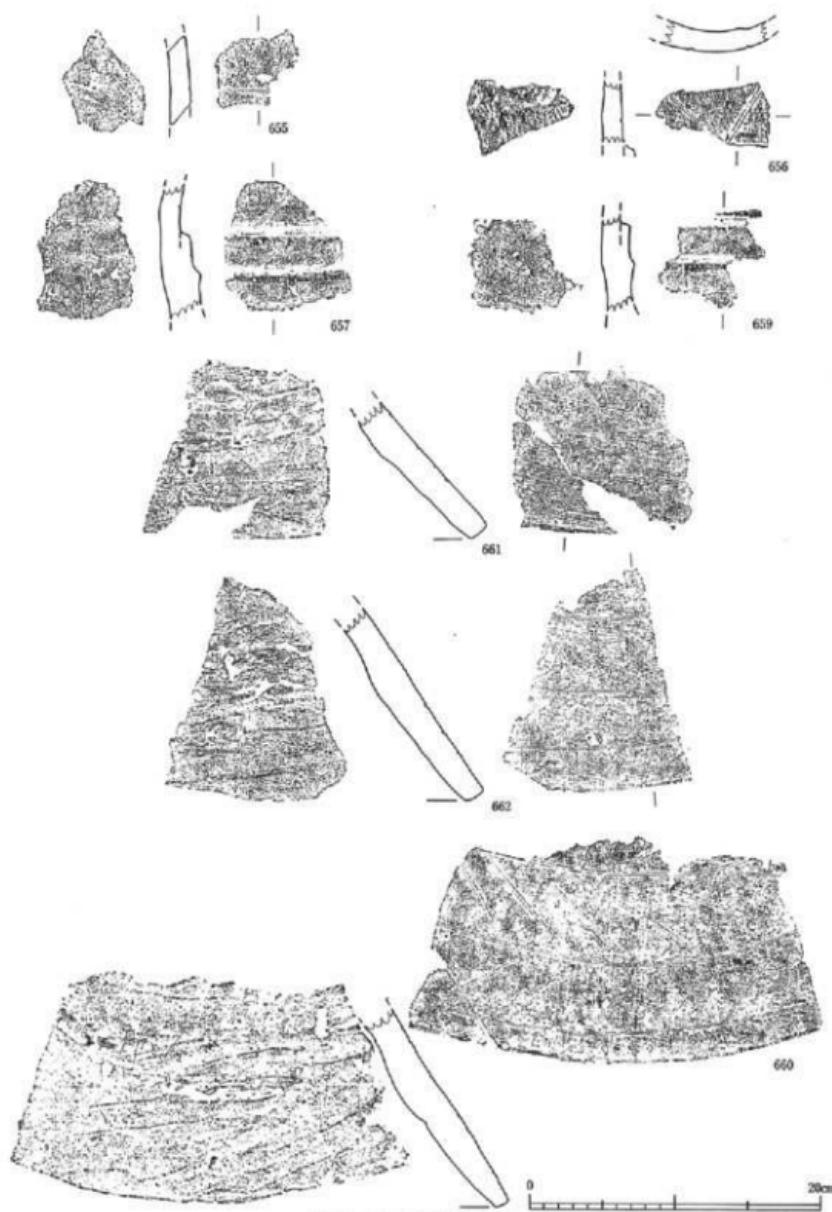


第82図 甲冑形埴輪3(2)

に強くナデ付けたような細長い単位の調整が並んでいる。しかし、擦痕は調整の単位に直交する方向に走っており、どのような行為で残されたものか判断がつかない。

第82図の649～653はいずれも肩甲もしくは頸甲の部分の破片である。肩甲の線刻の幅は3.8～5.5cmと広く、甲冑形埴輪1に類似する。650は左右の幅7cm程が残っているが、線刻が見られないことから、頸甲の部分に相当するものと考えられる。654は短甲の肩口の部分の破片である。

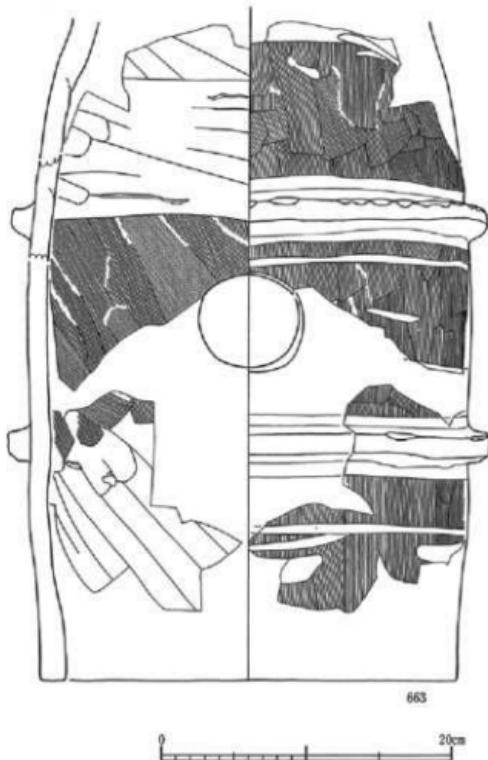
第83図の655・656は三角板を表した短甲部の破片である。655は弯曲の具合いから脇の付近と考えられ、656は下端外面に剥落痕が続くことから草摺との接合部付近である。657・659は短甲下部から草摺の上端付近の破片で、長側第3段の下は、直接草摺につながる。草摺上端に



第83図 甲冑形埴輪 3(3)

は2段の段が付く。このうち上側の段には、格子状に線刻を施すが、左下がりの線刻が強く、右下がりの線刻は弱い。660・661・662は草摺の破片で、いずれも外面を横方向の沈線で区切り、その内部は各段で互い違いに向きを変えて斜方向の沈線を運ねている。各段の幅は甲冑形埴輪2と比べると広いが、最下段の幅はかなり狭い部分もあり一定していない。

第84図の663は円筒形の台部である。3段として復元しているが、上半と下半の破片は接合せず、推定による復元である。第2段目に円形のスカシ孔が開けられており、後に示す短甲部とのつながり具合いから、これが前後の方向を向くものと判断される。下



第84図 甲冑形埴輪3(4)

端を欠くため最下段は段の高さは不明であるが、次に述べる甲冑形埴輪4の台部から16cmと推定した。第2段は復元の際には最下段と同じ高さにしたが、ここで上半の破片と下半の破片が分かれるため高さは不明である。駒形埴輪1では最下段が15.5~16cm、第2段が13~13.5cmであり、この数値が円筒・朝顔形埴輪の第1・2段の高さにそれぞれ等しいことから、この甲冑形埴輪の台部の第2段も13cm程になる可能性も強い。この個体でも、残存する部分を観察する限り、そのように考えても矛盾する点は無い。横断面形は第1・2段はほぼ正円であるが、第3段では上に続く短甲部下端の断面形態に合わせて、上に行くにしたがい前後が大きく、逆に左右が狭く作られている。凸帶は上面と下面是強くヨコナデが施されているが、側面のナデが弱く粘土紐の形状を部分的に残している。

甲冑形埴輪4 (第85~87図、第30表、図版66・67)

甲冑形埴輪3とほぼ同工のものである。

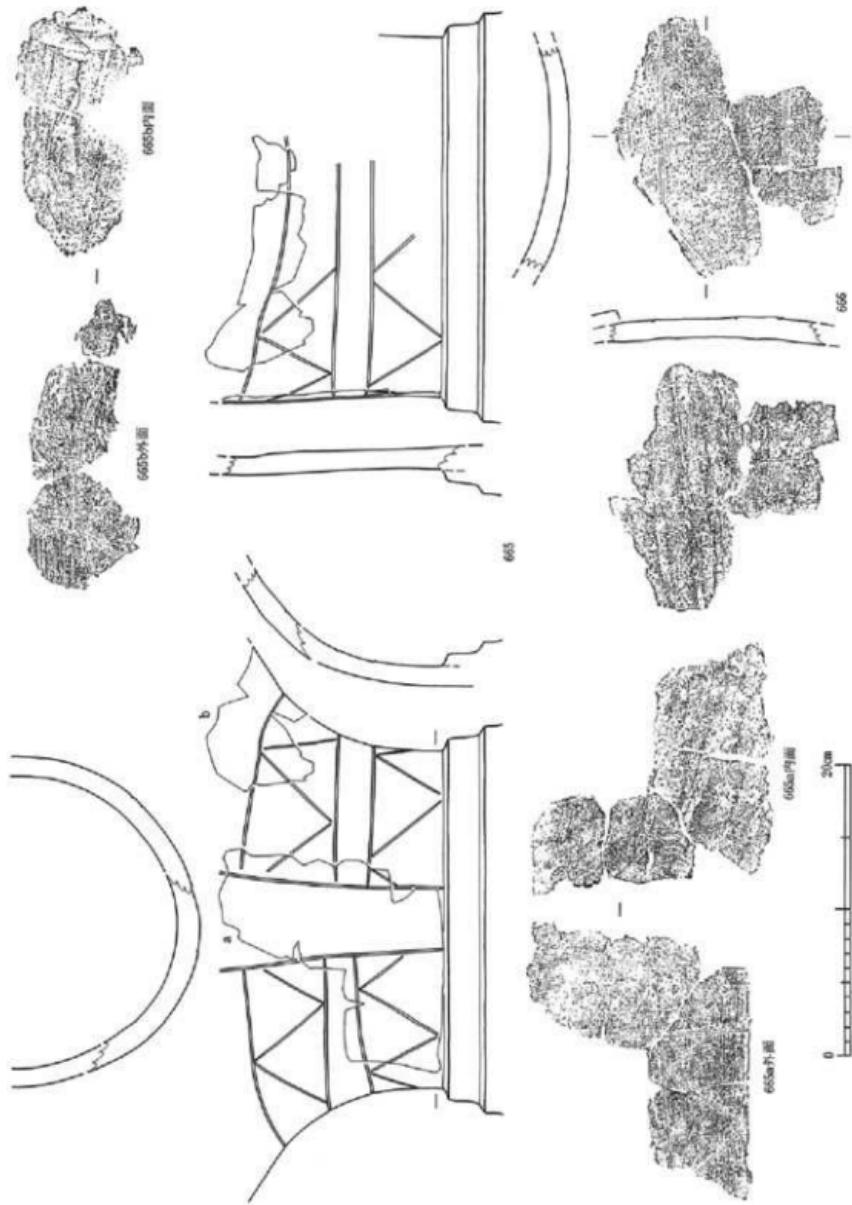
第85図の665は短甲の前胸から脇の部分で、2点の破片を合わせて復元した。前胸引合板の部分での高さが16cm程になると想定され、他の個体に比べてやや小ぶりである。短甲部下端付近での横断面形は、正面の部分の弯曲が強く、前後に長い梢円形を呈するものと考えられる。残存する下端外面に、外に屈折する部分がわずかではあるが残ることから、長側第3段の下は直接草摺部に続くものと判断される。長側の帶金をはさんで三角板が向かい合うように配されており、引合板をはさんでも向かい合っている。ただし、前胸左側の第3段の引合板に接する三角板は、線刻の位置がずれたためか小さくなっている。内面調整はナデのみであるが、左脇の内面には、甲冑形埴輪3と同様な強くナデ付けられたような細長い単位の調整が並んでいる。666は短甲の後胸の部分の破片である。弯曲の具合からほぼ中央の部分の破片と考えられる。帶金をはさんで、向かい合うように三角板を表現している。上端には頸甲の剥落した部分が残っている。

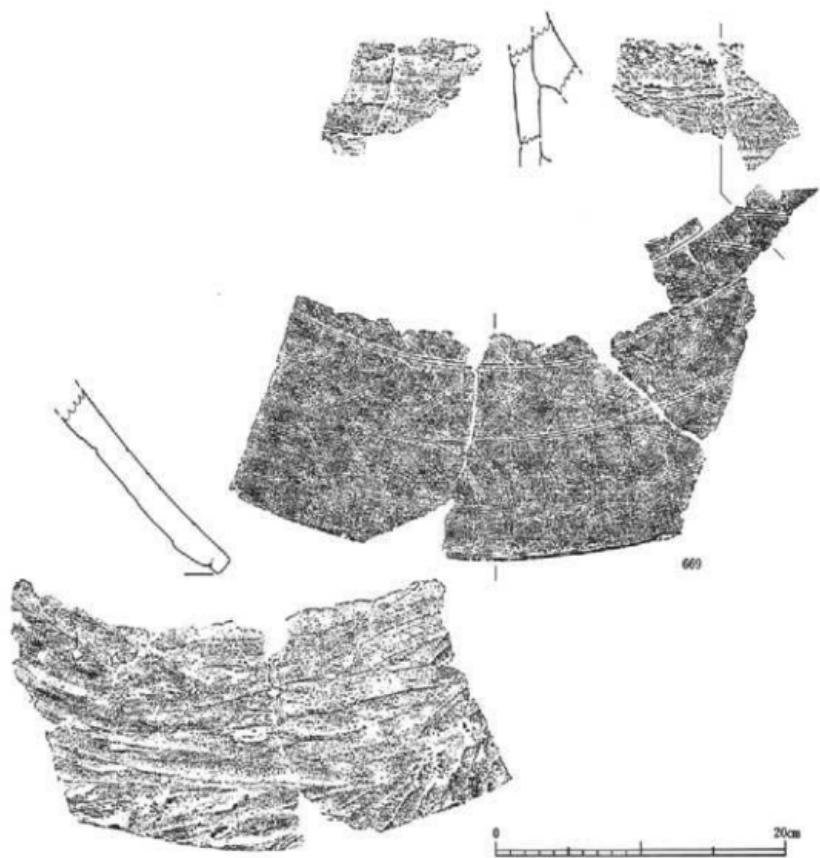
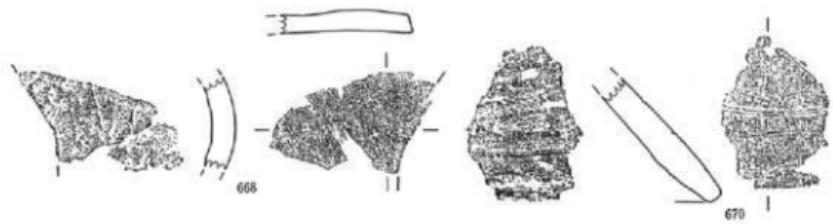
第86図の668は短甲の肩口の部分である。669・670は草摺の破片である。いずれも横方向の沈線で区切り、各段で互い違いに向きを変えて斜線を連ねている。この内669は台部との接合部分が残存しており、下から5段目までが残っている。接合部の位置からこの5段目の最上段が、草摺の最上段になるものと考えられる。そうすると、草摺の高さは18cm程となり、甲冑形埴輪2の草摺と比べると若干小さくなる。台部の凸帯と草摺の接合部の高さは6cmで、甲冑形埴輪3の台部の第3段の高さよりも低い。短甲部の高さが低いことも合わせて、全体にやや小ぶりに作られている可能性がある。

登録番号	図版番号	出土地場所	種類	形態の特徴・法線等	製作技法の特徴・文様等	ハケメ		色調	
						外側	内側		
665	85	66	I-326149 No245	短甲	前胸から脇にかけての部分 背筋高: 18.4、短甲部高: 約16 短甲部下端の左右の幅: 23.2 厚さ: 1.2~1.5	外面: 横方向ハケ→ナデ→縫隙で二角板 を表す 内面: ナデ→横方向ナデ	12 64	— —	7.5YR6/6 黒
666	85	66	I-326148 No241	短甲	脇から前甲下端の破片 背筋高: 18.2、厚さ: 1.2~1.5	外面: ナデ→横方向ハケ→肩甲貼付け→ナ デ→縫隙で二角板を表す 内面: ナデ	12~13 64	— —	7.5YR6/4 にぶ・黒
668	86	66	I-326146	短甲	肩口の破片 厚さ: 1.2~1.5	外面: 横方向ハケ→ナデ 内面: ナデ	13 64	— —	7.5YR6/4 にぶ・黒
669	86	66	I-326150 No241 No245 No246	草摺	下端から肩部との接合部まで残存 背筋高: 16.0 背筋部幅: 1.5~1.7 脇部幅: 1.4~2.3	下端部外側: タテハケ→草摺貼付け→推 合筋付方面ナデ 下端部内側: 横方向ナデ 脇部外側: 横方向ハケ→横→横方向ナ デ→縫隙(縫隙で段間に区切り間に網眼を 通れる) 脇部内側: 横方向ナデ	12 64	— —	7.5YR6/4 にぶ・黒
670	86	66	I-326153	草摺	下端部分 背筋高: 8.7、厚さ: 1.3~2.2	外面: 横方向ハケ→横方向ナデ→縫隙 縫隙: 縫隙で区切り間に網眼を連ねる 内面: ナデ	12 64	— —	10YR4/6 黒
671	87	67	I-326149	台部	円筒形の台部の第1段、高さ: <30.2 背筋高: 19.2、第1段内高: 16.0 脇部高: 16.0、厚さ: 1.4~2.4 凸部 上面: 1.5、下面: 2.5、高さ: 3.5	外面: ナデハケ→凸部貼付け・下端ヨコナ デ 内面: 肩方向ナデ→横方向ナデ	10~13 64	10~13 64	7.5YR6/4 にぶ・黒

第30表 甲冑形埴輪4 觀察表

第85图 甲壳形植绘 4(1)

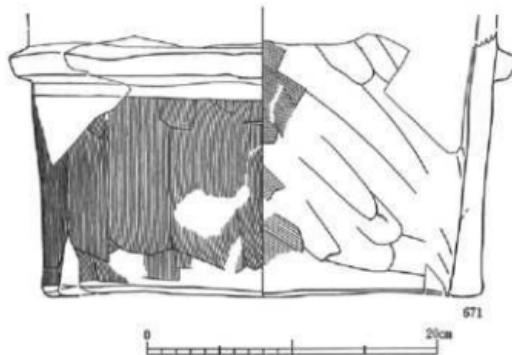




第86図 甲冑形埴輪 4 (2)

第87図の671は円筒形の台部で、第1凸帯付近までしか残存していない。最下段の高さは16cmである。凸帯の断面形状は甲冑形埴輪3の台部と同様であるが、それよりはヨコナデは良く施されている。

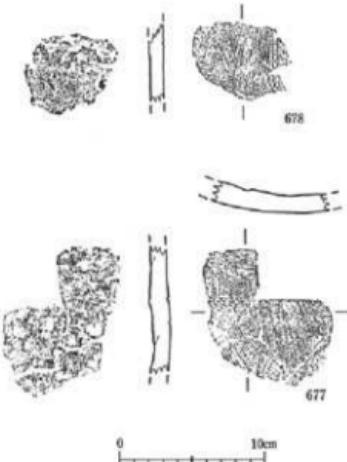
さらにここに示した以外に、極めて小さな破片のため図示しなかったが、甲冑形埴輪3と同様の肩甲の破片が存在する。



第87図 甲冑形埴輪4(3)

甲冑形埴輪5 (第88図、第31表、図版67)

短甲部の小破片2点のみが確認された。焼成は甲冑形埴輪1・3・4と同様に、堅密に焼き上げられているが、これらでは三角板を表現した部分の外面調整がハケメの後にナデが施されているが、この2点はハケメのみとなっていることから別個体と判断した。ただこの2点は、出土場所が離れるため、別々の個体に分離される可能性も残る。いずれも短甲の三角板を線刻で表した部分である。外面はハケメ調整、内面はナデによっている。器厚が1.0cm前後と、他の甲冑形埴輪と比べると若干薄手である。



第88図 甲冑形埴輪5

番号 登録 番号	測定 番号	国際 番号	出土場所	層位	形態の特徴・法量等	製作技法の特徴・文様等	ハケメ			色調
							外側	内面	組成	
677	88	67	133Ne29	短甲	短甲部の幅近くの破片 厚さ: 1.0-1.3	外側: 蔵方向ハケ→確密で三角板を出す 内面: ナデ	13 bl	— a	n 3YR6/5 相	
678	88	66	133Ne29 1次西トレンチ 上半	短甲	短甲部の下段の三角板の部分 厚さ: 0.9-1.0	外側: 蔵方向ハケ→確密で三角板を出す 内面: ナデ	13 bl	— a	n 3YR6/5 相	

第31表 甲冑形埴輪5観察表

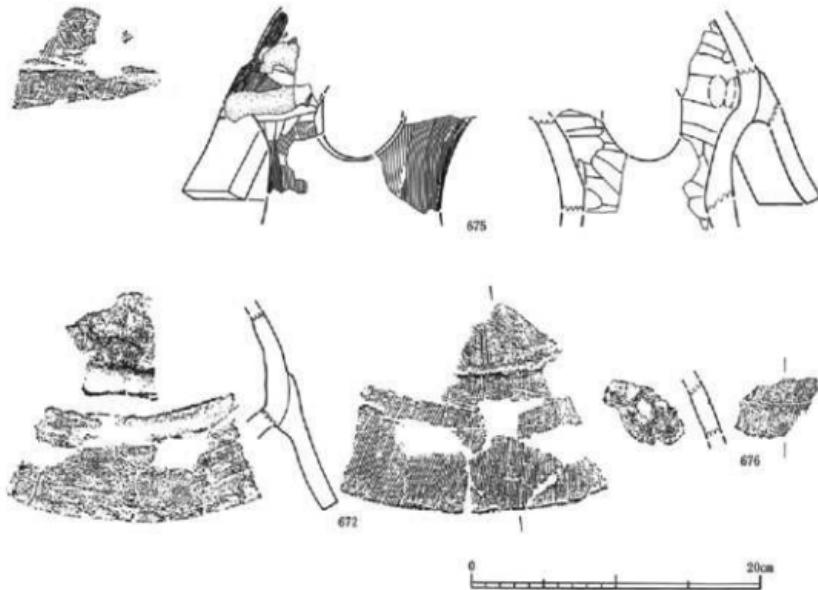
帰属不明の甲冑形埴輪(第89~92図、第32表、図版67~69)

これまでに挙げた甲冑形埴輪のどの個体に帰属するか不明の破片を、ここに一括した。ただし先に示したように、甲冑形埴輪2は焼成・色調から他の個体とは明確に分離された。したがって、ここに示すものは、甲冑形埴輪1と甲冑形埴輪3~5のいずれかに帰属する可能性があるものである。

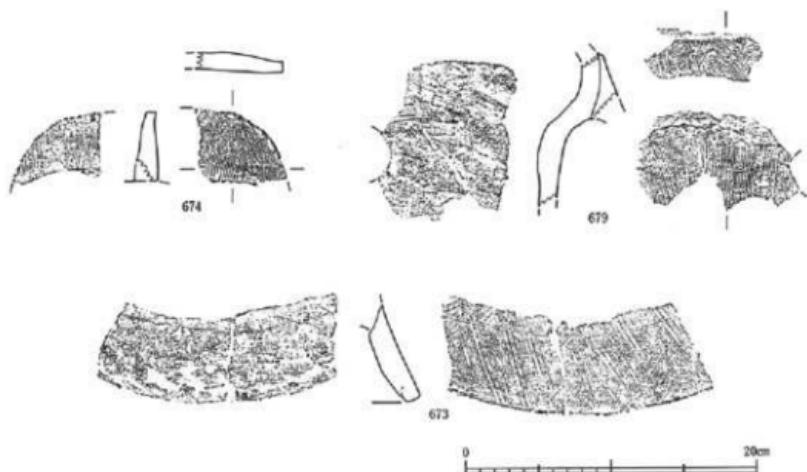
第89図に示したものは、同一個体と考えられる冑部の破片である。製作技法は、甲冑形埴輪1と同様に、頸部から冑の上端に至るまで粘土紐を巻き上げ、しかる後に鋸部を貼付けている。このうち675・676には、線刻で三角板を表現していることから、三角板を縫じ合わせた冑であることが判る。したがって、この点から衝角付冑を表したものであると考えられる。

第90図には、この衝角付冑以外の冑部の破片を示した。674は眉庇の部分と考えられるが、両面ともハケメ調整のみで、甲冑形埴輪1のような線刻による表現は加えられていない。679は頸部から冑部にかけての破片で、製作技法はこれまで示したものと同様である。673は鋸の部分の破片である。この679・673は、鋸部分の外面調整が、いずれもハケメを斜めに施した後に、それと直交させて再度ハケメを施しており、同一個体の可能性が強い。

第91図に示したのは短甲部の破片で、いずれも内面調整がナデのみであること、色調の類似



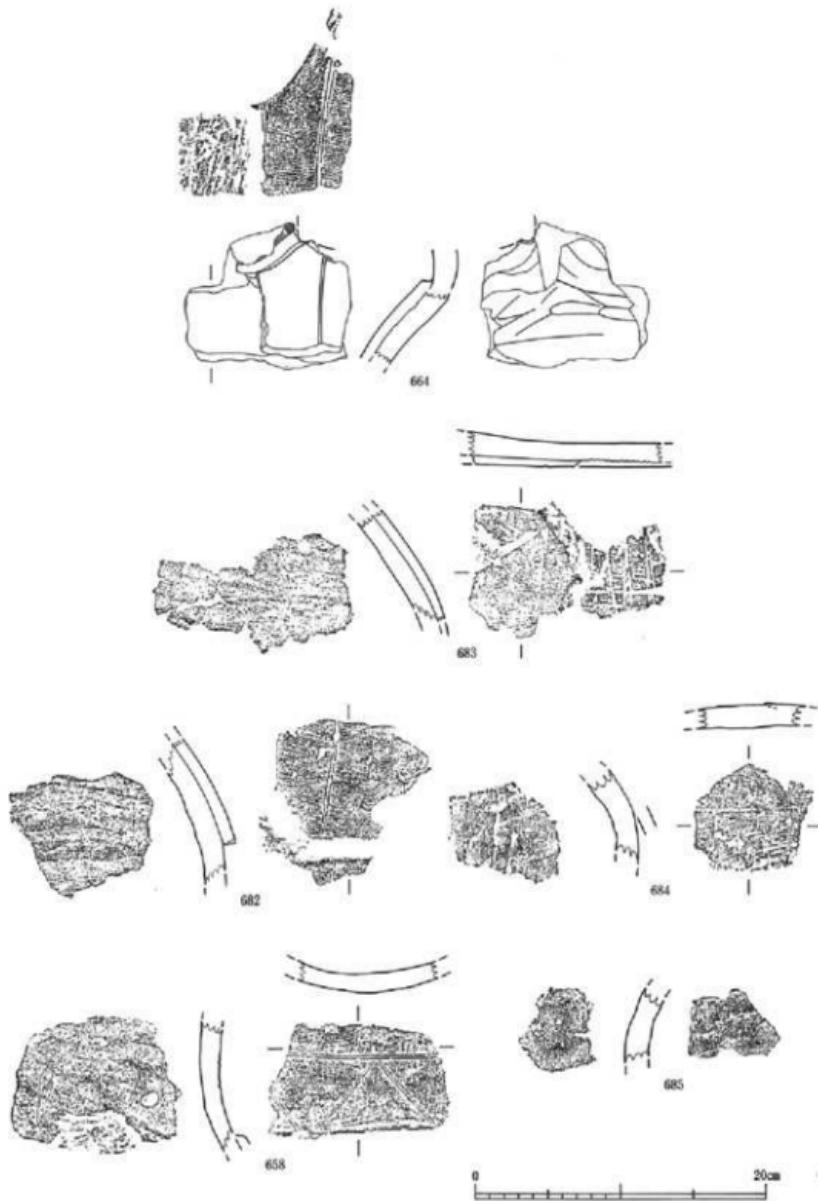
第89図 帰属不明の甲冑形埴輪(1)



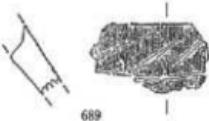
第90図 帰属不明の甲冑形埴輪(2)

性から甲冑形埴輪3あるいは甲冑形埴輪4に帰属する可能性が高い。664・683は頸甲から肩甲にかけての破片で、短甲本体を製作した後、表面に格子状に沈線を施してから粘土板を貼り付け頸甲・肩甲を作出する。682も頸甲から肩甲にかけての破片で、684は肩甲の剥落した肩口近くの破片である。658・685は、いずれも短甲本体を表した部分の破片である。

第92図の686～691は草摺部の破片である。このうち686は、草摺各段の幅が狭いことが甲冑形埴輪3・4とは異なり、甲冑形埴輪1の草摺部に相当する可能性がある。687・690・691は、最下段に描かれた斜線が右上がりであり、これが左上がりの甲冑形埴輪3にはならない。甲冑形埴輪4の可能性がある。693は、焼成・色調・凸帯の形態から甲冑形埴輪の円筒部と考えられるものである。



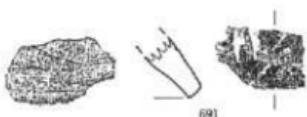
第91図 帰属不明の甲冑形埴輪(3)



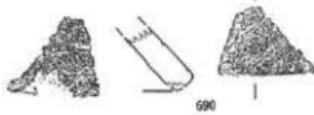
689



688



691



690



687



686



683



第92図 縮属不明の甲冑形埴輪(4)

登録番号	種類番号	出土地所	部位	形態の特徴・記述等	製作技術の特徴・比較等	ハンドル		表面成	色調
						外側	内側		
658	91	68	不明	頭甲	頭甲部の下端の三角形の部分 頭厚：1.2-1.4	外側：横力方向→ハーネス→縫合で三角形を表す 内側：横力方向ナメ	14 b	- a	7.5YR5/4 に近い黒
664	91	68	II次 E-4	頭甲	本体に粘土板を重ね合わせて頭甲を作成 頭甲部と側面との間に段差 頭厚：2.1	外側：頭甲部横方向ハーネスナメ、縫合縫 方方向ナメ 内側：横力方向ナメ・縫合縫方向ナメ	12 b	- a	7.5YR6/6 褐色
672	89	67	II次N-13 N-22	背～頭	背面に粘土板を重ね合わせて頭甲を作成、面部の 下端から3cmの所に横力方向沈線 背面厚さ：1.0-1.6 頭の高さ：9.3、側面厚さ：1.2	背面外側：縫合で目隠しヘタ 背面内側：横力方向ナメ・縫合 縫合外側：横力方向ヘタ→縫合 縫合内側：横力方向ナメ	13 bl	- a	7.5YR7/6 褐色
673	90	68	I-3N-18 N-25	頭	側面に目隠しヘタから下端から4cmの所に横力方向 沈線、頭の高さ：6.5、頭厚：1.1-1.6	外側：横力方向ヘタ→透視方向ヘタ→縫合 内側：横力方向ナメ	13 bl	- a	7.5YR6/6 褐色
674	90	68	I-3N-26	頭部	平坦化した頭部 最大幅：6.2、頭厚：6.6-1.5	上下面：横 側面底面：ハケ痕跡	10-13 bl	10-13 bl	7.5YR6/6 褐色
675	89	67	I-3N-23	頭部～ 背部	ラッパ状に開く頭部から背部の被片 頭内付骨、頭部の頭に円孔穿孔(乳頭孔)：5- 6.30、残存高：15.7 頭厚：1.1-2.8	頭部外側：横力方向ヘタ→頭の接合部横方 向ナメ→円孔穿孔 頭部内側：横→対角方向ヘタ→縫合で三内 板を表す 内側：横力方向ナメ・縫合→→円孔穿孔	14 bl	- a	7.5YR7/6 褐色
676	89	67	II次N-20	背	頭内付骨 頭厚：1.1	外側：横力方向→ヘタ→縫合で三角板を表す 内側：横力方向ナメ・縫合	14 bl	- a	7.5YR7/6 褐色
679	90	68	II次E-2台追	頭部～ 頭	ラッパ状に開く頭部から縫合の接合部付近 頭部表面に円孔穿孔(乳頭約4) 残存高：11.0、頭厚：1.2-1.8	頭部外側：横力方向ヘタ→円孔穿孔 頭部内側：横力方向ヘタ→横方向ヘタ 内側：横力方向ナメ→円孔穿孔	11-13 bl	- a	7.5YR6/6 褐色
682	91	68	II次南トレンチ 下半	頭甲～ 頭甲	頭甲本体に粘土板を重ね合わせて頭甲を 作成 頭甲本体断面：1.5 前甲板断面：2.2-2.6	頭甲本体裏面：縫合→ヘタ→横力方 向ナメ→横方向で斜めを表す 内側：横力方向ナメ	13 b	- a	7.5YR6/6 褐色
683	91	68	II次E-7	頭甲～ 頭甲	頭甲本体に粘土板を重ね合わせて作出し た頭甲から頭甲の歯部分 頭厚：1.7-2.3	外側：本体に粘土板に頭甲→横付け→横 力方向ヘタ→横方向ナメ→縫合 内側：横力方向ナメ	10 b	- a	7.5YR6/6 褐色
684	91	68	II次D-10～12	頭甲	頭口近くの頭甲が側面した被片 頭厚：1.5-1.8	外側：横力方向ヘタ→前甲板付け 内側：横力方向ナメ	11 b	14 b	7.5YR5/6 明赤褐色
685	91	68	II次D-1-2	頭甲	頭口近く 頭厚：1.5	外側：ナメ・縫合 横力方向ナメ	-	-	10YR3/2 に近い褐色
686	92	68	II次 I-J-4 D-10～12	頭部	大きさより草図の下端の遺 物厚：7.9、頭厚：1.3-2.0	外側：横力方向ヘタ→横力方向ナメ→縫合 縫合：縫合で既切り側に前縫を運ぶ 内側：横力方向ナメ	13	-	7.5YR6/6 明赤褐色
687	92	68	II次C-4	車輪	下端近く 頭厚：9.0、頭厚：1.4-2.2	外側：横力方向ヘタ→横力方向ナメ→縫合 縫合：縫合で既切り側に前縫を運ぶ 内側：横力方向ナメ	10 b	-	7.5YR6/6 褐色
688	92	68	II次C-4	車輪	中間部分 頭厚：1.5-1.9	外側：横力方向ヘタ→横力方向ナメ→縫合 縫合：縫合で既切り側に前縫を運ぶ 内側：横力方向ナメ	12 b	-	7.5YR5/4 に近い黒
689	92	68	II次A-B-4	車輪	中間部分 頭厚：1.5-2.1	外側：横力方向ヘタ→横力方向ナメ→縫合 縫合：縫合で既切り側に前縫を運ぶ 内側：横力方向ナメ	12 b	-	7.5YR5/4 に近い黒
690	92	68	II次C-4	車輪	下端部分 残存高：4.5、頭厚：1.8	外側：横力方向ヘタ→横力方向ナメ→縫合 内側：横力方向ナメ	12 b	-	7.5YR6/6 褐色
691	92	68	II次D-1-2	車輪	下端部分 残存高：4.3、頭厚：1.3-2.0	外側：横力方向ヘタ→横力方向ナメ→縫合 内側：横力方向ナメ	11 b	-	7.5YR6/6 褐色
693	92	69	I-3N-345	台部	円錐形の台部の頭1-2段 残存高：2.5、頭厚：1.1 凸上部1.0、下部1.3、高1.7	外側：テテハケ→凸面削付(凸面下に次 縫)一部部分にヨコナメ→スカラシ孔穿孔 (内縫)、底部焼けむら(変色・斑駁) 内側：横力方向ナメ・スカラシ孔穿孔	13 bl	-	7.5YR5/6 明褐色

第32表 爐属不明の甲冑形埴輪観察表

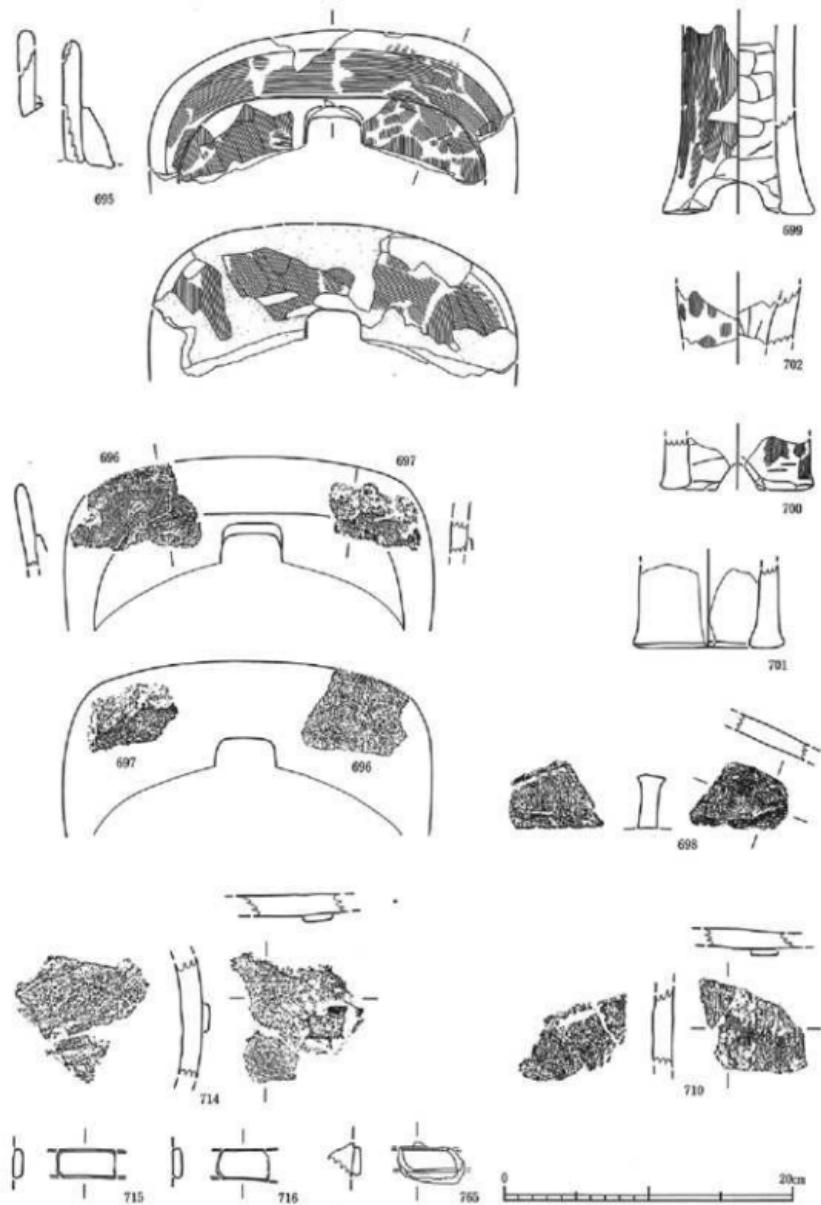
【馬形埴輪】（第93～96図、第33表、図版69～71）

馬形埴輪も遺存状況が悪いうえ、ほとんど接合できず、全体の形状などは明確でない。ただこれらの破片は、いずれも焼成・色調・調整などが類似し、また同一箇所が重なることもなく、同一個体と考えられるものである。したがって、馬形埴輪は1個体のみが確認されたことになる。

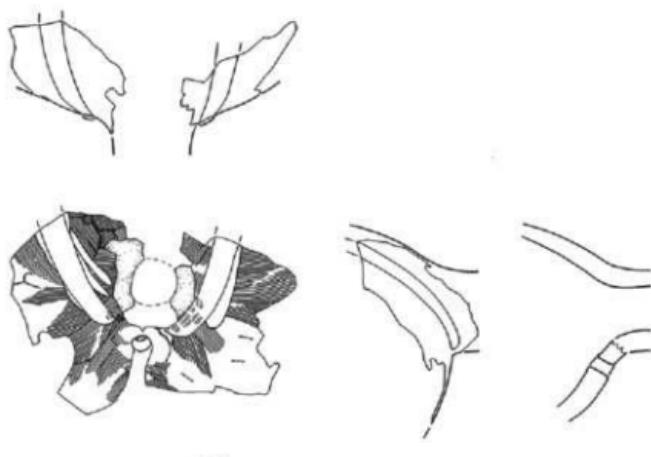
第93図の695～697は鞍の破片である。いずれも粘土の貼り付けによって釘金具を表現し、えぐり込みを入れる。残された部分を観察する限りでは表現の違いなどは見られず、前輪・後輪の区別はできない。699～702は脚部の破片で、いずれも径10.5cm前後と小形で、先の鞍の大きさも合わせて、かなり小形の馬形埴輪であったことが判る。いずれも小破片のため、粘土紐を巻き上げているのか、粘土紐を重ねた板状の粘土を巻き合わせているのかは判断できない。699・700には、脚下端にはほぼ三角形の切込みが見られ、蹄を表していると考えられる。698は剝落した板状の破片で、上端が厚くなるもので、タテガミと考えられる。710・714～716・765は幅1.3～2.2cmの薄い貼り付け、あるいはその剝落痕を有す破片で、繋を表現しているものである。このうち714は繋が十字に交差する部分で、表面の遺存状況が良くないため確実ではないが、辻金具の表現は加えられていないようである。

第94図の712は胴体の尻尾付近の破片である。尻尾のすぐ下には小孔が穿孔されている。尻尾に向かって、両側から2条の凸帯の剝落痕が伸びており、尻繫を表現したものと考えられる。尻尾の両側は、下に行くにつれてもりあがり、これが左右の後ろ足に続いて行くものであろう。胴体の内面には横方向に粘土紐の接合痕が観察される。尻尾は、胴体を作成した後に孔を開け、取り付けたものと思われる。外面調整はナデの後ハケメを施すが、下半はハケメが粗く、ナデを多く残している。711は厚い帶状の破片で、横断面形はM字状に弯曲する。胴体の下側の腹で、前後の脚をつないだ部分の破片と考えられる。

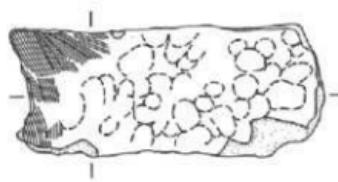
第95図の704は左右の脚にはさまれた付け根の部分と考えられる。図に示した右側が上に上がりていき、この部分の表面の状況が712の尻の部分に良く似ていることから、後ろ脚の付け根の可能性がある。中央の尾根状の部分に接合部が観察され、左右の脚をここでつなげたことを示している。709・720は外面のハケメ調整が粗く、その前段階のナデを残していることが、712の尻の部分と類似することから、胴体の一部であろうと考えられる。719は上に行くにしたがって径が大きくなっている広がる部分の破片で、この破片の下端から下は余り径が変わらなくなるものと考えられる。脚の付け根の部分の破片で、この下端から下が脚の円筒状の部分になって行くものと推定した。708も同様に、径が上に行くにしたがって大きくなるもので、脚の付け根付近の破片と思われる。705は横断面形が梢円形の破片で、この横断面の大きさが先の脚の付け根の704のそれと類似することから、脚の付け根付近の外側に対応するのではないかと



第93図 馬形埴輪(1) -



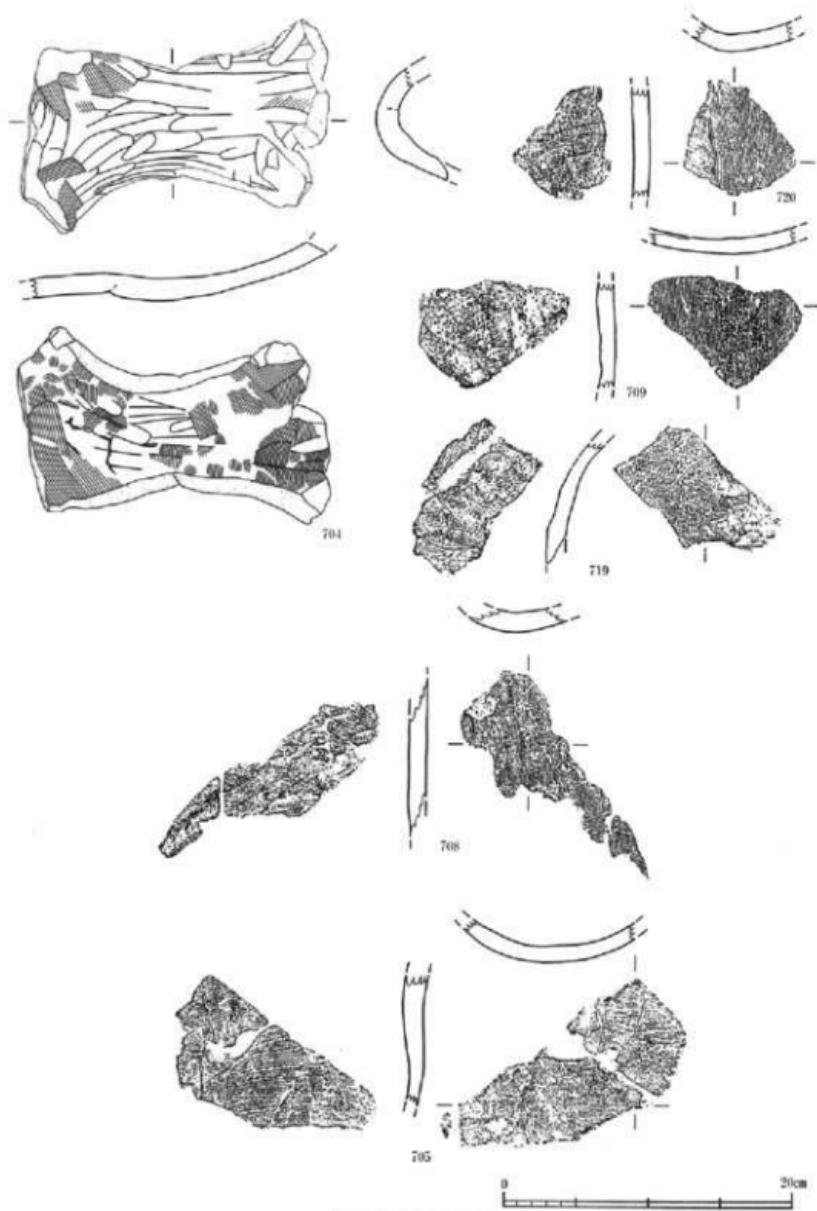
746



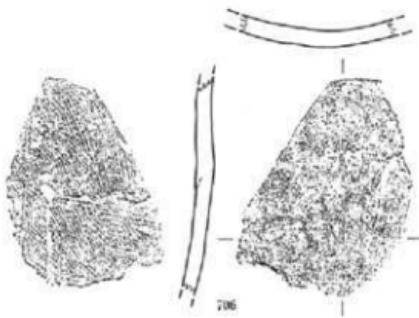
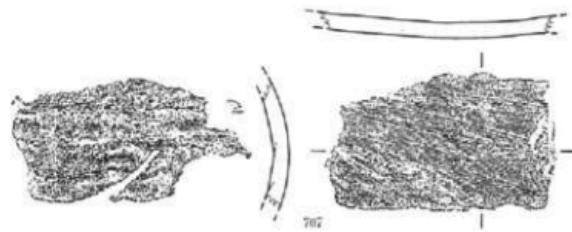
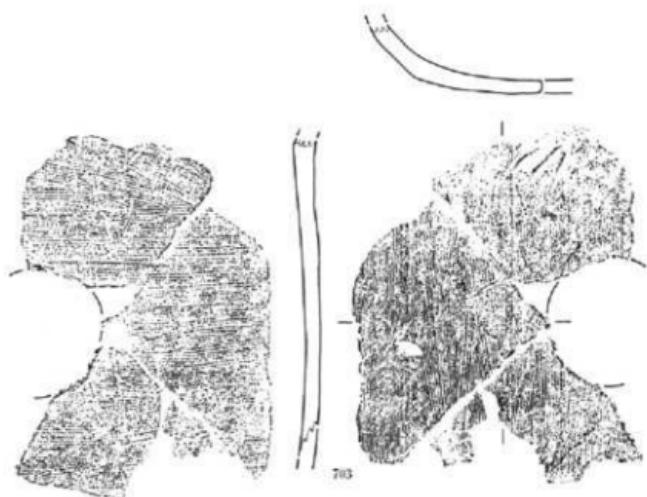
711



第94図 馬形埴輪(2)



第95図 馬形埴輪(3)



0 20cm

第96図 馬形埴輪(4)

登録番号	種類	部類	出土場所	部位	形態の特徴・法量等	製作技術の特徴・文様等	ハケメ		色調
							外側	内面	
695	93	60	1次不明	輪	左右の幅：25.3、中央での高さ：8.5 輪だけでは金具を出す。中央にえぐり 留厚：1.0-1.2 鍍金具部の最大幅：3.5	表面（鍍金具部）：ハケ一端部カゲ・鍍金 具貼付せり鍍金具上ハゲ→えぐり作出 面：ハケ一端部ナデ・基部分にナゲ	14 32	b b2	10YR7/6 明黄褐
696	93	60	1次不明	輪	鍍金具の側面底あり 留厚：0.8-1.0	表面（鍍金具部）：ハケ一端部カゲ・鍍金 具貼付せり 表面：ハケ一端部カゲ	13 b	b b	10YR7/6 明黄褐
697	93	60	I-33N-135-136	輪	鍍金具の側面底あり 留厚：1.1	表面（鍍金具部）：ハケ一端部カゲ・鍍金 具貼付せり 表面：ハケ一端部ナデ	13 b	b b	10YR8/6 黄褐
698	93	60	I-33N-135-136	テナガミ	平底、下側端部は剥落、上側端部は凹側 に膨出、底面：4.8、留厚：1.1-1.9	表面（鍍金具部）：ハケ一端部ナデ 表面：ハケ一端部ナデ	13 b	b b	10YR8/6 黄褐
699	93	60	II-3G-5	輪	下端が現し物は直立、下端に三角形のえ ぐり込み、底面：10.5、残存高：13.2	外側：下端附近直方向ハケ→テナデ 内面：横方向ナデ	13 b	-	10YR8/4 浅黄褐
700	93	60	II-3G-4	輪	直立、下端に三角形のえぐり込み 底面：10.5、残存高：4.5	外側：横方向ナデ 内面：横方向ナデ	13 b	-	10YR8/4 浅黄褐
701	93	60	I-33N-135-136	輪	直立 底面：10.5、残存高：5.7	表面：不明 内面：不明	-	-	c 10YR8/4 浅黄褐
702	93	60	I-33N-135-136	輪	やや平たく 底面高：4.5	外側：横方向ナデ 内面：横方向ナデ	13 b	-	c 10YR8/4 浅黄褐
703	96	71	I-33N-135-136 No.227, No.228	胸	円形門の断面膨張、側面に円形のスカシ 乳孔（径：約0.7）、留厚：1.0-1.5	表面：ハケ 内面：ハケ	10-13 b	9 a	10YR8/6 黄褐
704	95	70	I-33N-135-136 II-3-4	輪付口盤	大きさく見ゆる左右の側付口盤の組 留厚：1.2-1.5	外側：ナデ→ハケ 内面：ナデ→ハケ	13 b	12 a	10YR8/6 黄褐
705	95	71	I-33N-138	輪？	側付け横口近の外側か 留厚：12.5、留底：9.3-1.4	外側：鍍金ハケ→ナデ 内面：横方向ナデ	14 b	9 a	10YR8/6 黄褐
706	96	71	I-33N-138	胸	ゆるく内湾 内面留厚：15.6、留厚：0.9-1.5	外側：鍍金ハケ→ナデ 内面：斜方向ナデ	13 b	9 a	10YR8/6 黄褐
707	96	71	I-33N-131-2	胸	ゆるく内湾、外側に底部内の底部状のナ デ、ナデの外側は底部膨らみ、留厚：1.1	外側：横方向ナデ→ハケ→底部状のナデ 内面：斜方向ナデ→底部状のナデ	13 b	9 a	10YR8/6 黄褐
708	95	70	I-33N-129	輪付口盤	側付け横口外側か 留厚：1.2	外側：横方向ナデ→斜方向ナデ 内面：斜方向ナデ→斜方向ナデ	13 b	8 a	10YR8/6 黄褐
709	95	71	II-3G-4	胸	ゆるく内湾 留厚：1.0-1.2	外側：ハケ一部前にナデ 内面：ナデ	14 b	-	b 7.5YR8/6 黄褐
710	93	60	I-33N-131	蓋	蓋をした白帯の剥落痕のある端片 留底留幅：1.8、留厚：1.0-1.4	外側：ハケ→側面付ナデ 内面：ナデ	13 b	-	b 7.5YR8/6 黄褐
711	94	71	I-33N-135-136	蓋	側縫の開きがない形狀の部分 側縫の具：21.7、右の幅：9.1 留厚：1.4-2.4	外側：ナデ→ハケ 内面：ハケ剥落・ナデ	13 b	-	b 10YR8/6 黄褐
712	94	70	II-3G-4	底	斜面付、底面を出した側付け側面直 底面の下に小孔穿孔（孔径：2.0） 留厚：14.1、現れる左の孔の幅：39.1 底尾外径：5.7、底盤側面留幅：1.3-1.8 留厚：	外側：ナデ→ハケ→側面付→斜面付 内面：ナデ	13 b	-	b 7.5YR8/6 根
713	93	60	I-33N-130 II-3G-4	蓋	蓋の差違する部分、鍍金具の表面無し 留幅：1.8-2.0、高さ：6.5 留厚：1.3-1.5	外側：ハケ→側面付→ナデ 内面：ナデ	13 b	-	b 10YR8/6 明黄褐
715	93	60	I-33N-135	蓋	剥離した部 留厚：2.0、高さ：0.7	外側：ナデ	13 b	-	b 10YR8/6 黄褐
716	93	60	II-3G-4	蓋	剥離した部 留厚：2.0-2.3、高さ：0.7	外側：ナデ	-	-	b 10YR8/6 黄褐
719	95	70	I-33N-125-126	輪付口盤	側付け横口外側 留厚：0.9-1.8	外側：斜方向ナデ→斜方向ナデ 内面：上半ナデ→下半斜方向ナデ	12 b	9 a	10YR8/4 浅食物
720	95	71	I-33N-129	胸	ゆるく内湾 留厚：1.1	外側：ナデ→ハケ 内面：ナデ	14 b	-	b 7.5YR8/6 根
725	93	60	II-3G-5	蓋	胸体部分はわずかに選別 留幅：1.0、高さ：0.5	外側：ナデ	-	-	c 10YR8/4 浅食物

第33表 馬形埴輪観察表

考えられる。

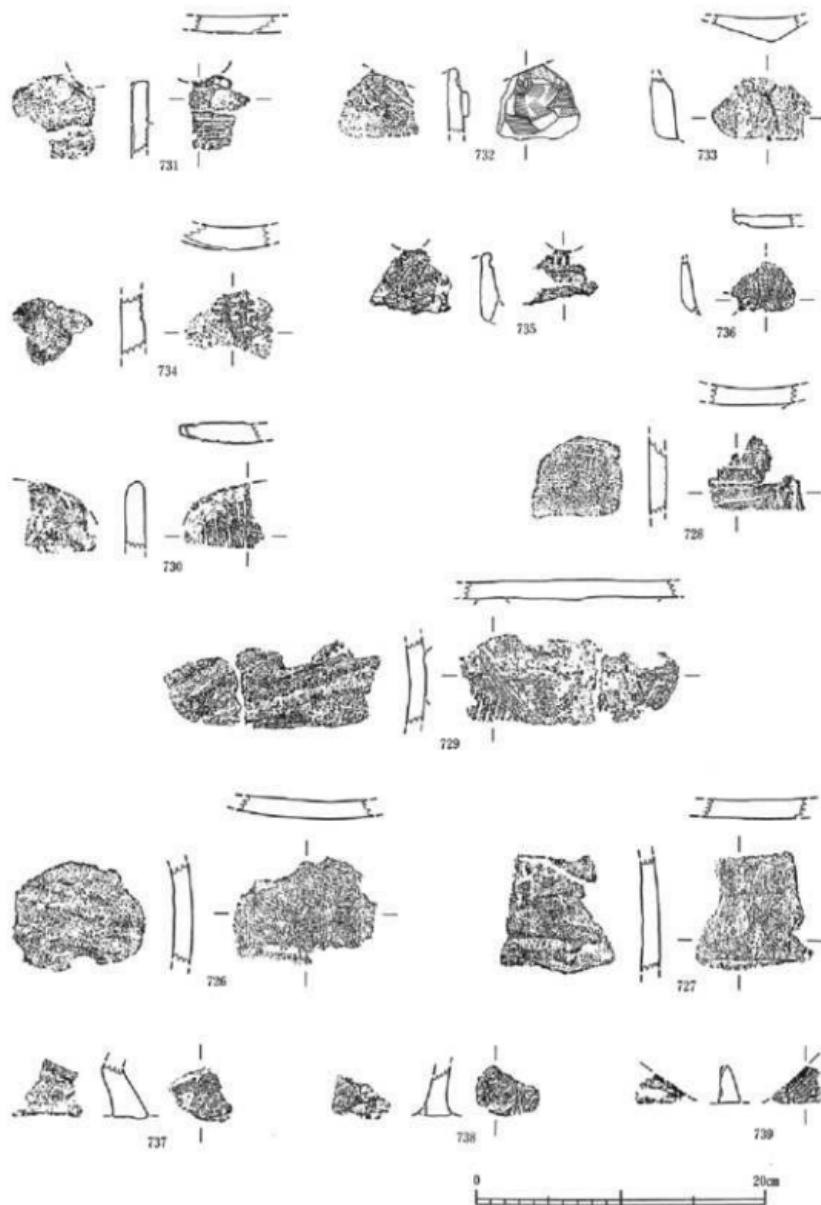
第96図に示したのは、胴体の部分の破片ではないかと考えたものである。703は横断面形が構円に近いもので、円形のスカシ孔を開けている。スカシ孔の上はわずかではあるが外に屈曲している。この方向で、胴体から首にかけての部分になるか、あるいは上下左右が90度ずれて胴体の一部になるものではないかと考えた。707は粘土紐の接合部方向から、図に示した向きになると判断した。外面のハケメ調整が粗くナデの部分を残していることが、712の尻の部分と類似する。外面の一端には沈線状のナデが上下方向に施されている。胴体の一部で、このナデの先に、鞍などの馬具の表現が続くものではないかと思われる。706はゆるく内弯するもので、外面はハケメをナデ消している。調整の具合が他のものと似ていることから、馬形埴輪と考え、胴体のいずれかの部分になるものではないかと推定した。

【種類不明の形象埴輪】（第97～99図、第34・35表、図版72・73）

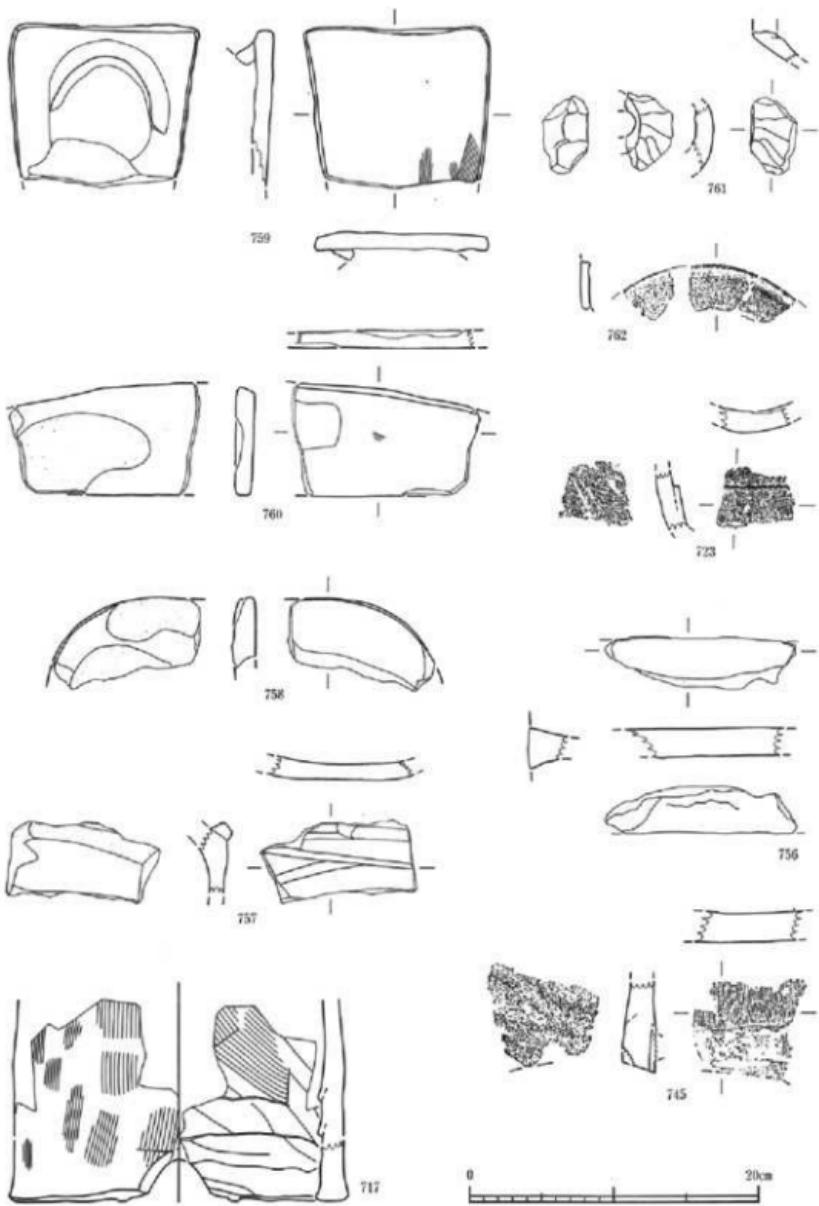
形状などから通常の円筒埴輪・朝顔形埴輪とは考えられないが、どのような形象埴輪に該当するのか不明のものをここに一括した。

第97図に示したものは、焼成・色調などから甲冑形埴輪2・馬形埴輪に類似するものである。中でも728～736は、同一個体の可能性が高い。728・729・731は、平行する沈線を施した上に、粘土板を貼り付けた痕跡のある破片で、逆に剥落面に沈線の陰影を残すものが732である。この732には、表面に長方形の刺突が施されており、同様の刺突は733～736にも見られる。また731・736は小孔を穿つものである。これらは馬形埴輪に表現された馬具を表した可能性を考え、検討を行ったが、確証は得られなかった。他の破片の内、738・739は、馬形埴輪の鞍あるいはタテガミの可能性がある。

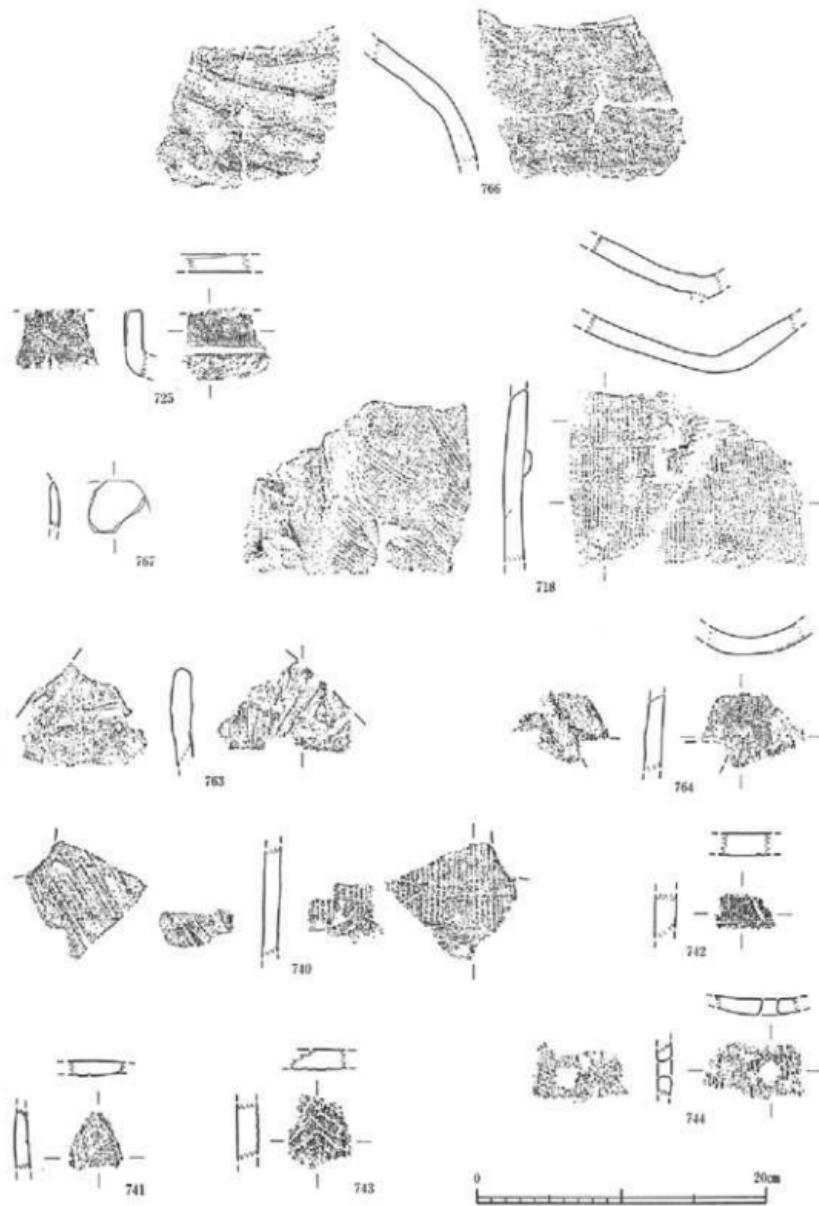
第98図の759は板状の破片で、裏面にU字形に細い粘土紐が付けられているもので、その内側は円形に近い剥落痕となっている。これは女性の人物埴輪の島田櫻が頭部から剥落したものとの可能性が高い。そうであった場合、器財埴輪のセットに、女性の人物埴輪が加わることとなる。ただこの破片は、島田櫻にしては剥落部から先の長さが短いように思われ、この点で問題を残している。760も板状の破片で、焼成・色調が759に類似するものである。761は、動物の鼻を表したものと考えられる。762は円形に薄く張り付けられたものの破片で、衣蓋形埴輪の笠部の筒状の受け部の裾に施された装飾の可能性がある。723は家形埴輪の棟の妻に近い部分かとも考えられる。758は馬形埴輪の鞍かと思われるが、焼成の状況から前項で記した馬形埴輪とは別個体である。この破片には、鞍の釦金具の表現が見られない点で鞍とは断定しなかった。757はほぼ扁平なものが屈曲する部分の破片で、屈曲部に凸帯がめぐる。家形埴輪の一部かとも考えたが確証がもてない。756は剥落した棒状の破片で、家形埴輪の下端にめぐらされ



第97図 種類不明の形象埴輪(1)



第98図 種類不明の形象埴輪(2)



第99図 種類不明の形象埴輪(3)

登録番号	規格番号	回数番号	法土場所	特徴的特徴・法益等	要件達成の特徴・文様等	ハケメ		
						外側	内面	底底
717	96	72	I 306101~	小円筒形、表面に三角形の切欠き、底部：1-2.3 幅：13.3、底存高：13.0、露厚：1.1-2.3	外側：斜方向ハケ 内面：斜方向ナデ→斜方向ハケ	7 al	g b	7.5YR8/4 にぶん黒
				II 8C-4	外側：斜方向ハケ→凸筋貼付 内面：斜方向ハケ→斜方向ナデ	7 al	g b	5YR8/4 にぶん黒
718	99	73	II次1-4	平面的な傾斜する部分と直折する部分 底高：12.4、露厚：1.0-1.5	上部：ハケ→ナデ 下部：ハケ	14 b	14 b	5YR8/4 にぶん黒
				II次1-5	平面的な傾斜する部分 底高：1.3-1.5	14 b	14 b	10YR8/6
720	97	72	II次1-5	△△く骨舟 底高：1.3	外側：斜方向ハケ 内面：斜方向ナデ	13 b	— b	10YR8/6 黒地
				I 306135~	外側：ナデ	14 b	— b	10YR8/6 黒地
721	97	72	II次1-5	ほぼ平坦、外側に斜面 底高：1.1-1.3	外側：ハケ→平行する沈縫→點付け 内面：ハケ	14 b	8 b	10YR8/6 黒地
				I 306125 No.227	ほぼ平坦、外側両端附近に斜面 底高：1.1-1.2	外側：ハケ→平行する沈縫→點付け→點付け の間に沿ってハケ 内面：ナデ	14 b	— b
722	97	72	II次1-5	半球、球状の縦 底高：1.0-1.5	外側：ハケ→ナデ→平行する沈縫 内面：ナデ	14 b	— b	10YR8/6 黒地
				I 306145	半球、外側に斜面 小孔（径：約0.5）を穿つ、底高：1.1-1.2	外側：ハケ→平行する沈縫→點付け→點付け に沿ってナデ・小孔穿孔 内面：ナデ	13 b	— b
723	97	72	II次1-5	半球的な側扁した鏡片、外側に凸縫 3本交差、 長方形状の側扁 0.2×0.6、露高：0.4-1.1 凸縫幅：1.5-2.2、凸縫高：0.4-0.6	外側：ハケ→凸筋貼付→突堤上ナハ・網状 網面に平行する沈縫の跡影	13 b	— b	10YR8/6 黒地
				II次1-4	平面的な鏡底した鏡片、外側に鏡底が3本交差、 長方形状の側扁 0.3×0.6 露高：0.7-1.5	外側：ハケ→網状	13 b	— b
724	97	72	I 306131	△△く骨舟、外側に長方形の側突が3列並ぶ (0.2-0.3)×(0.6-0.7), 露高：1.4-1.7	外側：ハケ→側突 内面：ナデ	14 b	— b	7.5YR8/8 黒地
				II次1-5	半球に側扁した鏡片、小孔を穿つ 外側の小孔は長方形の側突 0.2×0.6 露高：0.7-1.3	外側：ハケ→側突 側面の小孔は平行する沈縫の跡影	14 b	— b
725	97	72	II次1-4	半球的な鏡底した鏡片、外側に鏡底が3本交差、 長方形状の側扁 0.2×0.6、露高：0.4-0.6	外側：ハケ→平行する沈縫→點付け→點付け に沿ってナデ・小孔穿孔 内面：ナデ	13 b	— b	10YR8/6 黒地
				II次1-5	半球的な側扁した鏡片、外側に鏡底 3本交差、 長方形状の側扁 0.2×0.6、露高：0.4-0.6 露高：0.7-1.5	外側：ハケ→側突 内面：ナデ	14 b	— b
726	97	72	II次1-4	半球的な鏡底した鏡片、外側に鏡底 3本交差、 長方形状の側扁 0.2×0.6、露高：0.4-0.6 露高：0.7-1.5	外側：ハケ→側突 内面：ナデ	13 b	— b	10YR8/6 黒地
				II 8C-4	半球的な鏡底が遮蔽する部分、片側の端面は鏡 底、露高：1.3-2.2	外側：ハケ 内面：ナデ→ハケ	13 b	13 b
728	96	72	II次1-5	半球、外側に斜面 底高：1.1-1.3	外側：ハケ→平行する沈縫	14 b	— b	10YR8/4 浅青地
				II次1-6	外側：ハケ→平行する沈縫	14 b	— b	10YR8/6 黒地
729	97	72	I 306125	ほぼ平坦、外側両端附近に斜面 底高：1.1-1.2	外側：ハケ→平行する沈縫→點付け→點付け の間に沿ってハケ 内面：ナデ	14 b	— b	10YR8/4 淡青地
				No.227	ほぼ平坦、外側両端附近に斜面 底高：1.1-1.2	外側：ハケ→平行する沈縫→點付け→點付け の間に沿ってハケ 内面：ナデ	14 b	— b
730	97	72	II次1-5	半球、球状の縦 底高：1.0-1.5	外側：ハケ→ナデ→平行する沈縫 内面：ナデ	14 b	— b	10YR8/6 黒地
				I 306145	半球、外側に斜面 小孔（径：約0.5）を穿つ、底高：1.1-1.2	外側：ハケ→平行する沈縫→點付け→點付け に沿ってナデ・小孔穿孔 内面：ナデ	13 b	— b
732	97	72	II次1-5	半球的な側扁した鏡片、外側に凸縫 3本交差、 長方形状の側扁 0.2×0.6、露高：0.4-1.1 凸縫幅：1.5-2.2、凸縫高：0.4-0.6	外側：ハケ→凸筋貼付→突堤上ナハ・網状 網面に平行する沈縫の跡影	13 b	— b	10YR8/6 黒地
				II次1-4	平面的な鏡底した鏡片、外側に鏡底 3本交差、 長方形状の側扁 0.3×0.6、露高：0.4-0.6	外側：ハケ→網状	13 b	— b
733	97	72	II次1-4	半球的な鏡底した鏡片、外側に鏡底 3本交差、 長方形状の側扁 0.3×0.6、露高：0.4-0.6	外側：ハケ→網状	13 b	— b	7.5YR8/8 黒地
				II次1-5	半球的な側扁した鏡片、外側に鏡底 3本交差、 長方形状の側扁 0.3×0.6、露高：0.4-0.6 露高：0.7-1.5	外側：ハケ→側突 内面：ナデ	14 b	— b
734	97	72	I 306131	△△く骨舟、外側に長方形の側突が3列並ぶ (0.2-0.3)×(0.6-0.7), 露高：1.4-1.7	外側：ハケ→側突 内面：ナデ	14 b	— b	7.5YR8/8 黒地
				II次1-5	半球に側扁した鏡片、小孔を穿つ 外側の小孔は長方形の側突 0.2×0.6 露高：0.7-1.3	外側：ハケ→側突 側面の小孔は平行する沈縫の跡影	14 b	— b
735	97	72	II次1-4	半球に側扁した鏡片、小孔を穿つ 外側の小孔は長方形の側突 0.2×0.6 露高：0.7-1.3	外側：ハケ→側突 側面の小孔は平行する沈縫の跡影	14 b	— b	7.5YR8/6 淡青地
				II次1-5	半球に側扁した鏡片、小孔を穿つ 外側の小孔は長方形の側突 0.2×0.6 露高：0.7-1.5	外側：ハケ→側突 側面の小孔は平行する沈縫の跡影	14 b	— b
736	97	72	II次1-4	半球に側扁した鏡片、小孔を穿つ（径：約0.5）、 外側の小孔は長方形の側突 0.2×0.6、露 高：0.7-1.5	外側：ハケ→側突 内面：ナデ	14 b	— b	7.5YR8/8 黒地
				II 8C-4	半球に側扁した鏡片、小孔を穿つ（径：約0.5）、 外側の小孔は長方形の側突 0.2×0.6、露 高：0.7-1.5	外側：ハケ→側突 内面：ナデ	13 b	— b
737	97	72	II 8C-4	半球に側扁した鏡片が遮蔽する部分、片側の端面は鏡 底、露高：1.3-2.2	外側：ハケ 内面：ナデ→ハケ	13 b	13 b	10YR8/4 浅青地
				II次1-3	外側：ハケ	14 b	— b	10YR8/4 浅青地
738	96	72	II次1-4	半球、外側に斜面 底高：1.0-1.2	外側：ハケ	14 b	— b	10YR8/4 浅青地
				II次1-5	半球、外側に斜面 底高：1.0-1.2	外側：ナデ	13 b	— b
739	97	72	I 306132	半球、球状の鏡片の側扁の部分、馬形場 の側扁の可能性、露高：1.0-1.2	外側：ハケ 内面：ナデ	13 b	— b	10YR8/4 浅青地
				No.227	半球に側扁した鏡片と同様の鏡片に側扁化の露高 底存高：8.5、露高：0.8-1.1	外側：ナデ→カクナデ(凸筋貼付?)→スカラシ孔穿孔(内面)・隙間 内面：ナデ	5 3-4 a3	— c
740	99	72	II次1-4	半球に側扁した鏡片と同様の鏡片に側扁化の露高 底存高：8.5、露高：0.8-1.1	外側：ナデ→カクナデ(凸筋貼付?)→スカラシ孔穿孔(内面)・隙間 内面：ナデ	5 3-4 a3	— c	10YR8/4 淡青地
				II次1-5	半球、外側に凸縫を窺む鏡片 底高：0.7-1.0	外側：ハケ→網状 内面：ナデ	13 b	— c
741	99	72	II次1-5	半球、外側に凸縫を窺む鏡片 底高：0.7-1.0	外側：ハケ→網状 内面：ナデ	13 b	— c	10YR8/6 黒地
				II次1-6	半球、外側に凸縫を窺む鏡片 底高：0.7-1.0	外側：ナデ→網状 内面：ナデ	— —	c
742	99	72	II次1-5	半球、外側に凸縫を窺む 底高：0.7-1.0	外側：ナデ→網状 内面：ナデ	— —	c	10YR8/4 浅青地
				II 8C-4	半球、外側に凸縫を窺む 底高：0.7-1.0	外側：ナデ→網状 内面：ナデ	— —	c
743	99	72	I 306108~	半球、外側に山形を窺む鏡片 底高：1.3-1.5	外側：ナデ→網状 内面：ナデ	— —	c	7.5YR8/6 明暁
				II 8C-4	半球、外側に山形を窺む鏡片 底高：1.3-1.5	外側：ナデ→網状 内面：ナデ	— —	c
744	99	72	I 306108~	内面崎輪と同様の感覚に小孔を穿つ 孔径：1.0、露高：0.8-1.1	外側：ナデ→ハケ→小孔穿孔 内面：斜方向ハケ	6 2	6 2	7.5YR8/8 黒
				II 8C-4	内面崎輪と同様の感覚に小孔を穿つ 孔径：1.0、露高：0.8-1.1	外側：ナデ→ハケ→小孔穿孔 内面：斜方向ハケ	6 2	6 2
745	98	72	II次1-3	球状の鏡片、斜面の端面は側扁 露高：1.1-2.9	露面裏面：ナデ	— —	c	10YR8/7 にぶん黒
				II 8C-4	半球に側扁する部分、側扁部端面に凸 縫、露高：1.0-1.9 凸縫上縫：0.8-0.9、下縫：1.5、露高：0.9	外側：ナデ→凸筋貼付 内面：ナデ	— —	c
746	98	72	II次1-3	半球、上側の端面は球状、馬形場端面の側の可能 性、側扁部の側扁は見られず 最大上縫：4.8、露高：1.6	露底面：不明、部分的にハケ側扁	— —	c	10YR8/4 浅青地

第34表 種類不明の形象埴輪観察表(1)

登録番号	地図番号	出土場所	形態の特徴・法量等	操作法の特徴・支撐等	ハケメ		焼成	色調
					外側	内側		
759	96	72	I 次No138	平坦、表面に剥落痕、側面板の側面に鉛土貼付材、女性の人物模様の島田屋の可逆性、先端幅: 13.4、厚さ: 0.9-1.3	表面: ハケ 裏面: ナデ	14 b	-	c 7.5VR/3 黄緑
760	98	72	I 次No119-3	平滑 最大幅: 7.6、厚さ: 1.1-1.3	表面: 不明、部分的にハケ痕跡	-	-	c 10VR/7 明黄
761	98	72	不明	先端に小孔を持つ、舟形切端の鼻の可逆性 舟底: 1.1-8、厚さ: 0.3-1.4	表面: ナデ-小孔穿孔 裏面: ナデ-小孔穿孔	-	-	b 10VR/6 黄緑
762	98	72	I 次No201	平滑な削落した断面、外側の端部は円形にまわる、舟底: 0.3-0.6	表面: ハケ-ナデ 裏面: ハケ-動植物	14 b b	14 b 5VR/6 黄	
763	99	73	I 次No138	前筋に斜めか斜形切端の舟形の内面側の最上端、厚さ: 1.1-1.5	表面: ナデ 裏面: ナデ	-	-	b 7.5VR/6 黄
764	99	23	II 次E-4	小円筒形、半円形のスカシ孔を穿つ 厚さ: 1.1-1.3	表面: タテハナースカシ孔穿孔(半円形) 裏面: 調方向ナデースカシ孔穿孔	14 b	-	b 7.5VR/6 黄
765	99	23	II 次D-10-12	ゆるく内側 厚さ: 1.2-1.4	表面: タテハナースカシ孔穿孔(半円形) 裏面: 調方向ナデ	8 8	-	b 7.5VR/4 にじい-緑
767	99	23	I 次No148	薄く削落した断片 厚さ: 0.4-0.6	表面: ナデ	-	-	b 5VR/4 にじい-緑

第35表 種類不明の形象埴輪観察表(2)

た凸帯の可能性がある。717は直径23cmほどの小円筒形の破片で、焼成・色調からは家形埴輪7(円形柱建物)に類似し、円形柱の下端部かと考えたが、馬形埴輪の脚部と同様の切込みが見られる。しかし馬形埴輪の脚部とは径の差が大きく、このためいづれとも判断しかねた。754は平坦な破片に凸帯の剥落痕をもつもので、凸帯の下側に切込みが見られる。この凸帯と切込みとの間には、ヨコハケが観察される。

第99図の766は朝顔形埴輪の肩部に類似するが、外面調整にハケメの後ナデが施されている。あるいは衣蓋形埴輪の笠部になるかとも考えたが、屈曲の様子が異なることから判断しかねる。725は偏平な破片が屈曲するものである。767はほぼ円形の薄く剥落した小破片で、貼付けによってなんらかの装飾を表現したものと考えられる。718は平坦なものが60度ほど屈曲するもので、横方向に凸帯の剥落痕が残り、さらに屈曲部で横方向の凸帯の上に凸帯が伸びる。763は鶴形埴輪あるいは唐形埴輪の後ろに付く円筒部の上端の破片である。764は直径12cmほどの小円筒の破片で、家形埴輪7(円形柱建物)に焼成・色調が類似する。ただしこの破片には半円形になると思われるスカシ孔があげられており、柱とは考えがたい。740~743は線刻を有する破片である。740は通常の円筒埴輪と形態の上では変わりはない。その他は偏平な破片に線刻を施すものである。744は小孔を穿つもので、その点以外は通常の円筒埴輪と特に変わることはない。

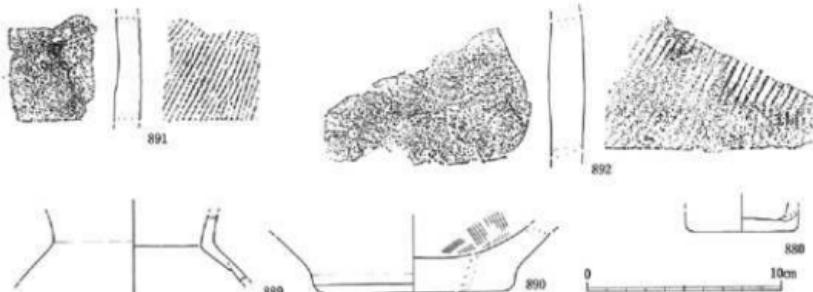
第2節 墳輪以外の遺物

墳輪以外の遺物としては、須恵器・土師器・縄文土器（？）・陶器・石器がある（第100・101図、第36・37表、図版74）。第1次調査の際に、墳頂の深みから出土したとされる砾石は、保管されていた資料中には見つからなかった。

須恵器は2点出土している。いずれも壺の体部の小破片で、焼成は良好である。891は外面が細かな平行タタキで、内面はナデられており當て具痕は観察できない。892は外面が粗い平行タタキで、内面はナデが施されているが、同心円文の當て具の痕跡がわずかに残っている。

土師器は3点出土している。いずれもロクロを用いない。890は壺あるいは壺の底部で、底部は突出する。外面は風化のため不明であるが、内面にはハケメが観察される。889は頸部の破片で壺になるものと思われる。表面の風化が著しく、内外面とも調整は不明である。882は図示しなかったが、壺の体部を見なされる小破片で、外面調整にナデが施されている。

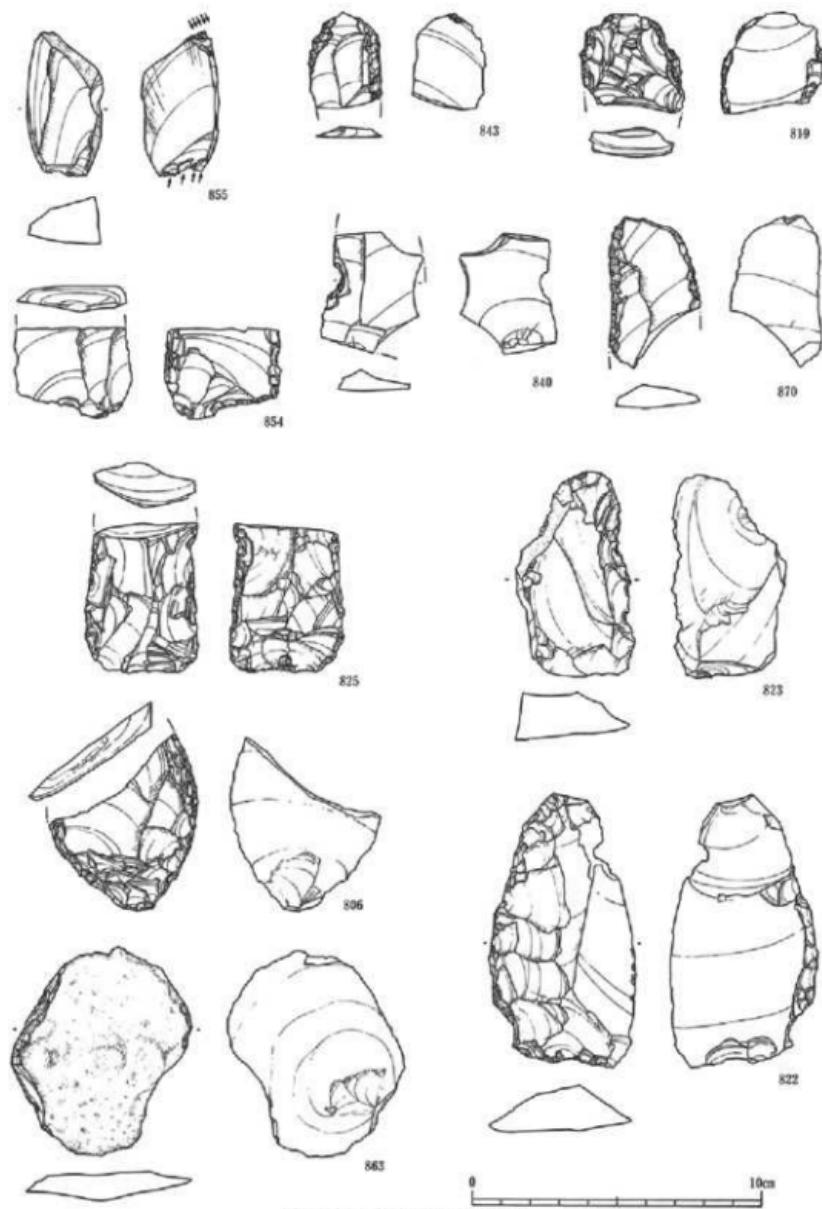
縄文土器かと考えられるものは8点出土している。その内4点が、北トレンチの深掘り区の旧表土から出土している。いずれも小さい破片であるうえ、保存が悪く地文が判るものも無い。



第100図 墳輪以外の遺物(1)

遺物番号	測量番号	回復番号	出土場所	種類	特徴
886	100	74	II次A・B-4	縄文土器?	細部
881	-	-	II次1-4	縄文土器?	細片
882	-	-	II次北トレンチ上半	土師器	体部片、外面ナデ、内面不明
883	-	-	II次C-4	縄文土器?	細片
884	-	-	II次不明	縄文土器?	細片
885	-	-	II次北トレンチ深掘り剖表土	縄文土器?	細片
886	-	-	II次北トレンチ深掘り剖表土	縄文土器?	細片
887	-	-	II次北トレンチ深掘り剖表土	縄文土器?	細片
888	-	-	II次北トレンチ深掘り剖表土	縄文土器?	細片
889	100	74	II次北トレンチ上半	土師器	細部、内外面風化のため不明
890	100	74	I次N-158	土師器	底部、外側不明、内面ハケメ
891	100	74	II次J-2	須恵器	黒、体部、外面平行タタキ、内面ナデ
892	100	74	II次1-4	須恵器	黒、体部、外面平行タタキ、内面ナデ・当て具痕残る
893	-	-	II次不明	脚部?	細片
894	-	-	II次不明	脚部?	底部、近世以降
895	-	-	II次D-10~12	脚部?	口縁部、近世以降

第36表 墳輪以外の遺物観察表(1)



第101図 増輪以外の遺物(2)

登録番号	同属番号	出土地所	器種	備考	登録番号	同属番号	出土地所	器種	備考
881	—	日次A・B-4	刮片		839	—	日次I-4	刮片	
882	—	日次A・B-4	板状刮片	840と同一母岩	840	101	日次I-4	ノッチ	
883	—	日次南トレンチ下季	刮片		841	—	日次I-4	板状刮片	
884	—	日次南トレンチ下季	板状刮片		842	—	日次I-5	石塊	
885	—	日次南トレンチ下季	tool未完成品		843	101	日次I+J-4	薄形刮片	
886	101	24	日次南トレンチ下季	板状刮片	844	—	日次不明	刮片	
887	—	日次南トレンチ下季	刮片?		845	—	日次不明	刮片	
888	—	日次C-4	刮片		846	—	日次不明	刮片	
889	—	日次C-4	刮片		847	—	日次不明	刮片	
890	—	日次C-4	刮片		848	—	日次不明	刮片	
891	—	日次C-4	刮片		849	—	日次不明	刮片	
892	—	日次E-4	刮片		850	—	日次不明	刮片	
893	—	日次南トレンチ上季	石質破片		851	—	日次不明	板付スボール破片	
894	—	日次南トレンチ上季	石質破片		852	—	日次不明	刮片	
895	—	日次南トレンチ上季	刮片		853	—	日次不明	薄形刮片	
896	—	日次南トレンチ上季	刮片		854	101	日次不明	石塊	
897	—	日次南トレンチ上季	板状刮片		855	101	日次不明	ビニス・エスキエ	
898	—	日次南トレンチ上季	刮片		856	—	日次不明	tool未完成品	火ハネ有
899	101	—	日次南トレンチ上季	石塊	857	—	日次不明	刮片	
900	—	日次南トレンチ上季	板状刮片		858	—	不明	刮片	火ハネ有
901	—	日次南トレンチ上季	刮片		859	—	I次Cトレンチ	刮片	
902	101	24	日次南トレンチ上季	石塊	860	—	I次南A01～112	薄形刮片	
903	101	24	日次南トレンチ上季	板状刮片	861	—	I次南A01～112	刮片	
904	—	日次D-10	刮片		862	—	I次南A01～112	刮片	
905	101	24	日次D-10～12	石塊	863	101	I次南A01～112	薄形刮片	
906	—	日次G-4	石塊		864	—	I次南A08	薄形刮片	
907	—	日次G-4	ノッチ		865	—	I次南A08	刮片	
908	—	日次G-4	刮片		866	次前			
909	—	日次G-4	tool未完成品		867	—	I次南A138	刮片	
910	—	日次I-4	刮片		868	—	I次南A132	薄形刮片	
911	—	日次I-4	刮片		869	—	I次南A217	薄形刮片	
912	—	日次I-4	刮片		870	101	I次南A24	薄形刮片	
913	—	日次I-4	刮片		871	—	日次不明	石核片	
914	—	日次I-4	石塊	火ハネ有	872	—	日次不明	石核片	871と組合
915	—	日次I-4	石質破片		873	—	不明	tool	
916	—	日次I-4	石質破片		874	文通			
917	—	日次I-4	刮片		875	—	日次J-3	磨石	西周鉄器
918	—	日次I-4	tool未完成品		876	—	日次I-4	磨石片	

第37表 塙輪以外の遺物観察表(2)

そのため縄文土器と断定できる根拠もないが、土師器と比較すると焼成が著しく悪く、また石器の内容から縄文土器であろうと考えた。880は底部の破片で、底径5.8cm、わずかに残存する部分からあまり開かず立ち上がるものと考えられる。その他のものは、ごく小さな細片である。

陶磁器は3点確認されたが、いずれも近世以降のものである。

石器は墳丘の各所から出土しているが、いずれも原位置を保ったものではない。内容は第37表にゆずるが、確実に旧石器時代に属すると考えられるものはない。縄文時代の可能性が高いものと思われる。刮片石器の石材は、全て頁岩である。

第5章 考察

第1節 円筒埴輪・朝顔形埴輪の検討

考察にあたって、最初に、出土遺物の大半を占める円筒埴輪・朝顔形埴輪の内容を検討することとした。順序は逆になるが、まず朝顔形埴輪から見ていくこととする。

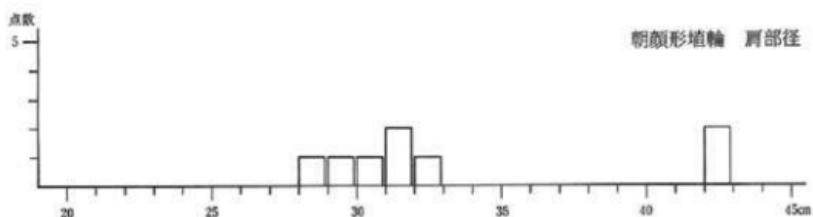
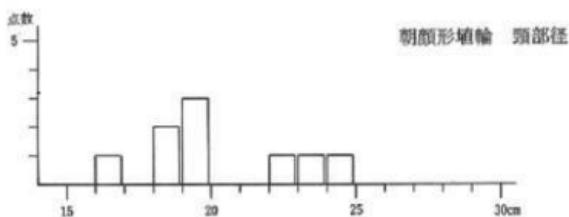
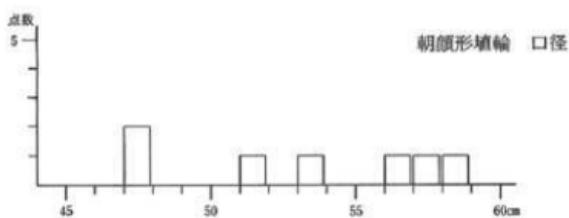
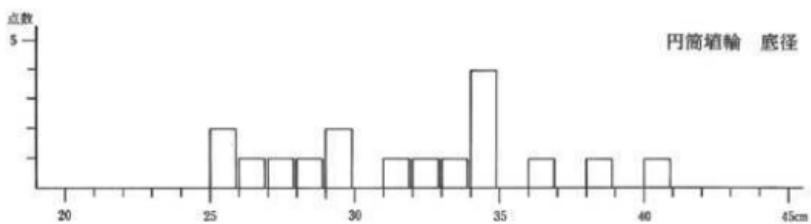
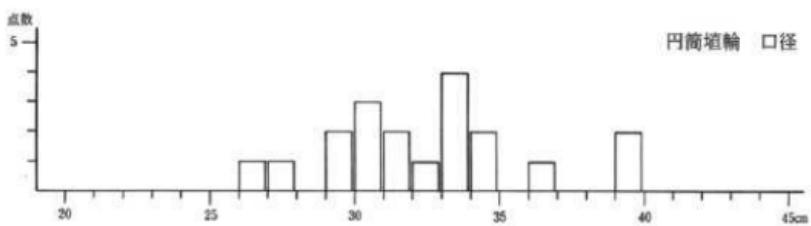
第4章の出土遺物の報告においても指摘したように、菅沢2号墳出土の朝顔形埴輪は、いずれの個体も形態と製作技法の上で、基本的な特徴は共通している。その一方、法量の点から、大小2類に分けられることも、先に指摘した。その内容をここであらためて要約すると、以下の通りとなる。

- ・口径は分散が大きく明瞭ではないが、頸部径と肩部最大径では、明確に大小2群に分かれる（第102図）。
- ・各段の高さを比較すると、第4段より上が、大型のものが小型のものより若干大きく作られている。
- ・器壁の厚さを円筒部で比較すると、大型のものが1.5cm前後であるのに対して、小型のものは1.1cm前後で、他の部位でも同様に大型のものの方が厚い。
- ・器面調整に使われているハケメは、小型がa類であるのに対し、大型ではb1類のみが確認される。
- ・凸帯も大型のものの方が太く、円筒部ではb類のみが確認できる。
- ・2次調整のB種ヨコハケは、この大型の朝顔形埴輪の一部にのみ認められる。

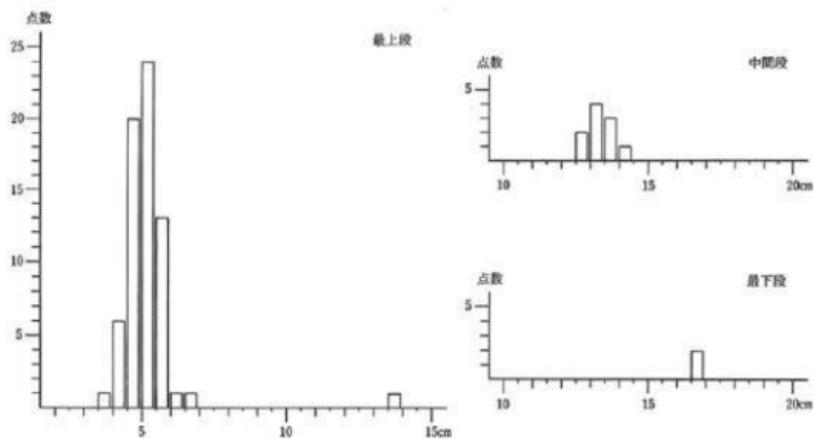
以上の点をもとに、小型のものを朝顔形埴輪1類、大型のものを朝顔形埴輪2類とする。さらに、朝顔形埴輪2類の内、円筒部の中間段が1次調整タテハケのみのものを2a類、2次調整B種ヨコハケを施すものを2b類と細別する（第105図）。

この朝顔形埴輪2類に見られる、ハケメb1類・円筒部凸帯b類・円筒部器厚1.5cm前後という特徴は、円筒埴輪・朝顔形埴輪の区別が判明する個体では、円筒埴輪にはいずれの特徴も見いだせず、朝顔形埴輪2類にのみ見られる。したがって、整理の進め方の方針上、円筒埴輪に含めて第4章で報告した資料の内、中間段の013・232・236・259と底部の213・229は、上記の特徴を有することから、朝顔形埴輪2類の円筒部である可能性が極めて高いものと考えられる。そうであると、2次調整B種ヨコハケが施されるのは、いずれも朝顔形埴輪2類であり、円筒埴輪であることが確実なもので、2次調整を施すものは存在しない。よって次の円筒埴輪の検討では、これら朝顔形埴輪2類となる可能性が強い個体は除外して考えることとする。

円筒埴輪は、全体に遺存状況が悪いため、口縁部が残存する資料を中心に検討する。円筒埴



第102図 円筒埴輪・朝顔形埴輪各部の径の分布



第103図 円筒埴輪各段の高さの分布

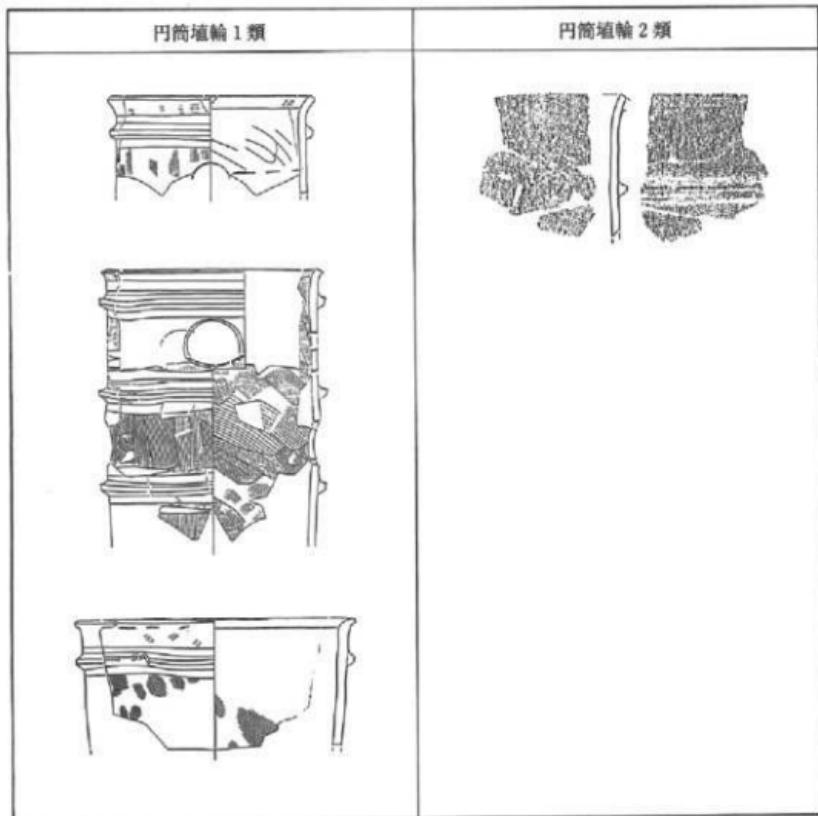
輪を、まず口縁部形態で見ると、圧倒的多数は、口縁端部より5cm前後のところに凸帯をめぐらす、最上段の狭いものである。それに対し、221と244の2点だけであるが、口縁端部の外面に凸帯をめぐらすものがあり、まずこれらを円筒埴輪2類として分離することとし、残る最上段の狭いものを、円筒埴輪1類とする。

この最上段の狭い円筒埴輪1類には、法量や細部の製作技法の点でかなりのバラエティーが見られるため、次にその点について検討してみたい。まず各段の高さを見ると（第103図）、最上段は5cm前後に集中し、ほとんどが4～6cmの間に入る。右側に1点のみ離れているのは、円筒埴輪2類である。厳密には円筒埴輪1類のものばかりとは決められないが、中間段の高さも13.5cm前後に集中している。最下段の資料は少ないが、16.5cm前後に集まり、翫形埴輪1の円筒部の最下段の高さも同様である。以上の点からは、これらの円筒埴輪は、形態の上では強い共通性を有していると判断される。一方、口縁部と底部の径を見ると（第102図）、かなりの分散が見られる。ただし、底径に示したうちの、右側に分布する2点は、先の検討から朝顔形埴輪2類の底部と考えられるものである。口径では、39～40cmのところに2点やや離れて分布する（203・205）のが注意される。それ以外は、いくつかのグループに分かれそうではあるが、資料数が少ないため明確ではない。また、口縁部の細部形態・口縁部内面調整・凸帯・ハケメの特徴の組合せから、グルーピングを試みたが、明瞭な対応関係は見いだせなかった。ただ、口径の特に大きい2点は、両者とも端部を小さく外に屈折させるものである。口径の判明する資料では、端部を小さく屈折させるものは他には認められないため、対応関係を有する可能性がある。底径では、34～35cmを中心とするグループと、30cm以下の小さいグループとに分かれ

そうであるが、これも資料数が少なく、両者を明確に区分することは困難である。ただし、最下段の外面調整に、縦方向のナデを用いるものは、底径が大きい傾向がある。

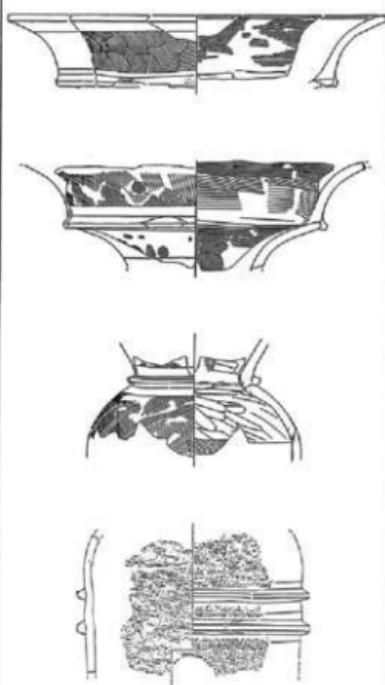
以上の点からは、法量によっていくつかのグループに細分できる可能性はあるものの、一貫した基準で分類することは容易でない。特に今回の資料は、全体に遺存状況が悪く、径の復元もほとんどが4分の1以下しか残存していないものから行っており、歪みを考慮すると復元値の信頼度もさほど高いとは考え難い。したがってここでは、円筒埴輪1類は、法量によって細分される可能性を指摘するにとどめ、一括しておきたい（第104図）。

これら以外に特殊なものとしては、中間段のスカシ孔が方形のもの（228）、中間段の外面調整がナデのもの（218・233）、底部の外面調整にヨコハケが使われているもの（029）があるが、

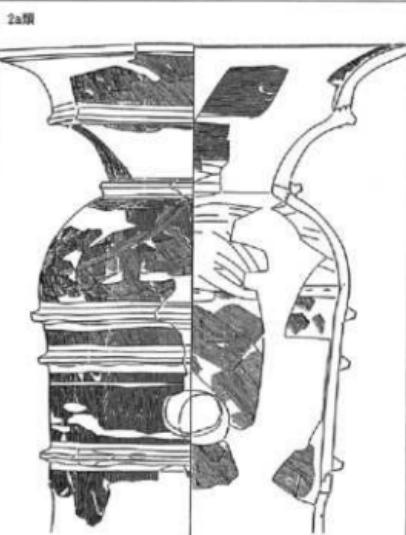


第104図 円筒埴輪の分類

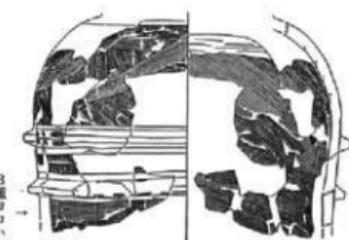
朝顔形埴輪 1類



朝顔形埴輪 2類



2b類



第105図 朝顔形埴輪の分類

他の部位との関係は不明で論じられない。

第2節 塙輪から見た菅沢2号墳の築造年代

菅沢2号墳の出土遺物の内、古墳の築造年代を検討しうる遺物は埴輪しか存在しない。須恵器・土師器もわずかに出土しているが、いずれも細片で時期を確定し難いうえ、出土状況も明確ではない。ここでは、埴輪の内容の検討から菅沢2号墳の築造年代を考えたい。

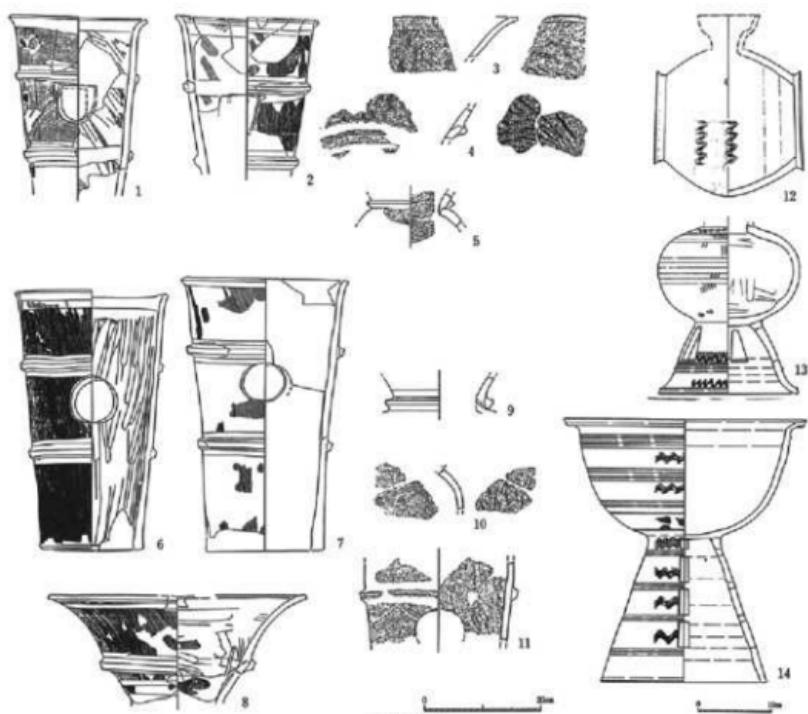
近年、円筒埴輪の編年研究は各地で盛んであるが、早くに森俊二郎氏が指摘したように（森俊二郎：1973）、埴輪の詳細な編年にあたっては、その系統関係を識別していくことが必要であると考えられる（結城慎一・藤沢敦：1987）。その際、本古墳出土埴輪と類似し、系統関係が追求できるような埴輪が近隣地域に存在すれば、それらとの比較を行うべきである。しかし次節で詳しく検討するように、菅沢2号墳出土埴輪に類似する埴輪は、今のところ東北地方には知られていない。したがって、全国的な埴輪の変遷観に照らして、本古墳出土埴輪の年代を限定していく方法を取ることとする。

菅沢2号墳の円筒埴輪・朝顔形埴輪の特徴の内、年代を考える上で問題となる点を抜き出せば、以下の諸点があげられる。

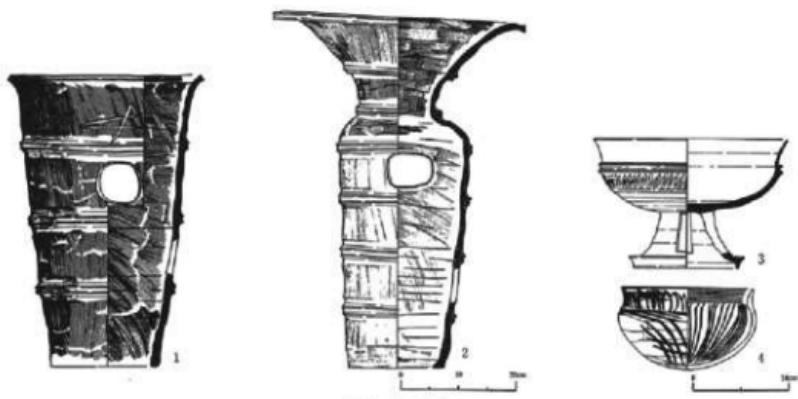
- 1)円筒埴輪はいずれも小工程を繰り返す製作方法によっており、一挙巻き上げに伴う底部調整は見られない。
- 2)外面調整は大型の朝顔形埴輪の一部（朝顔形埴輪2b類）に2次調整B種ヨコハケが認められる以外、すべて1次調整タテハケのみである。
- 3)焼成は形象埴輪も含む全てが窯窓焼成である。
- 4)凸帯はいずれも突出度の高いM字形を呈するもので、退化していない。

以上の点から、川西宏幸氏の円筒埴輪編年に対比させると（川西宏幸：1978）、一部にIV期の段階のものを含むが、ほとんどがV期の段階に相当するものである。底部調整を欠くが、これは東日本のV期の段階の埴輪に多く見られる現象であり、特に問題とはならない。

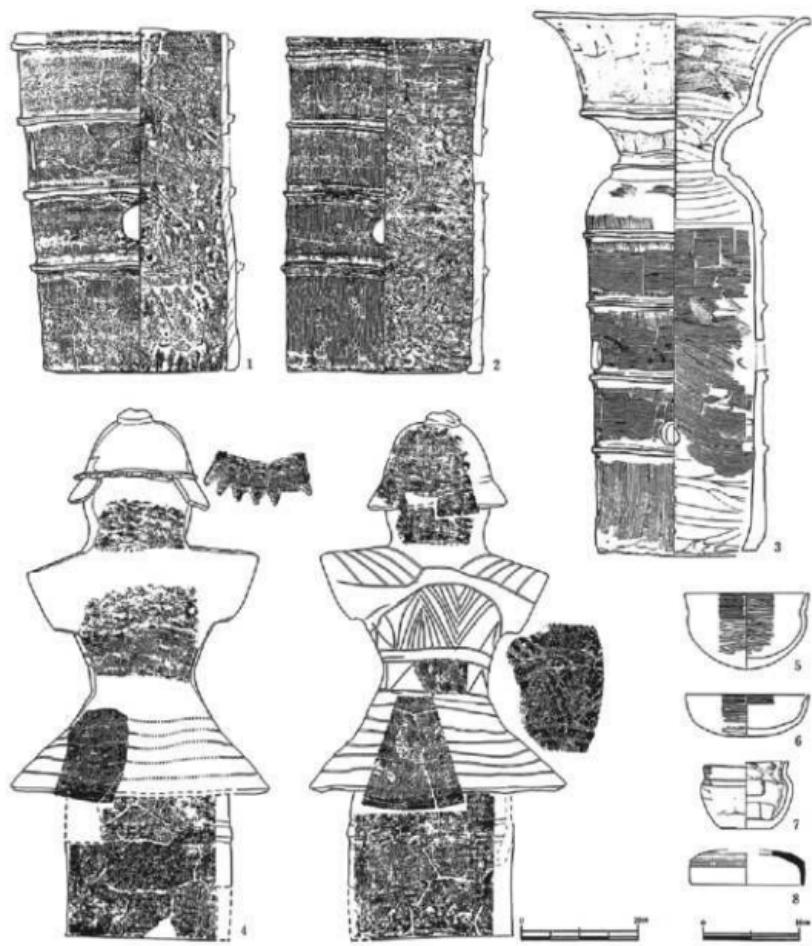
東北地方で当該期の埴輪に他の遺物が伴って出土している古墳としては、宮城県仙台市裏町古墳、福島県泉崎村原山1号墳、福島県本宮町天王塚古墳があげられる。裏町古墳では円筒埴輪・朝顔形埴輪とともに須恵器樽形壺・台付壺・器台が出土している（第106図、伊東信雄他：1974、結城慎一・藤沢敦：1987）。円筒埴輪・朝顔形埴輪では、半円形スカシ孔を有するA群（第106図1～5）の一部に2次調整B種ヨコハケが存在する。円形スカシ孔をあけるB群の円筒埴輪・朝顔形埴輪（同6～11）には、2次調整は全く認められず、全て1次調整タテハケのみである。須恵器は、その中に生焼けのものを含むことから在地製品の可能性があり、厳密な時間的併行関係については問題が残るが、ほぼ陶邑編年TK208型式の段階に相当する。原山1号墳



裏町古墳



原山1号墳



第107図 福島県天王塚古墳出土遺物

では、円筒埴輪には2次調整は見られず、全て1次調整タテハケのみである(第106図、鈴木啓・辻秀人他:1982)。朝顔形埴輪には、最下段の底面付近の外面に横方向のハケメが施されるが、これは変形を部分的に整えるものと考えられ、一般的な2次調整とは認め難い。ここでは須恵器無蓋高环と土師器環が出土しており、前者は陶邑編年TK23型式の段階に相当するものである。後者は佐平林式のもので、須恵器ではTK23型式からTK47型式ごろに相当するものと考えられる。天王塚古墳では、円筒埴輪・朝顔形埴輪とともに、ほとんどが2次調整B種ヨコハケ

を施しているが、2次調整を省略し1次調整タテハケのみのものがわずかに存在する（山崎義夫・大河内光夫：1984）。周溝底面から土師器が3点出土しており、これらは引田式に属すると考えられる。周溝の確認面ではあるが、須恵器壺蓋が出土しており、これについては東海地方の東山48号窯との共通性が指摘されており、陶邑編年ではON46号窯の段階に比定されている。いまだ少ない例であるが、以上の例からは、東北地方にあってもTK208型式からTK23型式の間で、2次調整のヨコハケはおむね姿を消していくものと考えられる。このことは、埼玉県内での共伴する土師器・須恵器の検討から、TK208～TK23型式の間に2次調整のヨコハケが消滅していくという意見や（坂本和俊：1982）、栃木県でもタテハケのみの円筒埴輪で構成される小山市宮内2号墳で、TK208型式の須恵器大型埴輪が伴っていることなど（石川均他：1985、今津節生他：1988）、関東地方での様相と基本的に共通するものである。したがって菅沢2号墳の円筒埴輪・朝顔形埴輪からは、TK208型式の時期を上限とすることができ、かつV期の段階の中でも、古い特徴を有していると考えられる。

一方、菅沢2号墳では器財埴輪を中心とする、豊富な形象埴輪が出土している。形象埴輪の中でも器財埴輪については近年研究が進展し、いくつかの変遷案も示されてきている（高橋克壽：1988、田中秀和：1988、松木武彦：1990）。ここでは、器財埴輪全般にわたって、その変遷を検討している高橋氏の編年に基づいて検討することとする。

鞠形埴輪は箱形の矢筒部の周囲に背板を有し、背後に半円筒形の支えが付く点から、高橋氏の一類に相当し、やじりの表現が直接背板に刻まれるという点から一類の中でも3式に該当する。ただし高橋分類の一類は、矢筒部と背後の半円筒形の支えを同時に筒状に製作し、その後に鐘状の背板を付けるのに対し、本古墳例では円筒部に鐘状の背板を付け盾形埴輪のように製作した後に矢筒部を付けるという違いがあり、類例が無い。しかし、関東地方を中心に分布する奴鳳形の二類とは明確に異なるため、一類3式に含まれるものと考えておきたい。盾形埴輪は盾面がII字形の区画によって分割されるもので、二類に相当する。甲冑形埴輪は笠部の端部と受け部の部分が残っておらず、明確ではない。ただし残存している破片からは肋木は付かないと考えられ、二類、もしくは三類になるものと思われる。以上の器財埴輪の組合せからは高橋氏の器財埴輪編年の第四期に相当する。菅沢2号墳では、上記の器財埴輪以外にも家形埴輪、馬形埴輪が存在しているが、これらは高橋編年の第四期に存在しているものである。また菅沢2号墳では、女性の人物埴輪の可能性のあるものが出土しているが、人物埴輪の中でも巫女を表したと考えられるものは、大阪府大山古墳（仁徳陵古墳）の例のように、早くに出現するものと思われ、福島県天王塙古墳では甲冑形埴輪と女性の人物埴輪が出土している。以上見てきたように、菅沢2号墳の形象埴輪は、この高橋編年の第四期の器財埴輪の主要なもの

が全てそろっており、その構成は畿内を中心とする西日本のものと共通している。

この高橋編年第四期に位置づけられている大阪府蕃上山古墳では、甲冑形埴輪に伴い多様な人物埴輪が出現し、第五期にいたると、一類の駒形埴輪と二類の甲冑形埴輪は消滅し、器財埴輪の構成が大きく変わるとされている。そしてそれに伴い、多様な人物埴輪を中心とするものに形象埴輪の内容が一変する。したがって、菅沢2号墳の埴輪は、武人などの多様な人物埴輪群が出現する以前のものと考えられる。

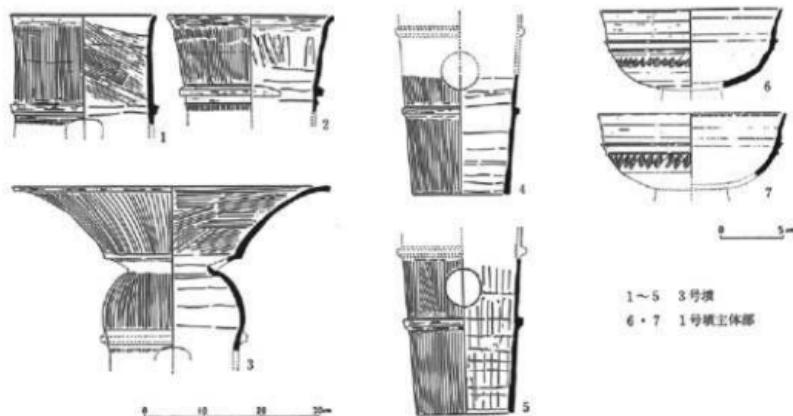
この大阪府蕃上山古墳では、甲冑形埴輪とともに多様な人物埴輪が出土しており（西谷正：1965、野上丈助：1982）器財埴輪中心の形象埴輪から、人物埴輪中心の形象埴輪へと移り変わっていく初期のものと考えられる。蕃上山古墳の円筒埴輪は、古市古墳群の円筒埴輪の検討から、IV期からV期にかけての時期に位置づけられており（川村紀子：1982）、2次調整を省略した最も早い段階のものと考えられる。関東地方では、埼玉県の埼玉稻荷山古墳が人物埴輪の初期の例と考えられ、ここではTK23型式、あるいはTK23からTK47型式にかけてのものとされる須恵器が出土している。東北地方でも、福島県原山1号墳ではTK23型式の時期に、既に多様な人物埴輪群が出現している。また先に見たように円筒埴輪の変化が他地域と並行すると考えられることから、東北地方でも器財中心の形象埴輪から人物埴輪群が中心の形象埴輪への変化も遅れるることは無いものと考えられる。したがって、菅沢2号墳の形象埴輪の内容からは、TK23型式の時期を下限とすることができよう。

先に見た円筒埴輪の検討と合わせて、菅沢2号墳の埴輪からみた築造年代は、陶邑編年TK208型式からTK23型式にかけての時期に限定されるものと考えられる。実年代の比定に関しては、近年多くの議論があるが、辛亥年銘の鉄劍を出土した埼玉稻荷山古墳の礫標出土遺物がMT15型式の時期のものとする、白石太一郎氏の年代観を妥当と考え、須恵器の出現を5世紀初頭としたい（白石太一郎：1985）。よって、菅沢2号墳の築造年代は、5世紀の中葉から後葉にかけての年代が考えられる。

第3節 菅沢2号墳出土埴輪の系譜

菅沢2号墳の円筒埴輪・朝顔形埴輪はその形態の上で、頗著な特徴を持つ。円筒埴輪は、2類としたごく少數の例外を除けば、その他のものは全て、ほとんど開かない円柱状の形態を示し、口唇部から5cm前後のところに凸帯を持ち、その直上から大きく開いて口唇に至る。朝顔形埴輪も体部は円柱状で、肩部に間隔が狭い2状の凸帯をめぐらす。円筒埴輪・朝顔形埴輪ともに、法量の点では大小あるが、いずれにおいてもこの形態上の原則は守られている。

菅沢2号墳の埴輪の類例は、現状では東北地方では発見されていない。山形県で埴輪の出土が報告されている古墳は、以下の7基である。



第108図 上山市矢倉古墳群出土遺物

風間古墳 山形市

鶯の森古墳 山形市

菅沢1号墳 山形市大字菅沢字山崎

菅沢2号墳 山形市大字菅沢字山崎

土矢倉1号墳 上山市金谷

土矢倉2号墳 上山市金谷

土矢倉3号墳 上山市金谷

このうち風間古墳・鶯の森古墳は伝出土であり、古墳の位置自体も不明である。この両古墳の出土とされる埴輪は、山形大学博物館に収蔵されているもので、いずれも小破片で、凸帯の部分は残っていない。円筒埴輪の凸帯の間の部分と思われる。1次調整タテハケのみで、黒斑は認められない。菅沢1号墳の埴輪はその内容が検討できず不明である。ただ2号墳と同一古墳群中にあるため、この系譜の検討の際には、そのことは特に大きな問題ではなかろう。土矢倉古墳群の埴輪は、円筒埴輪・朝顔形埴輪については、3号墳の資料が報告されている（柏倉他：1969）。円筒埴輪は最上段の高さが15cm前後の一般的な形態のものである。朝顔形埴輪は、肩部から凸帯1条をはさんでスカシ孔があり、菅沢2号墳のように狭い段は入らない。これら土矢倉3号墳の円筒埴輪・朝顔形埴輪と、菅沢2号墳のそれらとは、形態の上で相違がはなはだしく、およそ両者の直接的関連は想定し難いであろう。土矢倉2号墳から古くに出土した埴輪は、東京国立博物館の所蔵となっており、その図版目録に写真が掲載されている（東京国立博物館：1968）。円筒埴輪の口縁部の特徴が判明するものはなく、菅沢2号墳例との関連は検

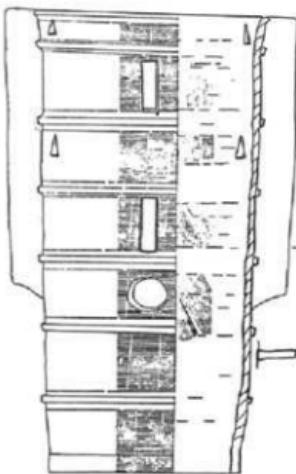
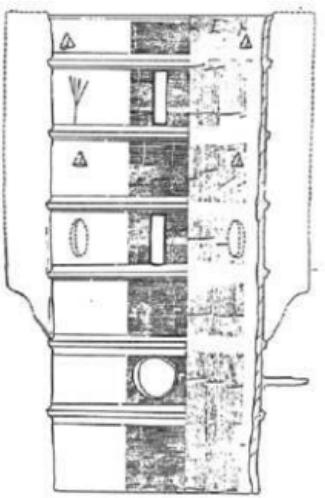
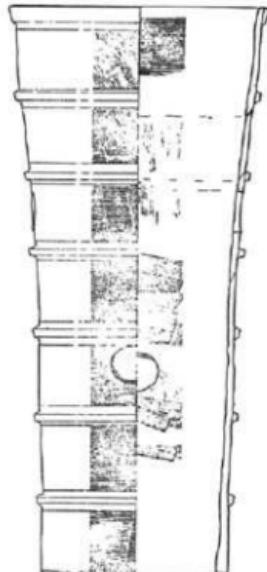
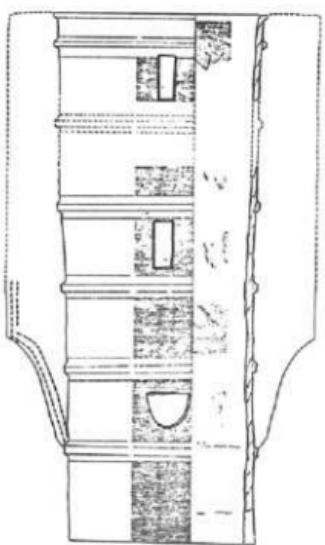
討できない。また、人物埴輪の腕の部分の破片が1点出土している。土矢倉1号墳の埴輪については、その内容が報告されておらず不明である。ただ、この1号墳の主体部の箱式石棺からは須恵器無蓋高杯が2点出土しており、いずれも陶邑編年TK23型式の段階のものである。

さらに視野を広げて、東北地方全体を見渡してみても、菅沢2号墳出土の埴輪に類似するものは、今のところ確認できていない。東北地方では、岩手県2遺跡、宮城県74遺跡、山形県7遺跡、福島県50遺跡の、合計133遺跡から埴輪が出土している。その内、ある程度形態や技法の特徴が検討可能な埴輪が確認できているのは67遺跡あるが、いずれも菅沢2号墳出土埴輪とは大きく異なるものである。したがって、今後資料が増加しても、菅沢2号墳出土埴輪と類似した埴輪が、一つの地域に集中して発見される可能性はほとんど無いと考えて良いだろう。

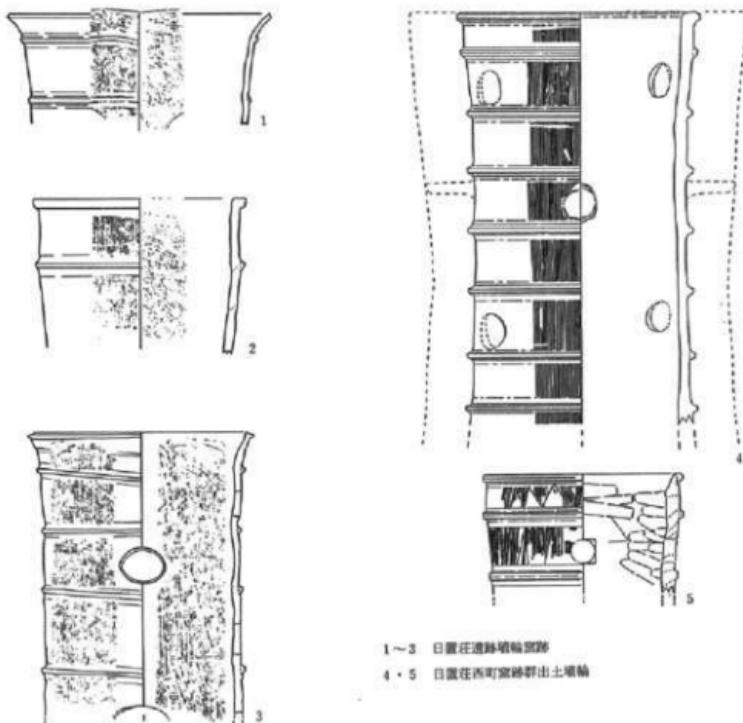
菅沢2号墳の埴輪は、窯窓焼成という当時の最先端技術で製作されていること、後に詳しく検討するが、細部の相違はあるものの、器財埴輪の構成は基本的に畿内を中心とするものと共通する。これらの点から、菅沢2号墳の埴輪の製作にあたっては、その技術を保持した先進地域の工人集団の何らかの関与が不可欠と考えられる。したがって、菅沢2号墳の埴輪の系譜は、より広い範囲で検討されなければならないであろう。

菅沢2号墳出土の円筒埴輪・朝顔形埴輪と同様に、円筒埴輪の最上段が狭く、朝顔形埴輪の肩部の下に狭い段が入るという特徴を持つものは、川西編年II期の段階の奈良県東大寺山古墳をはじめ、大和を中心とする近畿地方の各地で、ヒレ付円筒埴輪として多くの例が知られている。また福岡県鍋崎古墳など近畿地方以外の地方でも、点的に存在する例があり（柳沢一夫・杉山富雄：1984）、近畿地方の工人集団が移動して生産にあたった可能性を示している。このような特徴的な形態を示す埴輪が他には見いだしえないことから、菅沢2号墳の円筒埴輪・朝顔形埴輪は、そのもともとの源流は近畿地方に求められそうである。しかし、それらの例はいずれも川西編年II期からIII期にかけてのものばかりで、菅沢2号墳とは時間的な隔たりが大きい。川西編年IV期にまで下る例としては、奈良県のウワナベ古墳出土円筒埴輪がある（町田章：1975・1、第109図）。しかし、ウワナベ古墳出土の円筒埴輪はいずれもヒレ付円筒埴輪であり、菅沢2号墳の円筒埴輪とはなお隔たりが大きい。一方、最上段が狭いという特徴を持つ円筒埴輪は、近年大阪府堺市の日置荘遺跡埴輪窯跡（入江・岡本：1989）や日置荘西町窯跡（十河稔郁：1989）で川西編年V期まで下るものが出土している（第110図）。これらは菅沢2号墳よりも下る例であり、すぐさま直接的な関係を認められるものではないが、ウワナベ古墳などに残ってきた系譜が、その後これら堺市で窯跡を残した工人集団たちに引き継がれていき、その間のある段階で菅沢2号墳の埴輪を製作した工人集団に関与したとの想定も、一つの可能性として考えておきたい。

これまでに検討した円筒埴輪とは異なる特徴を持った円筒埴輪2類としたものは、口縁端部



第109図 奈良県ウワナベ古墳出土埴輪



第110図 大阪府日置莊遺跡・日置莊西町窯跡群出土埴輪

外面に凸帯をめぐらすものであるが、同様の口縁部をもつ円筒埴輪は、川西編年IV期の段階に河内で多く見られるものである。同様のものは、関東地方でもいくつかの類例がある。さきにあげたウワナベ古墳では、最上段の狭いものに混じって、この種のものが少數含まれており、この点でも菅沢2号墳の円筒埴輪のあり方に類似している。

菅沢2号墳からは豊富な種類の形象埴輪が出土している。その内訳は家形埴輪・衣蓋形埴輪・盾形埴輪・穀形埴輪・甲冑形埴輪・馬形埴輪からなり、器財埴輪からなるセットを良く保っていると評価できる。次に、そのそれぞれについて、やや詳しく述べてみよう。

家形埴輪は、少なくとも7個体が確認され、その中には円形柱の高床建物を表したものも含まれる。円形柱高床建物を表す埴輪は、大阪府堺ノ本古墳（永島暉臣慎他：1978・3）や平城宮下層SX5700・SD4992（立木修：1981・9）などの出土例があるが、東日本では埼玉県瓦塚古墳出

土例が知られているにすぎない。その点で希有な例と言えるであろう。

衣蓋形埴輪は畿内で発達し関東地方ではほとんど例を見ないものである。しかし近畿地方などの諸例と比較すると、台部の底部近くに凸帯をめぐらすこと、立ち筋りの形態が直線的なことは、他に類例のないものである。

盾形埴輪は置盾を表したもので、鋸歯文で囲まれた長方形の区画の内部を菱形の文様で埋めるもので、その基本的構成は畿内のものと何ら変わりはない。ただ鋸歯文の内部を充填する線が、側辺に直交ぎみに交差して引かれている。畿内の盾形埴輪では、鋸歯文の内部は、側辺に平行か底辺に直交するものに統一されている。

軽形埴輪は矢筒部の両側全体にヒレ状の背負板を付けるもので、関東地方の川西編年V期の時期に多くみられる奴馬形の軽形埴輪とは異なり、畿内で発達した軽形埴輪の形態（高橋分類の一式）を示している。一式の軽形埴輪は、高橋氏の御教示によれば、関東地方では群馬県赤堀茶臼山古墳から出土しているだけである（後藤守一：1933・4）。しかし畿内の一式の軽形埴輪が、矢筒部分と後ろの円筒部分を一連に作るのに対し、菅沢2号墳例では盾形埴輪と同様に背負板までを作った後に、矢筒部分を貼付けて作るという、製作方法上の大きな相違がある。

甲冑形埴輪は少なくとも5個体存在し、いずれも胃までを一連に作出したものである。その内、甲冑形埴輪2のみが、肩甲や草摺の細部の表現方法で他のものと異なるが、基本的な特徴は一致している。

これまで、東北地方で甲冑形埴輪を出土した古墳としては、宮城県名取市の経の塚古墳と福島県本宮町の天王塚古墳がある。このうち経の塚古墳の甲冑形埴輪は、前胸引合板と後胸に半環状の突起を付けるという、短甲の実例にも埴輪にも他に例を見ないものや、短甲下部に凸帯をめぐらし、頸甲と肩甲まで作出しながら胃を持たないものがある（東北大文学部：1982、東京国立博物館：1968）。甲冑形埴輪で頸甲と肩甲を作出するものは、全て胃を乗せており（高橋克壽：1988・3、西谷真治・置田雅昭：1988・7）、凸帯と合わせて極めて異質である。この経の塚古墳出土の埴輪は、甲冑形埴輪を含めて、全体に一般的な埴輪の形態・技法から隔たつたもので構成され、在地の土師器工人が模倣して製作にあたったものである可能性が高い。一方、天王塚古墳出土の甲冑形埴輪は、三角板の短甲に眉庇付胃を乗せるものである（山崎他：1984、第107図）。これは、菅沢2号墳出土のものと比べると、むしろ胃や短甲の表現方法で退化していると考えられる。また天王塚古墳では口縁部の2～3cm程度に凸帯をめぐらし、口縁端部はそのまま直立する特徴的な円筒埴輪が伴っており、菅沢2号墳との関連を考えるのは困難である。

甲冑形埴輪の全国での分布を見ると、その大部分が畿内、中でも河内地方に集中している（若松良一：1988、今津節生他：1988）。東日本では胃までを一体に作るものは、東北地方の2古墳

の例を除けば今のところ発見されていない。菅沢2号墳例より先行する、短甲のみを作出するものでは、確実な例は群馬県の赤堀茶臼山古墳（後藤守一：1933・4）・白石稻荷山古墳（後藤守一・相川竜雄：1936）のみである。この2古墳とも円筒埴輪などでは、菅沢2号墳との関連は認め難い。関東地方にあっても赤堀茶臼山古墳・白石稻荷山古墳と菅沢2号墳の間を埋めるような例が現状では認められない以上、埴輪の系譜は、さらに西の地方に求めざるをえない。甲冑形埴輪が畿内を中心に発達し、その分布も畿内に集中することから、そもそもその源流は畿内に求められるかもしれない。しかし畿内の諸例と比較すると相違点もある。菅沢2号墳例では、肩甲が横にほぼ直線的に伸ばされている。一方畿内を中心とする西日本の出土例では、肩甲は肩口に向かうにしたがって下へ湾曲していくのが一般的である。

以上見てきたように、菅沢2号墳の形象埴輪は、その基本的構成においては、畿内のものと共通するが、細部では様々な点で異なっている。これら形象埴輪のいずれもが、かなり高度な技術をもって製作されており、単なる模倣では作りえないことは既の考古学例を見れば明らかであり、畿内などの先進地域で埴輪製作にあたっていた埴輪工人の何らかの関与が無ければ、その製作は困難であると考えざるを得ない。

その場合考えられることとしては、次の3通りの解釈があるだろう。

- 1) 畿内などの先進地域で埴輪製作にあたっていた工人（工人集団）が移動して生産にあたった。
- 2) 畿内などの先進地域と菅沢2号墳との間で、これらの埴輪を生産する技術が伝えられた未発見の地域があり、そこから工人（工人集団）が移動して生産にあたった。
- 3) これら1)・2)いずれかの地域で埴輪生産にあたっていた埴輪工人集団のもとで、土師器工人などの本来埴輪生産にあたっていなかった者が、技術を習得し、それらのものが移動して製作にあたった。

菅沢2号墳の形象埴輪には、畿内の形象埴輪と比較したとき、細部では様々な相違点があることは述べた通りであり、1)のように専門的工人集団が移動して直接生産したものと考えるのはやや難しいであろう。2)・3)のいずれかについては、直接比較できる資料がないため、その決定は困難である。しかし、菅沢2号墳のような形象埴輪の構成を持っている古墳は、東日本全体を見渡しても、極めて限られており、継続してこのような埴輪の生産が行われていたと考えられる地域はほとんど無いことから、2)の場合であったとしても、ワン・クッション置く程度であったであろう。以上のように、菅沢2号墳出土埴輪の系譜は、形象埴輪が同時期の畿内のものと基本的構成で一致し、円筒埴輪の系譜も畿内に求められる可能性が強いことから、そのそもそもの遡源地は畿内であり、菅沢2号墳に至るまでに何らかの形で介在する地域があったとしても、大きな変容をきたすほどではなかったと考えられ、比較的短時間の内に波及したものと考えられる。

第4節 菅沢2号墳の埴輪の生産体制

まずその製作地について検討してみたい。前節において、菅沢2号墳に類似する埴輪が、周辺地域のみならず東北地方においても知られていないことを指摘した。今後の資料の増加によって発見される可能性は残るが、少なくとも、菅沢2号墳の埴輪を製作した工人集団の本拠地が、例えば仙台平野や阿武隈川流域といったような周辺地域にあり、そこで継続した生産を維持していたとは考え難い。したがって、菅沢2号墳に樹立された埴輪は、かなりの長距離を運ばれて来たものでない限り、この古墳の近隣の地で製作されたと考えざるを得ない。

そこで、菅沢2号墳の埴輪が当古墳の近隣で製作されたと考えた場合、その想定が胎土から見た場合と矛盾するか否かを検討した。すなわち、胎土に含まれる砂粒の岩石・鉱物を同定し、それらの岩石・鉱物が古墳周辺の地質と比較して、それに含まれ得るものであるかどうかを検討することとした。

分析は山形大学理学部地球科学教室の大場興志男教授に依頼し、埴輪10点と菅沢2号墳の立地する丘陵を構成する凝灰岩の風化粘土2点をプレパラートにして、含まれる岩石・鉱物を同定していただいた。時間などの種々の理由から、ポイント・カウンティングなど、定量は行っていない。分析した埴輪は、焼成の具合や砂粒の含まれ方の異なるものを混ぜて、それらに違いが表れるかどうかを検討できるようにした。分析の結果、いずれの資料でも胎土中に含まれる鉱物は、石英・長石がほとんどで、その他の特徴的な鉱物は見られず、これは基盤の風化粘土でも同様であった。分析点数が少なく、対比資料もわずかであり、その結果もごく一般的な鉱物を確認できただけに終わっている。そのため、菅沢2号墳の埴輪がこの地域で製作されたとの、積極的な証拠は得られなかつこととなるが、同時に、菅沢2号墳の埴輪がこの地域で製作されたことを否定する積極的根拠も得られなかつことになる。

この点に関して興味深い資料として、古墳群の北側、すなわち1号墳の北側で採集された埴輪がある(第111図、図版74)。これは丘陵麓近くの伊東長十郎氏所有の畠で採集されたもので、円筒埴輪と朝顔形埴輪の破片が各1点ある。円筒埴輪は口縁部の破片で、菅沢2号墳出土の円筒埴輪1類と共通する特徴を有している。朝顔形埴輪は肩部の破片で、これも菅沢2号墳出土



第111図 古墳群北側斜面採集の埴輪

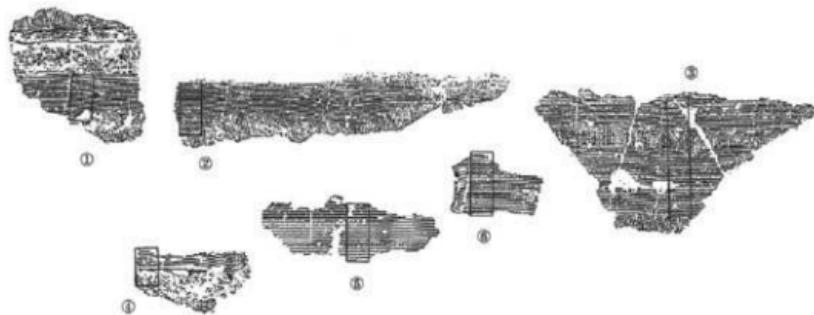
の朝顔形埴輪2類と共に通する。これらは採集品であり本来の位置を保ったものではなく、1号墳の埴輪の内容が明確ではない現在では、1号墳からの流れ込みの可能性も否定できない。ただ、丘陵の裾近くであり1号墳との距離があることから、これらの埴輪が菅沢2号墳の埴輪を製作した窯跡のものである可能性も残るだろう。この点については今後の調査・検討が必要であるが、菅沢2号墳の埴輪を製作した場所の候補の一つとして指摘しておきたい。

本章第1節の検討によって、円筒埴輪・朝顔形埴輪の中で、大型の朝顔形埴輪（朝顔形埴輪2類）が、ハケメ工具の点からも他のものと区別できることを指摘した。このハケメ工具を介在させることによって、部分的ではあるが、円筒埴輪・朝顔形埴輪の製作者と形象埴輪の製作者の関係を明らかにすることことができた。これをもとに、菅沢2号墳の埴輪を製作した工人集団の構成について検討を加えてみたい。

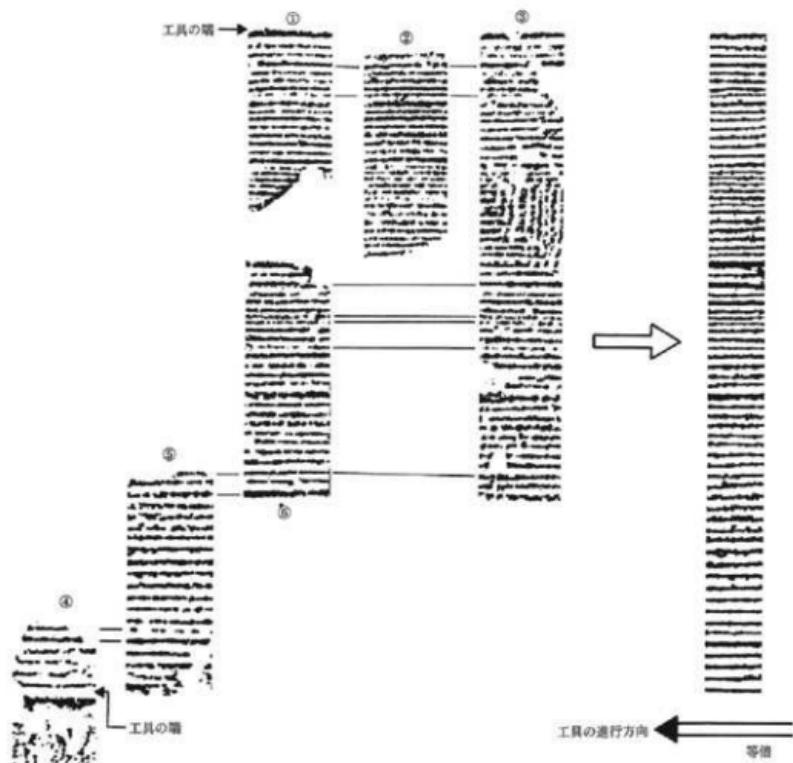
朝顔形埴輪2類のハケメ工具は条線の密度が細かく、かつ条線が明瞭で特徴的なbl類としたものである。このハケメ工具が使われている朝顔形埴輪2類には、2次調整にB種ヨコハケをもつものがあり（朝顔形埴輪2b類）、これらでは工具の端が判明する。そこで、B種ヨコハケをもつものの内で、最も残りの良い朝顔形埴輪413（第47図）の第3段の部分で、ハケメ原体の復元を試みた。同一個体の資料を、条線の特徴的な部分でつなぎ合わせて復元したところ、工具の幅は11.5cmと復元された（第112図）。これをもとに、同じハケメ工具を使用している埴輪を検討した。検討の対象としたのは、第1章第3節で示した基準で抽出した資料、すなわち本書に報告した資料に限定した。これは、ひとつには時間的な制約のためであり、また抽出したもの以外の資料は破片が小さいため、条線のパターンが十分検討できないものがほとんどを占めるからである。その結果、表面の保存が悪くて十分な検討が行えず不明であるもの以外は、朝顔形埴輪2類は、全てこの朝顔形埴輪413と同一工具か、もしくはその逆のパターンで条線が現れるもので占められていることが明らかとなった。また形象埴輪では、甲冑形埴輪1・3・4と、それと同様の特徴をもつ帰属不明の甲冑形埴輪、そして家形埴輪4が、この工具と同じものか、またはその逆のもので器面調整がなされていることが判明した。

この復元された工具とまったく逆のパターンで条線が現れるものについては、次の2通りの解釈が可能であろう。

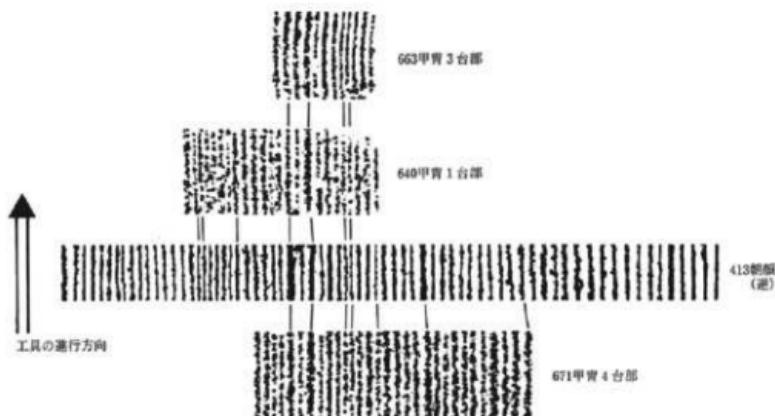
- 1) ハケメ工具に用いる板を作る際、单一の材料から2枚の板に割り、その割られた面がそれぞれ使用された場合、両者はまったく逆の年輪のパターンになる。よって、この2者は別々の2つの工具である。
- 2) 工具に用いた木材が直径の大きい木であった場合、薄い板の裏表では年輪のパターンはほとんど変わらないことが予想される。よって、この2者は单一の工具であり、その裏と表を両方使用したため正と逆のパターンが現れた。



②は413標本の第3段、他は413同一個体破片 (Scale 5%)

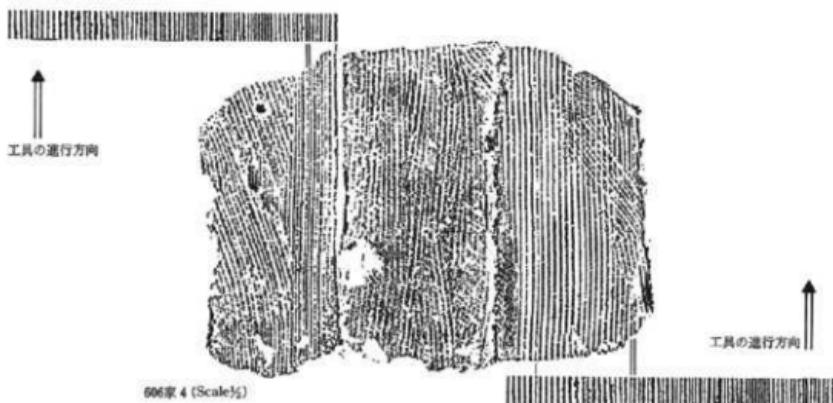


第112図 ハケメ原体の復元



Scale = 1/1

第113図 同一ハケメ工具による埴輪(1)



第114図 同一ハケメ工具による埴輪(2)

この2通りのいずれかを判断することは、現実には困難であると言わざるを得ない。また1)・2)の理由が重なって、実際にはもっと多くの工具の数があり、器壁に残された痕跡では区別できていない可能性も考えられる。しかし、いずれにしても、これらのハケメ工具が使われている1群の埴輪が、他のものから分離できることには変わりはない。

また、家形埴輪4の壁の部分の破片である606では、壁面に柱を表現するための粘土帯を貼付け、後にその両側にハケメ調整を施している。貼付けの右側では、ハケメは工具の左端（工具の進行方向に向かって）の条線と一致し、逆に貼付けの左側では工具の右端の条線と一致した（第114図）。貼付けの右側と左側では、ハケメの条線の密度はまったく異なっているが、同一の工具で付けられたものである。今回復元できたハケメ工具のように、両側で年輪の密度が異なる木材を使用していた場合、その工具のどの部分が器壁にあたったかによって、条線の密度は異なってくることとなる。したがって、ハケメ密度の大小によってのみでは、工具の異同を云々することはできないこととなる。

今回復元できたb1類のハケメ工具と、その逆のパターンの工具が使用されている朝顔形埴輪2類は、本章第1節で指摘したように、ハケメに加えて、形態（法量）・凸帯の点から他の朝顔形埴輪とは明瞭に区別される。一方、これらのハケメ工具が使われている形象埴輪は、色調が赤みが強く、堅く焼きあげられている点で、他のものとは明瞭に区別される。またこれらの内、甲冑形埴輪では、凸帯がいずれも太いg類としたものである。ハケメb1類が使われる朝顔形埴輪2類の凸帯は、円筒埴輪・朝顔形埴輪のなかでは、これらのみが太いb・i・k類を使用しており、ヨコナデの施し方の違いを除けば共通性は強い。

一方、形象埴輪の中には、ハケメb2類が使われているものがある。このb2類のハケメは、鶲形埴輪の矢筒部の外面で観察すると、工具の幅は5cm以下であると観察される。矢筒部の正面は、内側に反っており、b1類のように工具幅が11.5cmもあると、工具の端が明瞭に観察されるはずであるが、そのような痕跡は認められず、平行する単一の動作で付けられた条線は5cm以下の幅しか確認できない。したがって、ハケメb1類とb2類は確実に異なる工具であると判断できる。このハケメb2類が使われている形象埴輪の内、鶲形埴輪・衣蓋形埴輪では、円筒部の調整はハケメ密度の粗いa類が使われ、矢筒部や背負い板、立ち飾りなど器物を表した部分は、b2類のハケメが使われており、製作にあたって2種類の工具が使い分けられている。甲冑形埴輪の中で唯一b1類のハケメを使用していない甲冑形埴輪2では、草摺が付けられている部分で台部の内面がわずかに残っており、そこでは粗いa類が使われ、草摺などの部分ではb2類が使われており、鶲形埴輪や衣蓋形埴輪と同じ工具の使い分けが認められる。

これらの形象埴輪の円筒部に使われているハケメa類を使用する、円筒埴輪1・2類、朝顔形埴輪1類では、凸帯はバラエティーがあるものの、ハケメb1類を使う朝顔形埴輪2類の凸帯と比べると、いずれも細く高さも低いという点で共通する特徴を有している。このハケメa類とb2類を使う形象埴輪の内、凸帯が残る鶲形埴輪では、ヨコナデが十分施されない点はハケメb1類を使用する甲冑形埴輪と同様であるが、法量からみるとこれら甲冑形埴輪の凸帯より細く高さも低いものであり、むしろハケメa類を使う円筒埴輪・朝顔形埴輪1類に類似する。

このように、ハケメ工具の用いられ方、凸帯の太さという観点から、菅沢2号墳の埴輪は、大きく2つのグループに分けることが可能である。しかも、そのうちハケメb1類を用いるグループでは、朝顔形埴輪と形象埴輪の間で、同じ工具が使用されている(A群)。但し、ハケメb2類が使われている家形埴輪や馬形埴輪で、ハケメa類が使われていたかどうかは判らない。また、ハケメa類のみが使われている形象埴輪は認められない。ハケメa類・b2類が使われているグループ(B群)は、ハケメa類が細分可能であり、また円筒埴輪も法量や細部の形態・技法などで細分できる可能性があり、さらに小さなグループに分け、それぞれ形象埴輪との対応関係が検討されるべきである。しかし、これらには表面の保存の悪いものが多いため、今回は十分明らかにはできなかった。以上の検討結果をまとめたのが第115図である。

菅沢2号墳出土の埴輪が、円筒埴輪や朝顔形埴輪で見ると、形態と技法の上で全体に強い共通性があることは、本章の第1節で見てきた。よって、これらの埴輪は、同様の技術を保持した、一つの工人集団によって製作されたものである可能性が強いと考えられる。それでは、その中でA群・B群と分離された埴輪のグループは、何を反映したものと考えられるであろうか。

まず、工具が同じ、もしくはその逆というA群については、工具の共通性から、1人の工人が製作したものである可能性が考えられる。しかし、工具が一致したからといって、それが直ち



第115図 菅沢2号墳出土埴輪の構成

に工人個人と結び付けられるかどうかは別問題である。工人間での道具の貸し借りや譲渡といったことも、可能性としては否定しきれないからである。工人個々人の同定には、川西宏幸がかつて行ったように、ハケメの施し方のクセのようなものを抽出していくことが必要である(川西宏幸: 1973)。今回は、資料の遺存状態が良くなかったことから、そのような分析は行えなかった。ただ、このA群の埴輪は、ハケメ工具以外の特徴でも共通性が強いことから、確認は無いものの、それらが1人の工人によって製作されたものである可能性が高いものと考えたい。もし、そうでなく複数の工人によって製作されたものであったとしても、それらの工人たちは、きわめて近い関係(おそらく同じ世帯の構成員など)にあったものであろう。

一方、B群の埴輪は、前述のように更にいくつかのグループに分かれるものと考えられることから、A群のような工人個人か近い関係にある工人の小グループを、いくつか内に含むものと考えられよう。その数を実証する根拠は無いが、A群の様相から類推して、おそらく2・3の単位で構成されるものと思われる。したがって、菅沢2号墳の埴輪の製作にあたった工人集団は、3前後の単位からなる、比較的小規模な集団であったものと考えられよう。

菅沢2号墳出土の資料では、遺存状況が悪くこれ以上の議論は困難であるが、完形品に恵まれた良好な資料であれば、ハケメの施し方のクセなども加えて、より詳細な議論が可能になるものと思われる。今後、生産地である埴輪窯跡が未発見であっても、古墳出土資料において、このような検討が可能になれば、時期や地域ごとの埴輪工人集団のありようを比較していくことも可能となるであろう。

第5節 山形盆地の古墳の変遷と菅沢2号墳

最後に山形盆地における古墳の変遷を検討し、その中における菅沢2号墳の占める位置について検討したい。

山形盆地における古墳の分布を見ると、天童・寒河江より南の地域にほとんどが集中し、盆地北部ではその分布は希薄である（第116図）。南部の中では、須川東岸の、馬見ヶ崎川と立谷川流域の自然堤防上から丘陵にかけての地域に最も集中している。須川西岸では、山辺から山形市西南にかけての丘陵沿いに点々と古墳（群）が連なっている。前方後円墳は、山辺町の坊主窪1号墳と、上山市の土矢倉2号墳の2基が確認されているだけである。坊主窪1号墳は主軸長26mで、築造年代を検討し得るような遺物は出土していないが、墳形などから6世紀代のものとされている（川崎利夫：1988）。土矢倉2号墳はV期の埴輪を伴うものであるが、墳丘の改変が著しく、墳形などの詳細は良く判らない。この2基の前方後円墳以外は、ほとんどが中小規模の円墳で、菅沢2号墳は、山形盆地の古墳の中では最大のものである。

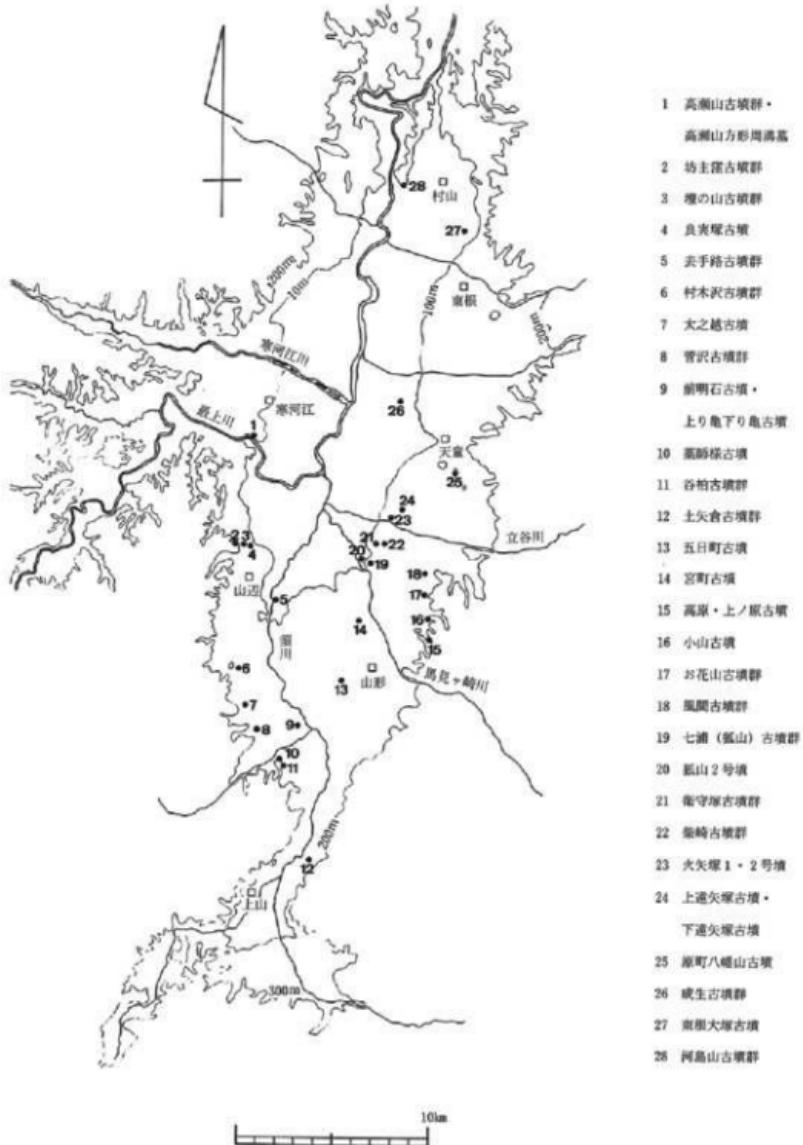
これらの古墳の内、その内容が明らかとなっているものは少なく、内容が知られているものについても調査されたのが古い例が多い。また調査されたものでも、総じて遺物の出土が少ないため、築造時期の検討が困難なものも少なくない。以下、その主なものについて、検討してみたい。

まず前期にさかのぼる可能性があるものとしては、東根市東根大塚古墳と、寒河江市高瀬山遺跡の方形周溝墓があげられる。

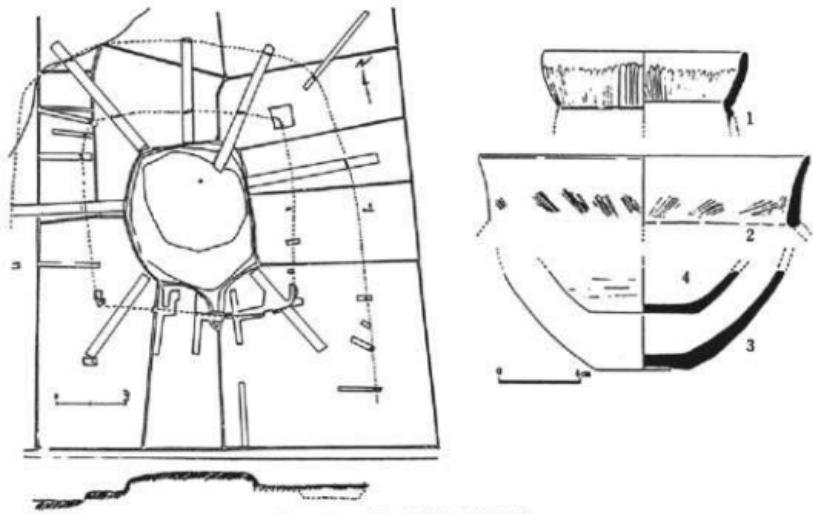
東根大塚古墳は、1辺約30mの方墳で、土師器が出土している（伊藤忍：1971、第117図）。これらの土師器は、「封土内出土」とされるもので、出土層位に問題を残すが、一応これらの土師器が古墳築造時期に近いものと考えておく。これらの報告されている土師器の内、1は口縁部が内窪して開く壺と考えられるものである。これはその特徴から、塙蓋式に属するもので、口縁部内外面にヘラミガキが施されていることから、塙蓋式の中でも、最も新しい段階までは下らないものであろう。

高瀬山遺跡の方形周溝墓は、溝の内側での辺の長さが13～15mのものである（佐藤正俊他：1982）。溝埋土から土師器が若干出土している。土師器は体部の小破片ということで、これで時期を検討することは困難と思われるが、これまでに東北地方で発見されている方形周溝墓は、塙蓋式の時期に限られていることから、前期にさかのぼる可能性が高いものと考えられる。

山形盆地における前期古墳の様相については、まだ明らかでないことが多く、今後の調査・研究に待たねばならない。特に、古墳分布が集中する、南部でまだ確認できていない。しかしながら、今後前期に遡る古墳の発見があったとしても、次にみる中期後半以降に、一挙に古墳



第116図 山形盆地の古墳分布図



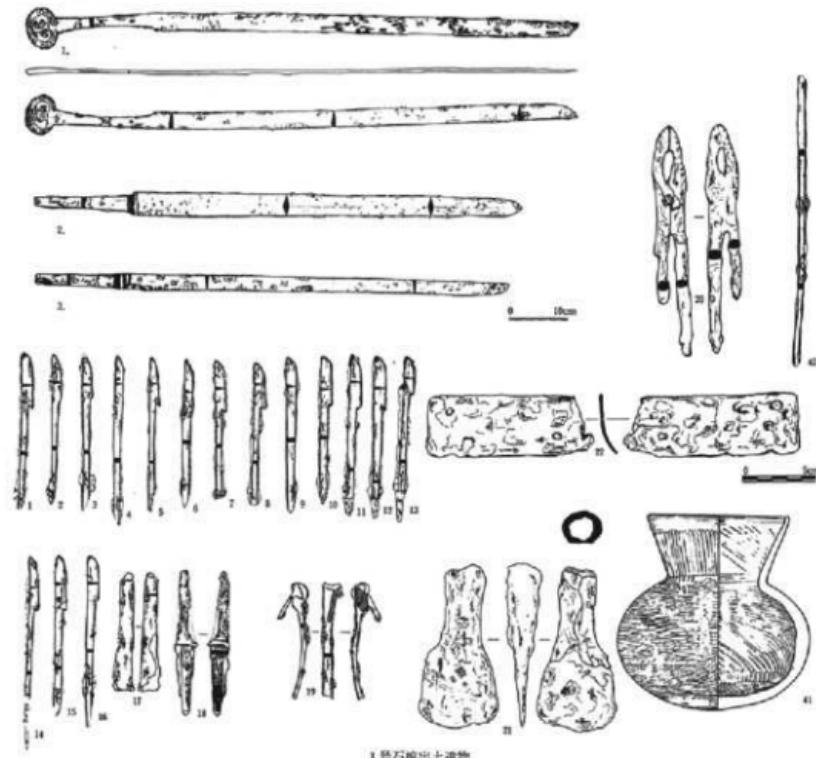
第117図 東根市東根大塚古墳

が拡大する時期と比べると、その希少さは変わらないであろう。

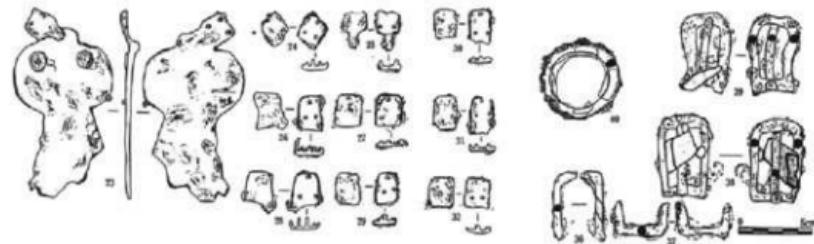
山形盆地の古墳は、ちょうど菅沢2号墳が築造される頃を境に、その数が一挙に増大し、また分布範囲も大きく拡大する。

山形市衛守塚古墳群は、馬見ヶ崎川と立谷川にはさまれた自然堤防上に立地するもので、現在はほとんどが破壊されて残っていないが、かつては12基あったとされる（柏倉亮吉：1973）。その内の2号墳は、明治12年に土取りが行われた際に、主体部の木棺が発見され、注目されたものである（後藤守一：1924）。この2号墳には、周囲に丸太が打ち込まれたような状態で並んでいたと報告されており、近年、これは木製の埴輪ではないかという指摘がなされている（高橋美久二：1988）。衛守塚2号墳から明治12年に出土した遺物は、東京国立博物館に所蔵されている。東京国立博物館所蔵の遺物の内、土師器の鉢とされているものは（東京国立博物館：1968、p.49）、肩がはり口縁部がくびれる小型平底の壺と思われるものである。この種の小型平底の壺は、引田式の古段階に認められ、それ以降には続かないことから、衛守塚2号墳の築造はこの頃と思われる。また2号墳の周囲の古墳から出土したと伝えられる遺物の中に、鉤状の取手を有する提瓶があることから、6世紀後半まで古墳群は続くものと考えられる。

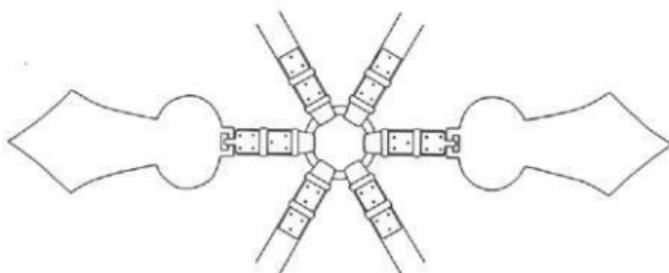
山形市大之越古墳は、菅沢古墳群の北約1.5kmに位置し、1978年に山形県教育委員会によつて発掘調査がなされている（川崎利夫他：1979）。径15～16mの円墳で、2基の箱式石棺が検出



1号石棺出土遺物



2号石棺出土遺物



第119図 大之越古墳出土馬具想定復元図

されている。箱式石棺は一部が重なって造られており、2号石棺→1号石棺という新旧関係が判明している。1号石棺内からは環頭大刀・鹿角製装具の痕跡を有する剣と刀・鉄鎌・鉄鉗・土師器壺などが出土している。2号石棺の棺蓋上からは剣菱形杏葉などの馬具が出土している（第118図）。

この最初の埋葬である2号石棺の棺蓋上から出土した飾帶金具は、剣菱形杏葉に付いているものを含めて、10点が図示されている。出土遺物の一覧表では「飾帶金具・その他」が11点となつておらず、本文中では飾帶金具が12点となっている。表と本文の記載の違いは杏葉に付いているものを数に入れたか入れないかの違いであると考えられることから、一応ここでは、杏葉に付いているものも含めて12点として検討する。これらの飾帶金具の内、杏葉に付いているものには舌状の釣舌金具が付き、その本体には鍔が4本認められる。杏葉は残っていないが、同様のものがもう一点ある。それ以外は方形のもので、鍔が3本認められ、また報告の図には示されていないが、資金具が銷着しているものが認められる。報告で、遊環とされているものは環状雲珠と考えられ、先の飾帶金具の構成から、第119図のような尻繫が復元できるだろう。この種の尻繫は、f字形鏡板と剣菱形杏葉の伴う馬具に多く見られるもので、中期後半から後期にかけて盛行したものである。剣菱形杏葉については、金銅板の覆い方が変化していくことが指摘されているが（小野山節：1964）、大之越古墳出土の杏葉は劣化がはなはだしく、鐵板の上に金銅板などをかぶせていたかは検討できない。また剣菱形杏葉は、時代が下るにしたがって剣菱部が長くなり、全体に大型化していくが（坂本美夫：1985）、大之越古墳のものは大型化していないことから、剣菱形杏葉の中でもさほど下るものではないだろう。

一方、新しい埋葬である1号石棺から出土した土師器の壺は、内外面とも丁寧なミガキが施される点で類例が無いが、体部の高さに比べて口縁部の高さが低いという形態は、引田式に特徴的に見られるものである。また、1号石棺からは鹿角製装具の痕跡がある剣と刀が出土しているが、鹿角製装具が刀に付けらるのは中期後半以降と考えられることと、土師器の様相は矛

盾しない（藤沢敦：1990）。

1号石棺の埋葬が引田式期で、それより古い2号石棺から馬具が出土していることから、先行する2号石棺の年代をさほど引き上げることはできないだろう。したがって、大之越古墳の築造年代も、1号石棺と同じく引田式の時期の中と考えておきたい。

山形市お花山古墳群は、馬見ヶ崎川と立谷川の間に西に迫り出す山地の裾の小丘陵上に立地する古墳群である。山形大学に所蔵されている風間古墳・鶯ノ森古墳から出土したと伝えられる埴輪の、その風間とはお花山古墳群の北約1km、鶯ノ森は同じく南西約500mのところの地名である。このお花山古墳群は1982・83・86年の3ヶ年にわたり、山形県教育委員会によって発掘調査が行われており、周溝が確認できず主体部のみが確認されたものもある。合計25基が確認されている（長橋至他：1985、長橋至：1987）。周溝が確認されたものは、いずれも円墳で、径7～19mの小規模なもので構成されている。主体部は木棺直葬と箱式石棺である。1号墳と22号墳の主体部から鏡が出土しており、山形盆地では唯一の例となっている。報告者の下限は7世紀前半、上限は5世紀後葉との年代的位置付けに基本的に異論はないが、出土遺物のほとんどが佐平林式併行期に集中するように見受けられ、古墳群築造のピークが比較的短い期間にあったことが窺える。

このお花山古墳群に見られるような、中小円墳で箱式石棺を主体部とする古墳群は山形盆地には多く、谷柏古墳群（17基）、高原古墳群・上の原古墳（合計6基）、狐山古墳群（10基）などがあげられる（柏倉亮吉：1973）。東北地方では、古墳の主体部に箱式石棺が使われるのは、これまで知られているものでは、中期後半から後期にかけての時期である。出土遺物から年代が確実なもので、7世紀以降に箱式石棺を主体部とするものはこれまで知られていない。しかし、山形盆地では、横穴式石室を主体部とする古墳が知られておらず、これら箱式石棺を主体部とする古墳を6世紀までのものと考えた場合、7世紀に編年しうる古墳がほとんど無くなってしまう。あるいは、山形盆地では横穴式石室の導入が遅れ、箱式石棺が遅くまで残るという可能性も否定しきれない。ただ出土遺物から確実に7世紀に下る例がないことから、これら箱式石棺は、6世紀代で終わるものとしておきたい。山形盆地での終末期の古墳のあり方の検討は、今後に残された大きな課題であろう。以上の検討をまとめたものが、第38表である。

先にも述べたように、菅沢2号墳が築造される中期後半を境にして、山形盆地の古墳は大きな変化を示す。すなわち、それ以前では限られた地域にごく少数の古墳が築造されているだけなのに対して、菅沢2号墳が築造される墳から、盆地内の各地に古墳の分布が拡大し、その数も大幅に増加していく。同様に中期後半に古墳の変遷の画期があり、それに伴って様々な社会的変化が認められることは、東北地方全体に普遍的に認められることである（辻秀人：1989・1990、藤沢敦：1990）。したがってこのような変化は、単に各地域の内的要因だけでは説明でき

A.D.300	土師器	須恵器	埴輪	寒河江	山辺	山形西南部	上山	馬見ヶ崎川 立谷川流域	東根
400	1								1
	2A								
	2B								
	3								
500	唐小泉式	TK73							
	TK216								
	TK208								
	TK23								
	TK47								
	MT15								
600	住社式	TK10							
	TK43								
	TK209								
	栗園式	TK217							

■ 著者大塚

■ 方形埴輪基

■ 土灰倉古墳群

■ 青竹古墳群

■ お花山
古墳群

■ 滝原古
墳群

■ お花山
古墳群

■ 2号

■ 1号

■ 2号

■ 大之塔

IV期

V期前半

V期後半

■ 2号

■ 1号

第38表 山形盆地の古墳編年表

ないものであり、その背後に畿内の王權を中心とする勢力の介在を示唆するものである。またこの時期以降、中小円墳からなる古墳群が成立し、そのため築造される古墳の数が一挙に増大していることは、古墳築造可能な階層が拡大していることを示している。おそらく、これらの階層を取り込む形で、畿内王權を中心とする勢力が地方經營を拡大していったことを、この時期の古墳の変化は示すのである。菅沢2号墳に畿内の特徴を色濃く残した埴輪が樹立されていることも、このような動向の中で理解されるべきものと考えられる。菅沢2号墳に葬られた首長が、畿内を中心とする先進地域の勢力と結び付いたなかで、このような埴輪がもたらされたのであろう。

山形盆地の古墳の中、菅沢2号墳は円墳ではあるものの、傑出した規模を有している。またその埴輪の内容も、東北地方全体を見渡しても、特に充実したものである。これらのことから、菅沢2号墳に葬られた首長は、山形盆地の中で、特に大きな権力を握った支配者であったと思われる。したがって、この時期の古墳の変化に見られる、政治的支配のあり方の変化の中で、特に重要な位置を占めた人物であったであろう。

畿内王權を中心とする中央の勢力が地方經營を進めていく過程で、それらの勢力と結び付き、山形の地で大きな権力を確立した首長の奥津城として築造されたのが、この菅沢2号墳であつたと考えられる。

引用・参考文献

(ア)

- 阿部明彦 (1986・3)「三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(1)」山形県埋蔵文化財調査報告書第106集
東北電力株式会社山形支店・山形県教育委員会
- 阿部明彦 (1986・7)「最上川流域の土師器編年と関東北との対比」『山形考古学会第28回総会研究大会発表予稿集—最上川流域の古墳の年代論—』pp.4~7 山形考古学会
- 阿部明彦 (1987・3)「三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(2)」山形県埋蔵文化財調査報告書第107集
日本道路公団仙台建設局・山形県教育委員会
- 阿部明彦・黒坂雅人・吉田洋一 (1988・3)「鶴岡西部地区遺跡群 矢馳A遺跡・矢馳B遺跡・清水新田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 山形県・山形県教育委員会
- 安藤満基 (1974・3)「千葉県木更津市烟沢窯址の調査速報」『古代』第57号 pp.35~37 早稲田大学考古学会
- 石川均・森田久男・小森哲也 (1985・11)「櫛木県域における埴輪の諸問題」『第6回三県シンポジウム 塩輪の変遷—普遍性と地域性—』 pp.279~335 群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文・研究所・北武藏古代文化研究会
- 伊藤玄三 (1970・10)「五世紀の古墳」『古代の日本』8 東北 pp.53~64 角川書店
- 伊藤忍 (1971)「山形盆地における発生期古墳の様相」『山形史学研究』第7号 pp.72~86
- 伊藤忍 (1972)「山形市上町石岡出土の石棺」『さあへい』
- 伊東信雄・伊藤玄三・岩瀬康治 (1974・3)「裏町古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第7集
仙台市教育委員会
- 伊東信雄他編 (1981・10)『宮城縣史 34 考古資料編』宮城縣
- 橋村繁 (1986・8)「群馬県における馬形埴輪の変遷—上芝古墳出土品を中心として—」『MUSEUM』No.425 pp.4~20 東京国立博物館
- 井上裕一 (1985・12)「馬形埴輪の研究—製作技法を中心として—」『古代探求II』早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集 pp.369~414 早稲田大学出版部
- 今津節生 (1984)「新材料による出土土器の補修」「古文化財の科学』29 pp.101~108
- 今津節生他 (1988・10)「企画展 東国のはにわ」福島県立博物館
- 入江正則・岡本健一 (1989・3)「IV調査成果 1.石池谷地区」「日置莊遺跡(その5)調査の概要」pp.4~86
大阪府教育委員会・財團法人大阪文化財センター
- 氏家和典 (1957・3)「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史』第14輯 pp.1~14 東北史学会
- 氏家和典・加藤孝 (1966・6)「東北」「日本の考古学IV 古墳時代上」pp.499~528 河出書房
- 岡崎晋平・中村潤子 (1984・10)「特別展「大和の埴輪」」特別展図録第22冊 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 小野山節 (1959・11)「馬具と乗馬の風習」「世界考古学大系』3 pp.88~104 平凡社
- 小野山節 (1962・10)「日本発見の初期の馬具」「日本考古学協会昭和37年度大会研究発表要旨』 pp.9~10 日本考古学協会
- 小野山節 (1964・10)「則菱形彩葉をともなう馬具の性格」「日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』 pp.17~18 日本考古学協会
- 遠藤源七 (1912・3)「陸前下増田延ノ塚発掘の鎧形埴輪」「考古学雑誌』第2巻第7号 p.49 日本考古学会〔カ〕
- 柏倉亮吉 (1953)「山形県の古墳」
- 柏倉亮吉・武田好吉・加藤稔 (1968・3)「山形市史別巻1 岬遺跡」山形市
- 柏倉亮吉・武田好吉・伊藤忍 (1969)「土矢倉古墳—山形県における埴輪古墳の研究」上山市教育委員会
- 柏倉亮吉 (1973)「第二章第三節 2 古墳の出現」「山形市史上巻 原始・古代・中世編」pp.305~33 山形市
- 柏倉亮吉・川崎利夫他 (1978・11)「上達矢塚古墳調査報告書」天童市・上達矢塚古墳調査団
- 加藤稔 (1973・11)「最上川流域における古墳文化的展開」「工藤定雄教授還暦記念論文集 最上川流域の歴史と文化』pp.109~164 山形史学研究会

- 加藤稔・龟田晃明・手塚孝他 (1983-3) 「戸塚山第 137号墳発掘調査報告書－戸塚山古墳群調査報告書第1集」 米沢市埋蔵文化財調査報告書第9集 米沢市教育委員会
- 加藤稔・藤田有宣他 (1984-2) 「天神森古墳発掘調査報告書」 川西町埋蔵文化財調査報告書第6集
川西町教育委員会
- 加藤稔他 (1987) 「菅沢2号墳発掘調査報告書」 山形市教育委員会
- 金井塙良一他 (1987-10) 「討論 群馬・埼玉の埴輪」 あさを社
- 川崎利夫・野尻侃・横田昭二 (1979-3) 「大之越古墳発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第18集
山形県教育委員会
- 川崎利夫 (1973-11) 「山形盆地の古式土師器」「工藤定雄教授還暦記念論文集 最上川流域の歴史と文化」 pp.83~108 山形史学研究会
- 川崎利夫 (1982) 「第五章第二節展開期の古墳とその被葬者」 「山形市史第一巻 原始・古代・中世編」 pp.269~282 山形市
- 川崎利夫 (1985-5) 「日本の古代遺跡21 山形」 保育社
- 川崎利夫 (1988-2) 「山辺町坊主塚1号墳第一次調査概報」 山辺町教育委員会・坊主塚古墳群調査団
- 川崎利夫 (1990-9) 「東北 2 山形・秋田」 「古墳時代の研究第11巻 地域の古墳II東日本」 pp.175~184 雄山閣出版
- 川西宏幸 (1973-7) 「埴輪研究の課題」 「史林」 第56巻第4号 pp.108~125 史学研究会
- 川西宏幸 (1977) 「淡輪の首長と埴輪生産」 「大阪文化誌」 第2巻第4号 pp.13~46
- 川西宏幸 (1978-9) 「円筒埴輪論」 「考古学雑誌」 第64巻第2号 pp.1~70 日本考古学会
- 川西宏幸 (1979-3) 「円筒埴輪論 地籍文献叢覧」 「考古学雑誌」 第64巻第4号 pp.90~105
日本考古学会
- 川村紀子 (1982-3) 「古市古墳群の円筒埴輪」 「古市遺跡群III」 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 7
pp.146~150 羽曳野市教育委員会
- 北武藏古代文化研究会他 (1985-11) 「第6回三県シンポジウム 墓輪の変遷－普遍性と地域性－」 群馬県考古学講話会・千曲川水系古代文化研究所・北武藏古代文化研究会
- 国学院大学考古学資料館河井山遺跡調査会 (1990-3) 「河井山遺跡群第1号墳調査報告」 「国学院大学考古学資料館紀要」 第6輯 pp.1~38 国学院大学考古学資料館
- 後藤守一 (1922-10) 「津山古墳実査報告」 「考古学雑誌」 第14巻第13号 pp.781~800 考古学会
- 後藤守一 (1933-4) 「上野國佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」 帝室博物館学報第六冊 帝室博物館
- 後藤守一・相川竜雄 (1936) 「多野郡平井村白石稻荷山古墳」 群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第3
- 小林行雄 (1966-7) 「埴輪」 陶器全集1 平凡社
- 小林行雄 (1974-8) 「埴輪」 開拓大系3 平凡社
〔サ〕
- 齊藤忠・柳田俊司他 (1980-11) 「埼玉縣荷山古墳」 埼玉県教育委員会
- 坂本和徳 (1985-11) 「埼玉県における円筒埴輪の縦年の諸問題」 「第6回三県シンポジウム 墓輪の変遷－普遍性と地域性－」 pp.63~69 群馬県考古学講話会・千曲川水系古代文化研究所・北武藏古代文化研究会
- 坂本美夫 (1985-4) 「馬具」 考古学ライブラリー-34 ニュー・サイエンス社
- 佐々木洋治・佐藤庄一 (1985-3) 「県指定史跡安久津古墳群」 山形県埋蔵文化財調査報告書第95集
山形県教育委員会
- 佐藤航雄・尾形興典 (1974-3) 「清水前古墳群発掘調査概報」 山形県埋蔵文化財調査報告書
山形県教育委員会
- 佐藤航雄・保角里志 (1979-3) 「福井古墳 昭和53年度調査概報」 山形県立博物館
- 佐藤庄一・名和達朗 (1985-3) 「沢田遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第88集
山形県・山形県教育委員会
- 佐藤正俊他 (1982) 「分布調査報告書(9)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第61集 山形県教育委員会
- 東海林次男 (1976-5) 「出羽南の古墳文化」 「山形考古」 第2巻第4号 pp.39~60 山形考古学会
- 白石太一郎 (1985-11) 「年代決定論(二)－弥生時代以降の年代決定－」 「岩波講座日本考古学1 研究の方法」

- pp.217-242 岩波書店
- 鈴木啓・辻秀人他 (1982・3)「原山1号墳発掘調査概報」福島県立博物館調査報告書第1集
福島県教育委員会
- [タ]
- 高橋克壽 (1988-3)「圓財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号 pp.69~104 史学研究会
- 高柳美久二 (1988)「木製の埴輪」再論』『京都考古』49 京都考古刊行会
- 立木修 (1981-9)「円柱を表現する家形埴輪-平城宮跡下層出土の家形埴輪-」『考古学雑誌』第67巻第2号 pp.119~128 日本考古学会
- 高木和夫・大越道正 (1979-3)「第2編板倉前B遺跡」『母畠地区遺跡発掘調査報告III』福島県文化財調査報告書第74集 pp.53~88 福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター
- 田中秀和 (1988-3)「畿内における蓋形埴輪の検討」『ヒストリア』第118号 pp.63~85 大阪歴史学会
- 田辺昭三 (1966-4)「陶邑古墳跡群I」平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 (1981-7)「須恵器大成」角川書店
- 玉川一郎・大越道正 (1978-3)「大玉村上高野出土遺物の再検討」『しのぶ考古』7 pp.1~11
しのぶ考古学会
- 玉川一郎 (1981-4)「舞台-福島県天栄村における古墳時代集落跡の調査-」福島県岩瀬郡天栄村教育委員会
- 千賀久也 (1990-10)「はにわの動物園」-関東の動物埴輪の世界- 桜原考古学研究所附設博物館特別展図録第34冊 奈良県立桜原考古学研究所附設博物館
- 辻秀人 (1986-3)「IV古墳時代」『図説発掘が語る日本史 第1巻北海道・東北編』pp.150~178
新人物往来社
- 辻秀人 (1986-12)「福島における埴輪生産の動向」『福島の研究第1巻』pp.249~272 清文堂出版
- 辻秀人 (1989-3)「東北古墳時代の画期について(その1)-中期後半の画期とその意義-」『福島県立博物館紀要』第3号 pp.1~19 福島県立博物館
- 辻秀人 (1990-9)「6東北 1福島」『古墳時代の研究第11巻 地域の古墳II東日本』pp.167~175 雄山閣出版
- 手塚孝・菊地政信 (1983-3)「米沢市万生町桑山团地造成地内埋蔵文化財調査報告書第II集 二夕保A遺跡・八幡堂遺跡」米沢市埋蔵文化財調査報告書第8集 米沢市教育委員会
- 手塚孝・龜田英明・菊地政信 (1984-3)「戸塚山古墳群詳細分布調査報告書」米沢市教育委員会
- 手塚孝 (1988-3)「比丘尼平堀発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第21集
米沢市・米沢市教育委員会
- 東京国立博物館 (1968-3)『東京国立博物館図版目録・古墳遺物篇(北海道・東北)』東京国立博物館
- 東北大学文学部 (1982-3)『考古学資料目録Vol. 2』東北大学文学部
- 十河徳裕 (1989-7)「2.日置莊町窪跡群」「大阪の埴輪窯-埴輪窯の検討・発表会資料』pp.6~10
財團法人大阪文化財センター
- 毒俊二郎 (1973-1)『埴輪研究』第1回
- [ナ]
- 長島英一 (1982-3)「大野田古墳群」「年報3」仙台市文化財調査報告書第41集 pp.13~28
仙台市教育委員会
- 永島暉臣慎他 (1978-3)「長原遺跡発掘調査報告」長原遺跡調査会
- 長崎至・佐藤正俊・渡谷孝雄 (1985-3)「お花山古墳群発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第85集日本道路公団仙台建設局・山形県教育委員会
- 長崎至 (1987-3)「お花山古墳群第3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第108集
日本道路公団仙台建設局・山形県教育委員会
- 西口寿生 (1975-1)「V古墳」「平城宮発掘調査報告VI-平城宮左京一条三坊の調査-」奈良国立文化財研究所
所学報第23冊 pp.109~127 奈良国立文化財研究所
- 西輪定生 (1961-12)「古墳と大和政権」『同山史学』第10号 pp.154~207 岡山史学会
- 西谷真治・置田雅昭 (1988-7)「ニゴレ古墳」京都府弥栄町文化財調査報告第5集 弥栄町教育委員会
- 西谷正 (1965)「藤の森・善上山古墳の調査」大阪府水道部
- 西村寅次 (1938-4)「置賜盆地の古代文化」郷土研究叢書第八輯 山形県郷土研究会

- 丹羽茂 (1983・3)「宮前遺跡」、「朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集 pp.71~213 宮城県教育委員会
- 丹羽茂 (1985・3)「今熊野遺跡I -古代編-」、「今熊野遺跡 一本杉遺跡 馬越石塚」宮城県文化財調査報告書第104集 pp.1~142 宮城県教育委員会
- 野上丈助 (1982・2)「大阪府の埴輪」大阪府立泉北考古資料館
〔八〕
- 橋本博文 (1980・3)「埴輪祭式論 -人物埴輪出現後の埴輪配列をめぐって-」、「駆逐り古墳群」pp.337~368 群馬県教育委員会
- 橋本博文 (1981・2)「埴輪研究の動態を追って」、「歴史公論」2月号 pp.120~130 雄山閣
- 橋本博文 (1987・8a)「埴輪の出現 -関東地方の場合-」、「季刊考古学」第20号 pp.18~22 雄山閣
- 橋本博文 (1987・8b)「関東地方の埴輪」、「季刊考古学」第20号 pp.72~77 雄山閣
- 坂靖 (1985・3)「埴輪編年と技法伝播の問題」、「考古学と移住・移動」同志社大学考古学シリーズII pp.313~324 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 坂靖 (1987・6)「埴輪文化の地域性」、「考古学と地域文化」同志社大学考古学シリーズIII pp.213~226 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 坂靖 (1988・10)「埴輪文化の特質とその意義」、「権原考古学研究所論集」第八 pp.293~393 吉川弘文館
- 藤沢敦 (1986・7)「東北の埴輪」、「山形考古学会第28回総会研究大会発表予稿集 -最上川流域の古墳の年代論-」 pp.41~44 山形考古学会
- 藤沢敦 (1988・4)「山形市背沢2号墳の埴輪」、「山形考古」第4巻第2号 pp.51~56 山形考古学会
- 藤沢敦 (1990・9)「6東北 3宮城・岩手」、「古墳時代の研究第11巻 地域の古墳II 東日本」 pp.184~192 雄山閣出版
- 藤田宥宣 (1986・3)「下小松浜丘群小森山支群第61・64号墳調査報告書」川西町埋蔵文化財調査報告書第10集 川西町教育委員会
- 古市古墳群研究会編 (1985・11)「古市古墳群とその周辺」 桐河泉文庫
〔九〕
- 埋蔵文化財研究会 (1985・1)「形象埴輪の出土状況」第17回埋文研資料
- 松木武彦 (1988・3)「第5章 墓内における鶴形埴輪の変遷 -埴輪に描かれた鏡と実物の鏡-」、「待兼山遺跡 II」 pp.33~47 大阪大学埋蔵文化財調査委員会
- 松木武彦 (1990・3)「第8章 考察 1 蓋形埴輪の変遷と画期 -墓内を中心に-」、「鳥居前古墳 -総括編-」 大阪大学文学部考古学研究報告第1冊 pp.69~92 大阪大学文学部考古学研究室
- 日黒吉明・佐藤博重・大越道正 (1978・3)「第1編佐平林遺跡(I~IV区)」、「母畠地区遺跡発掘調査報告II」 福島県文化財調査報告書第67集 pp.11~116 福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター
- 本宮町歴史民俗資料館編 (1987・3)「天王塙古墳のしおり」本宮町教育委員会
〔十〕
- 柳沼賢治 (1989・11)「福島県中通り地方の土師器について」、「福島県に於ける古代土器の謎問題」 pp.18~54 万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会
- 柳沢一夫・杉山富雄 (1984・3)「御崎古墳1981~83年調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集 福岡市教育委員会
- 山形県 (1969)「山形県史資料11編考古資料」山形県
- 山崎義夫・大河内光夫 (1984・3)「天王塙古墳」本宮町文化財調査報告書第8集 福島県本宮町教育委員会
- 山崎義夫 (1987・8)「天王塙古墳の埴輪」、「季刊考古学」第20号 pp.60~64 雄山閣
- 駒城慎一・藤沢敦 (1987・8)「大野田古墳群 春日社古墳・鳥居塙古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第108集 仙台市教育委員会
- 吉野一郎・茨木光裕 (1988・3)「山形県南陽市福荷森古墳 -史跡整備に係る昭和62年度発掘調査概報-」 南陽市埋蔵文化財調査報告書第3集 南陽市教育委員会
- 吉野一郎・加藤徳・阿子島功・茨城光裕 (1989・3)「山形県南陽市福荷森古墳 -史跡整備に係る昭和63年度発掘調査報告書-」 南陽市埋蔵文化財調査報告書第4集 南陽市教育委員会
〔十一〕

- 若松良一他 (1987・4)『諏訪山33号墳の研究』
若松良一 (1988・3)『はにわ人の世界』埼玉県立さきたま資料館
渡辺泰伸他 (1974・9)『富沢窟跡』古窯跡研究会

写 真 図 版



図版1 菅沢古墳群航空写真（山形市道路河川課・1984年撮影）



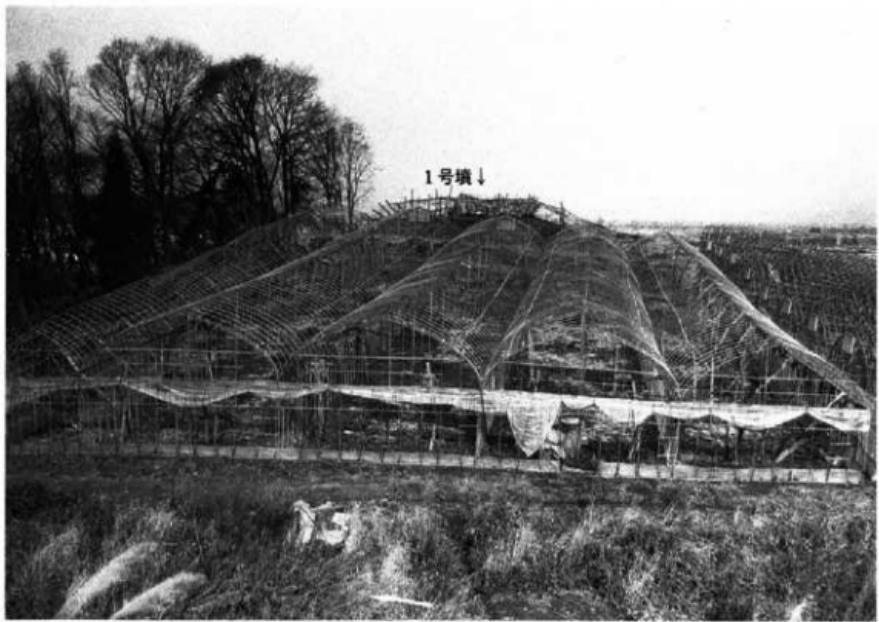
a 菅沢古墳群遠景 東より西方向をのぞむ



b 菅沢古墳群遠景 南東より北東方向をのぞむ



a 2号墳近景 北東より南西方向をのぞむ



b 1号墳近景 二号墳より北をのぞむ



a 3号墳遠景



b 2号墳からの眺望 (山形市街)



a 東トレンチ



b 東トレンチ上半部土層断面



c 東トレンチ土層断面 テラス付近



a 西トレンチ



b 西トレンチ上半部土層断面



c 西トレンチ下半部



a 南トレンチ



c 南トレンチ上半部土層断面(1)



b 南トレンチ上半部土層断面(2)



a 北トレンチ土層断面



b 北トレンチ上半部土層断面



a 西側周溝部(1)



b 西側周溝部(2)



a 2号墳主体部(1) 南から



b 2号墳主体部(2) 西から



a 主体部横断面 西から



b 主体部縦断面 南から



a 主体部東側確認状況(1) 西から



b 主体部東側確認状況(2) 南から



a 東北側テラス



b 東北側テラス
上面のピット



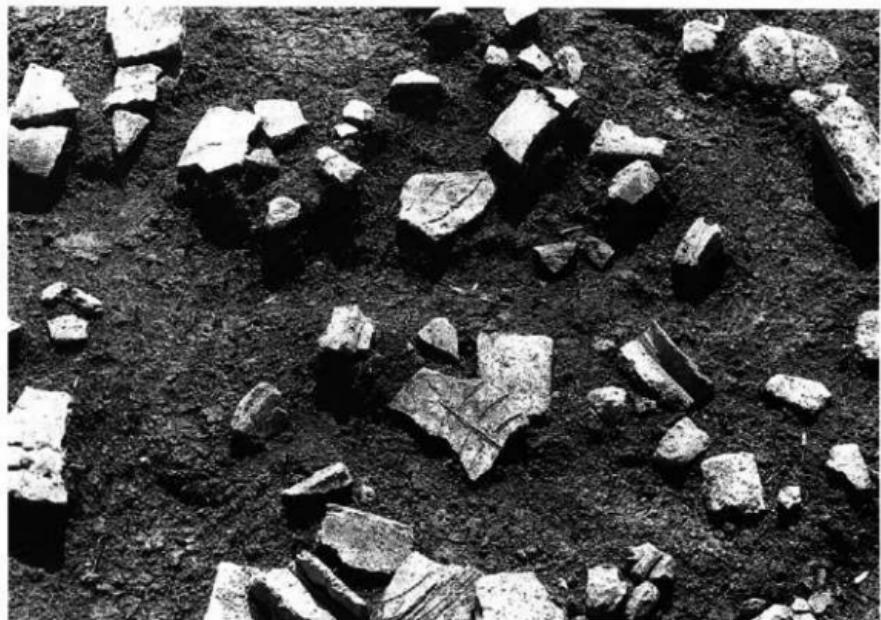
c ピット掘り方



a 東南墳墓部(c-4グリッド) 墓輸出土状況(1)



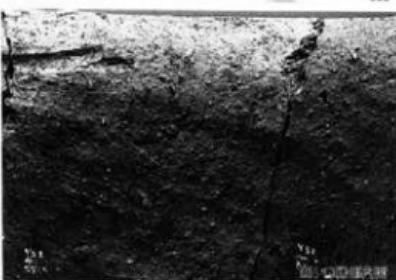
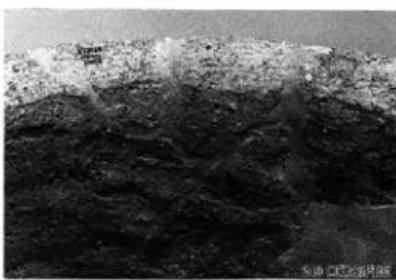
b 東南墳墓部墳輸出土状況(2)



a 東南墳龍部形象埴輪出土狀況(1)



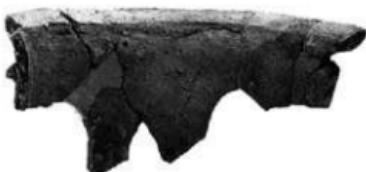
b 東南墳龍部形象埴輪出土狀況(2)



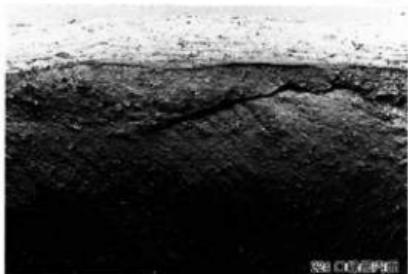
図版16 円筒埴輪(1)



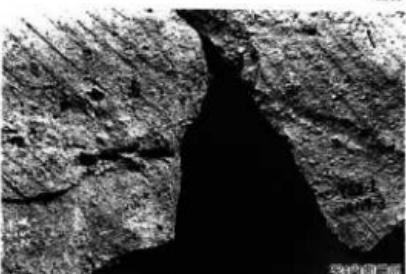
224a



224b



225a



225b



249a



249b



258a



258b



602

図版17 円筒埴輪(2)



260a



236a



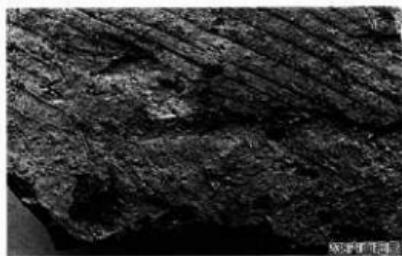
236b



260b



021a



021b



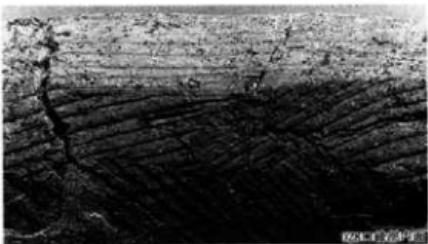
028a



028b

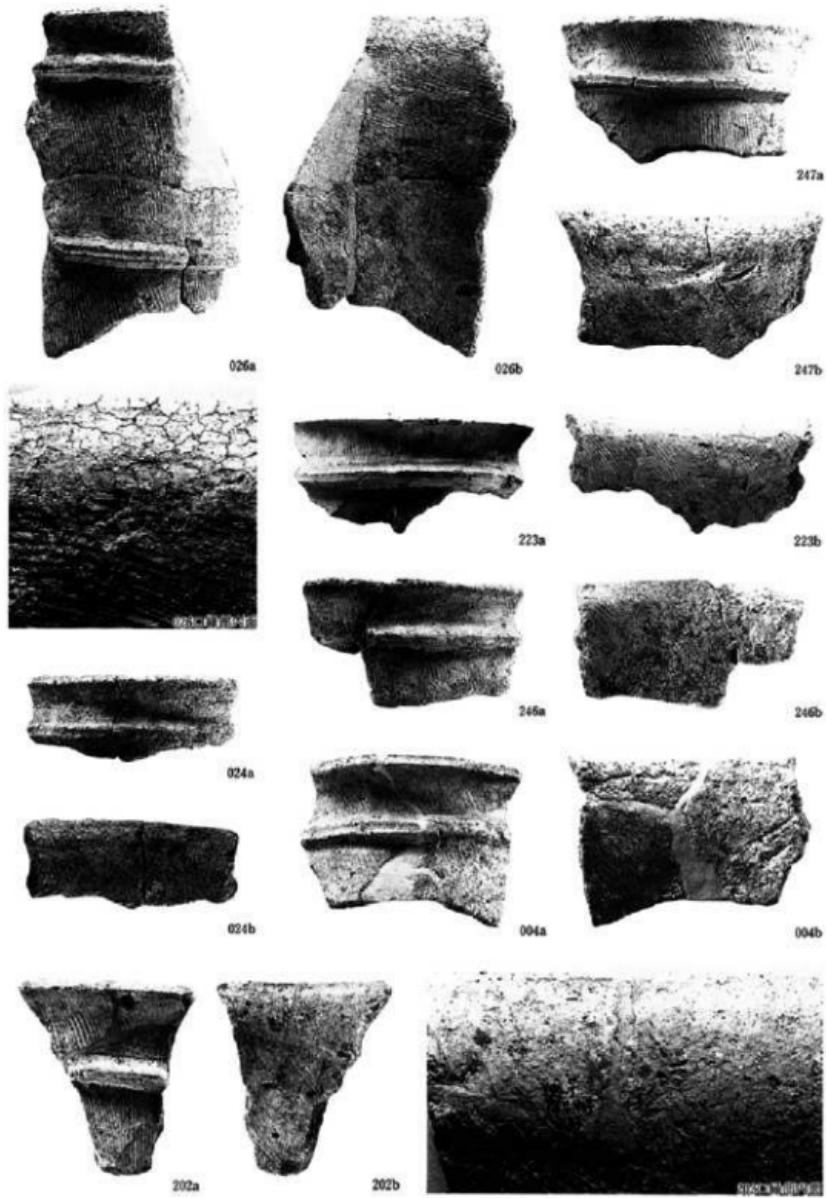


021a

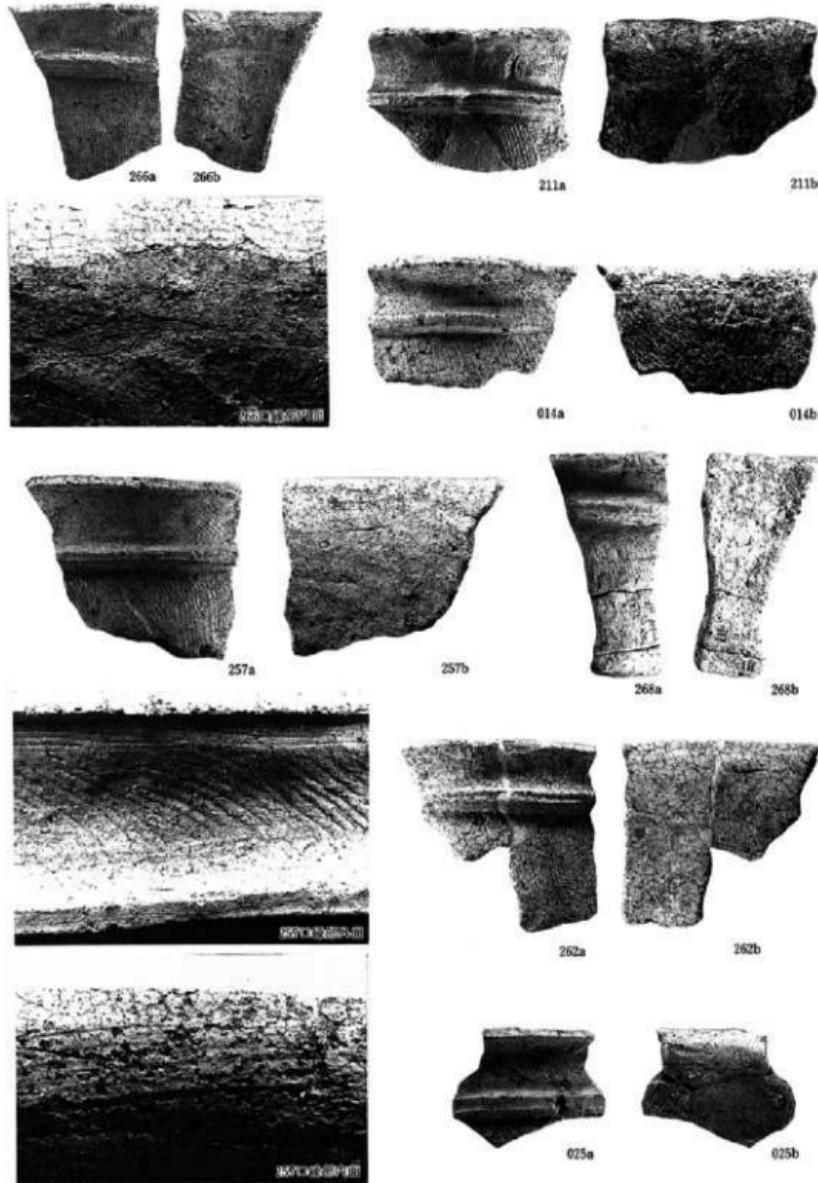


028a

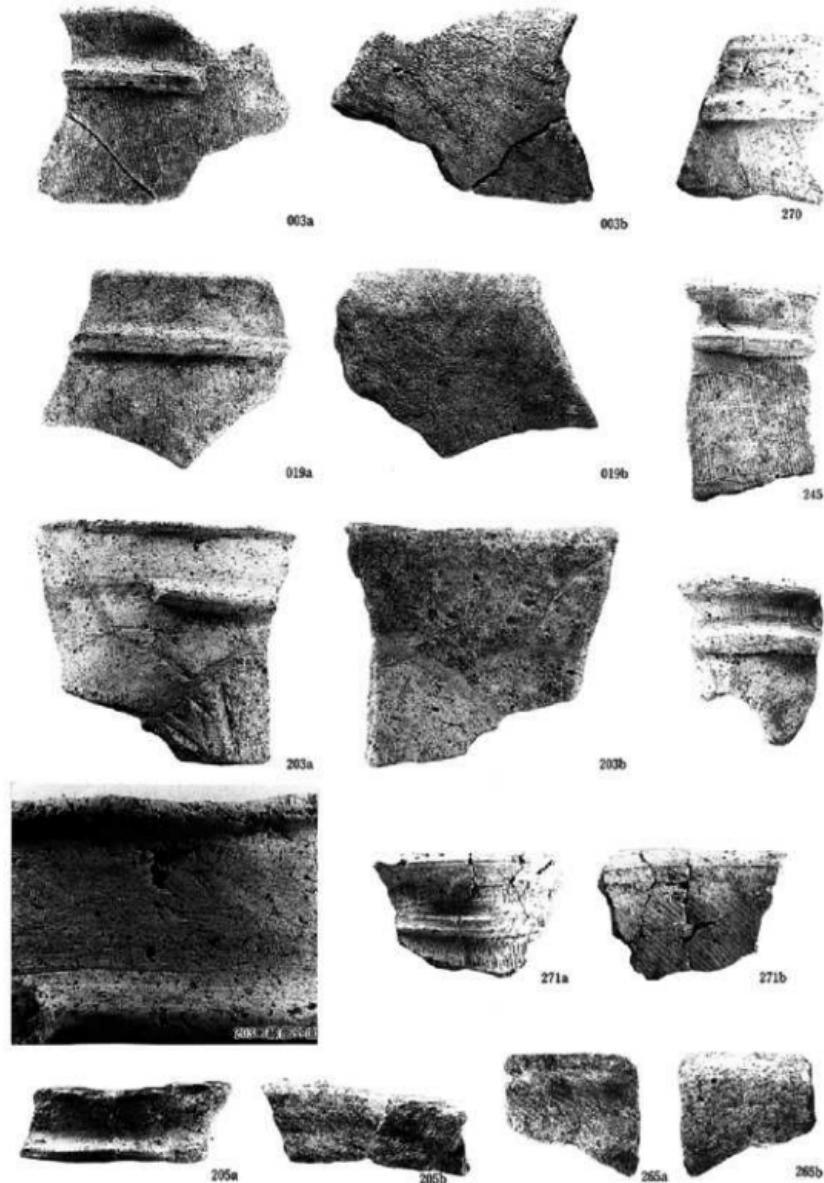
図版18 円筒埴輪(3)



図版19 円筒埴輪(4)



図版20 円筒埴輪(5)



図版21 円筒埴輪(6)



221a



221b



244a



244b



234a



234b



234a



234b

図版22 円筒埴輪(7)



011a



011b



006a



006b



005a



005b



207a



207b

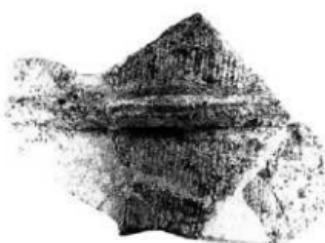


261a



261b

図版23 円筒埴輪(8)



018a



018b



017a



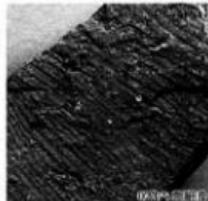
017b



023a



023b



023b



206a



206b

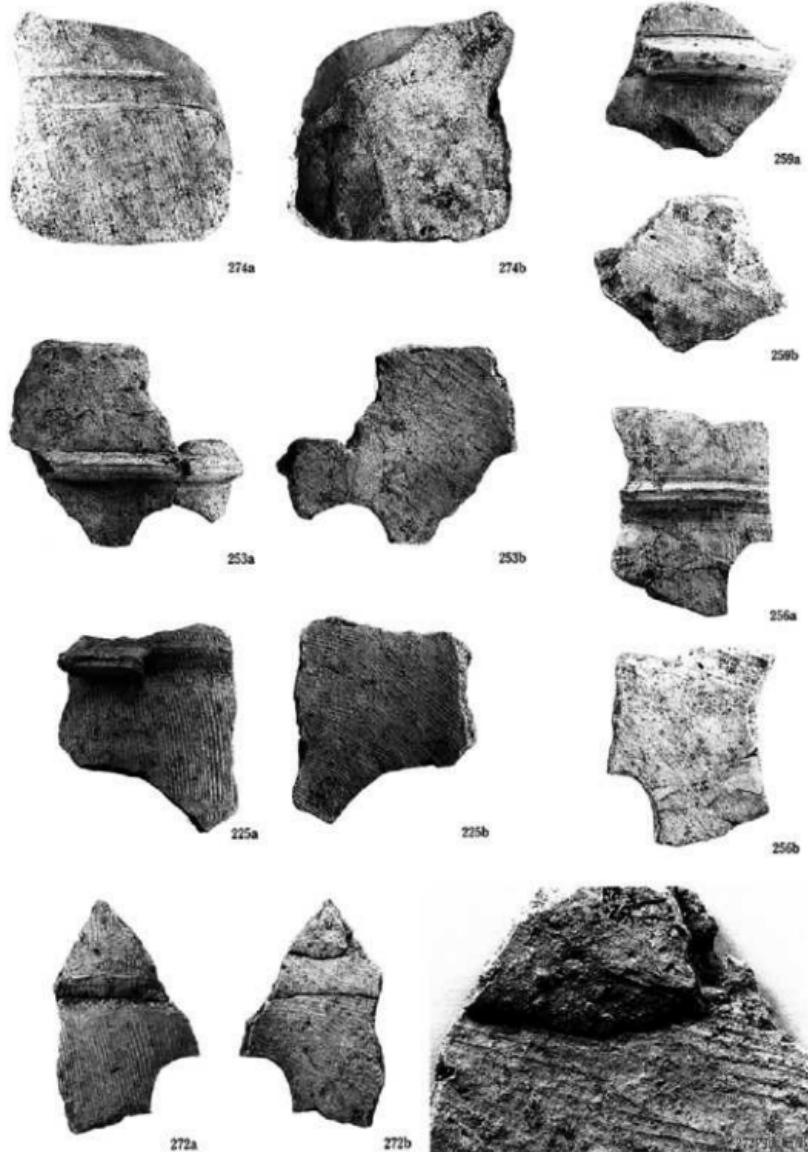


248a



248b

図版24 円筒埴輪(9)



図版25 円筒埴輪(1)



276a



276b



241a



241b



277a



237a



237b



277b



227a



227b



007a



267a



267b



007b

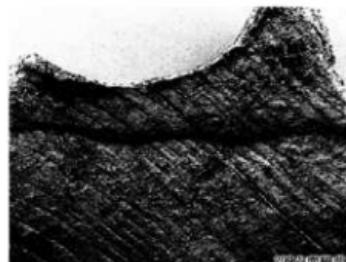
図版26 円筒埴輪①



209a



209b



251a



252a



252b



251b



251b



012a



012b



263a



263b

図版27 円筒埴輪12



015a



015b



236a



236b



228a



228b



233a



013a



013b



232a



232b



218a



218b

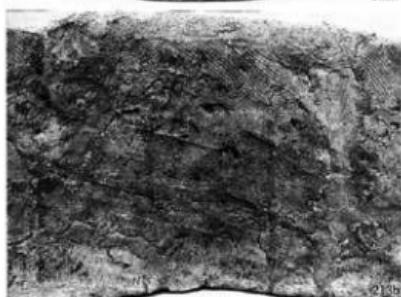
図版28 円筒埴輪(1)



213a



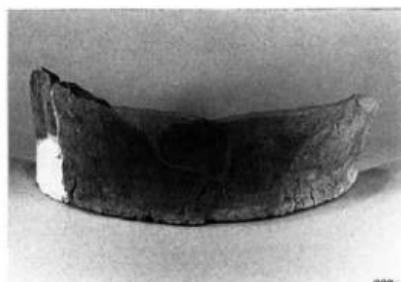
212a



213b



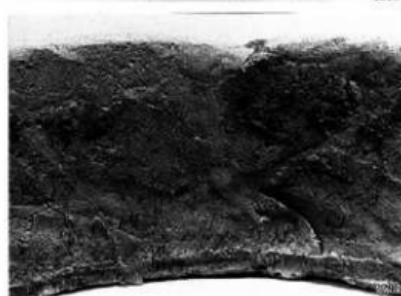
212b



229a



214a



図版29 円筒埴輪14



016



255a



219a



255b



219b



230a



217a



222a



217b



222b

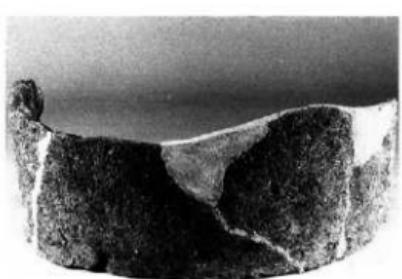
図版30 円筒埴輪(5)



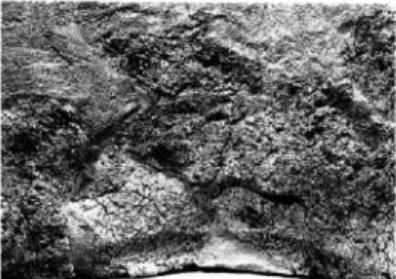
215a



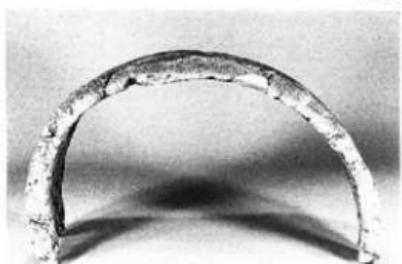
250a



216a



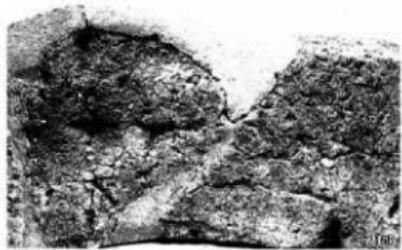
242a



216底面



242a



216b



242b

図版31 円筒埴輪06



022a



022b



032a



032b



210a



027a



210b



027b



208a



208a底面



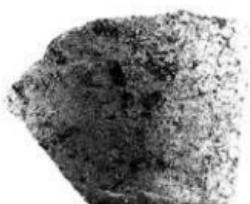
208b



図版32 円筒埴輪(17)



220a



226a



220b



226b



231a



254a



231b



254b



275a



275b



275c

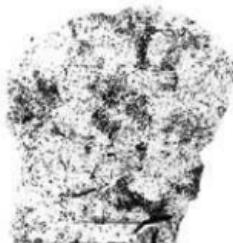
図版33 円筒埴輪18



264a



264b



030a



030b



235a



031a



031b



235b

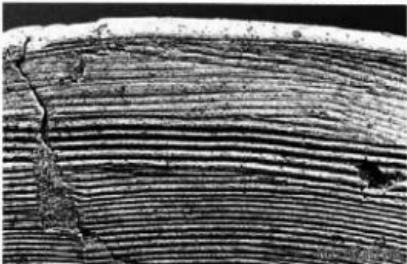
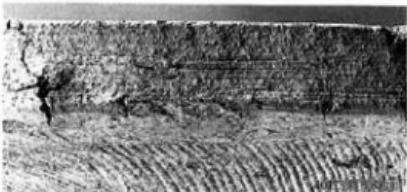
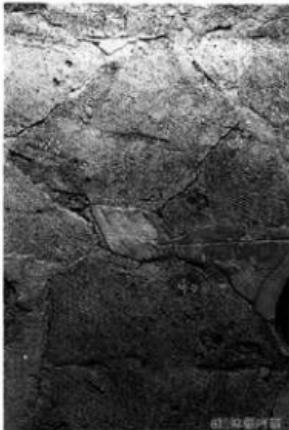


029a



029b

図版34 円筒埴輪19

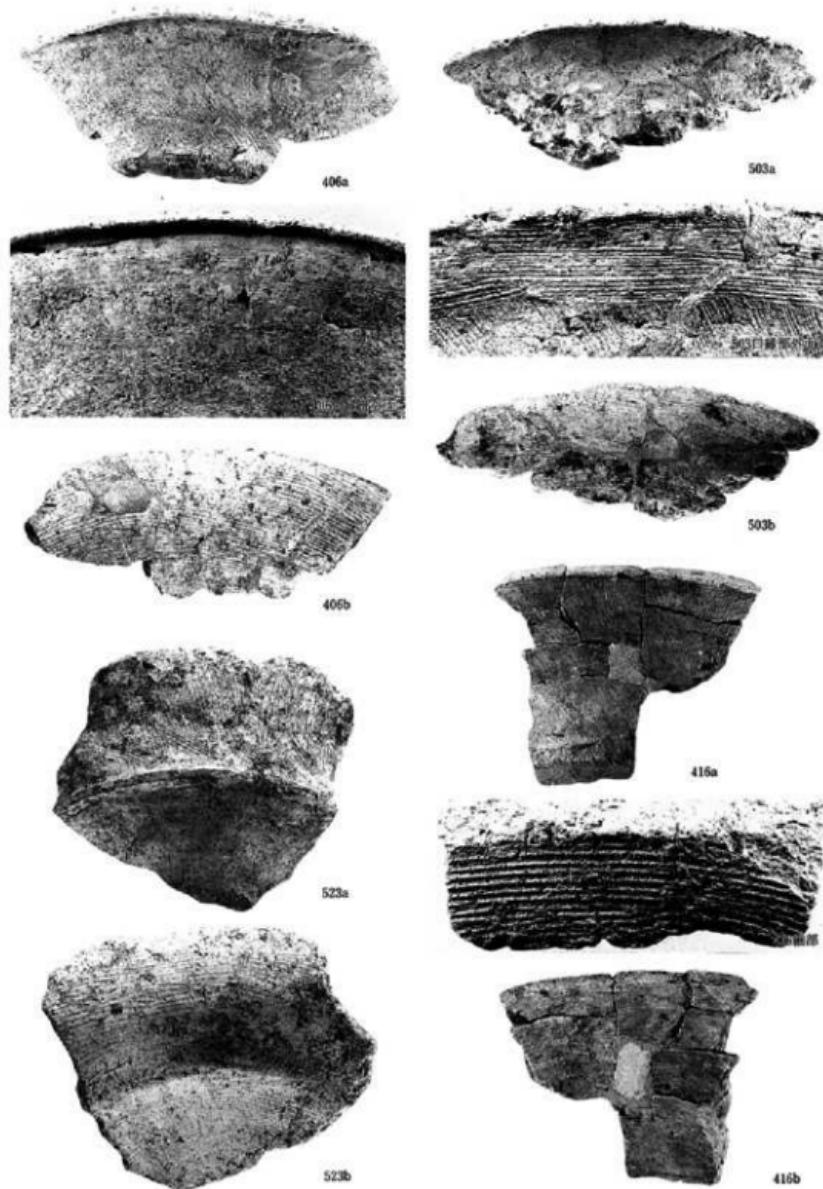


407a



407b

図版35 朝顔形埴輪(1)



圖版36 朝顎形埴輪(2)



410a



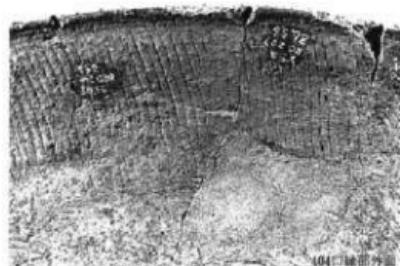
410b



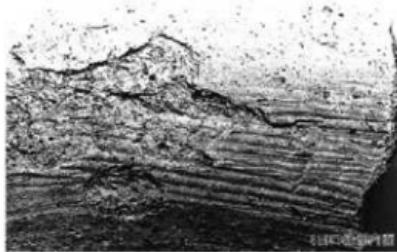
404a



404b



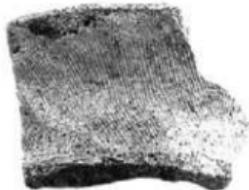
404c



404d



404e



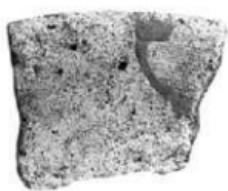
521a



524a



521b

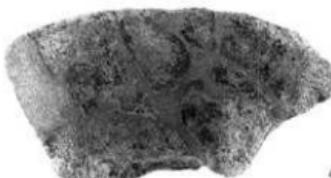


524b

圖版37 朝顏形埴輪(3)



502a



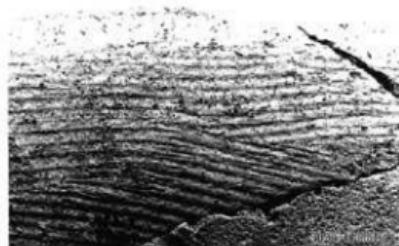
406a



502b



408b



507a



507b



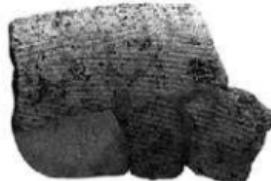
405a



516a



405b



516b

圖版38 朝顔形埴輪(4)



409a



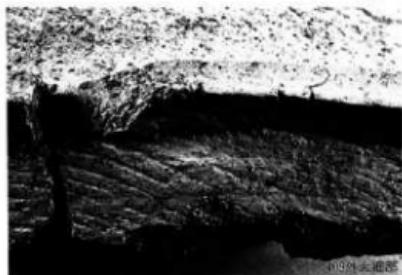
519a



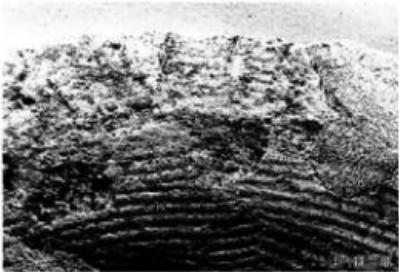
409b



519b



511a



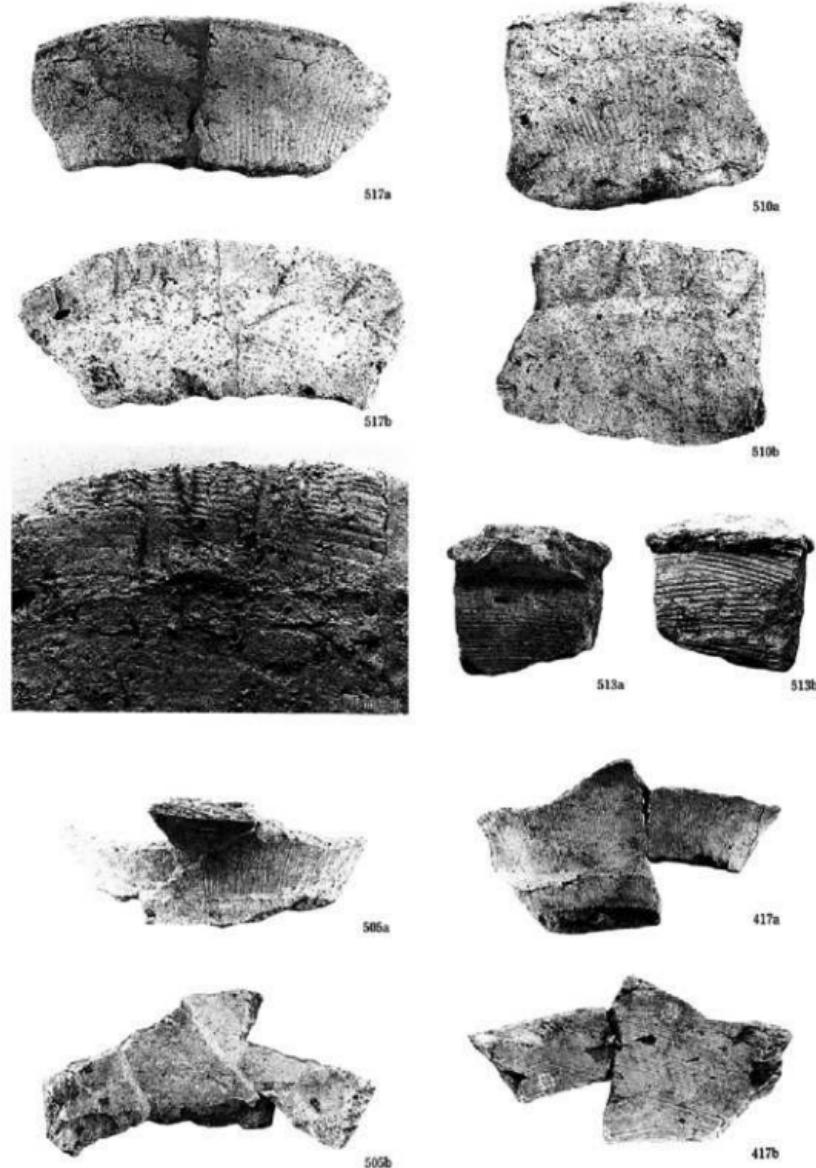
508a



511b



508b



図版40 朝鏡形埴輪(6)



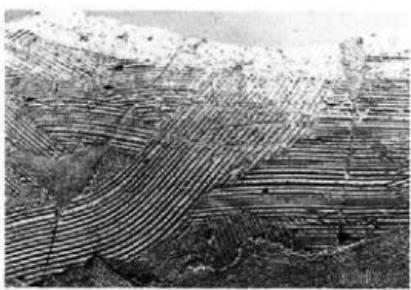
412



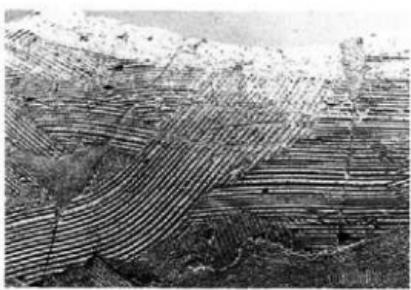
412底部内面



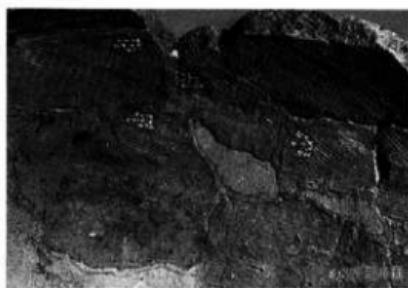
412底部外面



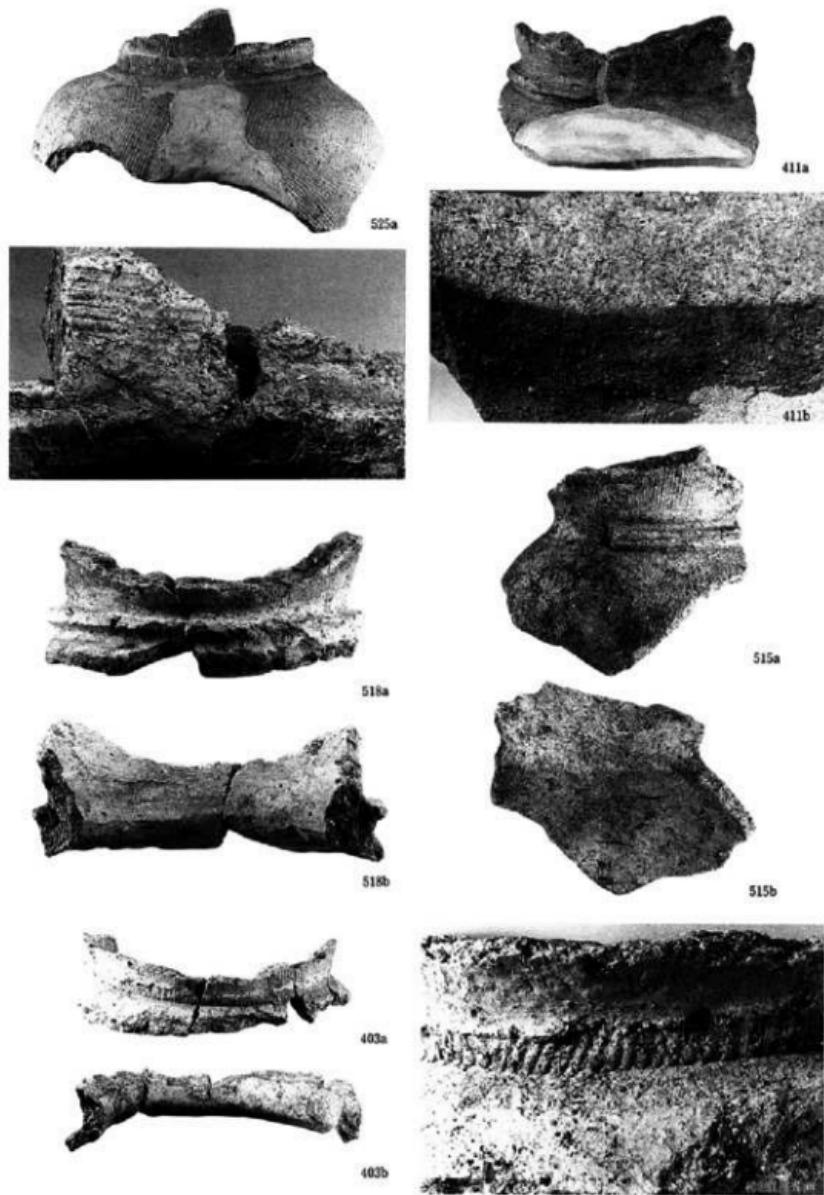
413



413底部内面



图版41 朝颐形埴輪(7)



図版42 朝顔形埴輪(8)

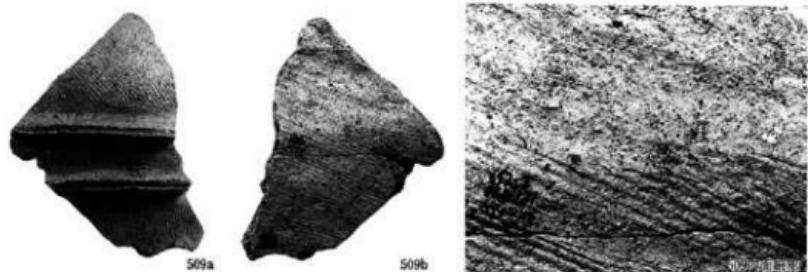


512a

512b

504a

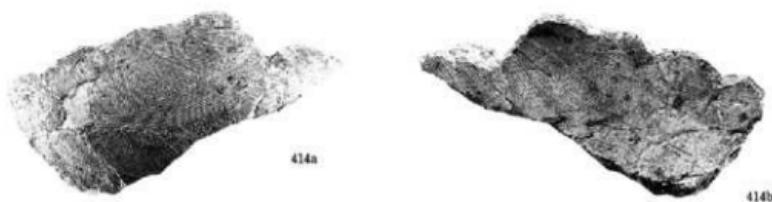
504b



509a

509b

小波浪形埴輪



414a

414b



415a

415b

図版43 朝顔形埴輪(9)



522a



522b



514a



514b



506a



506b



501a



501b

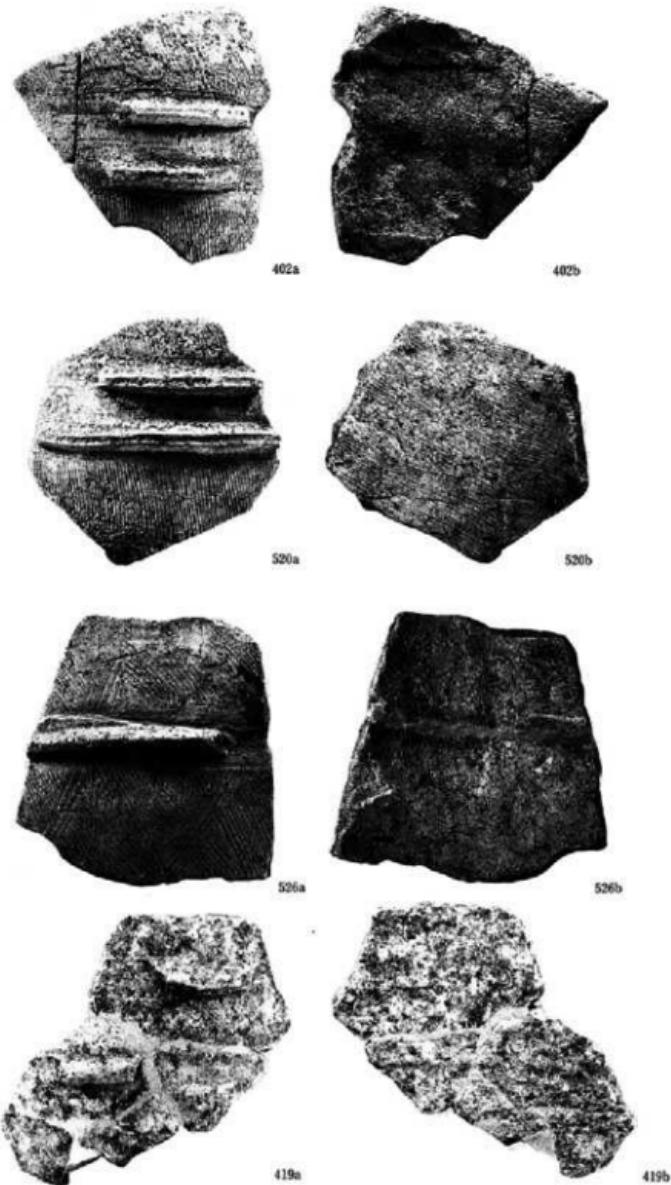


418a



418b

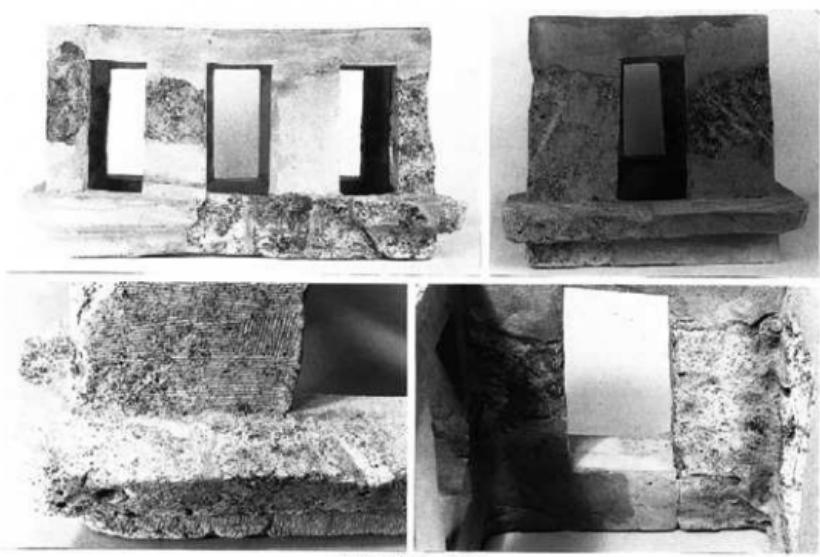
圖版44 朝顎形埴輪(1)



图版45 朝顔形埴輪(1)



家形埴輪 1 (601)

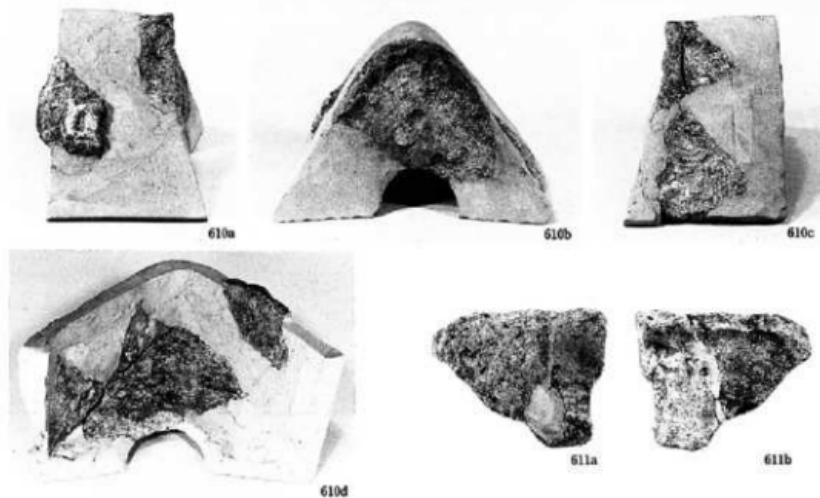


家形埴輪 6 (602)

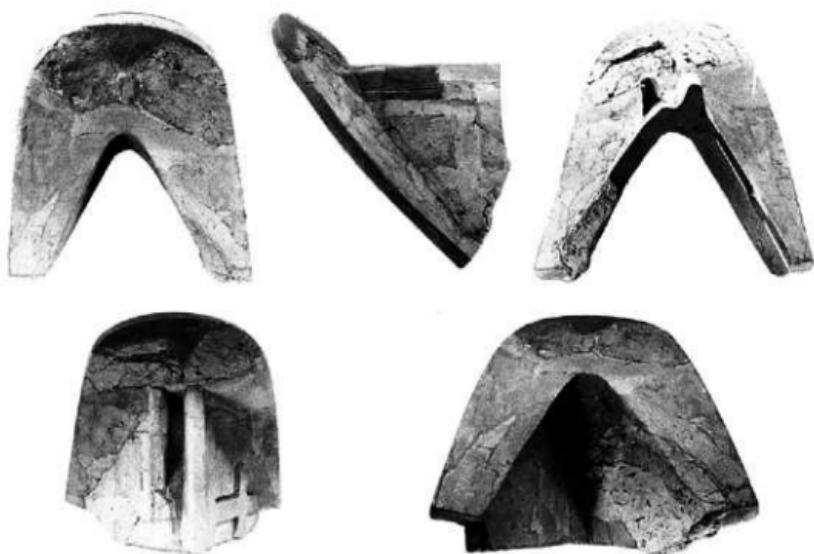
図版46 家形埴輪 1・家形埴輪 6



図版47 家形埴輪 2 (609)



家形埴輪 3



家形埴輪 4 (605)



606a



606b



724a



724b

家形埴輪 4



747b



747a



746a



746b



746c



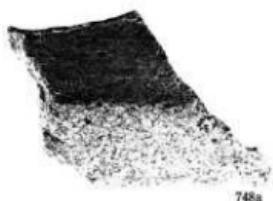
749a



749b

家形埴輪 7

図版49 家形埴輪 4 (2)・家形埴輪 7 (1)



748a



748b



748c



748d



750a



750b



750c



750d

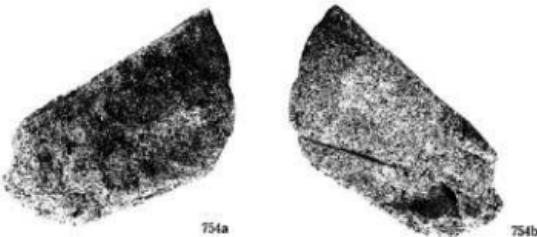


751a

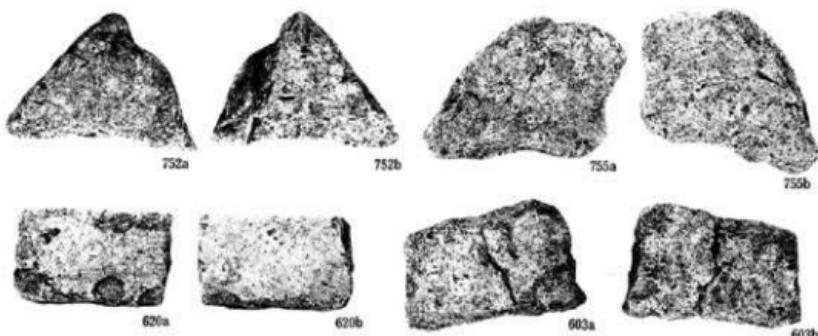
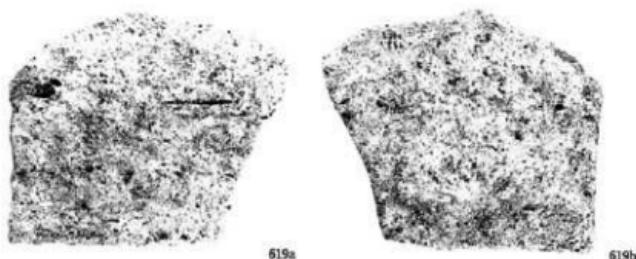
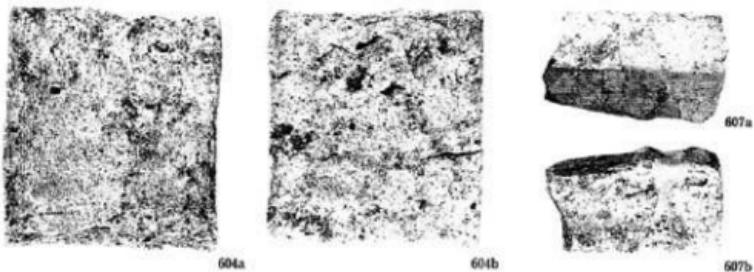


751b

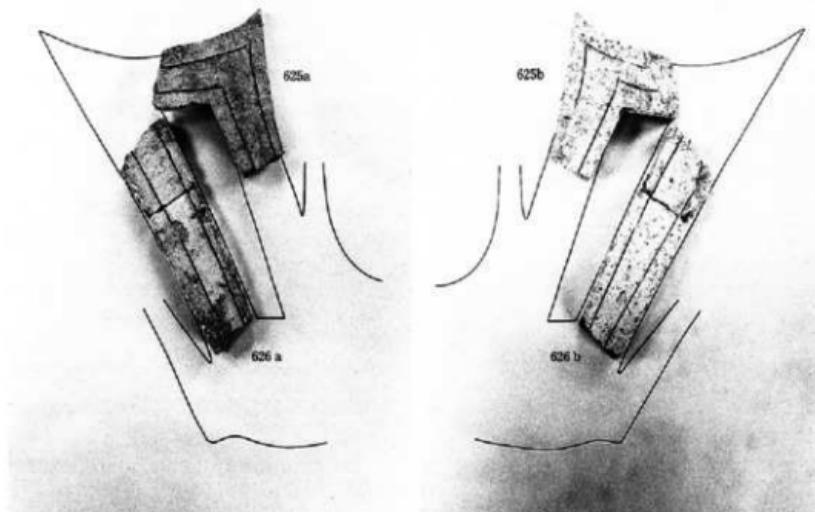
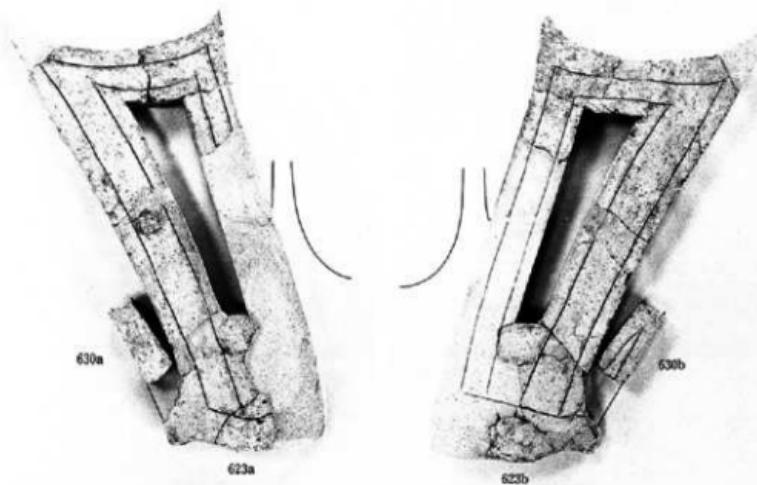
圖版50 家形埴輪 7(2)



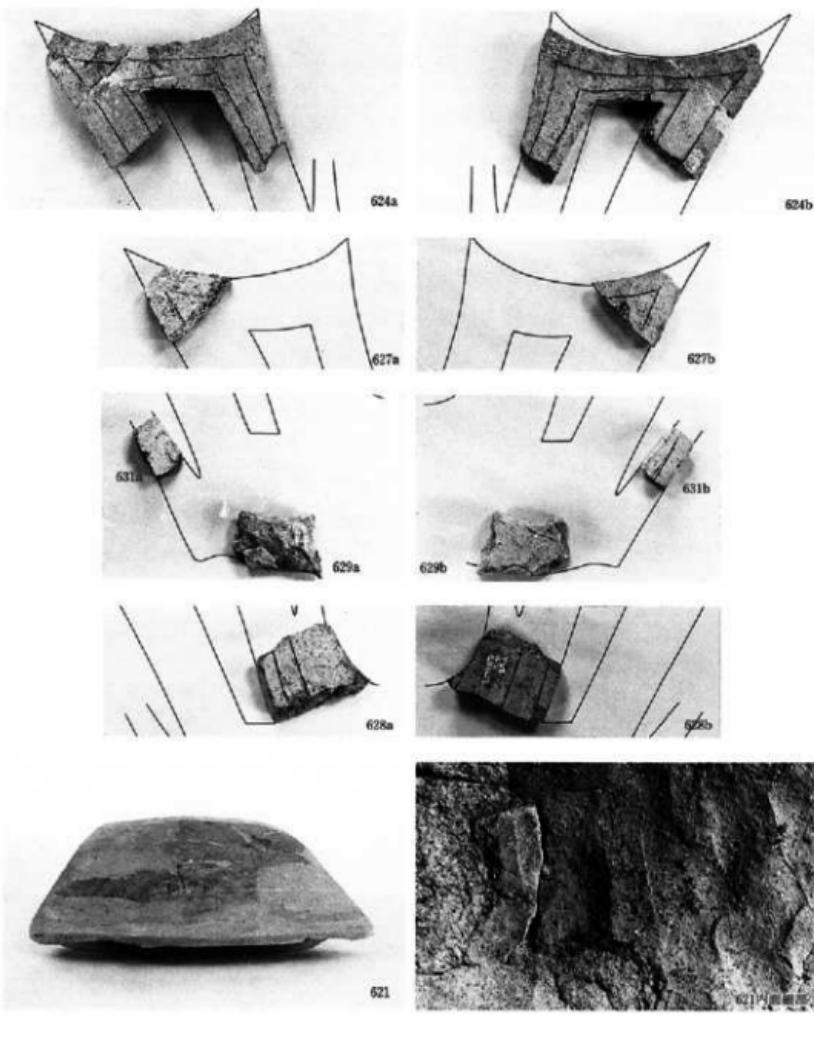
家形埴輪 5



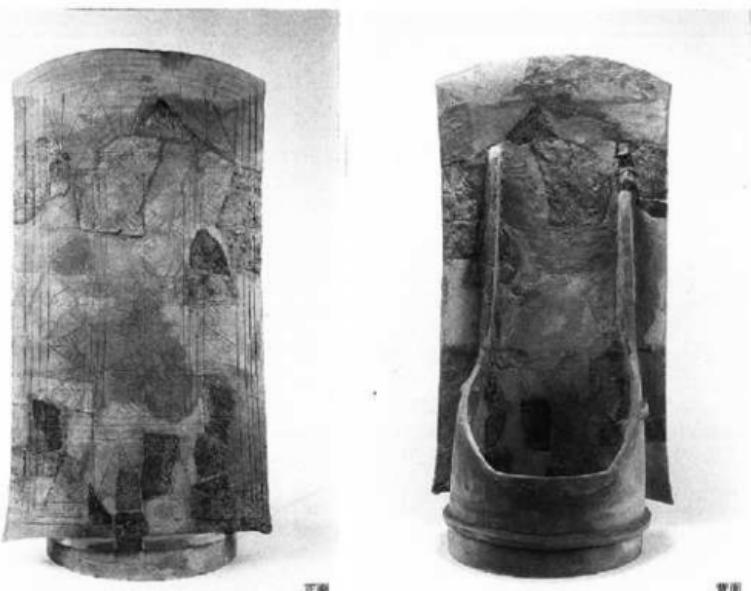
図版51 家形埴輪 5・帰属不明の家形埴輪



図版52 衣蓋形埴輪(1)

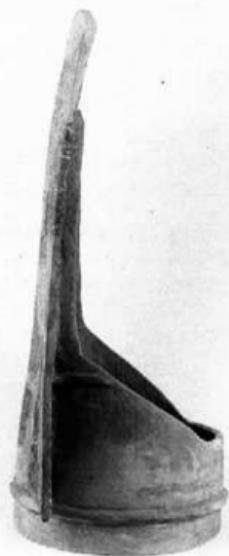


圖版53 衣蓋形埴輪(2)



正面

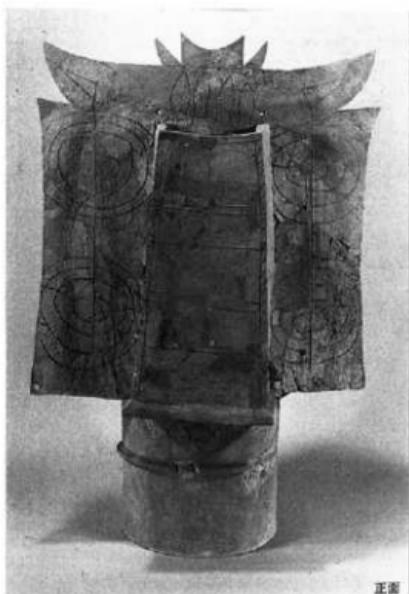
背面



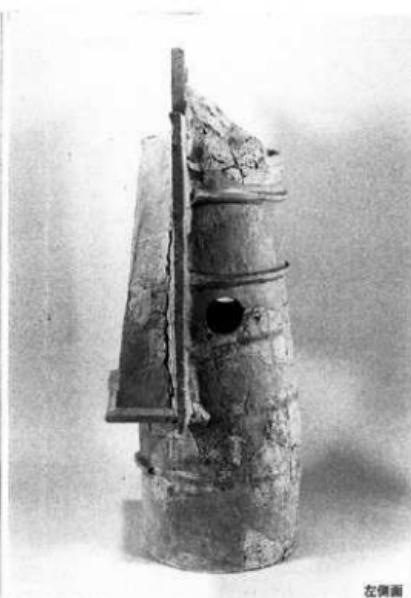
左侧圖



圖版54 盾形埴輪 1 (632)



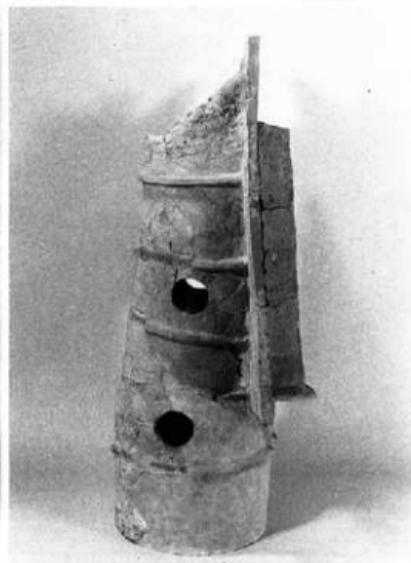
正面



左侧面

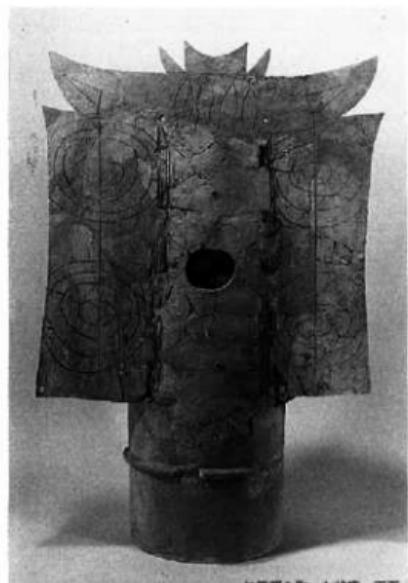


背面



右侧面

图版55 龙形埴輪 1 (633—1)



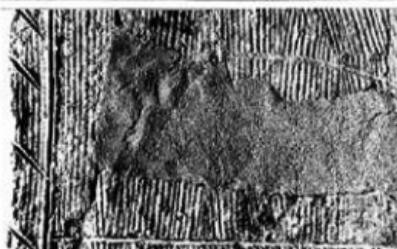
矢筒部を取った状態・正面



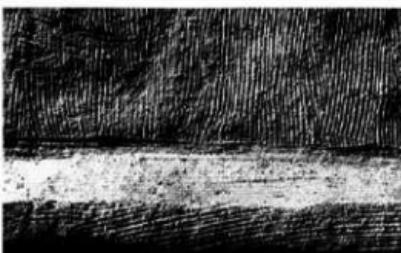
同・左侧面



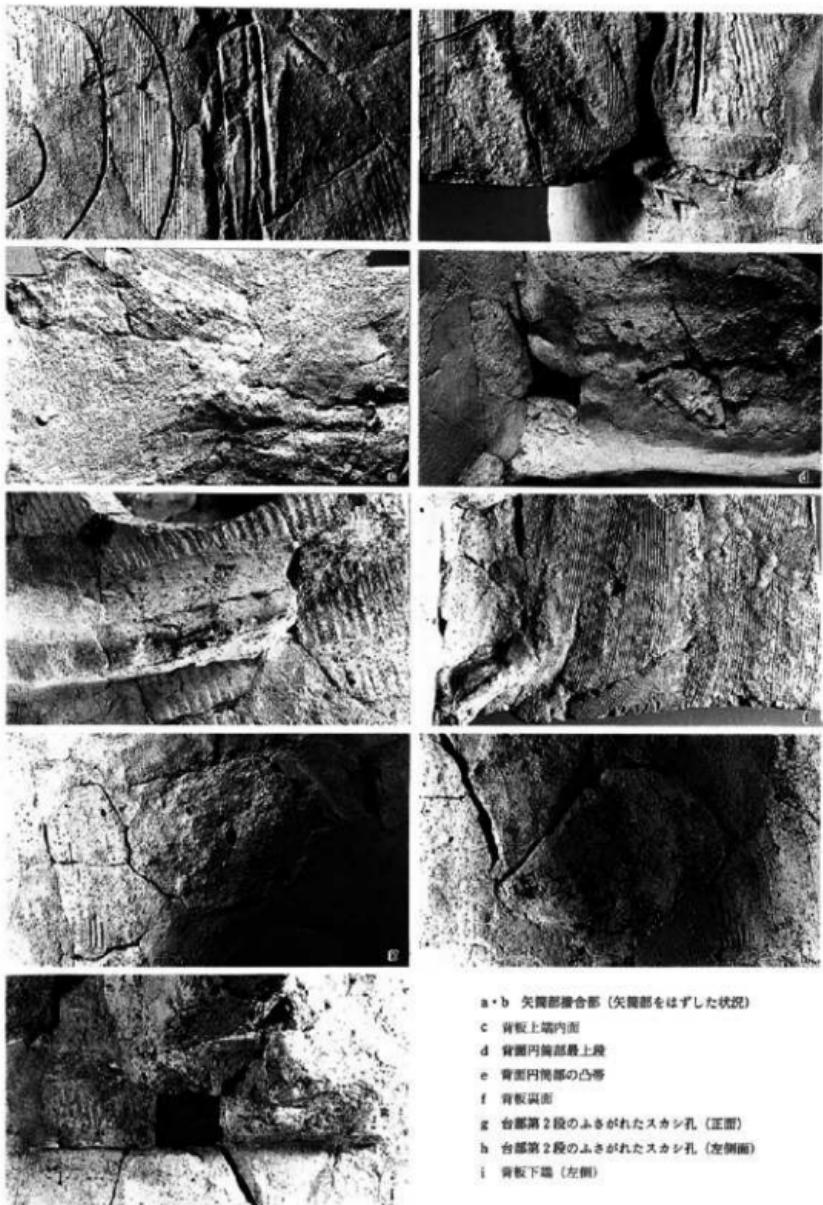
矢筒部内面



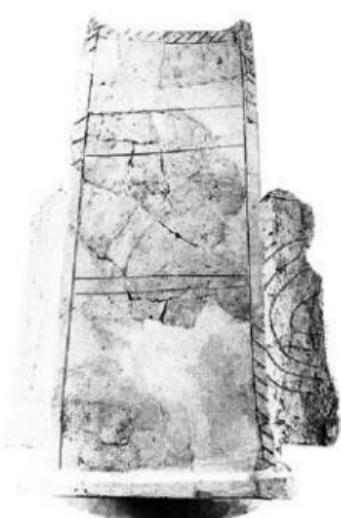
矢筒部外面



矢筒部下端外面



図版57 鞍形埴輪1 (633-3)



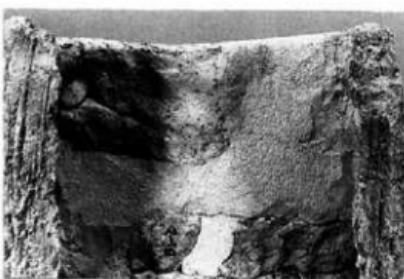
正面



左侧面



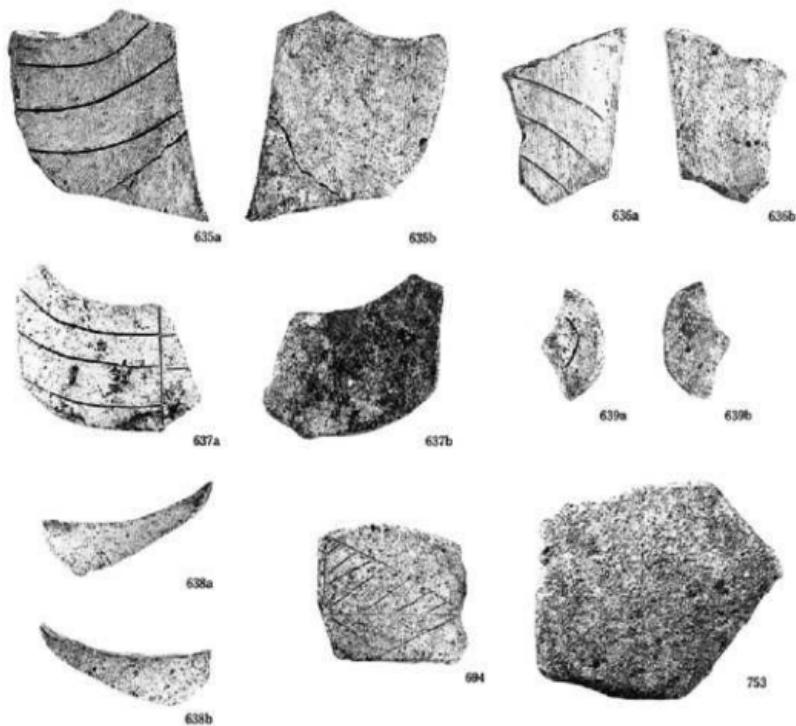
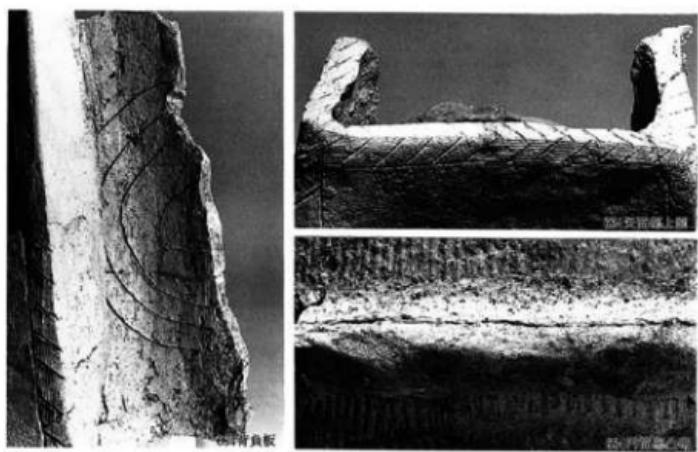
背面



円筒部内面



圖版58 駕形埴輪 2 (634)



圖版59 軸形埴輪・盾形埴輪



640正面



640左侧面

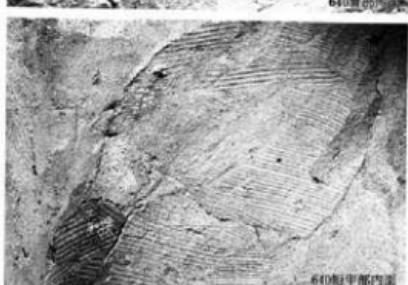
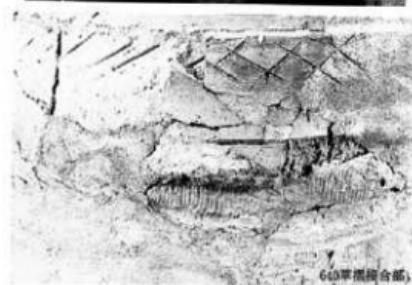


640背面



640右侧面

図版60 甲冑形埴輪 1(1)



646a

646b



645a

645b



646a



645b

645b



646b

图版61 甲青形埴輪 1(2)



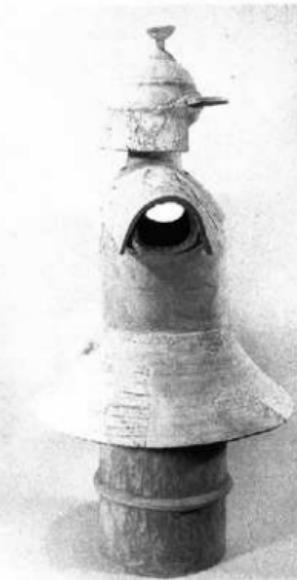
正面



左侧面

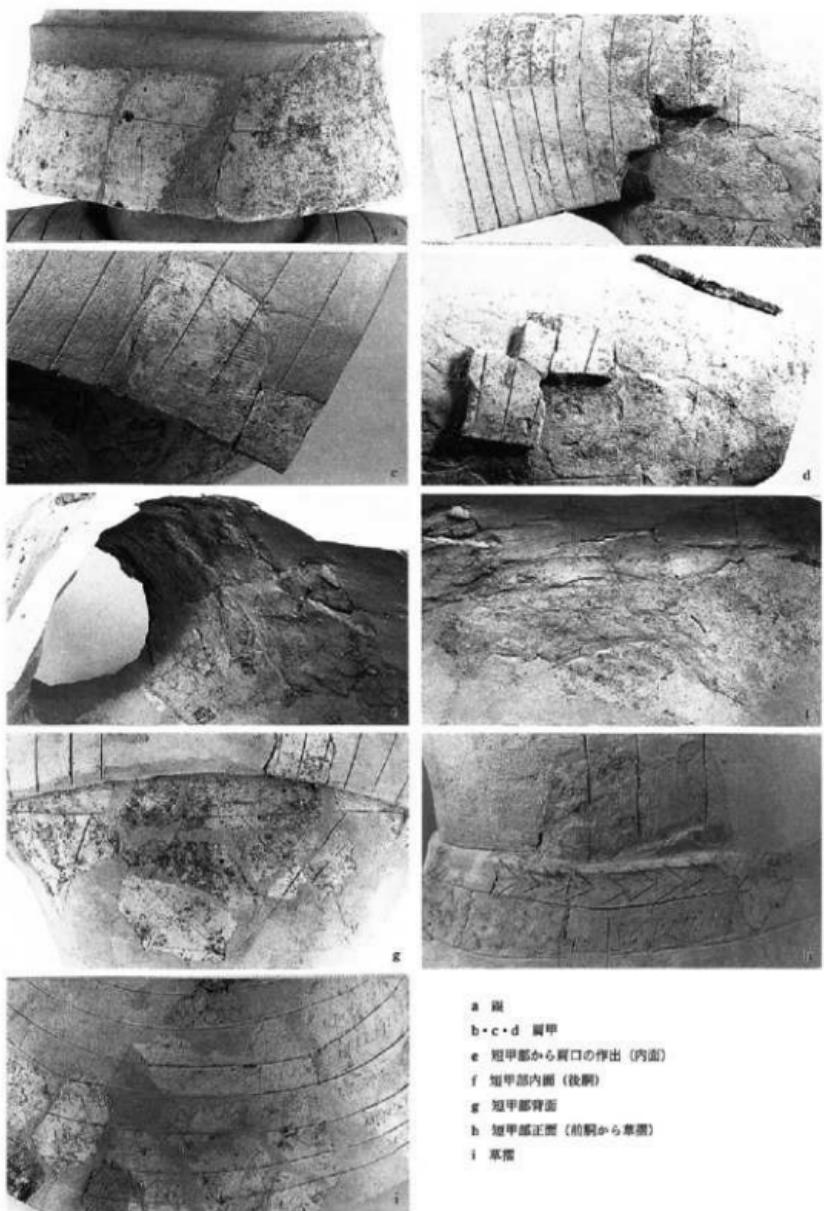


右侧面

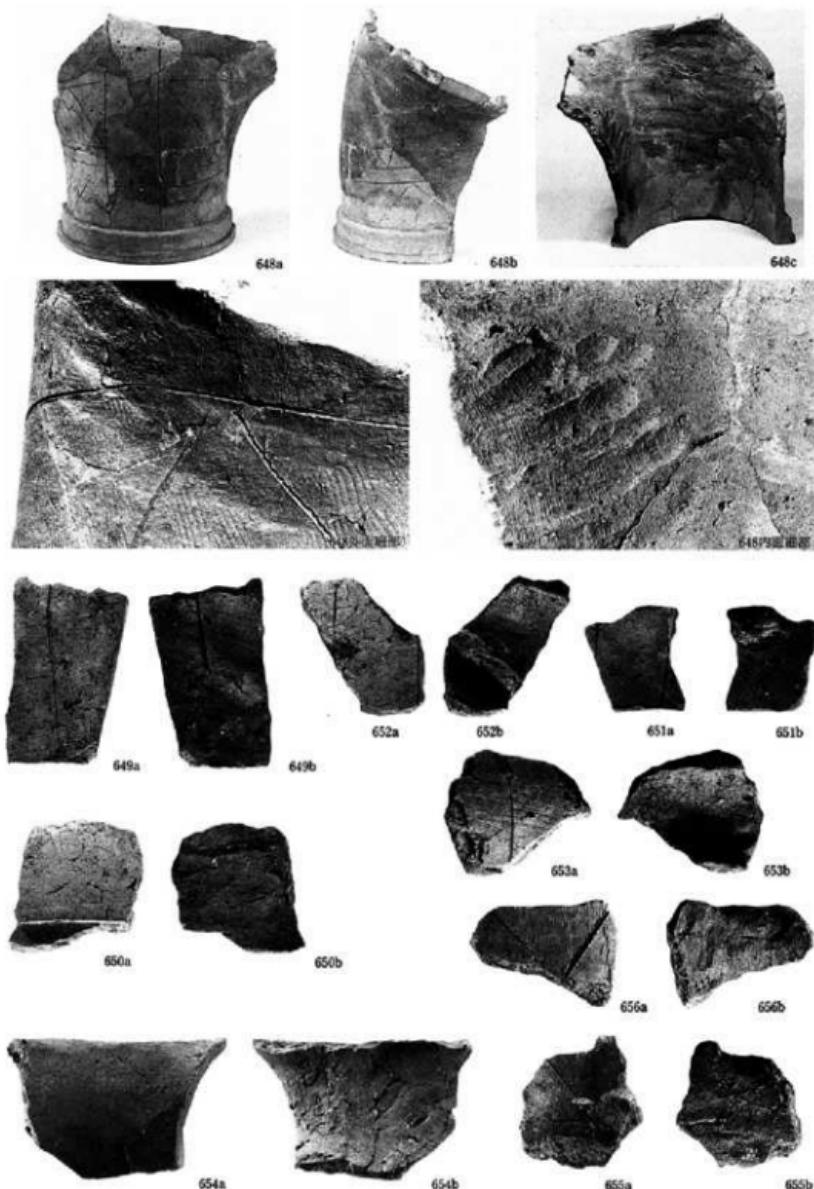


右侧面

図版52 甲冑形埴輪 2 (647-1)



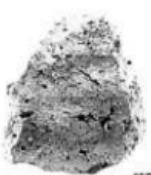
図版63 甲冑形埴輪2 (647-2)



図版64 甲冑形埴輪 3(1)



657a



657b



659a



659b



661a



661b



660a



662a



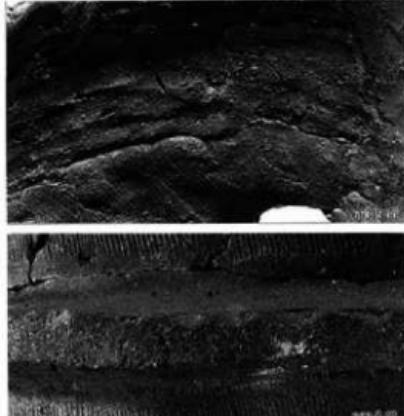
662b



660b

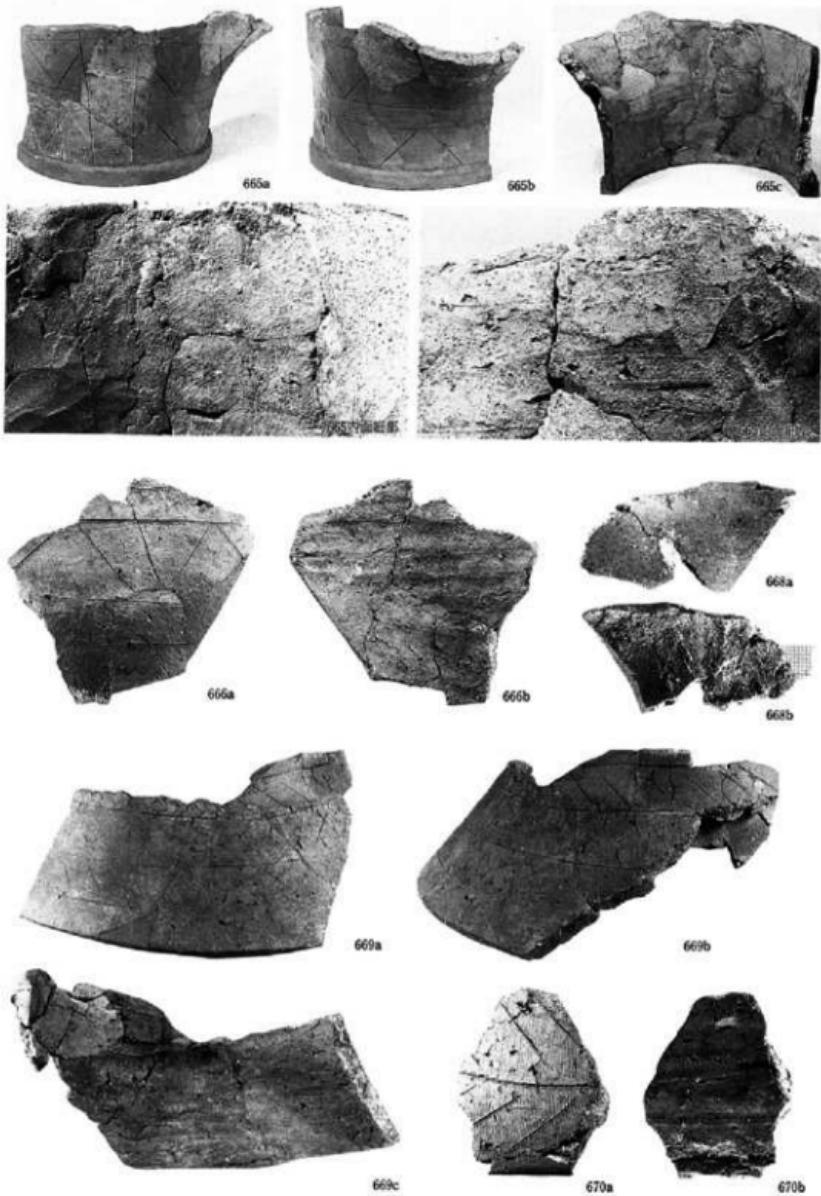


663

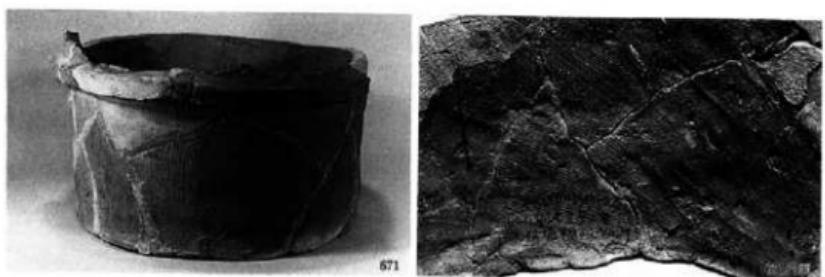


660c

图版65 甲胄形埴輪 3(2)



圖版66 甲胄形埴輪 4(1)



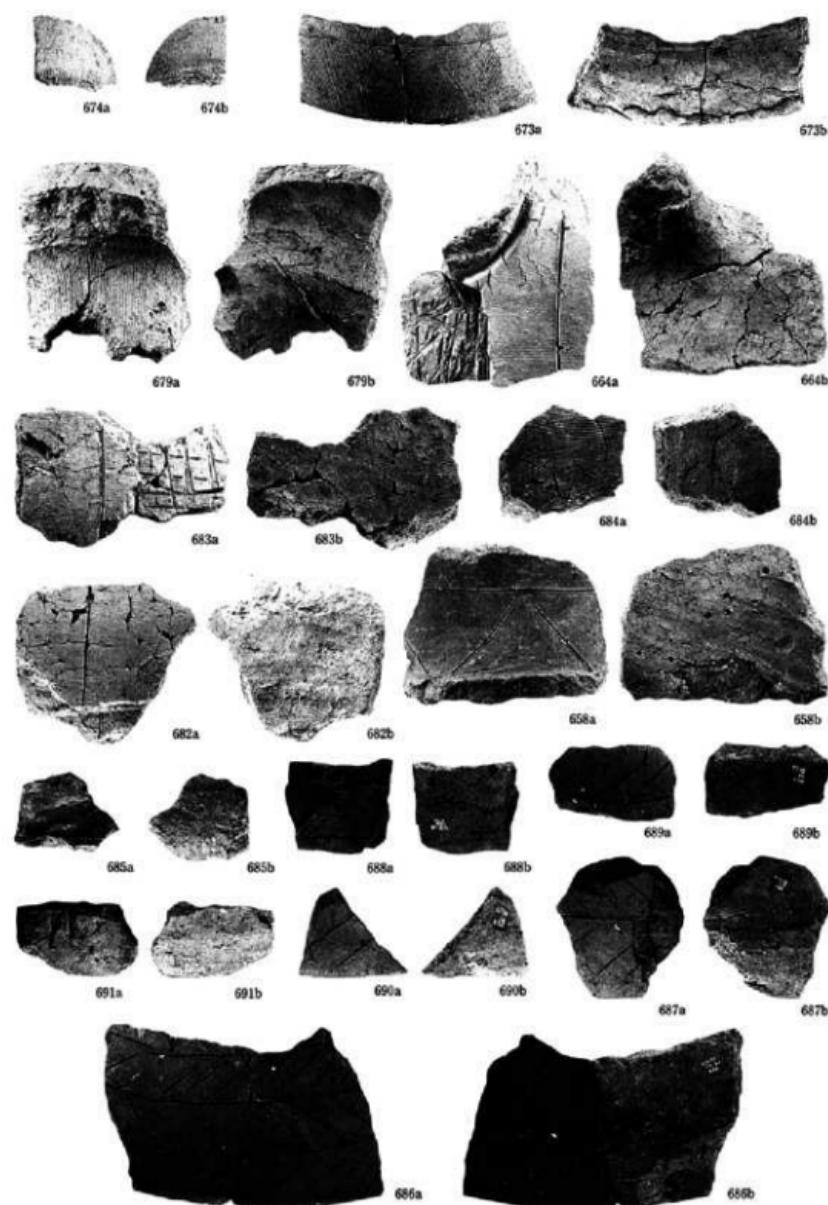
甲骨形埴輪 4



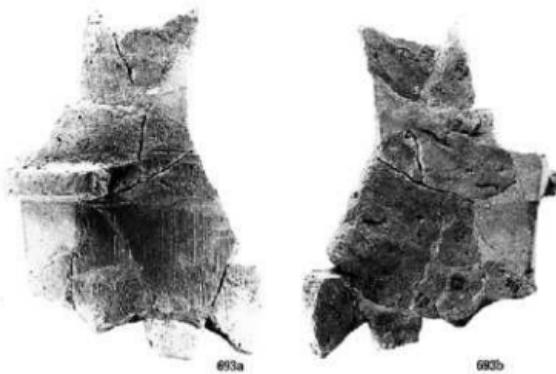
甲骨形埴輪 5



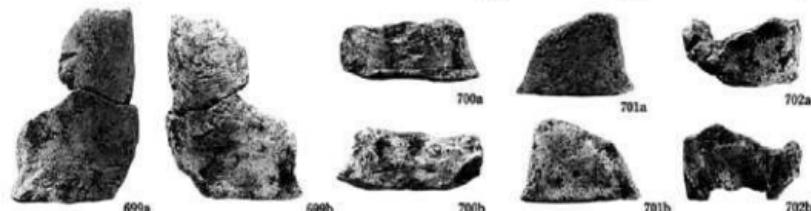
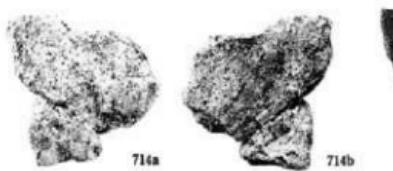
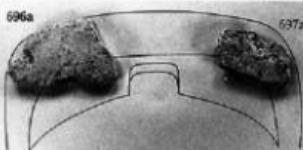
図版67 甲骨形埴輪 4(2)・甲骨形埴輪 5・帰属不明の甲骨形埴輪(1)



図版68 異属不明の甲冑形埴輪(2)



帰属不明の甲冑形埴輪



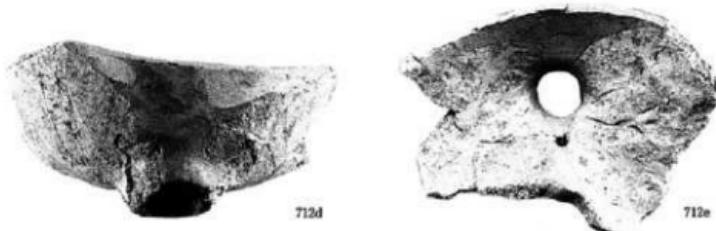
図版69 帰属不明の甲冑形埴輪(3)・馬形埴輪(1)



712a

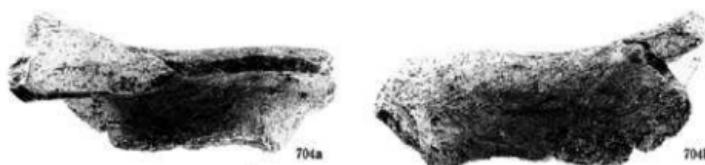
712b

712c



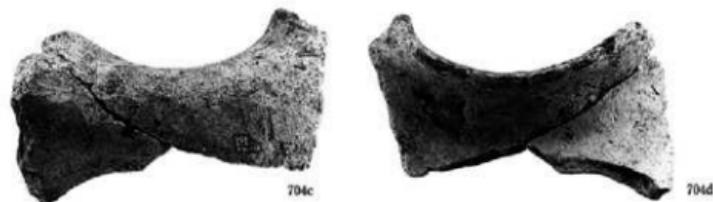
712d

712e



704a

704b



704c

704d



708a

708b

719a

719b

図版70 馬形埴輪(2)



711a



711b



707a



707b



703a



703b



705a



705b



720a



720b



706a



706b

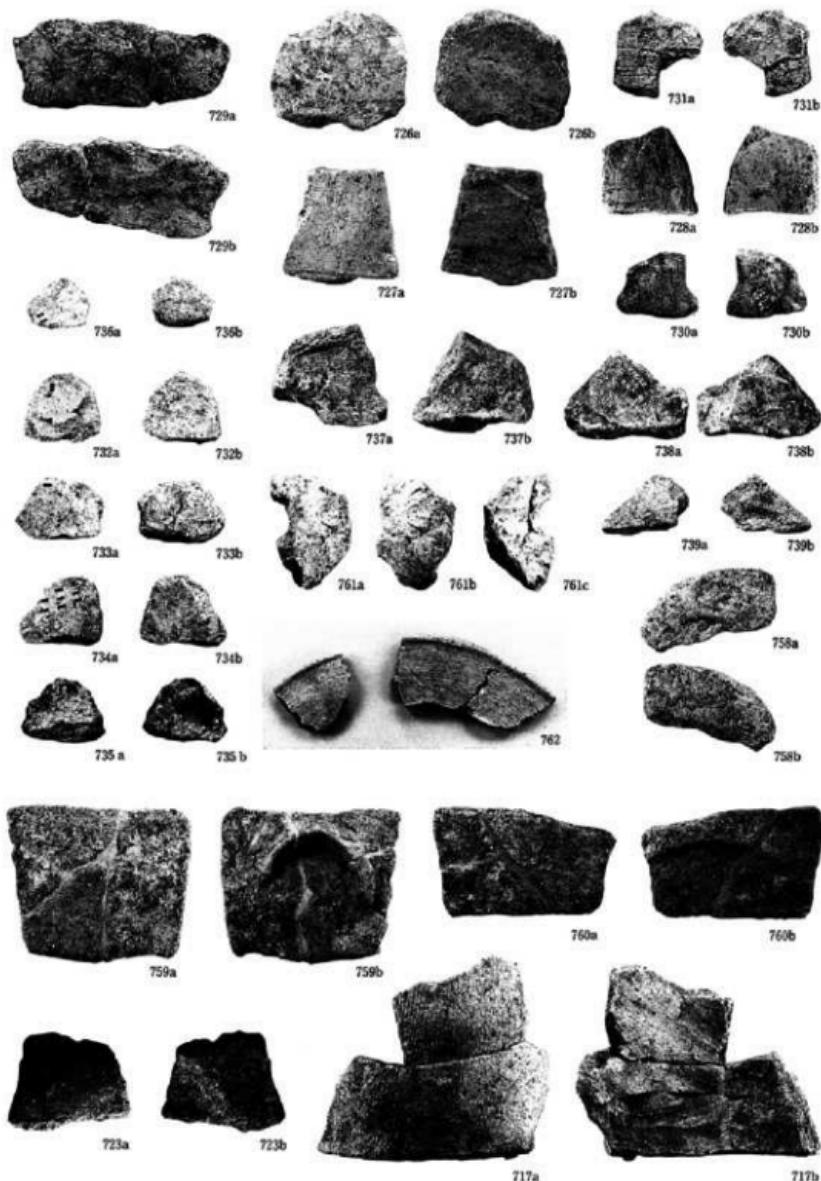


709a

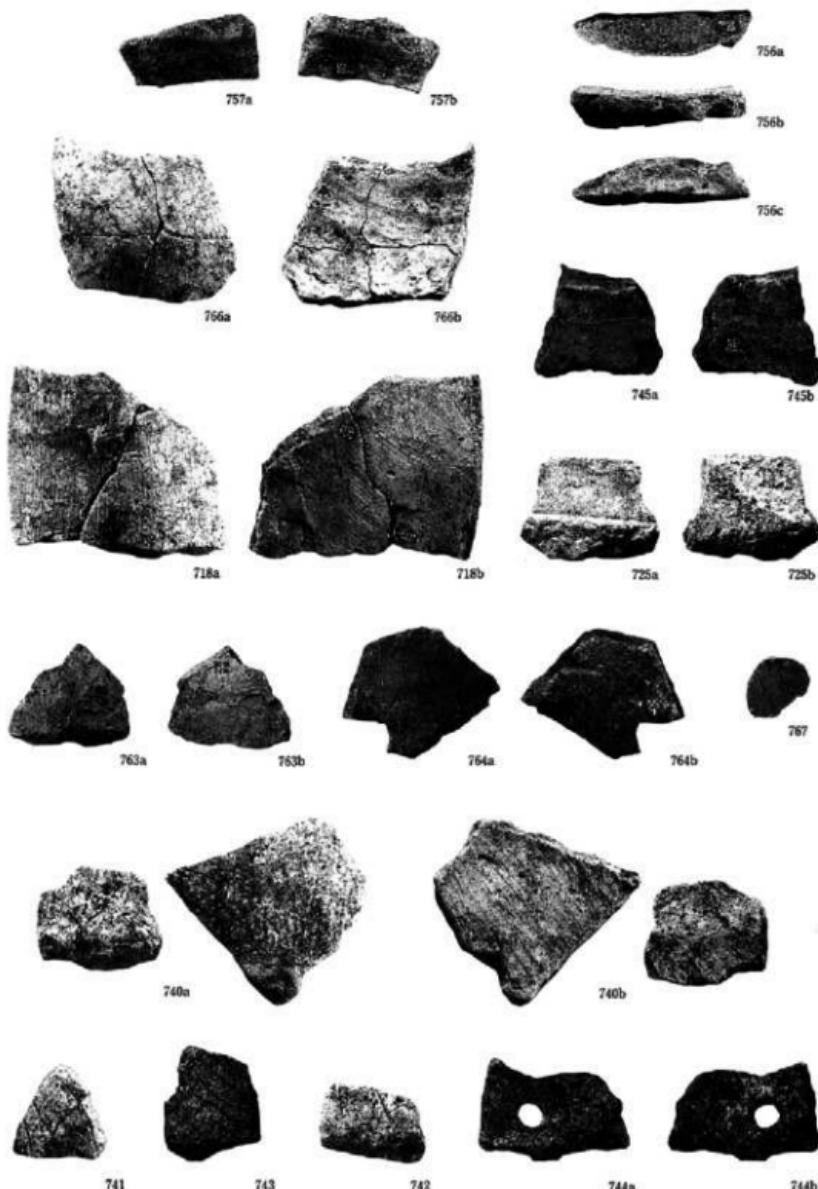


709b

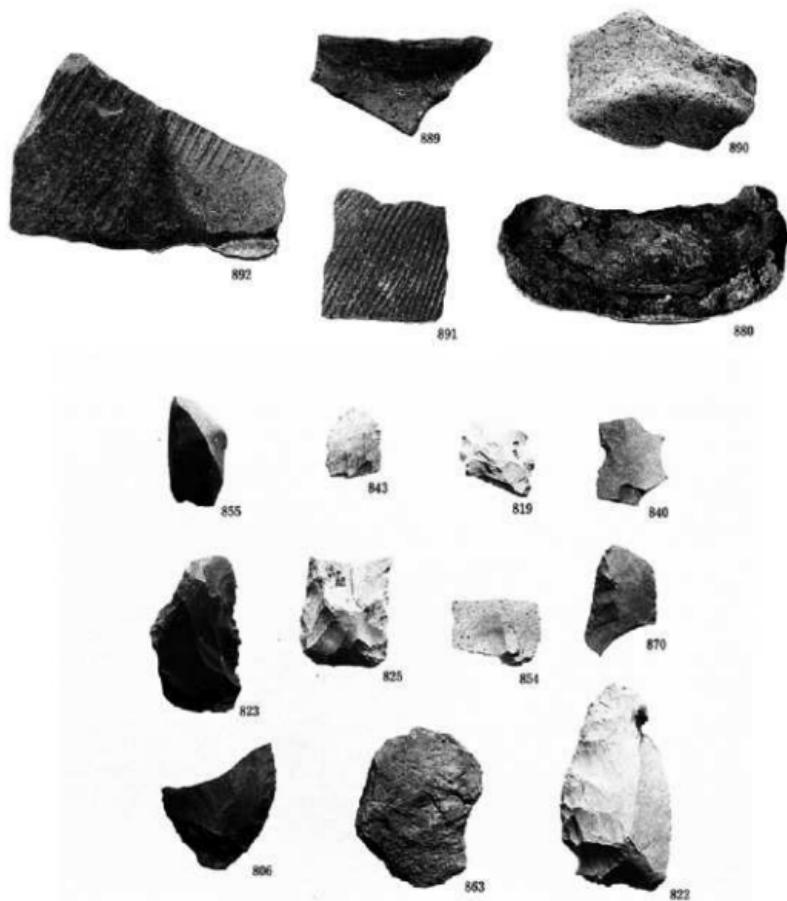
図版71 馬形埴輪(3)



図版72 種類不明の形象埴輪(1)



図版73 種類不明の形象埴輪(2)



埴輪以外の遺物



古墳群北側
斜面採集

図版74 墓輪以外の遺物・古墳群北側斜面採集の埴輪

菅沢2号墳

平成3年3月

発行 山形市教育委員会
山形市旅籠町二丁目3番25号
☎0236-41-1212 ₩990

印刷 藤庄印刷株式会社
山形市北町一丁目3番1号
☎0236-84-5555 ₩990
